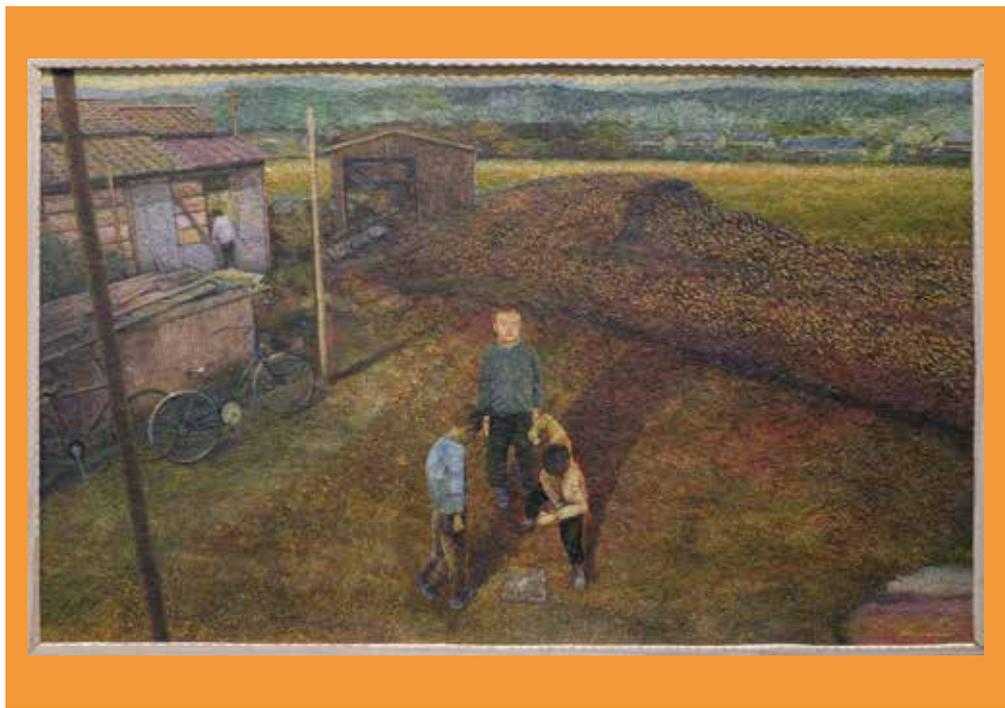


滨松市民文艺

64

滨松市民文艺
第64集



滨松市

滨松市

平成31年度 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講座

講座名	講師	開催時等	受講料円
文学講座(春)	松平和久	4/3,10,17,24,5/1,8 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代900+税)</small>
文章教室Ⅰ	たかはたけいこ	4/21,5/19,6/16,7/21 日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2,000
川柳入門講座	今田久帆	4/28, 5/26, 6/23, 7/28,8/25 日曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
古文書読解講座Ⅰ	小木香	4/11,18,25, 5/9,16 毎週木曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
短歌入門講座	村松建彦	6/1,8,15,22,29 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
俳句入門講座Ⅰ	九鬼あきゑ	6/1,8,15,22,29 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2,500
歴史と文学講座	金原増吉	6/2,9,16,30, 7/7,14 毎週日曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000
朗読教室	堤腰和余	6/11,7/9,8/6,9/10,10/8,11/12 火曜日(全6回) 10:00～12:00	3,000
夏休み絵本づくり講座	井口恭子	7/27(土) 13:30～16:00 4～6年生対象 付添不要	500
夏休み読書感想文講座Ⅰ	林 容子	7/27(土) 9:00～12:00 4～6年生対象 付添不要	500
夏休み読書感想文講座Ⅱ	林 容子	8/3(土) 9:00～12:00 4～6年生対象 付添不要	500
夏休み物語読み聞かせ講座	井口恭子	8/3(土) 13:30～15:00 2～3年生対象 付添不要	500
文章教室Ⅱ	たかはたけいこ	8/18,9/22,10/13,11/17 日曜日(全4回) ①13:00～14:30 ②15:00～16:30	2,000
文学と歴史講座	折金紀男	9/1,8,15,22,29 毎週日曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
文学講座(秋)	松平和久	9/2,9,16,23,30,10/7 毎週月曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代900+税)</small>
俳句入門講座Ⅱ	鈴木裕之	9/21,28,10/5,12,19, 毎週土曜日(全5回) 13:30～15:30	2,500
古文書読解講座Ⅱ	小木香	10/5,12,19,26,11/2 毎週土曜日(全5回) 9:30～11:30	2,500
古典和歌講座	松平和久	2/12,19,26,3/5,12,19 毎週水曜日(全6回) 9:30～11:30	3,000 <small>(別途テキスト代900+税)</small>

展示 9:00～17:00 5階 展示室

●企画展 収蔵展

特別収蔵展「はまなすの花の人・鷹野つぎ展～愛と悲しみの文学をたどる～」2月18日(月)～6月16日(日)
企画展「浜松の報徳」6月25日(火)～10月27日(日)

※ 以降の企画展、収蔵展は計画中

●講演会

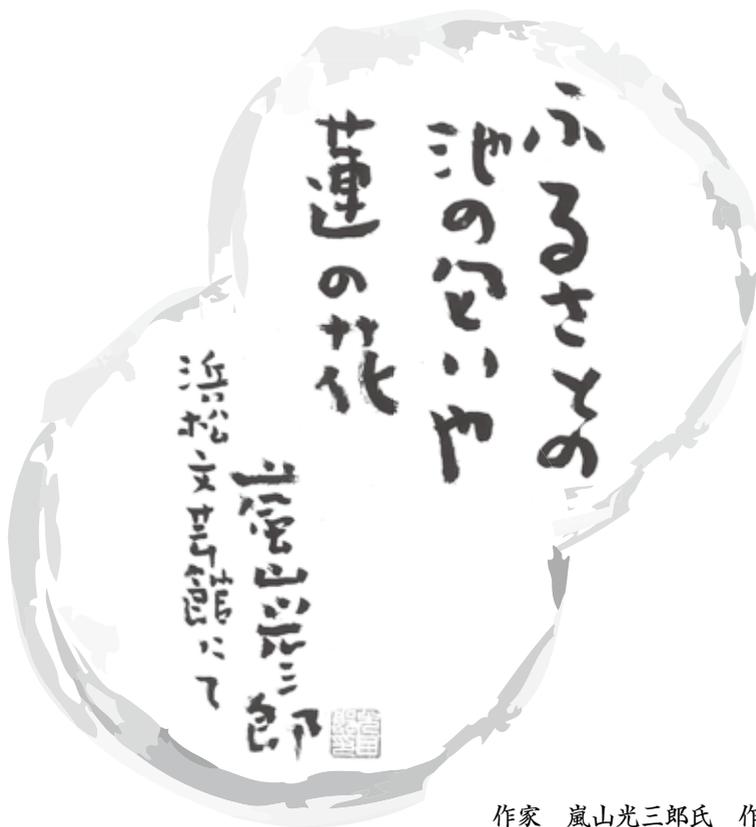
「恐るべし！中国の女帝」金原 増吉 5月12日(日)13:30～15:30 500円
「山頭火静岡に行く」和久田雅之 8月11日(日)13:30～15:30 500円
「正岡子規の生と死」中山 康雄 11月9日(土)13:30～15:30 500円

●朗読会

「山本周五郎を読む」堤腰 和余 10月20日(日)13:30～15:00 500円

浜松市民文芸

第 64 集



作家 嵐山光三郎氏 作

浜 松 市

		選者	
小説	柳本宗春	竹腰幸夫	
児童文学	那須田稔		
評論	中西美沙子		
随筆	たかはたけいこ		
詩	橋本由紀子		
短歌	村木道彦		
定型俳句	九鬼あきゑ		
自由律俳句	鶴田育久		
川柳	今田久帆		

☆ 表紙絵

安間 保正

平成30年度浜松市芸術祭「第66回市展」
芸術祭浜松市長大賞受賞作品 絵画部門
題「少年期」

何不自由なく満たされた日々のはずなのに、
物足りなさを感じていた六十四歳の自分。自分
に与えられたこれからの時間を、もう一度見つ
め直したい、という思いに駆られました。

その時、心に浮かんだのは子供の頃の自分で
した。嫌なことも多くあったはずですが、無邪
気で澁刺としていたあの頃の自分に戻ってリセ
ットしたい。そんな思いで描き上げた作品です。
完成した今、もう一度、楽しい人生が送れる
ような気持ちになりました。

「浜松市民文芸」第64集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者	部門	受賞者
小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌	馬場純平 s u i e n 鈴木篠千 河島憲代 内山文久 伊藤空 滝澤幸一 吉川摩里子 福代善彦 松田健 恩田恭子 竹内としみ オカダアイ ヒメ巴勢里 すぎきとしやす 河合和子 鈴木壽子 井浪マリエ	定型俳句 自由律俳句 川柳	松本重延 澤木幸子 藤田節子 鈴木やよい 佐久間優子 西尾わさ 中村瑞枝 大平悦子 尾内以太 生田基行 山口英男 竹山恵一郎 宮崎和子 佐野つとめ

目次

小説

市民文芸賞

あなたのすべては美しく……………馬場 純平……………10

猫に草……………sui en……………27

結合……………鈴木 篠千……………43

入選

A……………内山 文久……………61

宿老……………北 まくら……………74

遺品……………高 橋……………89

選評

……………竹腰 幸夫……………93

選評

……………柳本 宗春……………94

市民文芸賞

虹色のプール……………河島 憲代……………95

ぶんじいとぼく……………内山 文久……………101

入選

額にかざられた白いぞうり……………宮島ひでこ……………111

猫の喫茶店……………金指芙美代……………120

うさぎのあやとりうた……………如月はるの……………129

空の神様の贈り物……………生崎 美雪……………132

「またねー」……………かまくらゆき……………134

評論

市民文芸賞

芭蕉の虚と実について……………伊藤 空……………150

応仁の乱と下剋上……………滝澤 幸一……………156

入選

経験にとつて美とは何か……………木俣 統裕……………165

二つの展覧会から読み解く……………山下 裕子……………170

ジャポニスム研究の成果と課題……………中谷 節三……………178

風立ちぬ……………中西美沙子……………186

選評

……………中西美沙子……………186

随筆

市民文芸賞

伯父の声……………吉川摩里子……………189

我が家の雛祭り……………福代 善彦……………192

捨てる神あれば拾う神あり……………松田 健……………194

一度だけ着てみたかった…………………………197

入選

セーラー服……………恩田 恭子……………197

遠い日……………山田 知明……………199

選評

…………………………149

…………………………145

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

…………………………137

明日は我が身……………中村 淳子……………201
 旅する理由……………犬塚賢治郎……………203
 銭の要らん趣味……………石山 武……………205
 選 評 ……たかはたけいこ……………208

詩

市民文芸賞

旅のはじまり……………竹内としみ……………210
 汚点……………オカダアイ……………212
 宇宙に穴……………ヒメ巴勢里……………214

入 選

回答……………清泉 陽子……………215
 夕暮れの八百屋で……………吉川 愛……………216
 乗り遅れたっていいじゃない・遠藤 ゆき……………216
 回復……………水川亜輝羅……………218
 野良猫エリート家……………古谷 とく……………219
 あの頂さに……………石黒 實……………220
 選 評 ……橋本由紀子……………221

短 歌

市民文芸賞

すずきとしやす……………河合 和子……………
 井浪マリエ……………鈴木 壽子……………

入 選

清水 紫津	内藤久仁茂	内山 文久
杉山 勝治	石黒 實	鈴木 弘子
大山 啓	伊藤 美代	伊藤 友治
鈴木 健示	山本 勝彦	後藤 とも
柳 光子	su i e n	荒木 きぬ
井口 絹子	石井 泰子	石原新一郎
内山 智康	内山 文子	太田あき子
大庭 拓郎	岡部 政治	織田 恵子
加藤貴代美	金取ミチ子	神谷 淳子
川上 啓子	川島百合子	河田 琴栄
阪口佳寿子	坂口 ちせ	寒風澤 毅
柴田千賀子	新谷三江水子	鈴木 和子
ストロベリー	高橋 幸	竹内オリエ
土屋香代子	鴫多 健	鳥井 美代
中津川久子	中村 弘枝	猫田 伸
根本 文子	平井 要子	松浦ふみ子
水川あきら	峯村友香里	宮澤 秀子
宮本 恵司	米澤寿鶴子	相曾多加根
赤堀 進	渥美 進	渥美 佳子
あひる	あゆのつか碧	荒石由記美
安藤 圭子	池 蜻蛉	伊藤 順子
伊藤 米子	犬塚賢治郎	今駒 隆次
岩城 悦子	内田 一郎	内山 貴則
内山 由貴	太田 静子	太田 初恵

鈴木由紀子	ストロベリー	砂間 達也
平 幸子	高林 佑治	滝澤 幸一
竹山すず子	田中美保子	鶴見 佳子
嶋多 健	徳澄 英樹	鳥井 美代
中津川久子	二橋 記久	野嶋 薫子
野中美美子	浜 美乃里	林田 昭子
平井しづゑ	平野 旭	平野 道子
藤生 君江	藤本 幸子	古谷 とく
堀内 一枝	堀川千代子	真 砂
松本憲資郎	宮澤 秀子	山口 久江
山口 英男	山田 知明	吉野 民子
渥美 進	渥美 朋可	あ ひ る
安間あい子	井口 絹子	池田 智子
池田 稔	石井 泰子	石黒 實
石塚 茂雄	伊藤アツ子	伊藤 順子
伊藤 正	岩崎 五郎	内田 一郎
内山 文久	内山 由貴	太田 結花
岡本 久榮	小楠 勝代	加藤貴代美
加藤 雅子	金取ミチ子	川合 泰子
川上 啓子	北村 友秀	切畠 正子
後藤 とも	コルプス	斉藤三重子
佐原智洲子	清水よ志江	不 知 火
白柳ますみ	新村ふみ子	新 村 幸
す ず き	鈴木うた子	鈴木きぬえ

鈴木 賢三	高橋 常子	高橋 敏彦
高山 紀惠	竹内オリエ	竹下 勝子
竹田 道廣	竹平 安則	館石 照子
田中 貞夫	田辺百合江	土屋香代子
黒葛原千恵子	寺田 久子	徳増 貴子
鳥居さく子	鳥居 有子	永田 恵子
根本 文子	中村 寿	西山 良子
野田多満子	野田 俊枝	橋本まさや
長谷川絹代	東 直子	藤井 星子
藤原 孝志	松江佐千子	松田 千愛
水川 放鮎	水島 邦子	村松 和憲
森坂 芳喜	森下 綾香	山上アサ子
山下 静子	横田 照	横山 亜美
渥美結梨香	伊藤志津子	伊藤 日菜
伊藤 美代	太田 光	尾内 以太
かりりん	川合 妙子	川上 とよ
川島百合子	北島 はな	小池 久子
佐藤 ケイ	白井 忠宏	鈴木 彩郁
鈴木 京子	鈴木千恵子	高杉威一郎
高島 謙三	角皆 かつ	手塚 みよ
利徳 春花	永井 眞澄	西 周
兵藤 葵	深谷とく子	牧 元久
松本 和樹	宮本 恵司	山 中 伸夫
山本 澤乃	和久田俊文	

選 評 …………… 九鬼あきゑ …… 278

自由律俳句

市明文芸賞

入 選

選 評

尾内 以太	生田 基行	伊藤 有美	生田 基行	伊藤 有美
岩城 悦子	凡道くにを	岩城 悦子	凡道くにを	岩城 悦子
中谷 則子	中津川久子	中谷 則子	中津川久子	中谷 則子
松本ヒサ子	リコリス	松本ヒサ子	リコリス	松本ヒサ子
岩本多津子	内山 文久	岩本多津子	内山 文久	岩本多津子
小笠原靖子	尾内 以太	小笠原靖子	尾内 以太	小笠原靖子
畔柳 晴康	鈴木あい子	畔柳 晴康	鈴木あい子	畔柳 晴康
竹内オリエ	手塚 全代	竹内オリエ	手塚 全代	竹内オリエ
中村 淳子	根本 文子	中村 淳子	根本 文子	中村 淳子
原川 泰弘	藤本ち江子	原川 泰弘	藤本ち江子	原川 泰弘
伊藤 順子	太田 静子	伊藤 順子	太田 静子	伊藤 順子
加藤美恵子	白井 忠宏	加藤美恵子	白井 忠宏	加藤美恵子
鈴木 和子	竹田たみ子	鈴木 和子	竹田たみ子	鈴木 和子
叡 征	浜名湖人	叡 征	浜名湖人	叡 征
ヒメ巴勢里	水川 彰	ヒメ巴勢里	水川 彰	ヒメ巴勢里
	鶴田 育久		もとさんの姉	

川 柳

市明文芸賞

入 選

山口 英男	竹山恵一郎	佐野つとめ	宮崎 和子	浅井 常義	伊熊 靖子
田中 恵子	鶴見芙佐子	田中 恵子	竹山恵一郎	田中 恵子	竹山恵一郎
恭 子	鈴木 覚	恭 子	守屋三千夫	恭 子	守屋三千夫
竹平 安則	竹山恵一郎	竹平 安則	一 灯	竹平 安則	一 灯
宮崎 和子	守屋三千夫	宮崎 和子	小島 松太	宮崎 和子	小島 松太
飯田 幸子	一 灯	飯田 幸子	高橋 紘一	飯田 幸子	高橋 紘一
菊川 文江	小島 松太	菊川 文江	牧田 龍司	菊川 文江	牧田 龍司
鈴木 均	高橋 紘一	鈴木 均	伊藤 信吾	鈴木 均	伊藤 信吾
寺田喜代子	牧田 龍司	寺田喜代子	岡本 蓉子	寺田喜代子	岡本 蓉子
荒木いつか	伊藤 信吾	荒木いつか	金子眞美子	荒木いつか	金子眞美子
大庭 拓郎	岡本 蓉子	大庭 拓郎	佐野ふみ子	大庭 拓郎	佐野ふみ子
川口八重子	金子眞美子	川口八重子	鈴木千代見	川口八重子	鈴木千代見
佐野つとめ	佐野ふみ子	佐野つとめ	黒葛原千恵子	佐野つとめ	黒葛原千恵子
鈴木 勝則	鈴木千代見	鈴木 勝則	徳田美知子	鈴木 勝則	徳田美知子
土屋香代子	黒葛原千恵子	土屋香代子	徳田美知子	土屋香代子	徳田美知子
徳田 昭巳	徳田美知子	徳田 昭巳	根本 文子	徳田 昭巳	根本 文子
中津川久子	根本 文子	中津川久子	堀内まさ江	中津川久子	堀内まさ江
藤生 君江	堀内まさ江	藤生 君江	山田とく子	藤生 君江	山田とく子
水川 彰	山田とく子	水川 彰	渥美 進	水川 彰	渥美 進
	渥美 進		馬淵よし子		馬淵よし子
	馬淵よし子		浜 美乃里		浜 美乃里
	浜 美乃里		中田 尚		中田 尚
	中田 尚		手塚 美誉		手塚 美誉
	手塚 美誉		竹内オリエ		竹内オリエ
	竹内オリエ		鈴木 和子		鈴木 和子
	鈴木 和子		木村 和江		木村 和江
	木村 和江		嘉山 和美		嘉山 和美
	嘉山 和美		内山 文子		内山 文子
	内山 文子		馬淵 征稍		馬淵 征稍
	馬淵 征稍		高橋 博		高橋 博
	高橋 博		佐次本浜子		佐次本浜子
	佐次本浜子		A		A
	A		山口 英男		山口 英男
	山口 英男		寺田 文子		寺田 文子
	寺田 文子		竹川美智子		竹川美智子
	竹川美智子		内山 敏子		内山 敏子
	内山 敏子		竹平 和枝		竹平 和枝
	竹平 和枝				

池田 稔	伊藤 美代	猪原 利雄
岩城 悦子	内山 文久	太田 静子
太田 初恵	小栗 秀治	尾内 以太
恩田 章司	恩田 利子	恩田 恭子
加藤貴代美	加藤 典男	金取ミチ子
カモメン	川上 とよ	熊 鷹
畔柳 晴康	斉藤三重子	澤井由紀子
白井 忠宏	白柳ますみ	鈴木 民江
鈴木ますゑ	鈴木由紀子	高柳 龍夫
高山 功	高山 紀恵	塚田 弘之
寺田 久子	鴫多 健	戸塚 忠道
永井 真澄	中村 歌子	中村 禎次
沼田 壽美	橋本まさや	浜名湖人
平野 旭	馬塚 五朗	宮澤 秀子
宮澤 正人	山下あい子	山中 伸夫
横山タカ子	由倉 典之	米澤寿鶴子
和久田俊文		
選	今田 久帆	
評		

「浜松市民文芸」第65集作品募集要項……………303

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作
品は選考順または五十音順としました。
第64集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一一	短歌	五九六
児童文学	一二	定型俳句	一、〇七四
評論	六	自由律俳句	二五五
随筆	三三	川柳	五二三
詩	二九	計	二、五三八

小説

「市民文芸賞」

あなたのすべては美しく

馬場純平

三日前から水も食事も一切摂っておられませんと、施設長は視線を曇らせることなく言っていた。俺が反射的に唾を飛ばして怒鳴り出しても決して動じることはないという落ち着いた話し方だった。

なんでそんな重大なことを知らせずに放っておいたのか、おい、人の命がかかっているんだ、これは裁判沙汰だぞ、親の死に目に会えなかったら、お前、どういう責任を取るつもりだったんだ。もしそう言っただけとしても、微笑みながら俺をなだめるすべを持った経験が読み取れる視線であり、しなやかな言葉の抑揚だった。

しかし、俺は心の底からこの男に感謝していた。

ということは、母親はもう死んでくれるということですね。そういうことですね。施設長の襟首をつかんでその朗報を確認したいくらいだった。心が軽くなったのを知られまい

と、「そうでしたか」とだけ答え、ゆっくりとエレベーターの前まで足を運び、ドアが開くまでの間、両手の拳を握りしめて何度も頭を上下させながら感慨にふけっているふりをした。

俺が来たのがわかったのか、七〇一号室のベッドに、頭を向こう側にして横たわった母親は体を起こそうとしているように見えた。でも、体力はすでに使い果たされ、右腕がわずかに持ち上がっただけだった。

母親はしわがれ声だった。喉の奥から絞り出された言葉は痰が絡んでガラガラとしか聞こえなかった。俺は枕元で母親の顔を覗き込む。入れ歯を外しているから唇が口の中に落ち込んでいて、縦皺が深く刻まれた穴になっている。目はすでに見えないうらしく、開けようとしめない。へこんだまぶたには涙がたまつて、天井の蛍光灯を反射している。

母親は最後の命をつないでいた。薄い布団からはみ出したピンクの花柄のバジャマの肩が、布団と一緒に上下している。母親は俺が小さい頃からガリガリに痩せていて、そのまま歳をとり、こうして死の床にいる姿は、すでに立派なミイラだった。

空洞のような口がバクバクと小さく動いた。俺はきつと最後の言葉を語ろうとしているに違いないと、それくらいは聞いてあげないと、とりあえず血の繋がった親子なのだからと、耳を近づけた。生暖かい息が耳の中の産毛を逆なでた。俺は反射的に身震いした。

「わたしは、本当に、一生、見事にモノグサでした」

そう聞こえた。俺は耳を疑い、呆れ、うなだれた。人生の最後に、ひとり子に言い残そうとしているその言葉に俺は途方にくれた。母親は、最後の最後まで俺を裏切るつもりだった。それは意図的な裏切りではなくて、その時たまたま頭に浮かんだそのランダムな思考のフラッシュを何のフィルターもかけずに口に出してきた母親の一生を通じた癖に違いなかった。

いまさらそんなこと言われなくとも母親がどれほどモノグサであったかは知り尽くしている。モノグサばかりでなく、ヒステリックで、人の言うことは一切聞かず、自分が判断したことが全て正しく、間違っているのは常に他人なのだった。

だから、母親が自分をモノグサと認めているのは、俺に謝罪をしたいからではない。ただ、人生の最後に、自分の生き

様を客観的に総括しているのだった。死んでしまつたら何にも残らない、常々そう言い続け、本当にそう信じていたらしい母親が、せめて自分がいた証をと、最も短い言葉でまとめたのだ。

母親は目を閉じ、呼吸をするのさえ面倒そうだった。まさか母親が、いい家庭を築きなさいとか、社会に貢献するのよみたいな、美辞麗句であつたとしても、綺麗な言葉を残すなどという思いはなかつた。けれど、その口から、肉体を離れる魂のように浮遊して出た言葉はモノグサだった。母親はモノグサという言葉で八十五年の人生を終えるつもりらしかつた。

老人ホームの七階の、肉体のかすが腐つた臭いが充満した換気を嫌うその部屋で、俺は母親の手を握つた。母親がもうすぐ死ぬということが分かつていたからだ。

しかし、母親に手を引かれたことも抱かれたこともない俺は、母親の手を握ることに言いようのない嫌悪を感じていた。でも、俺は耐えた。死を目の前にして、息子に手を握られた時くらい、人間らしい感情を示すのではないかという、実験の意味で体温の消えかけた母親の手を、俺の手のひらで包んでいたのだ。

その時、ああ、私は見事にモノグサでしたと、母親は言つてのけたのだった。それは後悔でも謝罪でもなく、だからと言つて、自らを讃えているわけでもない、いつもの通り、感情を交わらせることのない、八十五年の生涯を総括する冷静

な言葉だった。

母親は苦しげに右手を天井に向けて持ち上げ、左手で胸を掻いた。ちょうど心臓が止まろうとしている印なのだった。俺は母親の手を振りほどき、心からホッとして立ち上がった。最後までこの人間の心を溶かすことができなかったことで、俺はあらゆる責任を逃れることができたのだ。

ドアの前で振り返り、また明日来るからと言いながら、後ろ手に音がしないように閉じた。

俺は母親が死ぬ瞬間を見たくなかった。母親には一人で死んで欲しかった。

あらゆる事を、感情をかかわらせる事なく、俺との関わりさえも事象の一つとしてしか見ていなかった母親には、孤独の死がふさわしかった。俺は家に帰って、ビールでも飲むかと思っていた。しかし、一時間のドライブを終え家に着くと、すぐに電話が鳴った。冷静で伸びやかな声で施設長は母親の死を告げた。

もう何年も前から母親が死んだ時の準備を始めていた。やつとその時が来たことに俺は高揚し始めていて、左手は小刻みに震えていた。俺は、震える手で白いコードレスの受話器をゆつくりとクレイドルに戻した。そしてすぐに、母親が前もって自分の葬式を手配していた教会に電話をした。そういうことはちゃんとする人だった。

牧師を名乗る男性は、明日は日曜目で礼拝があり葬式はで

きないから、月曜まで遺体を自宅で預かってほしいと告げた。棺桶は今すぐ持つていくので、遺体を老人ホームから自宅まで運んで来てくれれば助かりますと、初めて話すこの牧師の慣れた口調に俺はホッとした。人の死を過大に扱わない聖職者の話し方に、これからやろうとしていることに勇気が湧いた気がした。

母親は献体を申し出ているので、死後なるべく早いうちに大学病院まで運ばなければならないと俺は嘘をついた。火葬をする必要はないので、葬式だけでも今夜のうちに、孤独な人なので親戚に連絡する必要もないからと思いつくままに続けた。牧師は数秒を置いて、本当ですね、これから深夜にかかりませんがそれでもよろしいのですねと、静かな声で念を押した。

ええ、申し訳ありません、お世話をおかけします。

俺の声はかすかに揺れていたが、母親が死んだばかりなのだからそれも当然だと思ってもらえただろう。

免許証を忘れていないか確かめて、ワゴン車で再び老人ホームに向かった。途中で高速を二つ乗り換え、大きな吊り橋が続く海沿いの四車線の一番左側を、絶対に事故を起こしてはならないという覚悟でハンドルを握りしめて前方を見つめた。七十キロでゆるゆると走る前後の車に挟まれて、いつもはイラつくはずの俺はその二台の軽自動車に感謝していた。その分、書類を偽造する作業や死体処理の手順を頭の中で綿密に確認することができたからだだった。

ジェットコースターや観覧車にライトが当たって、まだ営業をしているらしい遊園地に隣接したインターで高速を降り、埋立地に挟まれたまっすぐな道をいつものように進む。母親が入所してから何度も通ったこの道を通るたびに気分は沈み、どうすればホームで過ごす時間を短くできるかと、いつもそればかりを考えていた。

職員はみな慇懃な表情をし、手のひらを体の前で合わせて俺を迎えた。俺はエレベーターで七階まで昇り、老人臭のたちこめる廊下を、もうこの匂いを嗅ぐのも最後なんだと変な感慨にふけりながらブラブラと歩いた。一番端の部屋が七〇一号室で、その引き戸を開け、そこから部屋を見渡した。普段訪れるのは昼間だったから、カーテンが閉じられていると、隙間から差し込む外の光と天井の蛍光灯の明かりの強さが大体同じで、昼と夜がミックスしたような異次元の感覚がした。しかし、いまはすでに外は真つ暗で、閉じられた無地のページュのカーテンは天井の蛍光灯を反射して、部屋の中は昼間よりも明るい。

足を踏み入れてベッドを覗き込むと、それはもう完璧な死体だった。近くの病院から医者呼び、すでに検視も終わっている和二階のカウンターで施設長が言った。顔も綺麗に拭いてあって、布団も新しいものに換えてある。その手際の良さに、自信に満ちた施設長の表情が浮かんだが、その顔も半年もすれば忘れてしまうに違いない。

覗き込むと、落ち窪んだ眼窩の底にはまだ光るものがあった

て、触れば体温も感じられたかもしれない。

すぐに部屋を出て、再び受付に戻った。そして、自分で母親の死体を持ち帰ることを告げたが、施設長は顔色を変えることもなく、ほのかな微笑みさえ浮かべて頷いた。すぐに三人の女性の職員がストレッツチャーを押し付けてきた。俺はほとんど何をする必要もなかった。俺が快活に説明したり礼を言ったりするので、職員たちはほっとしている。職員たちは布団のまま小さな掛け声をかけて母親をストレッツチャーに移し、愛想笑いを時々浮かべながらエレベーターに乗り込み、一階で降りると駐車場までゴロゴロと押しで行った。

駐車場は荒い砂利がアスファルトで固められたもので、ストレッツチャーはカタカタと音を立て、母親の頭がそれに合わせて小刻みに揺れた。俺はワゴン車に乗り込み這いつくばりながら後ろの席を倒すと、職員たちはテールゲートから布団のまま死体を滑り込ませ俺が中から引つ張った。老人ホームの暖房に火照って俺は汗をかいていた。開け放ったドアから吹き込む外の風が、カラカラの喉を潤す冷水のように心地よかった。

テールゲートを閉め、よいしょと、わざと大きな声を出して運転席に乗り込み、職員たちに月並みな言葉で礼を言った。施設長もタイミングを合わせて出てきてくれて、ふた周りほど大きな凶体を一番左に、四人が神妙な面持ちで横一列に並び、車が動き始め頭を下げるタイミングを計っている。

しかし、人が死ぬと人間は不思議な表情をするものだ。死

んだ人間のためというよりも、残された人間たちの間で、自分もすっかりと死体に敬意を表し、もしかして本当に悲しんでいる人がいたとしても、その人を決してないがしろにできなかったという証拠作りをしている面持ちだ。そうして、自分は亡くなった人に示すべき敬意は十分に示したと納得した時点で心の重荷から解放され、その人に関する記憶は自分の責任の及ばない所のものとなり、その人は過去の人となる。それは、俺にとっては都合がいい。

窓を開けたままに運転席から再び会釈をし、職員たちもそれに合わせて深々と頭を下げ、そして俺が運転席の窓を閉め発車して車がコンビニの角を周り、職員たちは再び深く頭を下げ、誰ということもなく振り返って建物に入ってドアを閉じると、俺の母親は彼らとは無関係なただの死体となる。

一号線と交わる信号で引つかかる。肩越しに振り返ると、五十センチほどの距離に母親の小さな頭がある。ほんの一時間ほど前に、その口から、信じられない言葉が発せられたあのままだ。

あなたは本当に手がかからない子でした。それは昔からの母親の口癖だった。放っておいてもいつも何かに熱中していたから、私は何もする必要がなかった。

冗談ではない、俺はあなたが何もしてくれなかったから、どこにも連れていってくれなかったから、仕方なく一人遊びをしていただけだ。あなたは、本を読んでくれたこともなければ、一緒に散歩に出かけたこともなかった。ましてや、あ

なたは、俺を抱きしめてくれたことなど一度もない。

あなたが「モノグサ」という、自分を形容するにはあまりにもありえないその言葉を発した時、ついにその事実を理解して、息絶える間際に懺悔でもしているのかとほんの少し期待した。

でも、俺は瞬時に理解した。それは謝罪ではなく、言い訳でもなく、いつもの、母親の四角い世界を定義した、自己肯定の言葉に過ぎなかった。アルミの弁当箱のような四角さだ。弁当箱よりも角が尖った長方形の四角い箱だ。それが母親だった。

自分が考えたこと、感じたことだけに意味があり、それ以外はすべて自分とは関係がない、分厚い壁の、息子さえもその壁で自分の世界から分断する、四角い硬い小さな世界なのだ。

ある時母親は俺に連絡をしてきて、俺が移り住んだ東海のこの県に引越して来ると宣言した。ついに人間的な情が湧いて、息子に寄り添って生きていきたいという感情が生まれたのかと思った。

全く迷惑な話です、お父さんがそういうのです、あの人は赤ん坊のようにわがままで、一度決めたらどうしようもないのです。

俺の家の横に余った狭い土地に、小さな家を建てて住むのだという。こちらの都合とか関係なく、すでにそう決まっていた。

今すぐにと言われても困るから、それは少し先の話にしよう、とりあえず近くのアパートに入ってこの土地に慣れてもらえないかと、妻の顔をうかがいながら電話の向こうの母親に俺は切々と語った。

私は嫌なのですよ、お父さんは老後の事が心配になつて焦り始めたんです。なぜあの人はあんなにも視野が狭いんでしょう、どうせいつかは死ぬだけなのに。

妻は電話のあと、あなた、お母さんは嫌いなんですよと、距離を置いた視線を俺に向けた。なのに、なぜお母さんの言うことをちゃんと最後まで聞いてあげるの？

妻としては、もちろん俺の両親などとは関わりたくないのだし、俺がなぜ、「そんなこと無理に決まっているじゃないか」ときつぱり断らないのかが不満なのだろう。

俺は母親とは違う。ダメなものには百パーセントダメで、結論が変わる可能性はゼロであるという母親とは違う。俺は相手が誰であつてもちゃんと話を聞き、最善の解決策を考える。そうすることで、自分というものを見出し、ギリギリの状態ではあつたけれど、母親に押しつぶされることなくここまで生きてきた。しかし、妻にとつては、それは気の弱い、母親に頭が上がらない男の戯言にすぎないのだ。

妻を母親に会わせ、この人と結婚すると言つた瞬間の母親の表情を妻は決して忘れていない。あれを鬼の形相と言うのだろうか。人間の顔がそこまで醜悪になることができることに俺は言葉を失つた。それ以来連絡は全て絶え、電話をして

も手紙を書いて無視され続けた。それは娘が生まれる六年後まで続いた。結婚式の招待状も破り捨てられ、妻の親戚たちだけが出席する異様な式となつた。

この県の間は敬語の使い方を知らない、スーパーに行つても客を客と思つていない。週末両親のアパートを訪れるごとに聞かされた。母親の口からは常に毒の牙が飛び出した。父親は聞こえないふりをしてテレビを見ていた。

この地方の人はね、昔からみんな農業をしていたから、平等だつたんだよ、誰にも敬語で話す必要がなかった、だから、敬語で話しかけられないというのは、仲間だと思つてくれているという証なんだからいいことなんだ。

客は客です、レジで、何ですか、あの話し方は。

俺の記憶は母親の悪口で始まっている。

今度の首相はダメです、大局が見えていません、百年後の日本を考えたらあんなことができるわけがないでしょう、政治家とは所詮その時その時の判断しかできないのです、彼らに人の心は変えられませんが、人を幸せにすることはできません、せいぜい経済を立て直して収入を増やすことくらいです。

小学生の頃は黙って聞いていた。中学生になつて聞き流すようになった。高校生の俺は、賛同していると思われなくな

いから完全に無視するようになった。

しかし母親は語り続けた。

世の中を動かしているのは結局は金なのよ。経済を回してたくさん利益を生み出して、それを従業員に還元すればやがては社会が元気になる、社会が元気になれば不満を持つ人が減って幸せな国づくりができる、本気でそんなことを考えているのよ、政治家たちは。人を幸せにするのは金ではありません。

母親は政治家が嫌い、経済人が嫌い、教員が嫌いだった。教員が嫌いだったのは、退職するまでの父親が教員だからだ。

教員は自分が世界で一番偉いと思ひ込み、集まれば他人の悪口を言つては呑んだくれる世の中で一番タチの悪い人間なのです。

母親に抗う方法はなかった。母親の言葉は絶対なのであり、言い返そうとすれば、その十倍の論理で反駁された。逆に俺は言い込められ、あなたの屁理屈には疲れましたとなじられた。それが会話を締めくくる母親の言葉だった。その一言で全てが終わった。

だから、俺は一人で遊んだ。そして偶然の発見をした。

俺は家にいたくなかったから、週末には田んぼの端つこの用水路でフナを釣った。夏休みは毎日用水路に通い、一日中一心に水面を見つめた。小麦粉にカレー粉を混ぜ、直径が三ミリくらいの団子を作って針の先にちよこんとつけて流れる水に垂らした。細い竿の先がピクピクと動き、一時間に二、

三匹は釣れた。釣れては用水路に戻し、釣れては用水路に戻し、目的のない釣りは何日も続いた。

将来の夢とか希望とか、何もなかった。ただ、家に居たくなかった。目的があつたとしても、実現なんて可能ではないと無意識のうちに決めつけていた。塾に行つて勉強したいと言つても、ダメです、勉強は一人でするものと、母親が確信を持つて返事をするのに数秒とはかからなかった。なぜダメなのかと問いたですと、無言で平手が飛んできた。だから、俺は毎日用水路に通つた。

ある日、俺にしてはとてつもなく大きな、どっしりと重みのある大物が釣れた。俺はそれを記録として残したいと思ひ、持ち帰つた。

目的のない釣りに、意味が生まれたように感じた。最初は魚拓を作ろうと思つた。だが、それは誰もがやっていることであつただけで気持ちが萎えた。だから、ふと思ひ立つてその小さな口から紐を突っ込み、鯉蓋から引つ張り出して輪を作つて灯油の缶なんかに入れてあるちっちゃな倉庫の中に吊るしておいた。

俺は毎日用水路の脇に座り込んでさらに大きな獲物を待ち続けた。しかし、それからパツタリと釣れなくなつてしまつた。俺はフナ釣りが嫌になつて釣竿をあぜ道に放り投げた。

ある日、ふと紐でぶら下げたフナのことを思い出した。小屋の戸を開け、腐った藁の匂いがする薄暗い空間で、目を凝らしてそれを探した。干からびたフナはすぐに見つかり釘に

引つ掛けた紐を外そうとすると、からからに乾いているにしてもそれはあまりにも軽かった。

二週間ほどの間に乾燥が進んだからに違いなかったが、それにしてもスカスカな感じだった。俺は外に出て、開いたまま固まった口から中を覗き込んだ。まるで潜水艦だと思つた。フナの形はそのままに、中が空洞だったからだ。

その空間に、背骨と上下に伸びてヒレにつながる骨が透明に白く静かに輝いていた。

俺はそれを部屋に持ち帰り、ハサミで体の片側の皮をゆつくりとていねいに、かつザクザクと切り落とした。それは完璧で、何一つ欠けたところがなかった。すべての肉が溶け去り、骨と皮だけが残つたフナは神の創造の完全さを表していた。自然とは、こんなにも美しいものだったのだ。

でもどうして肉が消えて骨と皮のみが残ってしまったのか。ただ乾燥しただけならば、カリカリの干し魚のように、そう、トビウオの干物のようにカチカチになつていたとして、肉が残っているはずなのに。

俺は再び水路の脇にしゃがみこんで時を過ごすようになった。尻を畔につくと濡れる。だから、膝を曲げて座っているが、そうすると腰が痛み膝から下が痺れた。しかし、俺はそんなことはおかまいなく座り続けた。そして、大ききとは関係なく、釣れたフナはすべて、口から鰓蓋に紐を通し倉庫の中に吊るした。吊るしたフナは五十を超えた。俺はそれを見て満足し、数日経ってから、懐中電灯を持って倉庫に入っ

た。高ぶる心を抑えながらその一つ一つを手に取り、空洞と化した乾いた口に懐中電灯を照らして中を覗いた。

そして発見したのだった。

それは無数の黒い小さな点だった。

一番新しい生乾きのもので一番古くてすべての肉が消え去つたものを除いて、その間の状態のフナの腹の中は真っ黒い点で覆われていたのだ。その無数の点はフナの内側を埋め尽くしていたが、一つ一つが盛り上がった点であることは、その頂点が懐中電灯の光を反射していて無数の星が並んでいるように見えることから明らかだった。

俺はフナの口から息を吹き込んだ。すると無数の黒い点はざわざわと蠢き、また動かなくなつた。一匹のフナを紐から外し、自分の部屋に持ち込んで机の上で逆さにして振つた。

しかし、何も起きなかつた。だから、鱗で覆われた十センチの体を、潰さないほどの力で左手で握り、右手で軽く叩いた。何も起きなかつた。今度は引き出しからハサミを取り出して、口の端からザクザクと切つていった。

そうして腹全体の皮を切り終わつて、急須の蓋のようにぱつくりと鱗のついたその部分を剥がした。

フナの腹の中は大騒ぎだった。何百という直径三ミリほどの点が無秩序にうごめいて、あるところでは幾層にも重なり、あるところではお互いの体につるつると滑つて、ひっくり返つた連中が脚をバタつかせていた。そいつらは慌てふためいていた。

俺は久しぶりに覚える興奮に目を輝かせ、そのことが意味するたくさんの可能性が次々と頭の中に浮かぶ刺激に恍惚とした。それは夏休みのことだったから、まず思いついたのが自由研究だった。

フナの肉を食らう直径が三ミリの虫の研究。それが何という虫で、普段は何を食べていて、乾燥した魚を食べるのなら、動物の肉も食うのかとか、人間の体から出るタンパク質のかすみたいなものも食べるのかなど、いろんな考えが次々と浮かんで、空想は尽きなかった。でも、それがわかったにしても、その情報を明らかにするのは勿体なさすぎる。そのことは内緒にしておいて、そいつらの完璧な骨格標本を提出した方がインパクトがある。

それも、皮の部分を全部剥がした完全な骨格標本と、片側だけ剥がした、半分は生きてるように見える標本を、水中に仕立てた箱に並べるというアイデアが浮かんだ時、俺はまだ十歳にも達していない短い人生で初めて、生命というものを意識して、自分の命が終わる時も含めて、肉体の生々しさを感じたのだった。

それからその考えに沿って、一週間をかけて水の中の様子を作り上げた。今の言葉で言えばジオラマで、小学生にしてはとて良くてきていたと思う。それは見事に学校の夏休みの宿題の課題で金賞を受賞し、県の作品展に出されることになった。

普段は俺のことに全く興味を示さない母親が、その時だけ

は興奮して俺に寄り添った。しかし母親は、俺の作品が金賞をとったことを喜んでいただけではなくて、骨格標本そのものに関心があったのだった。俺が机の上にそれを置いて見つけていると、母親は俺の肩越しに覗き込み、きれいなねー、きれいなねーと何度も溜息のように呟いた。

その時、母親の息が俺の首に当たったのが気持ち悪くて、俺は目を閉じてじっと耐えた。

俺はその虫がカツオブシムシであることを突き止めた。図鑑に載っていたその虫は黄色がかったいて、表面には複雑な模様があった。しかし、フナの肉を食ったやつらは、大きさや体の形はカツオブシムシそのままなのに、真つ黒なのだった。

家に着くと、教会の車が俺の到着を待っていた。葬式の日程を変えたから、母親の死体をそのまま教会に運んでいってそこで棺桶に移してもいい筈なのだが、元々の手はずを勝手に変えては悪いと思っただろう。

俺が車から降りるのを待って、運転手の若者は俺を促し、二人で空っぽの棺桶を駐車場のアスファルトに下ろした。次に、俺の車から白い布団にくるんだままの母親を引つ張り出して、そのまま蓋の空いた棺桶の中に入れた。

母親は軽かったし、母親の言葉を借りれば、母親の死体は単なる物なのだから、作業は単純だった。検視が終わる骸であることが書類で証明されれば、こうして物として扱っても

誰も何も言わないのだ。これが自分の母親だったのだという事実は今もつきまといつていたが、この死骸に愛情は感じなかった。悲しい気持ちもなかった。俺はただホツとしていた。

「何で教会に頼むの」

母親は常に「神は存在しません。あれは人間の妄想です」と言い続けていた。だから、死後の準備の一環として教会に葬式を頼んだと言ったので、俺は驚いてそう聞いたのだ。

「教会が一番しがらみがないのです。葬儀費用は全て払ってありますから、私が死んだらただ向こうの指示に従えばよいのです」

「神を信じていない人が教会に葬式を頼むというのは、神への冒涇とは考えないの？」

「神はいないので。冒涇などあり得ません」
俺は、黙って頷いた。そうするしかなかった。

都合が良いことに棺には窓がなかった。誰かが手を合わせて人間の死体を崇拜することがあったら、神に対して罪を犯させてしまうことになるというのが教会の考え方なのだろう。死体となり、物と化した母親も、手を合わされるのは嫌だったに違いない。だからちようどよかったのだ。神を信じる者と、神を否定する者の考えが一致していたのだ。

母親の言葉によればそれはただの死体だった。それは物と化してしまっても、俺の中では俺を拒み続けた母親の骸

でもあった。

若者と二人で棺桶を教会の車に乗せ、妻と二人でその後続いた。

教会の礼拝堂というから、もつと厳かな場所を想像していた。黒光りするキリストの像が正面にあつて、丸い柱が何本も縦に並んでいるというイメージがあつた。しかし、そういうえばここはプロテスタントの教会だからキリストの像はない。奥の壁に縦の長さがせいぜい三十センチほどの白木の十字架がかけてあるに過ぎない。そして、真ん中の通路の両側には木製の長椅子が縦に六列並んでいる。椅子は長い間使い古されてきたようで、角が擦れ、座面には手作りの座布団が敷いてある。キリスト教会はこうも質素で貧乏っぽいのかと、半分あつけにとられていた俺を横目に、数名の若者が母親の棺を通路の奥の一段高くなった説教するための壇上に運んでいつて、二つ並んだXの形をした折りたたみ式の台に載せた。左右の端には小さな机があつて、茎の曲がった百日草をさした日用品の花瓶が載せてある。

急なものですから、これしか準備ができなくて。五十年代後半と思われる、面長の頬のこけた牧師が、申し訳なさそうに、でも、精一杯やっただですという気持ちも漂わせて棺を見下ろす。

午前一時から始まった葬式の参列者は妻と数名の教会の役員と棺を運んでくれた若者たちだけだ。三十分ほどで式は終

わり、賛美歌を一つ歌うと、俺は母親から解放された思いで、ホツとため息をついた。俺はついに生きていた母親から完全に解放されたのだった。しかし、これから死んだ母親との深い関わりが始まりかけているという自覚に、俺は背筋を伸ばして深く息を吸い込んだ。

俺はほとんど毎日母親に叩かれていた。しかし、殴られた物理的な痛みより、無言で口を一文字に結び、俺を見つめる水のような視線のほうがよほど心を刺した。

あなたを恥ずかしくない大人にするためです。そう言っただけで殴った。殴る時の鬼のような視線に、その言葉とは裏腹に、理性はなかった。感情を抑えられず、俺の頭を平手で叩いて、それが俺の将来のためであると言われても、俺は訳が分からず、ただ心を閉ざすしかなかった。

ある時風邪をひいた。母親は俺を病院に連れていった。そのうなのだ、病院には連れて行ってくれたし、食事も作ってくれたし、服も買ってくれたちゃんとした母親だったのだ。でも、母親はその一つ一つをするたびにため息をついた。ハートと深く息をして、母親として果たすべき義務であるから仕方なくやっているのだというふうに、俺を諦めの視線で三秒ほど見つめ、再び、ハートと、ため息をつくのだった。

母親はため息をついてコメを研ぎ、ため息をついて布団をたたみ、ため息をついて洗濯物を干した。何がそれほど嫌だったのだろうか。母親は一挙手一投足、すべての行動を疎ん

でいた。

俺は風邪をひき、頭の中はぐるぐると回り、激しい吐き気を我慢するために地面に座り込んでゆっくりと深い息をしていた。母親は俺を見下ろしてため息をついた。そして俺が立ち上げられるまで無言で待ち続けた。しかし、決して立ち上げるのを助けてはくれなかった。

何分かつたか分からない。俺が立ち上がり、吐き気を抑えながら歩き出すと、買い物カゴを下げた母親は俺の前をどんと進んでいった。病院のドアを開け、スリッパに履き替えるのに俺は難儀した。少しでも体を動かすと吐き気と目眩で立ってられないからだった。でも母親は母親としての義務を果たし、病院に連れてきてくれた。そして、金を払ってもくれた。

診察が終わり、母親は買い物をして帰るから先に帰っておくようにと言っていなくなった。俺は帰り道で、吐き気とぐるぐる回る世界に立てなくなってしまった。

あれほどの目眩と吐き気は、俺の人生で最後であるほどの激しさだった。俺は用水路の脇にしゃがみこみ、それが一分だったのか一時間だったのか、吐き気が収まるのを息を絶え絶えに待った。やっと歩けるようになって、ふらふらと家に戻り、玄関を開けると母親の無言の視線があった。

俺はただ、まだ残る吐き気と戦いながらそこに立っていた。俺はその場で殴られ、蹴られた。

母親の手が振り下ろされ俺の頭を真上から殴った。一段高

くなつた畳から蹴り上げた母親の足が俺のみぞおちに見事に命中した。俺はその場に倒れこんだ。

あんたのことを心配して病院まで連れて行ってやったのに、どこをほつつき歩いていたの。

その時の母親の叫び声はいつまでも耳に残つて、決して消えることはなかった。

俺は魚の骨格標本で県の作品展でも金賞をとつた。理科の教師は猫まで声で、どうやってあんなに見事な標本を作つたのかとしつこく聞いてきた。

やっぱり水酸化ナトリウムで煮たのかい。でもそんなことしたら、皮は溶けてしまつて鱗もバラバラになるだろうからね。君の標本は本当に素晴らしかった。あれだけ綺麗に皮膚も残つていたんだから、土の中に埋めて掘り返したわけでもなさそうだし。

俺は冗談めかして、覚えたばかりの企業秘密という言葉を使つてごまかした。教師はどうしても答えを知りたがつた。ウジ虫ですと嘘をつくと、そうか、やっぱりな、と言つて満足したふうだった。

ウジ虫かー、ウジ虫かー、と何度か呟いたが、自分で骨格標本を作る様子でもなく、多分、自慢話のネタにするくらいだろうからそれでいいのだと思つた。

父親がアルツハイマーを患い公立の老人ホームに入つたとき、母親はやつと父親に解放されたと言つて、我が家どころ

がりこもうとした。しかし、将来のこともあるからと、やつとの事でなだめすかし、入所費用を出してやつて私立の老人ホームに入れた。そのとき母親は、父親からはなるべく離れた施設を選ぶようにと俺に命じた。俺はその通り、百キロほど離れた隣の県の施設を探してきたのだつた。

それから五年、父親と母親は何の連絡を取ることもなく、異なつた老人ホームで次第に老いていった。

父親が入つたのは新築の、ヨーロッパ風のホテルを模した老人ホームだった。アルツハイマーで最重度だったから、簡単に入ることができた。老健を探すのに散々苦労していたから、あつけなく入れたことに驚いたし、ほつとした。それは個室で、八畳ほどあつただろうか。新築で染み一つなく、窓からも明るい日差しが入つていた。廊下にも発光ダイオードの光がまばゆいばかりに差しているのに、施設全体が冷たかつた。俺ならば絶対に入りたいとは思わない温かみの無い場所だった。

広い個室にポツンと置かれた柵のついたベッドで寝起きをするのだ。父親は俺が誰なのか理解できなくなつていたから、見舞いに行く必要はなかつた。でも世間体があるから、月に一度くらいは通つた。世の中の人も多分そうだろう。

もう自分のことが誰かさえも分からなくなつてしまつた親の手を取つて涙を流すのは、それはそういう遺伝子の、ごく稀な可哀想な人に違いない。ほとんどの人間は、見舞いに行つても親子の血の繋がりを認識してくれないことに限りない

解放感を覚えているのではないか。

とにかく俺は、冷たい人間だと思われたくないから施設に通った。

「最近、どう？」と、訪問するたびに俺は同じことを聞く。「忙しかとですよ。今日も兵隊さんの出て行かすとは見送りにいっとつたと」

父親の答えも毎回同じだった。そして、クリーム色の壁の向こうの遠くの世界を見つめている。

父親の生活圏は、自分の部屋とせいぜい五メートルくらい離れた食事を摂るテーブルの間だけなのだ。その空間で、父親は子供に戻り、出征していく兵士を毎日見送っていた。

老人ホームに入ってから三年後、父親が誤嚥性の肺炎で緊急入院し、あと二週間の命と告げられても、母親は見舞いを拒んだ。

父親は若い頃結核で片方の肺を失っていた。入院した病院の医者は、それを考慮すると多分あと二週間でしょうと言った。俺は、父親に対する未練はなかった。死ぬのならば、早い事死んで欲しかった。

数日して危篤状態になった。

俺は母親の意思ということにして、人工呼吸器とかの延命処置は必要ないと伝えてあった。母親の認識では、生きながらえてもそれは価値のない命であり、後世の人間に負担をかけるないためにもなるべく早く死んだほうがいいのだ。

父親は男ばかりの四人兄弟の次男だった。長男はビルマで戦死し、三男は東南アジアのどこかで脳に被弾して半身不随となり、四男もどこかに従軍していたのだという。

父親は兵舎で上官に呼び出されて告げられた。

「お前は兄弟の全員を戦線に送っている。もう十分にお国に奉公している。お前は実家に帰って母親を守ってやれ」

「は！ 私も前線でお国に奉公したいであります！」

父親はそう言ったのだという。しかしそれは却下され、除隊となった。

「門は出たときの嬉しさは、一生で一番だったばい」

そして、地元の防空壕に住民を避難させ、その前で銃を構えて空襲が終わるのを待っていたのだという。

「あんどきや、ほんなこと、嬉しかった」という、心の底から湧き出た喜びを噛み締めた父親の気持ちは分かった。

口先ではお国に奉公したいと言いながら、本心は兄弟たちのご奉公の故に幸運にも除隊できた父親が、そしてそれを最高の喜びだったと、息子の俺に満面の笑みで語る父親が俺は情けなかった。

それを嬉しそうに語る一人の男の不甲斐なさに、俺は自分の誇りさえも失ってしまった。多分母親もそうだったのだろう。すでに遙か昔に心は離れていたのだと思う。

母親はそんな父親に、そんな結婚に徹底的にうんざりして、いわば世捨て人としてモノグサな人生を送るようになって

たのかもしれない。

父親の危篤が数日続いて、いよいよあと一日持つかどうかと言うとき、俺は母親を訪れた。

「親父が危ないらしいよ」

遠くの方にあるテーマパークの、富士山を模したアトラクションがたくさんの人を乗せてゆつくりと上がっていくのを見ながら、微動だにせずに、母親は言ったのだ。

「あなたに全てお任せします」

そう答えるのに三秒とはかからなかった。俺だつて任せられたくない。

集中治療室で意識もなく、死に至るまでの時を刻んでいる父親の後始末を、何で俺がやらなくてはならないのだ。

老人ホームの個室で、毎日兵隊さんを見送っていた父親なのだ。自らは上手いこと兵役を逃れることができたにしても、それは父親の体験であり、俺とは何の関わりもない。

「もう最後かもしれないんだよ」

「あなたにお任せします」

「分かった。機械的に処理しておく」
せいぜいの抗いの言葉だった。母親は窓の外を見たまま返事もなかった。

結局母親は父親の見舞いにも葬式にも出てはこなかった。

この究極のモノグサは、たとえその一部が父親の責任であったにしても、このように徹底していたのだ。

親父が死んでからも、俺は母親の髪を切りに月に一回老人ホームに通った。

母親の姿は見たくなかった。声も聞きたくなかった。匂いなんてもちろん嗅ぎたくなかった。母親とは二度と関わりたくなかった。でも、俺は、月に一回母親の手をとって車椅子に座らせた。そこから髪を切る儀式が始まった。

タンスの引き出しを開けて、少なくとも十年は経っているビニールの風呂敷を取り出す。それは二段重ねか三段重ねの折詰弁当を包む白い水玉模様の入ったピンクの風呂敷だった。俺はそれを母親の首に巻いた。床屋のケープの代わりだった。そして同じ引き出しから、数年前の日付が入った新聞紙に包まれたハサミを取り出した。それは俺が思い出すことができる限りのはるか過去から使い古されてきた裁ち鋏だった。それは取手が黒いペンキで覆われ、歯にはたくさんの錆が浮いていた。しかし、母親は新しい鋏を買ってくるようにとは言わなかった。黒い櫛も同じだった。プラスチック製のそれは、俺が高校生の頃から母親が使っていたものだった。三分の一の歯は欠けていたが、まだ十分に使えると母親は思っていた。

そういう面で母親は立派だった。良く言えば、物欲のない人だった。しかし、反面、全てを諦めているかのようにも思えた。世の中のあらゆる風潮に怒っていたと言ったほうがいいようでもあった。コロナ変わる政府の方針に怒り、テレビ番組の墮落を怒り、老人ホームで揚げ物ばかりが出ること

を怒った。しかし、もしかしたらその怒りは父親に向けられたものであったのかもしれない。

俺は母親の後ろに回り、櫛を下からあてがって、ほとんど真っ白になった髪の毛を揃えていった。老人ホームでは毎日髪を洗ってもらえるわけではないから、母親の髪は歳をとっていても脂ぎっていた。その髪に櫛を入れ、裁ち鋏で揃えていく作業は、庭木の剪定を趣味とする俺にとってはある種の快感を与えてくれるものではあったが、それが母親のからだの一部だと思ふと気が滅入った。

その日も母親の髪を切りに老人ホームを訪れていた。月に一回そうして母親の髪を切るために訪れてあげないと、伸び放題になり、俺は介護を放棄したことになる。

俺は母親の近くに寄ることさえ気持ちが悪いと思っていた。それほど母親を嫌っていたが、母親を嫌う自分の気持ちの方がさらに嫌で、その痛みを少しでも和らげるために母親の髪を切っていたのかもしれない。

親孝行なんて気持ちは微塵もない。孝行しなければならぬ。いいわけではない。

この街にはたまたま友人が暮らしていて、もしかしたら人生の最後となるかもしれない食事をさせてあげるために和食屋を紹介して貰ったことがあった。母親は一生体を動かしたことがないので、自分で立ち上がって体重を支える力が残っていないかった。俺はそうしなければならぬ、そうしな

ければ母親は動くことができないという理由で母親の手を握り、体を支え、車椅子から車に載せ替え、車から降ろし、ほとんどおんぶの状態で店に入った。

俺の方から何度か確かめないと何を食べたいのか言わない人だから、何度も尋ねた。自分の望んだものではないのがきたりしたらいつまでもそのことにこだわり続ける人だから、何度も、優しく、ゆっくりと、ていねいに、さらに丁寧に尋ねた。

美味しいね、美味しいねと数回つぶやいてくれたが、母親の言葉を信じるわけにはいかなかった。そのあとで、プライベートになった時の毒舌がこの人の習慣だったからだ。

翌週友人と会った時、店の人たちが、あんな仲のいい親子は見たことがないと言ったのだという。俺は吐き気がした。俺は生きる気力をなくすほど自分を憎んだ。俺は何で他人に誤解を招く行動をしたのかと自分を責めた。俺は母親が嫌いなのだ。俺は拳で机を何度も殴った。悔しさしかなかった。

その日、心に決めた。いや、もう何十年も心の中で温めてきた計画を実行に移すことを決心した。

俺は母親を骨格標本にする。

母親は俺が作ったフナの標本に感動してくれた。それは俺の一度だけの忘れることのできない経験だ。そして、母親は、母親の論理の中では死んでしまったら何にも残らないただの物質なのだ。火葬して二酸化炭素とわずかばかりのカルシウ

ウムが残ってそれで終わりなのだ。

しかし、それでは俺との心のつながりあまりにも希薄ではないか。俺が幼い頃から求めてきて、フナの事件を除けば一度も満たされることのなかった母親との心のつながりは、本当にそれで全てが終わってしまうのだ。

小学三年生の頃、音楽の教師がわざわざ家に来た。

この子は磨けば開花する才能を持っている。私が責任を持って指導するからバイオリンを習わせてほしい。音楽教師のこの言葉は母親の四角い世界からは完全にはみ出していった。母親は、百万分の一の可能性も残さず、この教師を追い返した。

だから俺は、この醜い母親を醜いままではなく、美しい形で残したいと思ったのだ。俺の記憶に残る限り俺の母親は他人をなじり、実の息子を殴っては、この世のものとは思えない形相でにらめつけ、世の中が完全でないことを憂いていた。

俺は、そのままでは世界全体が、救済なんてありえない絶望の場所と化すように思えたのだ。喉をかきむしるような気持ちで俺は救いを待ち続けた。でも、それは誰からも得ることとはできなかった。そして、その救いをもたらすことができるのは実は自分自身だということに気づいたのだ。

母親を骨格標本にする。完璧な形で全ての骨を残し、骨と骨を繋ぐ腱までもぎりぎりに残して、世界で最も完全な標本を作るのだ。

俺はそのためにもう何年も前から具体的な準備を進めてき

ている。骨格標本を作る様々な方法は高校と大学の頃に随分と研究した。裏庭に猫の死体を埋めて一年後に掘り出したこともあるし、強いアルカリで犬の死体を煮たこともある。でも、結局は最も綺麗な標本を作るにはカツオブシムシに食べさせるのが一番いいという結論に至った。それは大学四年の時で、理学部の生物学科に属していたから、堂々とそれを卒論のテーマにして毎日実験をしていた。

しかし、カツオブシムシに死体を食べさせるのは簡単なことではなかった。そうするにはまず死体を乾燥させる必要があった。そのままだったら乾燥するのに何ヶ月もかかり、その間に腐敗が進行してしまう。だから、内臓を取り出して、骨を傷つけないようにできるだけだけたくさんの肉をあらかじめ剥がして、なるべく乾燥しやすくする。そうした下ごしらえを完璧にした上で、カツオブシムシに食べてもらうのだ。

母親は虫を集めやすい理想的な季節に死んでくれた。俺が運営する生物研究所の一角には職員谁也手を出すことのできないう部屋があって、全ての準備は整っている。俺はこれから、いくつもの緻密な処理を通して、とてもモノグサでは完成しえない世界一美しい標本を作るのだ。一番厄介なのは頭蓋骨だが、豚の頭を使って実験を繰り返して、脳みそをバキュームで吸い出す技術は確立した。死体の処理も、検体に関する偽の書類も全て解決済みだ。

俺はその先のことを考えている。出来上がった標本をどこでどのような形で展示するのか、どのようにすれば、母親の

骨は命という煩わしいものから完全に解放されて、最も美しく輝いて観覧者の視線を奪うのか、あるいは俺一人の秘密として何処かに隠したままにしておくのか。それとも、例えば五百年後に誰かが偶然発見する仕掛けをして、俺は俺で何処かで自分の命を終えるのか。

「棺はどのようにすればよろしいでしょう」

母親の言う通り、俺は手のかからない人間なのかもしれない。気がつくといつも空想にふけっつていて、一人だけの世界で充足している。

牧師の声に母親の葬式という現実引き戻される。

「ええ、私の車に乗せていただけますか。それと、妻は一人で帰らせたいと思いますので、申し訳ありませんが、タクシーを一台手配していただくとありがたいです」

牧師は若者達を呼び、指示を出している。俺は妻に、先に帰るようにと小声で促す。牧師が振り向いて、俺に歩み寄る。

「生前のお母さまとは一度しかお会いしたことはありませんが、お話をさせていただきながら浮かんだ聖書の言葉が実はありまして、今日は是非それをお伝えしようと思っております」

生きている母親との関係はまだ終わっていないかったのかと、俺は不意を突かれる。牧師は、革の表紙の聖書のちょうど真ん中くらいのページを開け、それを両手で支えて俺の目の前に突き出す。そして俺の視線が、自分が指差した箇所と

一致していることを確かめて、ゆっくりと発音していく。

我が愛するものよ、あなたのすべては美しく、あなたには何の汚れもない。

牧師が俺の母親にそんな印象を持っていたのだとしたら、それはまんまと騙されていたに過ぎない。母親は蔑む対象でない人間には丁寧すぎるくらい言葉を使って決して本性をあらわにしない人だったから。

「これって、予言でしょうか？」

俺は半分皮肉を込めて聞いてみる。

「そうではありませんが、どうしてそう思われたのでしょうか」

「ふとそういう気がしただけです。生きていた頃の母親は、身内からしてもとても褒められた人ではありませんでした。でも、これから、やっと生命というしがらみから解放されて美しくなっていくように思えてならないんです」

牧師は無言で俺の言葉を反芻している。そして、何かを聞き返そうとするが、あとは神に任せるときであるというふうな、目をつぶって何度か頷いた。

俺は深く頭を下げて車に戻り、テールゲートを開けて棺を乗せる準備をする。

了

(愛知県知立市)

「市民文芸賞」

猫に草

s u i l e n

渋谷^{しがや}の薄暗い地下にあるライブハウスに、日が暮れたところに足を運んだ。

緊張を心の奥に追いやって、平静を装った。彼は、すぐそばにいた。誰かと話をしている。話し声が聞こえてくる。

「好きです」

大学生くらいの女の子が彼に告白している。

「ごめん。俺、好きな人がいるから」

と彼が断わっていた。断るのに慣れているのかな、と、耳だけダンボにして聞いていた。次は、私に話しかけてくれるかなあ。と、約束を思い出して、その時を待つ。

隣にいた彼の友人のひとり、ルカが私に話しかけてきた。

「エリカは、オレのバンド好き？」

とにこやかに聞いてきた。ルカのことも、ルカのバンドも、

好きでも嫌いでもない。彼の友人だから社交している。それが普通だと思っていたから。だから、あくまでも社交辞令でこたえた。にこやかに。

「好きだよー」

軽く答えた。いつもの私の口調だったと思う。けれど、それを聞いていた彼は、「彼ではなくルカが好き」と言ったと勘違いしてしまったようだった。それが分かったのは、そのときではなくて、後になってからのことだったけれど。まったく。なんで、あのタイミングで勘違いするようなことをルカは聞いたのだろう。腹立たしさをいまだに感じる。

だから、今となっては、ルカのことは正直信用ならないと用心している。ルカは、実は、自分勝手に、自分に甘く、わがままなところがある。自分さえよければそれでよくて、他人のことなど構わずに、自分がチャホヤされたいのだ。

だから、今はルカのことを彼の友人粹という社交辞令で受け流すこともしたくないし、幻滅していることは確かだ。

が、あの日の私はルカを信用していたし、常識があり、私と彼を結び付けてくれる架け橋になってくれるはずだと思いつ込んでいた。彼の周囲の人々は、だれもがみんな私と彼の関係に好意的だったから。

ルカのバンドが好きと口にした途端、彼はその場を去ろうとして、楽屋口に向かった。

私はすぐにその後を追った。今日を逃したら、いつまたチャンスが来るかは分からない。そう思って、焦っていた。自分を取り巻く環境が以前と変わってきてしまったように、私は感じていた。それが錯覚だとしても、感覚に訴えてくる鳥肌が立つような気もち悪さは抜けず、彼といっしょなら乗り越えられるはずだと、私は彼のことがばかりを頼っていた。何が起こっているのか、それさえも分からずに。

「なんでなの？ ユエ」

私は彼を追って楽屋に入りながら、聞いた。なぜ、逃げるの？ 私から。

わけが、分からない。

それだけが頭の中にあつた。ユエは、見たことのないような形相をしていた。まるで、怖いものでも見るような顔をして、

私を見た。

それが、十二年前の出来事だった。頭が真っ白になって、階段を上ったことは覚えている。けれど、ライブハウスの場所も名前も、その前後のことも覚えていない。

ただ、大阪城ホールおおさかじょうのトイレを出たら、後ろで、「よく来れるね。あんなことあったのに」

という声を聞いた。きつとあのとき渋谷にいたんだろう。



新宿駅しんじゅくに山手線が入ってくると、すぐに、いつものエスカレーターへ向かって、地下へ下がり、迷路のような新宿駅の構内をすすつと抜けて会社まで、駅の出口から徒歩1分。それが私の通勤だった。ビルの5階にオフィスがあつて、プラインドのすき間から、スクランブルに交差した歩道橋と東邦生命ビルが見えた。

事務所では、いちばん奥のコーナーに席があつて、私は私語が嫌いだつた。極力会話はミーティングテーブルか会議室で行いたいと思つていた。

唯一、コーヒータイムだけが休息のときで、お茶はいろいろなものをそろえていた。コーナを独占しすぎて、総務の女の子に苦い顔をされたほどだ。私をおそれて何も言わなかつたけれど。

そう、私は、社内というか、事業部内の女子たちにこわがられていたのだけれど、特に口を大きく必要もなかったので、そのままにしておいた。それさえも彼女たちは気に入らなかつたらしいけれど、そんなことは知ったことではない。つまり、放置していた。

もつと質たちがわるい女子たちもいた。お姉さま方だ。ぶくぶくと太って、ランチに男子と同量の定食を毎日平らげる彼女たちは、驚くべき情報網を構築して、気に入らない人間を陥れる噂話で憂さを晴らすのに余念がない。全国展開しているから、おそろしいほどだとあきれていた。

ある日、飲み会があった。国立くにたちにある事務所の人とお偉いさんたちを交えた懇親会のようなものだった。女子はいつものとおり私ひとりだ。そのとき、国立の事務所で顔なじみのNさんが、声をかけてきた。

「ねえ、ねえ、一条さん。

「結婚したんだって？」

「は？」

思わず声を出してしまうところだった。は？ どういうことですか、それは。

「え？ 何ですか？ してないですよー」

と答えると、Nさんは、しまったという顔をした。やられたという感じにも見える。

ああ、そういうことね。

「誰から聞いたんですか？」

と聞いても答えない。

謀られましたね、Nさん。お姉さま方の情報網に踊らされて、そんなニセ情報をつかまされたのだろう。それは翌日出社したときのお姉さま方の反応で裏付けが取れた。Nさんに、かなり噛みつかれたのだろう。自業自得ですよ。姉さんがた。

というように、会社という小さな組織のなかでも、有象無象の輩が跋扈はつこしているのが現実なのだった。

それでも、わたしは、そういう下らないこともありつつも、そんな毎日に一定量満足していた。いつか、去らなければならぬとは、どこかでは感じていたかもしれない。

でも、それは、会社の名前や場所が違うだけで、やっぱり都内のどこかで、私はビルの中で仕事をして、苦手な電話でのやりとりをしたり、要領を得ない取引先との連絡メールをしたり、つまらない会議は上司に任せて、コンビニでジュ-

スを買ってきたり、偉いさんと軽口を交わしたり、そんなことをして、過ごしていくんだらうと思っていた。結婚をしても。

ひとり、また、ひとりと退職していく人が増えたのは、もつと前だった。

会社帰りの山手線^{やまのてせん}で、Kさんといっしょに渋谷まで乗って行った時のことだ。Kさんは、私が新入社員として入社したときから在籍していた女性の係長で、穏やかで知的で、よく私の泣き言を聞いてくれる優しい人だった。そのときまでは。

そのとき、Kさんは、わたしに《ひどいこと》を言った。それなのに、何を言われたのか思い出せない。Kさんが言い放ったセリフは、私の中では真つ白だ。

ただ、「私はKさんのことを一生ゆるすことはできないだろう」と心の中で感じた。それだけが残った。おそらく傷ついた私は、防御のためにそのセリフを消去してしまったのだ。都合のいい脳みそだなあ。まったく。

その後、Kさんから何度かの絵葉書と年賀状をもらった。

でも、会うことも話すこともなかった。

Kさんは、友人の会社に勤務していたが、乳がんが再発して、その後どうなったのか知らない。

Kさんが在籍中、ずっと抱えて、手放さなかった仕事がある。月刊誌の表紙の仕事だった。Kさんは、それを私に残した。引継ぎは簡素なもので、A4サイズ・1枚にまとめられた手順書は、表面的なことをさらっとまとめただけだった。ノウハウの共有を拒んだわけではなく、Kさんは「これでいいだろう」と判断して、その資料を残した。Kさんの脳みその中に書き込まれたノウハウは、退職とともに消えうせた。なので、表面的なことは引き継ぎつつ、自分なりにやることになった。

月刊誌の表紙といつても、1枚を表1から表4まで作る手軽いものではない。表1と表4は5版刷りという、1版多い仕様になっていた。全部で百五十種以上になる。

さらに、それは小学生用の教材だった。だから、4教科を6学年分作るので、十種。年間分を一気に作成するので、といつても並行して進行すると言う意味では月刊誌そのものなだけけれど。十二か月分ある。

それとは別に、表2と表3は、読み物の記事を掲載することになっていた。

単行本のように、改訂前の本をそのまま流用するという方法もあった。しかし、その都度改訂は必要で、さらにいえば、時代性に合わないという理由などで、差し替えれば新規ペー지를作成することになる。げっそりだ。

というように、重い仕事だけれど、表1のイラストの発注とマネジメント、進行管理や品質管理は全面的に自分でいじれるという楽しい仕事付きだったので、量に溺れ死にしようになりながらも、指定を入れるときなどはうきうきしながら、もがきつつ、楽しくはあるけれど、悩みつつ取り組んでいた。いわゆる、表紙デザインを担当していたことになる。



高校の国語や英語の教材の資料を作る仕事があった。原稿はアウトソーシングするのが常だったが、上司がのたまうには

「一条が原稿を書いたほうが、品質がいい」

とのことで、原稿を書くところから始めた。必然的に、高校の教科書を読むことになったのだけれど、楽しくて、遊んでいると傍目には見えたかもしれない。外注するよりもはるか

に早く原稿を仕上げただけけれど。

という上司ではあったが、あるとき、上司が作業していた部分が納期に間に合うかあやういときがあった。私が担当していた業務だったので、

「私も手伝います」

と言ったが聞いてくれない。

「打ち合わせを明日に延ばしましょうか？」

と言うと、そのほうがありがたいといって、むっつりとしていた。機嫌があまりよくないか、仕事が滞っているんだなと思っただけれど、終わったら取引先にメールで送っておくからという言葉を信じて、その日は帰宅した。

翌朝、出社すると、上司は、できてるから今から取引先に持って行ってくれという。

わたしは青くなった。納期は昨日だったのだ。それを分かっているながら、今日の朝までかかって仕上げたので、それを持って行けと言うわけだった。

「話がちがうじゃないですか！」

と怒鳴りたいのをこらえて、データを渡しに行くと、担当者はその日は休みを取っていた。ぎゃふん。古い。古いのは分かっているが、ぎゃふんという気分だったのだ。

なんだか、ひとりでもじめにコツコツ仕事してデータを完成させたのがバカみたいだなと思った。まあ、そんなもんな

のかなあ。

そう思いつつも、胸の奥にしまっておいた。

上司は、他部署からホイホイ仕事を請け負って、いい顔をする人だった。キャバオバーになれば、持ち帰りもする。残業もする。とにかく、社内立場を保つことにかけては上手に立ち回る人だった。

だから、後手に回された可能性は高い。それだけの話だ。

取引先には、私が納期を破ったと思われるだろう。そんなことは知ったことではないのだ。上司なのに。うーん。うーん。と悩んでも詮無い事なのである。無駄である。上司への不信感を抱いたのはたしかだが。



渋谷にAXというライブハウスがあった。いまはもうない。東京オリンピック誘致により、AXに隣接している国立体育館などを壊したときに、いっしょにおしなべて平にしてしまった。ブルドーザーで土地をどかどかと踏み荒らすように、夕陽の見える代々木体育館の見晴らしのいい展望台はなくなってしまった。いまは記憶の中だけに存在している。ビルディングが乱立している都内で、あんなに空が広く見える場所は特別だった。オーストラリアのオペラハウスに似た

かたちをした体育館の建物も美しかった。高度成長期の美というか、「古き良き時代」の名残のようなものが見えた。それも、もう、ない。

ふふ。なんだか、おかしい。だって、記憶の中のあの場所は、変わることもなく永遠に存在し続ける。あの時のすがたのまま。壊してしまった暴力など気にせずに。美しいすがたのまま。それが、壊されてしまったものたちから破壊者への復讐のような気がして、なんだか、すっきりしてしまった。もう、ない。だから、見ることもできない。私の記憶の中にだけ、あればいい。

AXで、ユエと待ち合わせしていた。ところがユエは、私が行くことをマネージャーや受付に言い忘れて、だれも来ないようにと作曲中だからと理由までつけていた。楽屋口で私は困ってしまった。電話しても出ない。

いつも通っているプールの入り口が、AXの裏口が見える場所に合った。子どもたちのスイミングスクールもあるからか、雨宿りや日よげができるような東屋のようなものがごちんまりとしてあった。そこに、ライブに来たのだろう女の子たちが幾人かいるのが遠目に見えた。今まで、その場所に入っていたのを見たことがなかった。プールに連日通っていたのに、一度も。

「はー」

というほど気楽ではなかった。すぐに泣いてしまったのを覚えていた。人前ではなく、渋谷の街に戻ってから。

怪訝な顔で見るマネージャーの表情に落ち着かない気分になったのを分かるだろうか。そのマネージャーは、その後、私のことを知ってから、苦虫をつぶしたような顔というのだろうか、嫌そうな顔をしていて、ほかで見せるような屈託のない顔をしたことはなかった。私を待っていたらしいと後で気づいた熊谷のときでさえも。怒っているのかと思うような仏頂面をしていて、その表情に気後れして、そういう人には寄り付くことができなかった。そういう気後れしてしまうようなところが私にはあって、ときどき顔を出す。本来の引っ込み思案な性質の端っこがひよっこりと出てくるように。

「ユエ、どうしてなの？」

西武百貨店の前で、(いや、公園通りのPARCOの前だったろうか?) ユエにメールを送っても返事はなかった。そのころ、いつもそうだったように、その日も私は泣いていた。泣いてばかりいた。

ユエは、それ以来、AXで一度もライブをしなかった。その前は、あんなにAXでのライブを楽しんでいたのに。

◆
季節は秋の終わりを迎えていた。その日は、ユエのバンド

のアルバムが発売日だった。長野で迎えたその日、私はお祝いに長野までかけつけた。長野へ新幹線で東京から行くのは初めてだった。その日はライブハウスでツアーがあった。そう、アルバムの発売が間に合わずに、ツアーが先行して始まるという異例の事態になったので、珍しいツアーだった。発売日は、一度延期になって、その後、また延期になり、最終的にツアー中にまでずれ込むと言う三度の延期をしたアルバムだった。

何がそんなにユエをアルバム制作の延期に追い込んだのか。ユエ自身は、いまでも覚えているのだろうか？

窓をすべて黒いカーテンで覆ってしまっ、真つ暗闇を作り、そこにこもってひたすら作曲をするという、ユエの作曲スタイルは、それだけでも鬼気迫るものがあり、異様で、そこまでしなければ、作曲というものはできないのだろうかと思配したほどだった。

私自身の創作の過程では、原稿を書くときに右往左往して、イライラしたり、本屋や図書館に行ってみたり、それでも原稿が書けなくて、ほんやりしたり。そのうちに、ひよつと書けてしまうということがあった。というか、そういうことがほとんどだった。

それに比べて、あまりにも自分を追い込んでいる創作方法に驚いたけれど、ユエは、自分自身を追い込むのが好きだと言う。でも、アルバムを制作し終わると、かならず、「もう、アルバムは作りたくないな」

というのだった。

しばらくすると、ふしぎと作曲したくなるようで、最期のアルバムかもしれないなどと口にしていたのが嘘のように、ユエは作曲に入る。そして、また、悶々とした日々突入していく。



長野のJUNK BOXはビルの中にあつた。その日、私は何色の服を着ていたんだっただか。とにかく、色を気にしていた。ちょっと前までは好きなように服を選んでいたのに、ユエは色を気にするようになっていたからだ。7月にあつた横浜よこはまのイベントで暑くなつて薄い上着を脱いだらピンク色のTシャツだとユエが勘違いしてしまった（それは黄色地にピンクの柄があつただけのTシャツだったのに）。またユエを傷つけないようにと神経質になつていた。

たしか、紫の薄手のカーディガンを着ていたような気がする。それが気に入らなくてメールも電話も返事をしてくれなにかと思つた私は、カーディガンを脱いで、黒い服にしたんだつたと思う。さだかではないけれど。

何階にあつただろう？ そのビルの前面ガラス張りの窓にくつつくようにして並べられていたイスに座ろうとしたら、車に乗りこもうとしているユエのすがたが見えた。ユエはこ

ちらに手を振つて、車のライトを点滅させた。昼間なのに。

ああ、もしかしたら、タワーレコードに行ったのかもしれないと思つた。あの頃から、ユエたちは、発売日にタワーレコードに行つていたから。

でも、なぜ？ 私はこんなに不安だ。すぐにでも会いたいと思つて早く出てきたつもりだった。それでも、彼は返事をくれない。失望しかけた。

もう、待つのは限界だとも感じていた。それは、3月にアメリカから帰国した日にユエが友人たちと目黒川めくろがわの花見に行つたと知つたときから、ずっと続いてきた。それでも、夏まではと思つたし、作曲が終わるまではと日延べして、ただただ待っていた。

アルバムが発売されたのに、なぜ？

ツアーはとつくに始まつていた。その初日だつたらうか？ 何かのイベントだつたらうか？ 横浜にあつたBLIZZにも会いに行つた。でも、雨の中で傘をさして待つたまま、会えなかつた。その日、ユエは徹夜続きの末のライブで、ほとんど意識がない状態でライブをしたと後になつて聞いた。

ファンの子たちが、物販でバンドが販売しているオリジナルのTシャツやタオルを買つて着替えて祭りの前のような揃いの格好をしてニコニコ笑つていくのが見えた。左手奥に何かあるのだろうかと思つたけれど、見に行つたりはしなかつ

た。控えめにしたほうがいい。そう思っていた。

それが、ルカのバンドが楽屋を飾って、ファンに公開していたからだというのも後から知った。

開場時間になってみんなが次々に入場していく時間になって、まわりには人影はなかった。ゲストリストを見ても私の名前はなくて、だれもいなかった。ツアーの主催はユエのバンドだったので、ルカのバンドがゲストアクトとして先に演奏する。私はあきらめきれずに、ユエにメールした。返事はない。

「帰る」

とメールした。そして、ビルの下まで降りて、あきらめきれずに、もう一度ライブハウスがあるフロアまで戻った。戻ってまた帰ろうとしたときに、下りようと階段に足をかけたから、ライブハウスから走って出てきた男の人と目が合った。その人が私に声をかけるかもしれないと一瞬思った。でも、その人は人ちがいだというように私を置いて、階段を下のほうへと駆け下りていった。

私は長野駅のイスでひたすら泣いた。

新幹線は最終だったろうか。混みあっていた。隣にいた年配の女性が、私が泣いているのに気づいて声をかけてきた。自分は病気をして不自由になったけれど、これから2駅向この娘の家に行く。孫の顔が見られるのが何よりの幸せだ。悪い事ばかりが続いたりしない。必ずいいことがある。だから

ら、だから、なんだったろう？ あの老女は何を言ったのだろうか？ 思い出せない。



年末年始はイベントのシーズンだ。渋谷でのカウントダウンイベントで年越しするのが例年のことになっていた。渋谷のクアトロで行われていたカウントダウンイベントで、ユエのバンドも年明けに毎年出ている。

クアトロに着いたのは夕方で、年越しだから、朝まで続くイベントに体力がもたないと踏んで、途中から向かうのが常だった。いまは一時間でもキツイが、当時は三〜四時間立っているのはなんでもなかった。平気だったのは毎日のように体力づくりをしていた一年半以上の実績があったからにちがいない。

フロアでビールを片手に待っていると、ユエの先輩のカウントダウンで、年が明けた。

年明け一発目がユエのバンドだった。そして、いちばん初めの曲は決まっていた。新年の歌だ。年一回しか聞くことができないう特別な曲だった。ステージに表れたユエは怒っていた。明らかに怒っていた。

そのとき、ユエが言った言葉もさだかではない。ただ、ものすごく怖い顔をしていた。そんな記憶ばかりで、やさしか

ったこととかドキドキしたこととか、たくさんあったはずなのに、忘れていくわけではないのに、書きたいと思えない。

「何かをしる」というような意味のことを言われた気がする。勘違いかもしれない。ユエは、まだ、成熟していなかった。いまでもまだ、青臭いところが残っているけれど、それとは別に、「誰かの言いなり」で「ひとのことを真つ正直にすべて鵜呑みにして信じて」いた。いまでは、「あんまり信用しなくていい」とか、「ひとのことを鵜呑みにするな」というほどになったけれど。そのときは、ちがった。「ああ、まるで駄々っ子だ。今日が逢える最後かもしれないのに、そんなふうには明日を信じて私に怒った顔を覚えさせるような真似をするんだなあ。この人は、わかっていない。しようがないけれど、わかっていない。」私には、かなしいことだった。それでも、私は強かった。そのときは強くあれた。微笑むことができたのだ。ユエが、私一人を誰よりも愛してくれていると信じてきたから。

そうして、年越しを境にして私は苦境に追い込まれ、気が付くと、初めての幕張メッセでのユエのライブも終わってしまい、私は、東京を去り、病院に入院していた。退院後も病状がすぐれず、一年くらいぐずぐずとした状態が続いた。東京の家は、親が引き払ってくれた。

何もしないうちに時間は刻々と過ぎて行き、その間に、ユエのバンドは、活動休止した。後日、そのことを私は、たま

たま知った。活動休止を発表した日は、私の病状が悪化した直後だった。



五月の連休のはじめ、両親とペットシヨップに立ち寄った。向かいにある釣り道具屋さんに父が行きたがったので、それに便乗して向かいのペットシヨップに行くことにしたのだ。その頃は、犬ブームがまだ続いていて、いろいろな犬種の犬が狭いアパートのようなキューブのような個室に入れている。寝ている子もいれば、愛嬌たっぷりにじゃれてくる子もいる。大きくなってしまっただけで主のような風格を身につけた子もいる。外の檻に出されている犬は、手を消毒すれば触ってもいいと書かれていて、ジャンプしたり、手をなめたりする犬たちが愛想よくあまえていた。

個室が連なる奥のほうに、猫のコナーがあつて、犬に比べると格段に少なく、数えるほどの猫がいた。どんな種類の猫がいただろう？ くわしくは思い出せないけれど、アメリカンショートヘアの生後3か月の子がいた。こちらをじっと見て、目を離さない。黒いふちどりのある目をして、目ばかり大きな子だった。しばらくよそをみて戻ってくると、うつらうつらしている。店の人に出してもらって抱かせてもらおうと、てのひらにすっぽりと収まってしまいうくらいのサイズだった。ちいさい。

「この子は、あんまり……」

と店員が口を濁した。どういう意味だろう？ 分かりかねた。ただ、ちいさな塊があたたかくてのひらで眠たそうにしているのが愛しくて、それだけだった。

両親は、そのひと月ほど前にいなくなってしまった猫が戻ってこないことをひどく気に病んでいた。老猫ではあったが、まだ死ぬような年でもなかった。あんまりにも猫が騒ぐので、父が外に出してやったさきり、戻ってこなかった。母はことさらに心配して、いつまでも外に向かつて猫の名前を呼んでいた。

そのことがあったので、気落ちしているだろうと娘をおもいやつてくれたのだろうか。アメリカンショートヘアの子猫は、うちにやつてくることになった。手続きはひどく面倒でいろいろなおプションがつけられ、表示価格を大きく上回る金額になった。

店員は、最後まで、ほんとにこの子で大丈夫ですか、とか、犬のように大きくなりませすよ、などと引き留めた。一体何を思っ止めるのか分からなかった。

家に連れて帰ってから、名前は私がつけることになった。ギリシアとローマの神話が好きで、その神話の事典を読んでいた私は、そのなかから、いくつか候補をあげた。

「エリカはどれにしたいの？」

わたしは、ひとりの女神の名前を指さした。そう、わたしは言葉が出なくなる病気になっていたのだった。

女神の名前は、レア。太陽と月の神を生んだ女神だった。

レアは、音楽を聴いて育った。当時、回復基調にあった私は、一日中、音楽チャンネルを流しっぱなしにしていた。レアのごはんをやるのも、まず、指定のキャットフードを水で溶かして離乳食のようにして、やわらかくしてから与える。私はレアがかわいくてしかたがなかった。眠っている姿を見るだけで満足だった。

音楽番組を流しはじめてすぐのころ、聞いたことがあるギターとベースの音がした。UさんのギターとHさんのベースの音だとすぐに分かった。知らないバンド名だった。ミュージックビデオにもたしかに、UさんとHさんが出ていた。知らない人が歌っている。そして、しばらく見ていると、ユエの声がした。私の知らないメンバーとユエが歌っていた。

ああ、音楽番組を何の気なしに見始めたのは、これだったのかと思った。

半年ほど、ユエは引きこもっていた。ラジオ番組のレギュラーは続けていたが、どこで何をしているのかブログで書き綴っている以上のことは分からなかった。それもパソコンの通信環境が整うまでのあいだは私は知らずにいた。

ユエの新しいバンドのファーストアルバムが発売された日に、アルバムを買った。

パッケージをあけて、CDのふたを開けると、盤面が見えた。

そこには、こぼれんばかりに満開のエリカの花の写真がプリントされていた。



インターネット環境が整うころには、旅行ができるくらいには、体調がよくなってきていた。音楽番組ばかり見ていた時期を過ぎて、歌を歌い始めた。最初はかすれたか細い声しか出なかった。それが、日に日に声が出るようになっていった。札幌に行つたのもそのころだ。入院してしまったので、行けなかった北海道旅行のリベンジという意味もあったのもしれないけれど、私はたまたま取れたユエのバンドのライブチケットを、母と二人分用意して、ZEPPELIN札幌に行くのを楽しみにしていた。ユエのすがたを見られる、ユエの声を聴くことができるのが楽しみだった。いつぶりの再会か分からないけれど、何を話してくれるのか。何を思っているのか。そんなことばかり考えていた。やさしいことばと笑顔があげばいい。そう、思った。

会場に入る前、少し寒いなと思った。季節はいつだったろう？ 昼は暑かったから夏になる前だったろうか？ 北の地というのは、こういうところなのかと思ったのを覚えている。

出囃子が鳴り、客電が落ちて、観客の歓声がわあつとあがる。フラッグが下りてきたかどうか覚えがない。ユエはステージの中央あたりで歌い始めた。澄んだ美しい声は、変わらない。繊細で、危うげなところも。

泣きそうな顔をしているように見えた。視力も落ちてしまったので、あまりはつきりとは見えなかったのだけれど。二階席で見たこともあって、表情はよく分からなかった。

ユエは、ただ、黙々と、ストイックに演奏に集中して、あつという間に時間が過ぎて、ステージを後にした。これといったMCもなく、ユエはとても緊張していた。隣で見ていた母はユエの声が気に入ったようで、「声がいい」と言った。母は人を褒めるのが下手なので、ひと言葉褒めると言うことは、十分すぎるほどユエの声を気に入ったということなのだ。



私は母といっしょに行ったことを少し後悔した。ユエは緊張してしまった。失敗しただろうか。翌日からは、母と札幌や旭川を観光して、ユエとは連絡も取らないまま帰宅した。

家では、レアが待っていた。私が両手を広げて、レアをのせている写真は、妹や弟に好評で、かわいいとお墨付きをも

らった。

レアは、あるときを境に急にビニールの音に敏感になった。レジ袋を怖がり、音がするとまっしぐらに駆け出して逃げてしまう。何年たってもそれは変わらなかった。

「お店の人に嫌われていたから、いじめられたのかしら」

母はいぶかしんでいた。

「お店に連れていくときに、ブリーダーさんがビニール袋に入れていったんじゃない？」

さまざまな憶測が飛んだ。レアがあきらかにトラウマを抱えていることはまちがいがなかった。そのせいなのか、レアには神経質なところがあった。前に飼っていた猫のような鷹揚なところがなかった。眠いとき以外のレアは、突然、怒り出したりする、ちよつとユエに似た怖がりさんだった。

そんなところも可愛くて、いつしよにベッドで夜眠ってほしいのに、なかなかついてくれなくてさみしい思いをした。でも、しだいしだいに慣れていって、冬の寒さにこごえそうな夜には、布団にもぐりこんでくるようにまでなつた。朝も目覚めるといつしよに起きようとする。寝ていていいよというとき、昼まで起きてこなかつたりする。夜は、寝る時間になると呼びに来る。

かわいくないはずがない。ユエに似ているなあと思うたびに、ユエに会ったらなかよくしてね、とレアに話しかけた。

◆

猫は毛づくろいを欠かさない綺麗好きな動物で、舌で体毛を舐めて綺麗にする。その毛が体の中に溜まってしまつと、吐き出す。そのために、草を食べたがる。

レアは、血統書付きの猫だったので、弱い子ではないかと、心配していて、ペットショップで勧められた値段も高めの療養食というキャットフードを与えていた。それは、毛玉を吐き出さなくするエサで、なので、レアは毛玉を吐くことはなかった。レアの体調が悪いときだけ、ごくたまに、胃液を吐くことがあったけれど、間違つて草を食べない限り吐いたりしない。レア自身も、見ているほうも、吐く苦痛を感じなくてすむので、安心していられるのだった。

◆

2011年3月11日。東日本大震災が起きた。私とユエが付き合い始めて、何年目かの記念日だった。9・11みたいだ、と私は思った。他人ごとではなくて、人知を超えた何かが、そういう大きな事件のときには絡みつくのだと何となく感じたからだ。嫌な匂いみたいなもので、自分の意思とは関係ないところで、そういうものが動いているような気がした。米国の多発テロとか、大震災とかがそれだった。

ユエは、ボランティア活動にのめりこみはじめた。ボラン

ティア先で出会ったり、いつしよに行ったりした仲間と親しくなり、頻繁に東北へ行き始めた。まるで、居場所を探しているかのようだった。居場所を探して、ここなら許されるだろうと考えているかのようには、東北にいたことが幸せうだった。なにかから目をそらすためのようだと私は感じた。

そんなもので、逃げられやしないのに。
私に会いに来てよ。

ユエは、ボランティアに夢中で、強行軍の日程を組んでまで慰問を繰り返した。いまでも続けている。

仕事が空けば、すぐに東北に向かうほどだった。異常なほどのめり込み方に、宗教や信仰のようなものを感じて、味が悪かった。でも、言葉は呑みこんだ。ボランティアを行うことは慈善活動として良い行いであることは間違いない。彼の心が病んでいて、それを癒す方法は、どこにもないことがわかっていったから、彼の先行きに不安を感じた。

ボランティアは、ユエにとつては吹き出し続ける血に貼ろうとしている一枚のバンドエイドだった。それはすぐに剥がれてしまう。傷口はふさがらない。そして、原因は私にあるんだらう、たぶん。

病気は、平静を保っていた。私は、薬を抜き始めた。医師

の処方通りに飲まなくなった。それだけ回復してきていたともいえるし、安定した環境に慣れてきたからともいえる。しだいに薬の数を減らして、一種だけを飲むようになった。

そうして、渋谷のライブハウスで開かれたDディJジェイイベントにユエが出ると言うので、出かけていった。

薬が抜けて、それまでオブラートにくるまれたように感覚を鈍らせてあった五感が戻ってきた。その楽しさを感じられる喜びは、忘れていた感覚だった。楽しさを感じられるうれしさで、私は舞い上がっていた。

「あとで」

ユエが私に言った。

私は快くうなづいた。

背の小さな女の子が、ユエに話しかけていた。後から思うに、彼女は歌手としてデビューすることになったとユエに伝えたのだと思う。ユエは、大喜びして、彼女を肩車して、何度も何度も乾杯していた。

店の店長らしい人も出てきて、酔っ払いだらけになった。

テキーラのグラスが並べられ、どれだけ飲んでも酔わなかった。まわりにいた綺麗な女の子たちといっしょにわけのわからないことで大笑いして、楽しかった。

ユエのまわりに人がいなくなつて、ユエはカウンターにひとり立っていた。両手の肘をのせて、もたれかかるようにしている。たぶん、相当酔っぱらっていたんだと思う。

私はユエの隣に行くと、腕を組んだ。そして、ユエが何か話すのを待った。次の瞬間、私はユエに突き飛ばされていた。

私が交際する相手に求めるものは多くはない。健康であることと、暴力を振るわない人。必要最低条件だった。

ユエは、ハツとして我に返ったように向き直り、私だったと気づいたようだった。そして、ドアから出ていった。

私は泣きたかった。でも、びつくりして、何が起こったのか、よく分かっていなかった。店が閉まるころに、いっしょに飲んでいた綺麗な女の人がやさしく肩を抱いて

「だいじょうぶ？」

と聞いた。私はいつの間にか泣いていた。泣くのも久しぶりだった。苦痛を抑える効果が薬にはあった。それが抜けたから泣くことができた。

病状は急激に悪化した。

薬を飲むことを思い出した。徐々に薬を増やしていった。でも、そんなに簡単に薬は効いてこない。飲み続けて何週間もたつてやっと効いてくる。

炬燵に入って、寒さに震えていると、涙が流れてきて止まらない。ユエのことはかりを思い出す。物音が轟音に聞こえる。顔のかゆみや手足の寒さが気になる。

以前と同じかそれ以上、薬を飲むようになって、やっと気

にならないほどの状態に回復してきたと思えたのは一か月か二か月後だった。

ユエにもう一度会わなくてはと思っていた私は、まだそんなに回復していないのに、次のイベントのときにユエに会おうと思っていた。両親は柿を剥いて干し柿を作るのが恒例になっていて、その日も柿を買いに出かけると言い出した。私は友人に会いに行くことに母に告げようとした。すると、物音がして、急にこわくなって、自分のしていることが間違っているような気がしてきた。それで、言い出せずに出かけることができなかった。

ユエは、たぶん、後悔していた。私に謝罪するつもりだったんだと思う。

でも、人は「それなら、エリカ、きみの家にユエが来て、きみに謝罪すべきだろう」というだろう。その通りだ。

でも、ユエは来なかった。

「次の日でもいい。いつでもいい。きみの家に来て、あやまるべきだ」と

というかもしれない。

でも、ユエは来なかった。

雪の日を思い出す。

ユエに初めて出会った日も雪が降っていた。

指から血を流していた日も。

夏の暑い日も思い出す。

ユエの熱い手と火照った瞳を。

大雨が降って泣いて困らせた日のことも。

軽トラの後ろに乗っていたユエに手を振って帰った日のことも。

ユエを口説こうとしている年増の熟女のきりのない話に飽きて、美味しいワインを2杯飲んだ私が、意識を失って倒れてしまった日のことも。

「こんど歌手デビューするの」と伝えたら、ユエは

「早くCD持って来いよ」

と荒っぽい口調で答えたことも。

翌日、私は歌手デビューの話を丁寧に断った。

ユエ、

私は待っていたよ。

ずっと、ユエを。

あの年の3月11日から、ずっと。

ユエは、

自分がエリカを待っている

と想ってきたかもしれない。

でも、それは、ちがう。

私が、

ユエを

待っていたんだよ。

ずっと。

薬が効いている。

だから、涙は出ない。

かなしくもない。

ちゃんと、薬が効いているから。

(了)
(浜北区)

結 合

鈴木篠千

「……じゃ、悪く思わないでね」

和久田の声が妙に明るく感じられた。

「……」

苛立ちを感じたが、俺は黙るしかない。

配達を終えた俺を待っていたのは『ブーランジェリーWA KUDA』の店長、和久田からの解雇通知だった。

解雇の理由は『店の売上が悪く、これ以上バイト代が払えないから』という、経済的なことであつた。

だが、それが和久田の詭弁である事はすぐに分かつた。「仕方無いんだなあ」と、さも、泣く泣く解雇という擬態を見せているが、その本当の解雇理由は俺の態度だろう。

この忘れっぽく、いい加減な老店主に対し、俺は少しも尊敬の念を抱いていなかった。言葉使いは、いわゆる、ダメ口であり、和久田に平然と文句を言っていた。

彼はそれが気に入らなかつたのだ。

俺は和久田を『認知症』の初期症状ではないかと疑っていた。

だが、数年前に脳腫瘍を患い、言葉が不自由な俺からしたら、人間は病を患うものである。別に普通の話である。この老店主にもそうした老いが訪れているだけである。そんな店主と気兼ねなく話せるのは、今まで就いた仕事現場ではなかつたので、むしろ、好意さえ抱いていた。

もつと言えば、普段、この口の不自由さから無口ではいるが、俺は本来言葉を発するのが好きな質（たち）である。自身の言語の不明瞭さを気にせず発するこのバイトはかなり気に入っていたのだ。

俺が何か文句を言つて、それに対して、和久田が「何言つてもいるか、わかんねえよ」と答えるので、それに俺がさら

に怒鳴る。そんなやり取りが出来るのが悪くなかった。

しかし、和久田の受け取り方は違っていたようだ。自身に對し、謙讓の姿勢を見せず、文句を放つ俺は自分が制御できない『氣に入らない存在』であり、それでも配達役の俺がいなければ、焼き上げたパンを契約店舗に配達する人間がいない。配達ができなければ、店の経営が危ない。

数十メートル先に、行列のできる人気ケーキ屋があり、市内外からの客で行列もしばし出来ている。

つまり、俺の態度に怒りを抱いても、俺を使役せずには、この零細パン屋を運営できないのであった。

また、それゆえに『経営不振』を解雇理由にして、俺を排除したのだ。

俺のことが、癪には障るが雇うしかない。その俺の態度は雇い主である自分を完全にナメている。和久田は自尊心を痛くすり減らしていたのであろう。

そんな彼に、我慢の限界が来たのだ。

そう俺が思うのは、和久田が俺の解雇する理由をあくまで『経営不振だから…』と聞いてもいないのに言ったからだ。

それは、つまり俺の『態度が氣に入らないから』などと言えは、自身の度量の狭さを吐露するものであり、あくまで『経営不振』を主張し、『雇っていたいけども…』ということ自分で自尊心を保ちたかったのだ。

それが、今、後ろめたさの中に、どこか歓喜を含んだ様子を見せている理由だろう。

少し前まで働いていた社員食堂の現場マネージャーと同じだ。

彼も俺を解雇する際、「他のバイトがね」と、自身があくまでも俺の雇用に前向きだという姿勢をみせた。

元よりそこで働き始めた理由は、偶然聞いたある高校野球部員の窮地を救うという、およそ詳細説明が難しい理由であった。だから俺は、マネージャーから解雇を告げられても割りとおささり受け入れた。

マネージャーの批判の矛先が口の不自由な俺に来ることで、パートのオバサンのストレスが無くなり、それで自分の息子に当たることも無くなり、さらにその息子が同級生をイジめる事も無くなったからだ。

そのイジメられていた同級生の兄が高校野球の豪腕投手であると、俺は偶然に知った。

そこで、あえてその社員食堂にバイトとして入り込む事で「犠牲」になったのだ。

一年して、俺の役割は終わった。

その豪腕投手は、甲子園出場は叶わなかったが、明らかに以前のような素晴らしい投球に戻っていたからだ。

手術から様々な仕事やバイトに就いて、解雇や契約解除されてきた。

「今月分の給料は計算して、必ず渡すからさ…」と和久田は既に俺が辞めた後の処理の話をし出した。俺は黙ってそれを聞いた。

『ブーランジェリーWAKUDA』から出ると、まだ午後
の三時前だった。

今日は夕方からの病院での食器洗浄の仕事は無い。俺はこ
のパンの配達だけでは食べて行けず、自宅近くの病院で夕方
から病院食の片付けや食器洗浄のバイトを掛け持ちしてい
た。

(…さて、どうするか?)

いつも遅い昼食を取るモール街のファミリーレストランに
行くか。

いや、今さつき収入の宛が一つ無くなったのだ。無駄な出
費は控えるべきだ。

海老塚のハローワークに行くか。

今年で俺は三十九になる。求人検索機の前で絶望し、就職
相談でたしなめられる自分を想像した。足は向かない。

夏の日差しは容赦なく俺の身体を照らす。

有楽街に続くこの道に立ち止まっているだけで汗が吹き出
てくる。

俺は途方に暮れた。

仕方なくコンビニの立ち読みで、午後四時になるのを待つ
た。そして、田町にある居酒屋『次郎』の暖簾をくぐった。

俺が病気を発症する前から通っている居酒屋であり、そこ
の大将は俺の、状況についても熟知している。無理に話し
かけて来ないので俺はこの居酒屋を度々利用していた。

「…おつ、何だい？ 久しぶりだな」

何故か白髪を伸ばして、陶芸家のように後ろで縛っている
大将が挨拶をしてきた。

一ヶ月ぶりの来店だった。大将はそれだけ言うとお通し
出して、酒の注文だけを聞いて奥に引っ込んだ。

コの字型のカウンターの一番奥で、出された徳利をお猪口
に注いで煽る。

さつきの和久田の白々しい態度が頭に浮かんだ。身体の中
心に熱いものが通ったが、それは今呑んだ日本酒だったのだ
ろうか。

(ま、仕方ないか…)

和久田と同じ言葉を自分に聞かせるように心の中で吐い
た。いくら自分が心地好く思っていた場所でも、そこが皆に
とって同じ感慨を持つ場所とは限らない。ましてや、和久田
は俺の雇用主であり、俺はその和久田に雇われている労働者
なのだ。

ここ数日間の出来事を思い浮かべた。

俺はある一つの問題を解決していた。

正確には、解決出来る方向に導いていた。

とある離散した家族の問題を救っていたのだ。別に誰かに
頼まれたわけではない。

たまたま以前の職場の上司に出くわし、彼の元嫁と母親と
も知り合いになった(元嫁とは工作上、仕方なくだが…)。

そんな俺にとっては何の得にもならない問題の解決をした

日に、俺自身は職を一つ失うなんて。世の中は不公平だ。何で、世の中は俺ばかりにこんなに厳しく当たるのだ。他に厳しくするべき奴はゴマンといるではないか。

脳腫瘍から回復して、必死に人生を再生している最中の俺に何故、こうも不公平だ。

何が悪い。何か罪なのか。

したたかに呑んだ。ほんの気晴らし程度のつもりだが、財布の中身がさらに寂しくなるほど呑んだ。

「兄ちゃん、大丈夫かい？」

支払い時に、大將が心配するほど俺は酔っていたようだ。

「らいじ、じょうび、らいじょうぶ」

手術してから言語不明瞭な俺は、酔うとその言葉はほとんど分からなくなる。

財布をデニムの後ろに入れようとして落とした。かなり酔いが回っていたが、昼間の暗澹たる気分は少し晴れた気がした。

大將に心配されながら、『次郎』の暖簾をくぐって外に出た。二時間程呑んだ。すっかり夜である。

足がふらついた。

『次郎』のドアを閉めた勢いで足がもつれて、前方に飛び出した。

それから瞬く間に七ヶ月が過ぎた。

俺は四十になる年を陰鬱な気分で見送った。

だが、七ヶ月間という時間は人の心を癒すには十分な時間だったようだ。

クビになったばかりで、また貯金などという概念が欠落している俺は、再び両親の慈愛にすがる日々に戻っていた。

ただただ両親からのその慈悲に甘んじているわけにもいかなかった。

夕方からの病院でのバイトは続けていた。

だが、この病院のバイトだけではやっていけない。3ヶ月前から少し遠くの老人介護施設の清掃のバイトを始めた。

朝九時から昼の十二時まで。施設内の決まった場所を清掃する。これを週に二日から三日行い、僅ながらも収入の内、三万円を自宅に入れた。それで給料日前にはほとんど残らなかった。

残った金額も、数ヶ月毎の病院での定期検査でそれは消える。金銭的な蓄えなど皆無である。

もっと稼げる仕事を探したが、退院直後同様、俺はあらゆる求人書類審査で落とされ続けた。

そんな中、少し困った事があった。

「必ず渡す」と言っていた、『ブルーランジェリー WAKUD A』からの辞めた日までの給料が払われない。夏を過ぎ、秋を越えても和久田からは何の連絡も無い。

昨年の十一月。俺は店に電話を入れた。

愛想良く電話口に出た和久田だったが、相手が俺と分かるのと露骨に態度を変えた。

明らかに迷惑そうな声に変わったのだ。

「お、い。お俺のき、き給料う、はは？」

「分かっていただけさ、こつちもいろいろ大変なんだよね……」
話が違ふと思った。あの日は確かに「払う」と言っただけだ。

その事を告げると、電話口の和久田の声は明らかに鋭さを増した。

「お前が辞めたからじゃねえか！」

店の売上が良くないのが、いつの間にか俺の責任に変わっていた。俺は辞めたくて辞めたのではない。しかし、パンの売れ行きが悪いのは俺の退職以前からであろう。

ただ未払いの給料を払って欲しかった。

その事を言うと、和久田はさらに小うるさそうに「分かってるよ」と言う。怪しい。

「ほ、本当には払うう、気があ、あるのかよ？ ア、アンタ」

ここまで言うと、和久田は激昂した。

「その言葉！」

「は、はあ？」

「前からよー、言いたかったんだけど、その言葉使い、なんとかならんのか？ 目上の人間に対して……」

「め、目上もなな何も、俺ははも、もうクビビビにな、なっただらろ？」

「うるさい！」

俺はこの時点で和久田が俺に残りの給料を渡す可能性は限り無く低いと思った。

この男からすれば、自分をナメている俺などに払う給料は無く、また、店の状態からもそれは厳しく、それでも「払えない」とは言えずに、形の上で「払う」と言っただけであった。

和久田からの給料の支払いを諦めた俺は、再び自身の三回目の再就職に勤しんでいた。

例年に無く厳しい寒さの冬を越え、春が間近に迫る頃になったが、俺の収入を取り巻く状況には変わりがなかった。

やはり、介護施設での清掃と、病院での洗浄を続け、他の仕事の求人に応募しては落とされてきた。

テレビでは、官僚の、「付度」問題が再燃していて、国会で証人喚問が開かれるらしい。

大坂の私立小学校設立に対してその予定地の買い取りに政治家、官僚の付度があったと、連日ニュースやワイドショーで取り上げられ、大騒ぎであった。

(あーあ、誰か俺のことも、「付度」してくれねえかな？)

自分の起こした事件をよそに、そんな事を考えるまでに精神的には立ち直っていた。

和久田からの、「未払いの給料」など、すっかり頭から追いついてきた。

そんな時だ。

不意に和久田から連絡があった。

驚いた俺だったが、スマホのディスプレイに映る『ブルー
ンジェリー 和久田』の文字を見ても給料の事など忘れてい
た。

「…な、何？」

少し身構えて出た。

「よー、元気？」

元気なはずがない。呑気な言い方にすぐに心がささくれだ
った。

「な、何が『元気？』だ？ ここのや……」

文句を放とうした俺の言葉を遮るように和久田が猛烈に話
しかけてきた。

「いやいや、それでさ……」

和久田が言うには、店の売上は相変わらず悪く、俺への給
料は払えない。だが、それを忘れてたり、誤魔化そうとしてい
るわけではない、という事をわかりにくく、数回に渡り、話
した。俺がクビになってから既に半年以上が経っている。「払
う」と言うがこの男に支払う意思はないのだろうか。やはり矮
小な自尊心を守る為に自己弁護をする気なのだ。

俺は、以前調べた浜松の労働基準局の電話番号を書いたメ
モの所在を頭の中で探した。

「…だからさ、鈴木君もさ、今から俺の言う所に行ってみて
よ」

急に促されて、俺の思考は止まった。

「は、はあ？」

「うん、だからね。今から俺が言う人にあってみたら……」

「は、はあ？」

「鈴木君もさ、いろいろ悩んでいると思うけど、人に相談し
てみたら？」

既に給料の支払いは諦めている。

その事を告げようとしたが、和久田は磐田市内のある住所
と『ツワブキ』という名前を俺に言い放ち、「給料はいつか
払うから」と言って、一方的に電話を切った。

俺に折り返す気は起こらなかった。

意味が分からない。

この住所に住む『ツワブキ』なる人物が今の俺の状況を変
えてくれるのか。

そのような事を和久田は言っていたが、元より和久田が俺
に残りの給料を払えば良いだけの話だ。

…まさか、このツワブキが和久田の代わり給料を払うとい
うのか。そんなバカな。そんな酔狂な人間がいるのか。

もしかして、高利貸しや闇金か。

だが、俺が知る限り、その教えられた磐田市の住所は住宅
街である。闇金の事務所がこんなところにあるとは思えない。

次の日は清掃も洗浄のバイトも無かった。

俺は昼過ぎに起きて、昨日和久田から告げられた磐田の住
所に向かうことにした。

かささぎ大橋を自転車に渡る。

天竜川から吹き付ける風はまだ冷たい。

橋を渡り、東に進む。コンビニを過ぎて、国道の高架を過ぎると、磐田の図書館が見えてきた。このまま真っすぐ行けば、JRの磐田駅前だ。図書館を通過してすぐの交差点を右に曲がる。住宅街にやって来た。

磐田は幼い頃から何度も来ているが、ここは初めて来た。

和久田から言われた住所の家はここにあるはずだ。

初めは闇金の類かと、思った。

スマホで『磐田 ツワブキ ローン』で検索したが、磐田市内の怪しい金融屋が引っ掛かって来ただけであり、その住所に俺が知ったものはなかった。

こうして来てみると、そこは普通の住宅街であり、寒風の中、陽だまりに身を寄せるように住宅が並んでいただけであつた。

『簡単審査 直ぐに貸し出し』などの怪しげな看板などはあるはずがなかった。

交差点を曲がり、十分も行けば和久田に言われた住所に着いた。築十年も建っていないであろう真新しい家があつた。

表札の文字には『TUWABUKI』と洒落た筆記体を書くり貫いた鉄板が掲げられていた。

浜松近郊では聞いたことのない苗字だ。

少し迷ったが、表札の下のインターフォンを押した。電子音が家の中から響いた。

「はいはい、ツワブキです。どちら様？」

女性とおぼしき声がインターフォン越しに尋ねて来た。退院後、俺が一番困るシチュエーションである。ほぼ確実に不審者扱いされる。

「あ、あの、は浜松のブ、ブランジエ、ジェリリー、のの店長か、から言われて……」

そこまでいうと、インターフォンの声は「はいはい」と何かを察して、切られた。程なくして、表札のある外壁の向このドアが開いた。

顔を出したのは、普通の主婦だった。

「ワクさんから聞いているわ。……どうぞ」

そう言いながら、女性はドアを片手で広げて、もう片方で手招きした。

「……？」

俺は戸惑った。風体の悪い男性が凄みながら出て来るかも、と予期してたからだ。

しかし、普通の主婦が出てきて、こうも簡単に他人を家に入れて良いのか。

だが、その女は「さあ」と言いながら、顔を翻してドアの奥に引っ込んだ。

「お、お邪魔しますす」

型通りの挨拶をして俺はドアの奥、この家の内部に上がった。

広くもなく、狭くもない玄関。

中からその家独特の匂いがした。室内用のスリッパに履き

替え、上がり込んだ。

廊下はワックスがよくかかっている。横壁がまだ新しい。廊下の途中には、洗濯物や使わない掃除道具、ダンナのゴルフ用具などは無く、とてもキレイだった。

「散らかっていて、ごめんなさいね。こっちへ来てね」

誘う女性が詫びるように言うが、それに反比例して開け放たれたドアから見える各部屋の様子は綺麗に整理されて、清掃も行き届いているようだった。

言われるがまま、リビングらしき部屋に通され、席に着くように言われた。ソファを背後にした四人掛けのダイニングテーブルの左隅の席に座った。

そこで改めて女の顔を見る。

まだ若い。俺と同じか、年下であろう。この家の主婦らしいが、テーブルの奥の台所の様子や背後のソファ一付のテーブルの上の雑誌、玄関にあった男物の靴とサンダルからこの家の家主で彼女の旦那が不在な事はすぐ分かった。旦那のいない昼間に俺のような者を引き入れて大丈夫なのか。

「私、ツワブキっていうの。ワクさんの知り合いでね」

そんな心配を他所に、ツワブキは話しかけてきた。

「紅茶でいいかしら？」

断る理由が無く、俺は無言で頷いた。

「ワクさんから話は聞いているわ。…言葉が少し不自由なんでしょ？」

また、無言で頷いた。ツワブキは台所で何かを手にしてポ

ットの給湯スイッチを押ししたようだ。紅茶を淹れているのだろう。

「鈴木君、つて言うのよね？」

再び黙って頷く。

「ワクさん、元氣？」

和久田の事などは昨日の電話があるまで忘れていた。

「あそこの焼きたてパン。大好きなの」

これには答えようが無い。既にクビになって半年以上が経っている。和久田の焼くパンの味など忘れてしまっている。

「はい。紅茶」

ツワブキが赤いマグカップに入れられた紅茶を俺の前に置いた。自分が飲むための陶器のコップを片手に俺の前に座った。

「それで、どうしたの？」

改まった感じでツワブキが訊いてきた。

「はあ？」

俺には質問の意図がわからず聞き返した。「どうしたの？」とは何なのか。

「あれ？ ワクさんからあなたが『悩んでいるから相談に乗ってやってくれ』っていわれていてね」

「……」

和久田は一体何を考えているのか。こんな普通の主婦に何を相談すればいいのか。第一、このツワブキは俺の事を和久田からどこまで聞いているのか。未払いの給料がどうにかな

るかも、という期待は見事に外れた。

「私ね、よくいろんな人から相談されるのよ。…人生相談っていうの？ 何か悩んでいたら、言ってみたら。聞くだけだけど」

そう言うと、ツワブキは少し笑った。笑うと口の端が上がリ、表情に安心感が出る。

俺も吊られて愛想笑いをしたが、別に彼女に話す相談事はない。あるとするなら、未払いの給料の件だが、自分の貧しさは今に始まった話ではない。俺が社会に出てから続く恒久的な悩みだ。それを目の前で紅茶を啜る初対面の主婦に願うする気にはなれなかった。

「…どう？ 何でもいいわ。あなたが今迷っていること、不安に思っていることとか無い？」

不安と言えば、俺の未来は常に不安だ。

「…うん、ふ不安と言えば、ば、なかなか職が見つからないのが不安、でですかね」

ツワブキからの催促の目線に耐えかねた俺は目下の俺の問題を吐露した。確かにコレが俺の一番の悩みである。

「…鈴木君。何で職が見つからないのかな？」

ツワブキがまるで小さな子供に尋ねるような口調で訊いてきた。正確に言えば、病院での洗浄のバイトなどをしてきたが、今後の事や、医大での検査などがある。俺には金が必要だった。

「ま、まあ、何かと、お金が必要で」

「お金って必要なのかな？」

この主婦は何を言っているのか。

「私はね。この人生相談をタダでやっているのよ。一円も貰ってないわ。わかる？ みんな、色んな事を言うわ。愚痴や文句。私に怒る人もいるの」

目の前にいるツワブキに相談にくるといふ人々を想像してみた。それは時々ファミレスなんかで見える主婦同士の井戸端会議のようなものではないのか。

「みんなタダで聞いているの。楽しくも悲しくも無いのよ。

お金なんてそんなもんよ。有れば有るだけ良いのかもしれないけど、それで人の心は変わらないわ。一番深いところまではね」

「……」

返す言葉が見つからない。俺は呆れていた。何で金の話が人間の深層心理になるのか。第一、俺は悩んではない。和久田は「必ず払う」と言っていた給料は既に諦めていた。正直、あの男の下で働く気はない。

あの店の売り上げは惨憺たるものであっただろうが、最早あの店が労働基準法違反だろうが、金をもらう気持ちには既に失せていた。

だが、ツワブキはさらに言う。

「お金なんていいじゃない。鈴木君には鈴木君の人生があるのよ」

まるで何年も前から俺を知っていたかのような言い方が軽

く癪に障った。何で、今さつき会ったばかりのおばさんに俺の人生の方向性を教わらなければならない。要らぬ世話である。

だが、面と向かって、このツワブキにそんな苛立ちをぶつける事は出来ない。

俺はまだ温かいマグカップの紅茶を一気に飲み干した。

「…そうう、すね。金がが人生のの全て、て、じゃないっすよよ」

あきれて俺は席を立った。そして、わざと満足げな表情を作ってみせた。帰ろうと思った。もうここにおいても何の意味も無い。

ツワブキはさらに何か言いたげに見えたが、そこまで自身が吐いたセリフに高揚したらしく、妙に落ち着いた笑顔をしていた。

帰宅し、ネットで『磐田 人生相談 主婦』と検索してみた。

驚いた。

ツワブキはネットの中では(磐田では)、かなり有名な主婦だったのだ。

ネット内で『ユウさん』とおそらく下の名前と呼ばれるツワブキは、あの自宅で訪問者の『人生相談』のつていた。

それが物凄く好評なのだ。

「助かった」

「話をするだけでスッキリ」

「初めはよく分からなかったけど、言われた通りにしたら、良くなった」

いろいろ調べたが、賛否のうち、『賛』が八割で『否』が二割。それもツワブキの『相談』自体を否定するものではなく、彼女自身の容姿などを茶化すようなものであり、俺にはそれが相談者らの『自己防御』に見えた。

他者の外観を批評したり、貶すことで自分を守っているのだ。真剣に相手する否定的な意見ではない。

そして、世の中にはこんなにも『不安』を抱えた人間がいることが分かった。

おそらく本人は公認していない『ユウさんの館』というコミュニティサイトまであった。

ここでは、彼女が人生相談を無料で行うこと、お礼の食事やプレゼントも貰わないことを賞賛していた。相談の際に菓子などを持つていくと、必ず、相談者とその場で食べるという『無欲』な姿勢も褒めちぎっていた。

今日のツワブキの話は真実のようだった。

彼女のネットでの扱われ方は様々だった。

相談受付、占い師、ヒーラー、先生…、超能力者のように呼んでいる人間もいた。

俺の頭に『新興宗教』の四文字が浮かんだ。

だが、テレビなどで見聞きするそれには、お金が必ず絡む。ツワブキは徹頭徹尾無料であることがネットでは書かれてい

て、それが彼女の評価を大きく上げていた。

ツワブキ自身は「自分はただの主婦。少しおせっかいなだけ」でこの時代の劇の隠居のような事を言っているらしい。

それは、小さなグループで威を張る、ママ友のリーダーのようだった。

彼女の目的は何なのか。

今日会ったばかりの、あのごく普通（に見えた）の主婦に物凄く興味を持った。

そして、和久田は何故俺にツワブキを紹介させ、会わせたのか。

まだ謎が多く、俺の興味は高まった。

次の日は夕方から病院での洗浄バイトだ。

俺は再びかささぎ大橋を越えて、ツワブキの自宅がある磐田に向かった。

そして、ツワブキ邸の近くの公園などで休憩するふりをし、その家に来る来訪者を観察した。

幾分と怪しい行動ではあったが、俺は昨日に引き続き、さらに驚かされた。

ツワブキの元を訪れる客の多さである。俺が観察を始めた午前十時過ぎから午後四時まで、おそらく十組、二十人はあ

の家のインターフォンを押した。そして、中から明るい声が響き、ツワブキが笑顔を覗かせて招いた。

俺は簡単に自宅に引き入れたツワブキに驚いたが、こうも

来訪者が多いのならいちいち警戒する気持ちも薄くなるはずだ。

来訪者たちはそれぞれ二、三十分ほど家の中にいて、誰もがスッキリとした表情でドアから出て来た。

俺が驚いたのは、その中に知っている顔がちらほらといったからだ。

スーツ姿の若い男性が出てきた。

それは俺がよく行く浜松の街中にあるファミレスで年配の女性を叱っていた男だ。

また、その時に叱られていた年配の女性も、ギョロギョロと辺りを見回してツワブキの家に入ってしまった。

さらにその女性に同じファミレスで口酷く注意されていた女性も友人らしき二人と現れ、やはりツワブキ邸のインターフォンを押した。

さらに青沼が来た。

青沼。

パン屋の配達先のショッピングモールで働いていた女性従業員。口が不自由な俺に何かと当たってきた女だ。

それが、ツワブキの家に入っていた。

帰り道、俺は頭を巡らせた。あのツワブキが自宅に他人を引き入れ、何かをしているのは確かだろう。

だが、中では何が行われているのか。
昨日の俺のように、本当に『人生相談』なのか。
あの青沼までがいた。猛烈に気になった。

どうやって、調べれば良いか。
そこで思い出した。
青沼の関係者を知っているではないか。

病院での洗浄バイトは平日午後六時から始まる。律儀な鶴田は五時半には来ていて、更衣室と休憩室を兼ねたその部屋にいた。

この五十歳過ぎのおばちゃんである鶴田の離婚前の苗字は宮本だ。

あの青沼の前の苗字も宮本。

二人は元家族であった。それを知ったのは半年以上前、偶然からであった。そして鶴田の息子で青沼の元の旦那は、俺の元の上司だった。

和久田のパン屋や社員食堂でバイトを始める以前、俺は派遣会社に登録し、鶴田（宮本）の息子のいる精密工場で働いていた。

俺がその工場をクビになった後、息子は退職した。そして、偶然、例のファミレスで携帯電話を手に怒り散らす彼を見つけた。

たまたまこの元家族を知り、その離散理由が些細な気持ちの行き違いであると分かった俺は、解雇を言い渡された日の昼間、青沼に手紙を渡し、宮本にはこの元嫁に連絡するように促していた。

あれから半年以上。宮本一家がどうなったのか、知る余地

も無い。鶴田は俺が息子の元部下で、元嫁を知っていることを知らない。この数ヶ月、俺に何かを言うのかと思っていたが、特に動きは無い。

俺は次の日の、数分早く出勤して鶴田に話しかけてみた。

「ツルさんって、か家族い、いるの？」

鶴田とはプライベート話をしたことは無かった。すでに年配の鶴田に、家族の有無を尋ねるのは、おかしな話である。

「いきなり、何よ」

俺はこのバイトでは昼間とは違い、無口を貫いている。急に家族の事を聞かれ、鶴田は明らかに驚いていた。

だが、こちらが促す前に、鶴田は自ら話し出した。誰かに聞いて貰いたかったのかもしれない。

鶴田がまだ宮本だった四年前、六十一だった夫が倒れた。命は取り止めたものの、明らかに介護が必要な体になった。宮本は夫の介護代と家計の助けにと、近所のスーパーでレジ打ちの仕事を始めた。息子も介護には協力的ではあったが、普段、家で夫の面倒を見るのは息子の嫁（青沼）だった。

宮本がその嫁のおかしな行動に気付いたのは、夫が倒れて一年後だった。

たまたまパートが早く終わり、午後二時あたりに帰宅すると、介護ベッドに夫はいたが、嫁の姿が無い。三十分後、その嫁は帰宅した。宮本が、何処に行っていたのか、と問うと、「ちよっと近所へ」と言った。

そんな事が度々あり、宮本は嫁に不信感を抱いた。たまり

兼ねて問い質すと、近隣の主婦の自宅で話をしていた、と言
い、「お義母さんも行かない？」と誘われた。

それがツワブキの家であった。

ツワブキは宮本にも親切であった。

「やたらと、『困っていること無いか？』って訊いてきたのよ」
と、今は旧姓の鶴田に戻った彼女は俺に言った。覚えのあ
る話だ。

そして、ツワブキは宮本親子に「お父さんに常に『ありが
とうね』と言って上げましょう」と提案した。

宮本には承服しかねる話だった。夫は認知症と診断され、
確かに日常生活は困難だが意識は確かにあり、無用な感謝の
念を受け取り喜ぶようには思えない。

だが、宮本の横にいた息子の嫁は激しく同意して頭を下げ
た。

(何これ？ 宗教？)

宮本は俺と同じ感想を持ったらしい。だが、ツワブキは一
円の金銭も要求せず、熱い紅茶を出すのみであった。

その日から、嫁は夫に「ありがとうね」を連呼するようにな
った。「おかしな事は止めてよ！」と宮本は叱ったが嫁は「お
義母さんは分かっている」と抗弁した。

嫁姑の仲が冷え出すと、息子夫婦の仲もおかしくなってい
った。

嫁姑の喧嘩、夫婦喧嘩が絶えなくなり、何故か、息子が「こ
の家を出る！」と言い出した。それでも嫁は彼女の家に通っ

ていた。

宮本には限界だった。家族の言葉を信じず、おかしな主婦
の言葉に従う嫁と暮らしていけるはずがない。

宮本は介護が必要な夫には罪悪感があつたが、離婚を申し
出た。

逃げるように浜北区の実家に戻った。

程なく、息子夫婦も離婚した。夫は息子が引き取り、世話
をしているらしい。

この話を今は旧姓の鶴田に戻った彼女は詳細に語った。

俺は「…は、はあ。よ、世の中には、そんな事と、もあ
るのかか、か」と、惚けたふりして聞いていた。

ツワブキは宮本一家を崩壊させていた。

もっとも、半年前に息子から連絡があり、今では元夫を含
めて、交流があるらしく、再生に向かっている様子だった。

しかし、元嫁の青沼とは未だに連絡は無く、彼女がどうし
ているのかは、知らない。

俺は前日に見た元の息子の嫁の姿を言いたくなつたが我慢
した。

これですます分からなくなつた。

あのツワブキの意図はなんなのか。何故、宮本一家を離散
させたのか。

俺はもう一つの謎を追うことにした。

ツワブキと和久田の関係である。

これは比較的安易に判明した。

次の週、俺はかつての職場、『ブーランジェリー WAKU DA』を密かに監視した。

そこには、あのツワブキ邸を訪れていた者たちがいた。

サラリーマンの男性と青沼以外の人間が、あのパン屋のドアを開いていた。

そして、和久田と何かしら話していた。

ここで、俺は想像した。

このパン屋に訪れる客の多くは、ツワブキからの紹介で来ているのだろう。

ツワブキは紹介料などを貰っているのかもしれないが、分からない。

紹介と、言ってもおそらく一日に来るのは十人程だ。数十メートル先に市内の有名店があるのだ。一日十人の固定客が払う代金などが知れている。そこからツワブキに紹介料など払うだろうか。また、あれほど『タダ』を唄うツワブキが金銭を要求するとは思えない。

おそらくパン屋への紹介は無料なのだ。

これは良くできた話だ。

自分のパン屋に客を呼びたい和久田だが、金はかけられない。だが、ツワブキのコミュニティを使ってパンを宣伝。

「信者」たちを誘導する。しかも、タダでだ。

ツワブキの方は、美味しいパン屋の存在をただ「信者」に話しているだけなのだろう。

「行きなさい」とも、「買いなさい」ともおそらく言わない。強制は無い。

ただ、親切な主婦と彼女を信奉する人間がいて、美味しいパン屋を焼く和久田の店がある。誰も損をしていない。

和久田が俺をツワブキに紹介したのは、未払いの給料をやはり払いたくなく、彼女に押し付けることで、「金の価値など」と思わせて、要求する気持ちを抑え殺す為だ。

なんて、手の込んだ話だろう。

和久田は俺に給料を払いたくないのだが、それが言えない。元とは言え、従業員だった俺に嘆願するなど、あの男の矜持が許さない。

だから、俺が自ら要求を取り下げる方法を探していたのだ。ツワブキの話聞けばそうなると思っていたのだろう。なんと浅はかで、狭小な器量の男なのか。

どうするべきか。

俺は再び、ツワブキに会う事にした。

清掃も洗浄のバイトもない次の日、俺は再びツワブキ邸のインターフォンを押した。

アポなしにも関わらず、ツワブキは一週間前と変わらない様子で顔を出し、俺を家の中に招いた。

「…鈴木君。どうしたの?」

この前のやり取りは、和久田に伝わっているのだろうか。ツワブキはまるで俺の事を良く知っているかのような様子だった。

「ツワブキがまた紅茶を入れると言い出した。その間に、キッチンを眺めていた。ダイニングテーブルとキッチンカウンタ―はびつたりと合わせられている。その上に黒い鉄の小さなバケツがあった。『インテリア小物入れ』とでも言うのか。先週末時には見落としていた。そこに見覚えのある紙が数枚入っていた。『プーランジエリーWAKUDA』のチラシである。ここからは見えにくいだが、下には店舗近隣の地図が印刷されているはずだ。

ツワブキと和久田の関係性に確証を得た俺は、紅茶を出される前に勝負に出た。

「ネ、ネットでい、いろいろ見ましたよ。なかなか、評判んで、ですね」

ポットの下には急須をセットしていたツワブキの動きが止まる。

「…ははは。見たの、鈴木君。みんな好き勝手書いていたでしょ?」

「あ、あなた、何がしたいんだ?」

俺は思い切って切り込んだ。俺のトゲのある言葉に、持ち上がったツワブキの表情は硬い。敵意が広がっていた。

「何って、私はただアドバイスしているだけよ。無料のアド

バイス。別に意図は無いわよ」

予期していた言葉だった。

「ななら、し従わない人と、が居ても良いよな。それに不幸に、ななつた奴がいたらら、どうするんだ、た?」

「私の言葉を、信じる、信じない、はその人の勝手よ。…ただ私はそうした方が『良くなる』と思って言っているだけよ」

そう言うツワブキは不満そうに口の端をひきつらせていた。そして続けた。

「それに、もしも不幸になった人がいたら、…もしもよ。それはその人自身の問題だわ」

何と言う言い方か。これがツワブキの本心だが、確かにその通りだ。人が何を信じて、何を信じないかは自由だ。そこから派生する言動の責任はその人自身にある。

「もしもね。『不幸になった!』って言うのなら、また私の所に来れば良いの。…だって無料なんだから。誰が来ても良いわ。あんまりたくさんだと困っちゃうけど…」

ツワブキは戸惑いと、怒り、憐れみが混じった不思議な顔でそう言った。

もう何を言っても無駄だろう。

俺は流れを切り替える事にした。

「あは、はは。そうですね、ね。また、あなたに、そ、相談すれば良いのですね」

その後、上辺だけの世間話を聞いて、出された紅茶を流し込んで、ツワブキ邸を出た。

ツワブキの主張は大体間違ではない。

人が何を信じるのかは、その人の勝手であり、どのように行動するのも自由だ。

ツワブキの言葉で宮本一家は離散してしまったが、それはツワブキが望んだ事ではなく、むしろ逆。家族の絆を強くさせようとしたに違いない。それが見事裏目に出たのだ。

ツワブキに悪意は無い。完全な善意。良かれと思ってアドバイスをしたに違いない。

俺は、『人間の最大の悪意は、善意である』という言葉を思い出した。

人間は自分の言動に「悪」を認識すると、罪悪感が生じる。だが、自分の言動を「善である」と思うと、それを推し進める。『自分は善なる存在であり、他者に良い影響を与える』と思うと止まらない。自分の善意を押し付けることに躊躇しない。何故なら、自分は良いことをしているからだ。

そして、そのツワブキに協力する和久田もまた自身を「善」と思っているのだろう。

二人の結び付きの始まりはわからないが、和久田からすれば、ただ自分のパン屋のチラシを置かせてもらっているだけ。そして、ツワブキは信者たちに「このパン屋さん、美味しいのよ」などと言っているのだろう。信者たちは『教祖様』様が言っているのだら…』とパン屋に赴くようになる。

そこに至るまで一円の金銭も発生していないのであれば、

まさに「善意」だ。

ツワブキと和久田。

お互いの利益が合致している。信者に善意からパン屋を紹介したツワブキ。パンを売りたい和久田。

お互いの必要性が見事重なり、見事に「結合」している。二人のそれに損は無い。互いに利益を得ている。ツワブキは信者からの感謝。和久田は売上。和久田の焼くパンの味はともかく、それがあの薄利のパン屋運営の下支えになっているのは分かる。

どうしたものか。

鶴田の息子、宮本は以前勤めていた南区の精密工場で俺をイジメ続けた憎き人間である。本来、その家族が離散しようが不幸になるのが俺には関係がない。むしろ、そうなった方が、溜飲が下がる思いがする。

また、ツワブキにしろ、和久田にしろ、犯罪をしているのではない。ツワブキは『善意から』やっつけて、和久田はただの営業活動に過ぎない。俺への未払いの給料は諦めていたし、このままでも良い気がした。

そんな事を考えながら、自宅で夕食に箸を伸ばしていた。「…まったく、官僚は下らねえなあ」

向かいに座る父が怒りの声を上げた。見つめるテレビ画面には、政治家に付度した財務省の元官僚が国会招致の場で野党議員から責め立てられているニュースが流れていた。

「全く、誰が得するんだよ。政治家の顔色伺って、それで偉

い気になりやがって……」

別にその元官僚が尊大な態度をしていたわけではないが、中学卒業後から四十五年以上地元メーカーで地道に働いてきた職人気質の父からしたら、この付度という官僚特有の配慮が理解出来ないようだった。

そこで、ふと思った。

『官僚特有』なのか。

こんな風にニユースになり、非難されるから悪く聞こえるが、誰かが誰かの為に事を起こすのは悪い事ではなく、良い事だ。

それこそ『善意』ではないか？

和久田もそうだ。あの男は俺の口ぶりに怒っていた。そこには『自分が雇い主であり、俺はお前から尊敬される存在だ』という希望がある。つまり、『付度』されたいのだ。

誰もが付度されたがっている。

俺には、ある考えが浮かんだ。

「立派な大学出ているのによ。何考えてやがんのか……」

父のボヤキが胸に刺さった。

その日から約二週間。俺はネットでツワブキの事を書いた。

悪評ではない。感謝と尊敬を込めた文章を書き込みまくっ

た。

様々なSNS、小さな地元コミュニティサイトまで登録

し、書きに書いた。

『磐田市に住むユウさん』は人の悩みを何でも聞いてくれる素晴らしい人です。問題の解決にはならないのかもしれないが、彼女と言葉を交わすだけで心が軽くなりました。そんな彼女の元を訪れる人も多いようです』

と、こんな感じの称賛と感謝、羨望を匂わせた文章をあらゆるネット媒体に書いた。

画像をアップできるサイトには、ツワブキ邸の近くの大通りの交差点の写真を出した。

『ここを右に曲がるとウワサのユウさんのお宅』とコメントを入れた。

『ブーランジェリーWAKUDA』の事も書き込もうかと思っただ、止めておいた。

寒い冬が終わり、日差しに春の暖かさが感じられるようになった頃、俺は午後一時頃、磐田のツワブキ邸の様子を見に行った。

あの家の前には訪問者らしき車が路上駐車され、インターフォン前には相談待ちの人が数人いた。彼女は小さなコミュニティの教祖様から、市内の『有名人』になったようだ。

俺は、今度は驚かなかった。

ツワブキは『無料』と『善意』を主張していた。それは間違いが無いのだろう。だが、その奥には『他者を自分がコントロール』したいという野心がなかったのか。

政治家に忖度する官僚と変わらない。

「私がここまでやってあげるのだから…」
というわけだ。

ただし、それは俺の勝手な予想だ。

ツワブキが本心に心からの善意で言葉を吐いているのであれば、殺到する訪問者一人一人に親身になって対応するはずである。

桜の花が開きかけ、すっかり春めいてきた頃、俺はネットでのツワブキの評判を調べた。以前は八割だった。賛が四割ほどになり、否が六割になっていた。

「彼女はどうもおかしい」

「言っている事の意味がわからない」

「言われた通りにしたけど、何も好転しないな」

ツワブキは叩かれ出していた。

俺はそんな時に手紙を出すことにした。住所は始めに和久田から聞いて知っている。

『拝啓 ツワブキ様。』

以前にお話を聞いていただいた者です。あの時は失礼な物言いをしてしまい、誠にすいませんでした。

あの後、貴女様のお話、考えの深さを知り、様々なサイト

で呼び掛けをしました。世の中には困っている人、迷っている人がたくさんいます。私だけではなく、そのような多くの方の力になって上げてください。

敬具

その便箋を切手を張った封筒に入れて自宅を出た。途中のポストに投函しよう。

俺に罪悪感はない。人々を助ける為に頑張る女性に、助けを求める、アドバイスを聞きたい人間を紹介したまでである。

これこそ、忖度だ。

さあ、ハローワークに行こう。

今の病院での清掃のバイト。悪くはないのだが、出勤日が少ない。もう少し稼げる仕事はないものか、自分で探しに行こう。

(了)

(浜北区)

A

内山文久

夏も終わりの、ある「夜」のことだった。突如、嵐が起った。海は荒れ、大地は震動し、空はかき曇り、全てが狂ったように動き続けた。これは無理もないことなのだ。私達が「自然」に逆らうことはどう考えても、罪悪だし、そう、文字通り不自然なのだ。それ故その法外もない嵐の動きは暫く続いた。荒れ狂う大波が岸壁に絶えず激突し、その飛沫は辺りの風景を朦朧とさせる。大地の上、空に轟めく雷の閃光と轟きは海を突き刺し、震わせ、雨は泣き叫ぶように降り注いだ。海から来る強い風は大地のあらゆる場所を激しくなぎ倒し圧倒してゆく。それでも全てものは、喜んでそうしているのだから、いいのだ。最後に、海の中、大地から離れた孤島の鋭く尖った一つの山の上から月の光を放つ、未曾有の噴出があった。その時飛び出した夥しい（かといって、大きさは殆ど同じ位の）動く群れは、初め空中を彷徨っていたのだが全て、やや粘ってはいるものの、浅く透明で、しかもゆつたり、しかも広々とした、大地の暖かな流れに飛び込み、その

流れに逆らって、「さあご覧ください」と訴えている水族館によく見られる、鰻の群れのように泳いでいた。皆、我先にと、躊躇う事など微塵もなく、目的地に向かって全速力で競い合い、泳いでいるのだった。ただ流れは動く群れにとつて危険なものだった。毒素を含んでいるため、偶然それに触れると次々に死んでしまうのだった。遡る度、犠牲は数知れず続くのだった。

どのくらい時間がたっただろうか。群れが泳いで行くにつれて、流れは次第に細く浅く緩やかになった。恐らく源流に近づいたのだろう。暫くするとその中、少なくなつた群れのうち、先頭近くの或る一つが別の（何か大きな一つ）と衝突した。それは偶然のことだった。本来なら一番先頭の奴が（何か大きな一つ）とぶつかつても当然なのだが、何故かそいつは（何か大きな一つ）の脇をするりと迂回し、つまり拒否し、通り抜け、何故か（何か大きな一つ）にピタッと貼りついてしまったのだ。（先頭の奴は疲れていたのだろうか）

（或る一つ）が（何か大きな一つ）に衝突した瞬間、その先端が、その（何か大きな一つ）の表面近くに食い込んだ。（何か大きな一つ）の外側は柔らかかつたのだ。すると衝突されたその（何か大きな一つ）が衝突した（或る一つ）を、逆にもるで（待っていました）と言わんばかりに、丸々、その中にじわじわと取り込んだのだ。しかも衝突した際出来た傷口は、濡れて柔らかく、ふわふわしているせいも、まるで何事もなかつたかのように、みるみるうちに閉じて、全く見

えなくなつてしまつた。つまり傍から見ると(大きな一つ)はべろりと小さな群れの一つを食べてしまつた観があるのだ。その間、先頭の一つと同様に貼りついてしまつた群れの一部を除いて、残された他の群れは右往左往している。流れが尽きて、行き場がなくなつたようなのだ。それで奴らはまるで、池の大掃除の為、水をすつかり抜かれ、泥の上に薺き合つて跳ねている鯉のようになってる。

(大きな一つは)最初の獲物を捕獲するとその外側の皮を忽ち硬くし、他の獲物を受け入れようとはしなくなつた。確かにそれは生物学的に言つて、その通りで、仕方のないことなのだ。たくさんの獲物を手に入れるとこの場合、困つたこととなるのだ。要は幾多の個体を、ただ一つの、別なものに同居させると、結合してしまふ。そうなると同様な形を合成した奇怪な(大きな一つ)となつてしまふ、收拾がつかなくなつてしまふ、あるいは、幾つもの個体を、大きいとはいえない一つのものの中で、育てなければならぬという事になるのだ。その為周囲にあつという間に壁を作つたのだ。ただ、これは「普通の事」と言つていい。何故かという元々(大きな一つ)は元氣の良い、(群れの中の一つ)だけをパートナーとして待ち構えていたのだから。つまり(大きな一つ)は、やつてくる最も力強い一つ(群れの中の一つ)とともに、その姿を現在とは全く違つたものにしていこうと意図していたのだ。もちろん確率的に言つて(大きな一つ)が元氣の良い一つにうまい具合に出会うことは滅多にない。それ故(この

ことは圧倒的に多いのだが)運悪く出会いが無かつた場合(大きな一つ)は悲しみの涙を流し、どこかへ消え去つてしまふというわけなのだ。そこから居なくなつてしまふのである。そう、(大きな一つ)にとつて、この場所に於いての、この出会いというのは、稀にみる、幸運のなかの幸運なのだ。(力強い動きの一つ)をやりわり受け入れた事によつて、喜びの為だろうか、使命感からか、そうしているのだろう。勢い(大きな一つ)の内部は変化していった。見る見るうちに、二つに割れ、次に四つに割れ、その後倍々と変化し、初めとは(大きな一つ)とは全く異質の、そう、言つてみれば(新たな一つ)となつていったという訳なのである。

全てはその(新たな一つ)から始まつた。

「始まつたつて? 何が」と多くのひとは言うだろう。「いやいやなかなかの下卑た比喩だね」とも感覚の鋭いひとは言うだろう。そうだ、いとも簡単に理解したその人には、自分の若干の後ろめたさも添えて、敬意を表しよう。僕はその理解度に驚き、ひれ伏すことにしよう。更に君が僕のことを「性のない奴だ」と思つたとしたら、素直に受け入れよう。それでもお願いだから敢えて我慢をして、解らないふりをして、聞いてもらいたいのだ。兎にも角にも、とりあえずその一つを僕は、**Aと命名**するとしよう。けれど、このことは僕にとつてとても不本意なことなのだ。そう、今まで述べてきたものについて、いちいち命名なんぞしたくないと思ひ、實際そうしたいのだが。こればかりは仕方がないのだ。ただ未だ、

AはAをAとは全く知らない状態である。もちろんAは合体したショックで呆然としているのではない。そもそもAは始まったばかりなのだ。誰だつて命名されたすぐ後に（君はAである）とは決して自覚などできやしない。つまりAは未だA自体のことを何も考えてはいないと思われるのである。とはいえ、こう述べている僕もAではないから、Aのはつきりした気持ちは解らない。本当のところは「Aのみぞ知る」だ。ただもし万一、今のAの立場を聞くことができたとするれば（いやそんなことは不可能だ。だつて僕には言葉があるが、AにはなにもA自らの事を打ち明ける手立てがない）だから推量するしかないのだが、AはAとはそもそも何なのか、それさえわからない状態でそこにいて、更に自らどこから来たのか、どこへ行くのかさえも分からない、と答えるだろう。恐らくそうなのだろう。ただ意地悪く、すべてを知っているかのように（本当の所、よくは知らないのだが）傍観している僕には、とにかくAが迷っているらしい姿が、はつきりに見えるのだ。Aは盲目的意思とでもいうべきか、訳の分からない望みを抱えるらしく（やつとこのことで）僕が先ほど暗黙の裡に「大地」だと言ったBという場所に、ともかく安住しようとしているように見える。Aは意志を持っているようなのだが複雑な意識というはまったく持ちあわせてはいない。ただひたすら、AはBの近くで、いやその中にあるのはあるが、Bから送られてくる物を感じ、それを受取るようにしているだけの事のようなのだ。要するに、それを食べて単

に、無意識的に生きようとしているだけの事と言ったら大変Aに失礼かもしれない。そう、ある意味でAは断然、必死なのだ。ただそれでも、傍観者の僕には、AにとつてBというその場所は、何とも言えない居心地の良い場所のように、断然Aはそこに居続けたいと思つているように見えるのも確かなのだ。

暫くするとBから突起、いや小さな紐のようなものが生え、伸びてきた。Aはその先で繋がつていて、訳も解らずフラフラと揺らめいている。もつともAのすべての部分は元々Bの位置にあつてBの一部でもあるという奇妙な関係でもあるのだが……Bがそれを察知しているのかどうか（ひよつとすると解っているのかもしれないが、無論、傍観者の僕には全く解らない）BはとにかくAに、自ら作り上げた細く短い紐帯を通して、どくどくと、自ら獲得した（栄養）というものをAに送り続けているのだ。BはAが始まったことを心の底から喜び、勇んでAにものを与えるその行為の為だけに、息つく暇もなくせつせと、更に紐帯の管を更に長く太くし続けながら、その管から、Aの中へと栄養物を送り込み、育てているようなのだ。それ故次第にAは、初めは虫眼鏡でやつと見える大きさだったものが、最終の姿からは考えられないような様々で異なった形に変化を続けながら、みるみるうちに大きくなったのだ。そうやって成長していったそのAの姿は、下手な譬えとは知つてはいるのだが、言つてみれば、宇宙ステーションから船外活動をする際に繋がれ

た、宇宙飛行士の遊泳状態と言った趣で、そのケープブルから空気が送られるよう、その紐帯からはたつぷりと栄養が送られ、飛行士の真空という空間と同様、暖かな溶液体という、周りの液空間で、黙々と作業が出来る状況に似ているらしい。AはBのある場所、そこでゆつくりと、動きながらも黙々と成長しているのだ。

ここまでくると（なあんだ）と思う人が多くなることだろう。しかしこれでも未だ、僕は黙っていようと思うのだ。そのほうが僕には都合がいいのだ。ただ、半ば、はぐらかされた気持ちになった人は誰しも、僕がこう書いたことに對してきつとこんな風に言うのだろう。

「僕は、私は、あの頃、そんな気持ちでいたわけではないのだ。何も考えなかったし、そんなこと思ひもしなかったのだ。どうして？ そんなこと、知ることさえもできないじゃないか」

「何故こんな風に表わすのか、意味があるのか？ その頃は君だつてそんな事、思ひもしなかったのだろうに」

そうですね、その通りです。いやいや、そうではなくて、そもそも、誰しも、訳のわからなかったものごとを、全て自分固有の領域だと決めつけてしまっているのが、僕には癪に障るだけなのだ。つまり、君達に言われるように、僕もまさしくそうだったのだが、それにもまして、誰もがその状況になった後、そう、ずうっとその後になつてから自分そのものを生き始めたように思っているのが、僕には奇妙で、どうにも

菌がゆいのだ。そうだろう？ それ（A）が今の状態であるように、君や貴女が同じ状況にあつた事には変わりがなくて、何故そうなっている事に対して、自ら何の説明もしない、できない。自分であることを証明する根拠が何もないのに、自分は由緒正しき、真つ当な名前のついた人間として、特別なのだと決めつけて過ごしている、自分を含めて、全人類というやつにさ。僕は何時の頃からか、そう決めつけ考えることをやめたのだ。僕が狂っていると君たちは思っているのだろうか。それならそれでいい。でも、よくよく考えれば、これは、どうにも自らは理解納得できない、変な事だろう。

「でも、名前がないとすれば、人を呼ぶこともできないわ」などと言っているお嬢さん、簡単なことです（あなた）とか（あの人）で誰かのことを呼べるし、あなた自身のことを（じぶん）といえは充分区別できますよ、と（じぶん）は言つて差し上げよう。（何としても、君達！ 名前で呼ぶことを止めて欲しい！）という暴言さえ吐きたくなるのですから。

さてさて、どうやらAはその成長とともに、多少物事を判断できるようになつてきているらしい。自らの思いに任せて、体を動かそうとする、反対に自ら動かないようにしつつ、周りのことを感覚として、不断に調べ、覚えようとさえしているようなのだ。そうすることを繰り返すことで、体の内部に出来つつある一部の、何ヶ所（そこは奇妙なキャベツのような形・葉っぱ状態になっている）に少しずつ溝が増え始めたようだ。どうやらそこがAの体の外周りが感知することを

纏めているらしく、Aは自らの身体の訓練をすることで、より密度が濃くなった感覚をその（葉っぱ）を通して「もの・こと」として捉え、その「もの・こと」を覚える度にその溝も深く、多くなっていくのだった。（葉っぱ）もまたBからの圧倒的影響を受けていることはAも重々承知のようだが（今いるBの中で無茶をしない限り、AはBの持っている暖かな液体の中でのんびりと過ごす事が出来る）というそのことを（葉っぱ）は何よりも重視しているのだ。Aの体はもとより、そこ（葉っぱ）もそれを知っている。なぜかというところ、それは（葉っぱ）が様々な情報を集めその集積を全て自らを作り上げ、それがまた自らのものとなっている、ゆえに、自らの判断に対してだれにも、どうこう文句を言わせないという自負があるからなのだ。その為（宇宙遊泳）の結果、AにとってBのこの場所は心身ともに生きてゆくには、最高の場所と思いきんでいるのは確かなのだ。尤も、Aの心というのがいつでできたのか、どうにも解らないのだが……

もう一度言おう。傍から見て、Bの中に入ったAは初め、全く動かないように見えた。しかしそれは違っていた。肉眼では決して判らないのだが、Aはいつも変化を続けていたのだ。続々と栄養が運ばれていた為、その身体も変容していったのだ。しかもAのいくつかの特定の部分はAを作り上げる為、激しく動いたり、ゆっくりと動いたり、全く動こうとしない時もあったのだ。その結果、初め球体であったAの身体が変形し充分大きくなると、その体の表面の様々

な、また特異な部分は、自らとそれ以外のものとの違いを感じ、その感覚を更に研ぎ澄ませ、お互いに暖かかったり少し冷たかったり、硬い柔らかいといった感覚があることを自ら認め始めたのだ。しかも、暫くするとAの身体の周囲の部分に振動、つまり音を感じする形が出来た。それによってAには少し離れたドクン、ドクンという音や近くの微かなポコポコという音が絶えず聞こえてきたのだ。Aにとってその音達とは初めから自分に馴染んでいるため何の違和感もなかった。もちろん他の遙か遠くから聞こえる不可思議な騒めきも聞こえてきたのだが、それはたいして気にならなかった。確かめようにも確かめようがない。つまり何が何だか解らないのだから。Aにとってそれらは殆ど雑音・嫌な音だとさえ思えただろう。またほぼ同時期に、圧倒的に優しくうっとりするような香りに気づき始めた。それはAに出来たささやかな突起の下に出来た、二つの穴に向かって、Aを包むBの液体を通して伝わってくるのだった。この香りに、Aは無性に心惹かれることはあっても、決して不快にはならなかった。またある部分ではAを囲んでいる液体の、えもいわれぬ仄かな味を感じ始めた。それゆえ、Aはこれらつまり全身の外皮を駆使して情報を集めることに夢中になっていたのだ。

BがAを圧倒的・全体的に鼓舞する感覚。Aにとってこのことは兎に角、驚きと不可思議の連続だった。ただそうこうするうちAはかなりの部分で完成されて行き、後は仕上げとなる増殖（重さの増大）くらいを残すのみとなりつつあった。

特に、先程言った三つの感覚の中で、Aがもつとも驚き、不可思議に思ったのは、最初に気づいた、ある部分に聞こえてくる一つの音の連なりだった。繰り返されるその音節に、Aは堪らなく魅かれた。むしろその音節に対して、恐れも少なからずあつたのだが……途切れ途切れに、必ず音の初めにそれは聞こえた。

「坊や、母さんよ」

「坊や、元氣？」

「坊や、会いたいな」

「坊や、早く出ておいで」

その音の群れは確かにAの方に向かって発せられたように思えたのだが、これもAには何のことか殆ど解らなかつた。ただ「坊や」という音は静かで優しいように（とはいえその言葉を感じとしては理解できたとしても、意味としては理解することはないので）断然自分に向かって聞こえるように思い始めたのだ。それ故、Aはその音に全身で反応していた。なぜなら繰り返されるその音はBのある部分から他の部分のBに向かってB自体を通り過ぎ、それからAに届くからだつた。Aには恐らくBに直結しているという感覚があつたのに違いない。Aを包む「坊や」の音の響きは何故かAの全身を振動させるのだ。そう呼ばれるともうAは蕩ける心地となつて、体をピンと伸ばそうとする仕草をした。そうすることで恍惚感に満たされる為、穏やかに眠りにつくのに好都合でさえあつたのだらう。「繰り返されるBのAへの深い想い・訴

えとAのそれにしても答えようとする喜びの動作と反応」それをやり取りする状態が、何か月も続いたのだつた。

しかしそれでも、Bが物質的にAを何時迄も許容するには限界があつた。AがBの中にいる為には、Aがあまりにも大きくなり過ぎて、Bの体では支えきれなくなつたのだ。ただBはAを殆ど自分の分身とさえ思っている為、体ではそのことを拒みたい、絶対に離したくないと思っているのだが、生物学的には、やはり無理なことだつた。（勿論Aもそれに負けない位の思いでいるのだが）ただそのまま成長し続けるとB自体がというより、客観的に見て、Aまでも死に追いやってしまう事になるのだつた。それゆえAをなんとか生かすため、泣く泣くBはAをその場所から遠ざけよう、放出しようとしたのだつた。その後、自らAを守つていこうとしたのだ。

ただそう決意すると、Bという存在は、他の同じ仕組みを持つ存在と同様、すべて大胆に、しかも堂々と事を成し遂げようとするらしい。大したものだと僕はつくづく思う。まず、やや長くなつたAの体の先端を手始めに、Bというものの中心部にある洞窟から、Bの持つ圧縮力と自然の重力を使ってその全体を、何とか押し出そうとしていた。丁度理科室の実験用具として使われる、大きなスポイトのゴムの部分を下に向けて圧縮するように、Bは自ら所有しているゴム状のある部分にぐいと力を込めた。当然中にあるAはぐにゅ、ぐにゅ、ぐにゅとその圧力に押され、全身をゆっくりと捻じられながらBより下降しながら離れて行かざるを得ない。ただAは全

くそんなことは願ってはいないから、必死で抵抗し続ける。

「いやだ、いやだ、お願いだ。こんな事はしないでほしい。

私はどうしても、ここを離れたくないんだ」

「ここは最高の場所なんだ。ここに居れば私は何も考えなくてもいい。夢を見る事さえ必要のない私だ。動くこと？ そりゃあ、したいと思えばこの空間で容易にできるのだ。本当に、ただ私はここBの中で静かにしていたい。お願いだから私を独りぼっちにしないでくれ」

そう思っているらしいAは、抗い、必死でむによむによと体を動かすのだが、やや広い空間から続くその洞窟は強く柔らかい、弾力のあるゴム質になっていて、Aにびったりくっついてしまつて、動きが取れない。Bは死に物狂いでどんどんAをその場所から遠ざけよう、下降させようとしている。とはいっても未だにAとBが繋がれているのはたしかだ。紐が見える。それにしても、B自体と繋がれている柔軟なその紐はだいぶ細くなつて、伸び続けていく。

「いやだいやだ」

と逆らつてAは激しく全身を動かそうとするが、何とも体が動かない。逆に、腹を決めているBは無慈悲にもAの動きを阻むように更に洞窟を締めつけて、Aを押し出そうとしている。何時間経つたであろうか、長い、長い圧迫の続いた後のある時、Aの先端の部分の感触が変わつたかと思うと、次第にAがBから分かれようとしていた。そしてある瞬間、Aは遂に完全にBから離されてしまつた。

「ギャ、フンギャー」

Aの中で音が発せられた。狭い場所で全身を圧迫され、縮こまつていた全身が解放されると同時に、体の中にある空洞に最初の苦しみを吸い込み、吐き出す運動が始まつた。それは、これからもずっと続く運動なのだが何故かとても苦しかった。苦しくてAは泣き叫び続けている。しかしその苦しみはその運動を繰り返しながら時間を経るに従い、いつしか薄れていくのだった。Aの持つ本能として、素早く対応する機能が働いたのだった。

Bから離れてしまつてから暫く後で、Aは少し全身に肌寒さを感じた。

「おお寒い。それにしてもあの場所は何だったのだろう。あそこは確かに少しべつたりと纏わりつく、動くには少し重い感じの場所だった。でも自分としては暖かく、気持ちよくて、全然嫌な感じはしなかつた。それとはまったく別のこの場所は、周囲に全く重さを感じない。少し肌寒い、今の体の周りとは一体何なのだろう」

Aはどうやら今迄より「途方もなく広い場所」に居るらしいことに、その皮膚からの感覚で、気づき始めている。なぜなら体にある五つの場所をどんなに乱暴に動かしても、Bの場所の中にいた時のように、何かにあたるような感触はない。びつたりとくっついていてる体の下方向にかかる重さ以外には全く周りに抵抗がないのだ。傍から見ると不安なのか自由に思っているのかどうかはわからないのだが、Aは思いつき

(クニユクニユ)と全身を動かしている。その体は皺くちやで、ふやけた赤い色だ。

よくよく見ると、繋ぎ止められていたAの紐帯とその基盤はAとともに、Bとは切り離され、その先端・基盤の塊から刻々と使い物にならなくなっているようだ。徐々に萎縮・枯渴を始めている。しかしその事は(生物学的見解によると)ただ単にそこが駄目になっていく訳ではないようなのだ。丁度、木々がその先端から枯れ始めるように、次第にその役割を別の場所に託す事を意図し、力を振り絞って、最終ともいふべき栄養をAに送り続けているというのだ。その結果、最後には紐帯自らも奇しくも枯葉のようにポロリとAから離れてしまうという。ただ、その作業を続けている間に、急に五本の肌色の枝のようなものがその紐帯を(じよきり)と大鎌を使って切り落とし、Aに近い部分を紐で縛った様だった。「何か」が意図的にこんなことを行つたのだ。これで完全にBからの直接補給は断たれてしまった。本来ならそこからしか受容するしか方法がないから、命は危険に晒されると普通なら思えるのであるが、Aはもちろん死ぬこともなかった。それを切られても、Aは何の意識、つまり痛みすら感じなかった。紐帯はAでもなければBでもないのだろうか。

今やAは長いその体の中心部がやや折れ曲がった状態になって透明のケース付きのベッドに横たわっている。全体は綺麗に洗浄され、ふんわりと柔らかな布の上に包まれて居るのだ。その中、それでもAは体の五箇所を無闇に動かさそうとし

ている。無論、この包まれた状態では満足にというより、殆どといって良い程体を動かせはしない。

先ほども言ったが、もうほとんど完成された体の一部・二つの穴を通してざわざわと異なった音が聞こえる。「弓子頑張ったね。有難う」「嬉しい。やっと生まれた」「二千八百グラムですよ」もちろんAには全く何のことも解らない。ただのモゾモゾしている間にも、**Bらしきものの響き**には心が動いた。暫くすると、急にAのある場所に、何かが触れて、生暖かい液体がAのなかに、その柔らかく温かい、小さな球粒のようなものの中から、溢れるように入ってきた。とても暖かく、美味しかった。それ故Aは夢中で自らのその一点の場所の周りを不連続な波のように動かし、またその部分の気圧を低くして暖かな液体を体内に取り込もうとした。Aがそこを動かしただけそれが入ってくる。それゆえAは必死でその動作を繰り返す。その後直ぐ、こんな音が聞こえた。

「初めまして、**坊や**、生まれてきてくれてありがとう。沢山飲んでね」

しかしAには「**坊や**」以外単なる音にしか耳に染み入って来ない。ただその話す方向から聞こえてくる音全体がAを威嚇する音ではないこと、Aを優しく取り囲むも、決してAを侵害するものでもないこと、Bの中にいた時と殆どそのままの感覚だということをAは確認しているようだ。それ故、「**坊や**」とよばれ続けるうちに、Aは言いようのない恐ろしい不安が、徐々に取り払われていることを感じながらも過ごして

いるようなのだ。ただ、ももとの恐れと不安は体には溢れている。Aにはそれが何なのか、確認することができないだけだ。はじめ感じた、やや冷たいと感じていた、Aにとっては、ごわごわしたもののよりも、暖かな、柔らかいものに触れられている。Aにはほ近い体温だ。そのものが、Aを撫愛する心地の良さと、Aの体に纏わりつく柔らかな密着感。それより格別に気に入ったのは、辺りを包むうっとりとする匂いだった。何かに守られている感覚。それら様々なものが少しずつBの中にいた時の記憶を蘇えらせていた。(そうだが、これはあの場所と同じ感じだ) (いいのだ。ずっとこの場所についていいのだ) Aはそう感じていた。位置の変化、つまり自らの運命の急激な変化に対する恐ろしさのあまり、ギーギーと音を立てていたAは、これからずっとここにおいて、好き勝手・自由にしていいのだと感じ、黙り始め、Bの中にいた時のように、すやすやと眠りについた。

それからどのくらい時間がたったことだろう。何百回、何千回いや何万回それ以上の、音や匂いや、温かさ冷たさ、重さ軽さを絶えず感じていたAは暫くすると、体のある部分に薄っすらとなにかを感じた。次第にその感覚は体中に広がるように思われた。初め、ほんやりとしたものが体に、またその部分に程近い(葉っぱ)に感じられた。それは暖かさでも匂いでも重さでも音でもないものだった。何か今までの感覚とは全く違う状態のことだった。しかもそれはAとはなんの直接的結合のない、別の場所に(いる・ある)もののような

のだ。しかもそれらはAのその部分を通してまるで一気にAの全身に広がるように思えた。まるで投網の中に捕らえられた一匹の魚が感じるような感覚だった。それで再び、どうしようもない不安に駆られたAだった。

「これは何だというのか、どういうことなのだろう。この感覚の先にあるものは一体何だというのだ。更に、それに魅了されているところの、間近に見える二つのもぞもぞ動くものは一体何なのだろう」

Aはとても怖かった。ほんやりとしている。訳が分からない。そう、その感覚がなんであるのか全く解らないのだから。それでも少しずつ時間がたつにつれて(ほんやりとした怖いもの)それがはつきりしてきたのだ。何故ならそれはAが今まで、それに触れ、聞き、嗅ぎ、味わうものと同じ方向から来るものであることが分かってきたからだだった。何故ならAがはつきりと確認し、喜ぶことが出来たのはその中でしか生きられないものと思っていた、まさしくBの顔の表情と上半身の姿だったからである。それは確信できた。何故ならBは威嚇する事は全くなく、圧倒的にAの全体を見て、柔らかに優しく抱きかかえているのだ。更に間近にあった二つのものをBが触れることよって、AはそれがA自らの一部であることを知り始めたのだ。例えばBがAを抱きかかえる。授乳する。Aはその乳房に二つのもので触りBを確認すると同時に自らをも確認する。そういつた多くの、絶えず繰り返される作業によつて、全身でAはその感触を味わい、この上ない喜

びを獲得しようなのだ。Aはもう安心している。Bに触れ、Bから聞き、Bを嗅ぎ、味わい、それからBを（見た）のだ。間もなく、Aはその時から殆ど「見る事」を通常態として、他の感覚はその都度使うといった状況に自らを追い遣り始めた。それがいいことなのかどうかは判断する間もなく、そうすることが何よりも迅速に、正確に、美しく物事を成し遂げて行く事が出来ると思つたのだ。Aのそれからの行為はすべて任せりの状況から出る（放縦さ）からは解き放され自らの「意思」による行動が始まる事となつたのである。どうやら殆どの人がこの状態から（私）を始めるらしい。ただそれでもAには一つ奇妙な感覚が残つた。Bが発するAに向かつてのもう一つの言葉だつた。それに対してAにはなす術がなかった。つまりAにはそれは決して、坊やという音節と同じく、自ら積極的に決められないことだつた。それは「翔太」という謎めいた音声だつた。

「あなたは翔太君よ」

「翔太えらいぞ、寝返りを打てた」

「あらあら、翔太君、おしっこ出ちゃったわね」

「ほら翔太が泣いているぞ。弓子 おっぱい おっぱい」

夥しい音の中でこの（しようた）という音は初めに感じた坊や以上に頻繁に響いた。それもAに向かつて何度も何度も突き刺さるように聞こえた。それゆえAは自らの体に累々とその刺し傷が広がるように思えたのだ。た。た。（心が痛いのだ）そうなるAはその都度「翔太」という音に反応せざるを得

ない。ただその音に反応すると、色々なものがはつきりと解つてきた。Bの一部、いや全身の姿、それと同時にそれ以外のものの姿から、またさまざまな音がする。例えば「笑つたわね」「声が出たぞ」等々。ただ依然「翔太」という音声以外には何のことかはわからない。傍から見ていると、Aは気分がいいから笑い、悲しいから泣いているわけでもないようだし、そもそも意図してそうしているわけでもないのだ。Aの動く様子を観察し判断した結果、Bを含めそれ以外の者がそう思っているだけなのだ。AはBを前にすると気分がいいから、その時は笑つたように思う。そうすると更にBはAを気分良くさせる為、Aのお気に入り液体を与えてくれるのだ。オムツが濡れ、いやな気分になつたり、うまく体が動かず痛みを感じた時の状況、所謂その時の条件反射でAはその仕草をし続ける羽目になつたのだが。それを類推することは、どうやらAの側にはなくBをはじめその周りの経験的、教えられた判断によるものらしいのだ。ただ、そうすることでAも無論、Bも気分が断然良いようなのだ。それ故AはBを初めとする様々な音を、それぞれ異なる概念としてAのものとしていった。つまりAは言葉を受け継いだというわけなのだ。

その後Aは他の同じ体を持つものと同じように、様々な決められた動きと表現するように教えられ、あの時、そう外に出た時からは、ほぼ七倍の重さになつてた。世の中で言うのと五歳になつたのらしい。しかしAは「翔太」という名前

を持ちつつも、また坊やという愛称もAを呼ぶ場合は同じであることを、自分の作り上げた言葉の枠組みの中に嵌め、理解するようになったのだが、未だその呼び名には違和感を持ち続けていた。だからその名前を呼ばれたとしても、ひと呼ば置いて、つまり「誰を呼んだのかな？ ははあ、それはこの体なのだな」と感じて「なあに」と子供らしい声を出し、反応していた。Bはもとより周囲のものもそれでよしとしているらしい。それでもAはAでも坊やでも翔太でもないことを知っている。それで思わず時々、Bに聞くのだった。時々というのはそのことを聞くと、Bがとても嫌そうな、それだけで、とても心配そうな顔をしたからだった。それゆえ、AはこのことをBの機嫌のいい頃合いを見計らって

「ねえ、僕って、だあれ」

と聞くのだったが、その都度Bに言われるのだった。

「決まっているでしょ。あなたは翔太君」

「翔太君かあ」

Aはため息をつきたかったのだが、それでもBを傷つけまいと、安心したという仕事を表す為、にこっと、Bに向かって笑いながらそう答えた。

「そう翔太君、もう何度も聞かないでね。お願い」

Bは決してAを知恵遅れの子だとは思っていない、ただ我が子ながら（少し変な子）だとは思っているかもしれない。いや断然そんなことはないようだ。そればかりか、近所の仲良しで、よく一緒に浜松城公園の砂場で遊ぶ、同じ年齢の三軒

先の妙子という、静大の講師をしている人の、皆が「賢い」と言っている女の子と比べても理解力の上では遜色がないし、いやそれ以上に判断する力は持っている、ひらがなはもう全部書けるし、ちょっとしたお使いも難なく出来るのだから、と思っている。それゆえ、Bは鷹揚に構えている。暫くすればきっと、この変な質問をするのが無くなるのだろうと思っているのだ。Bは誰よりも良識・常識を持っていると自覚している教育的な母親なのだ。

しかし、翌年、とうとうAは学校に行く年、満六歳になってしまっていた。尤もAはその頃になると既にきちんとAの周りの状況を理解していた。（この体は「翔太」と名づけられている事、他の身体にはそれぞれ呼び名があつて、初め何かわからなかったBという、自分に一番近い体が「かあさん」であつて「弓子」と呼ばれていることを。周りにいる「ひと」は「信一」という「父さん」を初め、呼び名の違いによって区別され、そのことで色々な「ひと」のことが区別できるのだということ）を。

「そんなことは当たり前だろう」

君にそういわれると「返す言葉がない」と僕が言うと思うのだろうか。そんなことはない、さつきも同じようなことを言ったかもしれないが何故かこの辺りから（ひと）は他人に対して本格的に（自分）を始めるらしいのだから。よくよく君も思い出してみるといいのだが。

金色の桜の印のついた黒い学帽、黒の学生服と短パン。白

いYシャツ、ピカピカの黒い靴と白い靴下。黒いランドセルの横と服の胸には 一年二組 なかやま しょうた という名札がそれぞれビニールケースに入り安全ピンで止められている。

昨日の夜、Aは何故か憂鬱で、よく眠れなかった。母に起こされ朝食を食べた。いつもなら平らげるのに、何故か少し残してしまった。Aは歯を磨き、顔を洗う。間もなく母に急かされ、仕方なく衣服を整え、ランドセルを背負い、真珠のネックレスをつけ、黒のワンピースの礼服を着た母親に、いやいや手を引かれながら、春の朝、まだ枯草の多い小川沿いの通学路を初めて歩いた。

同じくらしいの背丈の子供と大人がいっぱいいるなか、入学式が始まった。クラス順に並び、しかも出席番号順に続々と名前を呼ばれる段階になっても、他の同級生の名前にAはなんの違和感も持たなかった。ただ自分のクラスの名前読み上げの段階、それもアイウエオ順の終盤になって「ナカヤマシヨウタ君」という音が聞こえた時、Aは躊躇った。暫くの間沈黙した。すると、どんどん涙が溢れて来た。

「どうして僕はナカヤマ ショウタなのだろう」

「どうして、悲しくて涙が出るのだろう」

そう思ったのだが、どうしようもなかったAは、しくしくと泣きながら、真正面を向いて、できる限りの声で

「ハイ」

と返事をしたのだった。数十秒の間、クラス中がざわついた。

この名前の読み上げと返事の時、泣きだす子は確かにいて、誰もが多かれ少なかれ見聞きしていたのだが、泣いてから、はつきりとした声で「ハイ」と答える子は誰もみたことがなかったようなのだ。ただそれでも次の人の名前を先生という人が呼ぶと、Aの涙は次第に収まっていくのだった。

入学式の帰り、とぼとぼと歩く道すがら「かあさん」の手をしっかりと握り、うつむき加減に歩くAに向かって「かあさん」は囁くように言うのだった。

「泣いたね。それでもよく返事をしたね。えらかった」

するとみるみる再びA・翔太の目からぼろぼろと涙が零れた。翔太は「かあさん」のお腹に横顔をぶつけるようにして、両手で抱えるようにして、わんわんと泣きじゃくった。弓子の両手は翔太の頭をしっかりと抱きしめていた。弓子は知っていたのだろうか。折からの春風で二人の上に川岸に生えた、山桜の木から、花びらがはらはらと散り、舞い降りていた。

ある教師の独白

三十七年間小学校で教職をしてきた私である。最後の勤務となる今年、生まれ故郷の小学校の校長を務めさせてもらっている。先春、三十七回の入学式を終えた。今は冬の二月である。今年はいつになく雪が多く、先日は十センチも積もって、大変寒い日が続く、この老いた体には応える。いやそれはともかく、これから後は私にとって、最後の卒業生を送る

事が残っているだけである。この間、五千人以上の新入生を迎え、卒業生を送った。今回の卒業式で教師生活最後と思うと感慨も一入である。

振り返ってみると、入学式は、殆どの場合、肅々とした式次第に則って行われ、何事もないのが普通であったのだが、何度か印象深い入学式を味わうことがあった。この地方では新入生は入学式では、それぞれクラス別に並んで席に座る。そのうえで、新入生はひとりひとり担任より名前を呼ばれ、その場の椅子から立ち上がって、「ハイ」と返事をし、再び座るのが通例である。新一年生の多くは、自分の名前を呼ばれた嬉しさのあまり「ハアア」と大きな声を張り上げる子がいて、周りにいた父兄たちがどつと笑う、つまり「この子は元気で良い子」というその場の評価が他の新入生達に伝わると、一気に「ハアア」の連続となる場合が殆どであった。それでも何度か、呼ばれた瞬間、泣き叫ぶ子供を見たことがあったのである。私もその度に、多くの人が考えるように、他人に対しての、あまりの恥ずかしさに、恐れ慄き、その不安から子供は泣くのだと思っていた。実際、入学式の始まる前、母親から離され、あまりの恐怖に、泣き叫ぶ新入生の例は多かったのであるが、その場合母親・父親だけでなく担任の先生などが近寄り、対応し、宥めると、その場合はほぼ事なきを得て、すぐごとと自分の席に座る子供は大勢いたのである。今振り返ってみても、名前を呼ばれた時でさえ、多くの場合、泣き叫んだ生徒の反応はその場での感情的な

のに過ぎないと思うのであるが、それでも単にそのみで片付けられない事例がいくつかあったのである。というのは、私の記憶の中だけでも三名は父・母親を探したり、助けを求めることなく、きちんと真正面を向いて、返事もせず、さめざめと泣き続けていた、男の子が二人、女の子が一人いたのである。三人は決して取り乱しているのではなかった。それゆえ返事をしないこの三人の場合、その時はそれぞれの担任がその場を取り繕ってそのまま座らせ、女性の教師の場合であれば

「いいのよ○○さん、次からは返事をしましょうね」
などといって、次の生徒の名を呼んでいくことで式は進んでいったのである。

その後の三人がどうなったのか？ むろん三人三様であるからその状況に応じて対応され、見守られ、外見上は無事に入学式を終え、その後、それぞれの学校生活を過ごしていったのだらうと、他の人同様私は思っていた。残念ながら、いずれもその時は別の学年の一教師としてだけの立場であったから、直接の知見はなく、また、きちんとその児童の名前をも記憶することもなく、その時間をやり過ごしてしまったのである。中にはひよつとして、その後私の教え子となって私と話をした子もいるのかもしれないのだが、当時、若輩で不明な私にはその直感も、探し求める意思もなかった。未熟な感覚の持ち主であったことが本当に悔やまれる。ただ、いまさらという気持ちはあるのだが何故か、私には彼ら彼女がど

ういう気持ちで黙っていたのか、またその事を聞くことのできる技量も条件も持っているようなのである。そういった事には不思議と自信を持っているようでさえある。どうしてそう思えるのか、私にはその理由が解らないのであるが。

今になって想像するに、その三人のひとりひとりとは傍から見て、周りとの何の変わりもない生徒としてまた、本人自身も、すっかり忘れてしまつて、成長していったのかもしれない。それは誰にも、ひよつとすると本人にさえ解らなくなつてしまつている事なのかもしれない。いや、さめざめと泣いていた理由自体は幼い本人以外には解らないのであるから、却つて、体と心の全てで、嫌な思い出としたくないと、無理矢理、忘却のうちに葬り去り、本人の記憶の内には残つてはいないのだらう。

思うに、ひとが他のひとから命名されること。そこには確かに果てしない違和感があるのかもしれない。親の勝手な趣味嗜好や姓名判断、占いといったもので暫定的につけられた名前としての「私」が否応なくそこに在る事とはいつたい何なのだらう。それを当たり前として、そのことが異様であると思うことはないのだらうか。教師生活三十七年の間、何千人という幼い者たちを見てきた私であるが、本当に（見て）いたのだらうか心もとない。今さらながら、自らの不明を改めて思わざるを得ないのである。

言い忘れたのだが、ちなみに「私」というひとの名前は（ナカヤマ ショウタ）である。

（中区）

「入選」

宿老

北まくら

その人造湖は観光地として一年に一日だけたくさんの人々が集まってくることもある。森林鉄道の「湖上駅」を降りて、歩くには少し長い素掘りトンネルを抜ける。その隧道は「青の洞門」を連想させる。天井から壁に至るまで、尖った岩角から滴る地下水が地層の落涙に見える。隧道を潜り抜けると視界は湖上駅より少し狭くなつて、ダム湖が開ける。年に一日、人が作つた湖の周辺で「湖上祭り」が開催される。湖畔は広く平地に整地されていて、そこに建つ「電力資料館」には水力発電の仕組み、水力以外の発電システムとの技術的、経済的比較、このダム建設の難工事などがパネルやジオラマで展示されている。

だいたい、花火は夜空に向かつて、鉛直に揚がるものだが、この湖上祭りの花火は日中湖面を水平に走る。夜の花火のように天空高く同心円に広がる光の粒や線は無い。昼の花火は爆発音と数種類の色のついた煙を見せる。湖面擦れ擦れに飛び交うカラスモークは、アクロバット編隊飛行を俯瞰して

いるようなものだ。広場ではチャイナタウンの騒ぎを思わせる龍が鐘と太鼓で空に舞う。二メートルほどの何本もの竹竿で支えられ、鯉のぼりよりはるかに大きい空洞の龍がぎこちなく踊る。発電所職員と麓の限界集落の村人達が演じている。山塊の襷の一つに少し開けたダム湖が作られ、その空に泳ぐ龍の舞いは麓の村落に伝わる「竜神説」を現したと言う。資料館の脇にはイチヨウの大樹が一本立つ。湖上祭りのころは青々と新芽が出そろう。しかし、秋になってこの黄葉を愛

でる客はほほ居ない。イチヨウの大木の脇に大人の身長ほどの石碑が立っている。輪郭に自然石の名残がある。この慰霊碑の裏側には八十余名のダム工事殉職者の氏名が彫り込んである。記名の内、何人かはこの地方ではあまり耳にしない氏である。「南の国」に多い姓だと言われている。南の国の人々の技能支援で、このダムが完成したとも言う。

谷の流れを仮りに東に振って、新しい川の流れを作る。元の川床は干上がって、その両の崖を削り取る。広くなった旧川幅の両崖をアーチ壁で繋ぐ。何としても、大規模な土木工事だった。巨大なブルドーザーは解体して運び込まれ、ダム工事現場で組み上げる。人の身の丈を越すタイヤをいくつも履いた重機も、戦車を思わせる無限軌道の重機も、この景観の中では働き蟻の粒々にしか見えない。

その日は二週間の長雨が上がり、湿った土壁を太陽がじりじり干した。お昼頃、玉島幸吉の操るブルドーザーは自分で造成した狭い土棚の上にいた。運転席で弁当を取ろうとして

アルマイトの水筒の蓋をねじった時、玉島はブルドーザーと一緒に、崩れ落ちる土棚に揉まれながら落下した。この日、終業のサイレンは悲しげに木霊した。人員点呼で玉島の居ないことが知れた。重機整備と操作作業のベテランである玉島を、他者が安全監督することは無かった。玉島の腕が監督を無用にしていた。加えて、ただ見ているだけに一名を割くことは出来ない現場の作業員数だった。その工事現場はあまりに広大で、よほど深い作業領域だった。

「この仕事が終われば玉島さんは「宿老」の職位だって聞いているがなあ」「俺達は若い宿老ができることを楽しみにも、励みにもしていたのになあ」「それより残された家族はこれから、どうやって暮らしていくんだろう」「そりゃ、南の国に帰るだろう」「通夜の晩、重い会話がぼそぼそ聞こえた。退職後も仕事の任を保証される「宿老」と言う職位は職人達の憧れだった。生前幸吉に付与されていなかったが、まさしく幸吉の実力は「宿老」だった。仕事仲間はみなそう評価していた。

故玉島幸吉の妻「よし」は高齢になってから授かった二歳の一人娘「しず」を抱えていた。しかし、親類縁者の暮らす故郷の南の国へ帰らなかつた。そのままダム工事の麓の山の古い宿場町に住み着いた。その街にはダム工事を目当てに、バラック建ての映画館が一つ、パチンコ屋が二つ、飲食店が大小合わせて十軒、芸者の置屋が一軒、合法も闇も併せて風俗店がいつの間にか立ち上がっていた。よしは旅人の女たち

に和裁を教えた。加えて若いころ生活の中で習い憶えた三線を教授した。時には南の国の舞踊を披露した。そのよしの温かく気さくなふるまいに、厳しい環境の旅の女達は安らぎを覚えた。「着物が縫えるようになるより、よし先生と喋って、歌って、踊っている時間が楽しいよね」生徒達はそう口にした。健康的だった。

敗戦の復興の柱は豊かな工場稼働電力の供給だった。それには、大型発電所の建設が国策の一つだった。特に燃料を必要としない水力発電は優先的に計画された。また、発電効率を高めるために可能な限り、大型ダムが設計された。工期は極端に短かった。困難な土木工事は危険な作業を伴った。また、工事の早期竣工の課題を達成するために、巨大な土木重機が必要だった。しかし、この重機そのものと、それを扱う整備員や操作員はこの地の周辺には見つからなかった。これを満たすベテラン職能者を南の国に求めた。玉島幸吉もこれに応じて、南の国から一家を挙げてやってきた。当時、南の国は他国に支配され、軍事基地が広域に渡って整備された。そのため土木工事は大量の超大型重機が軍の国から投入された。軍の国は、南の国だけでなく、この国の政治も、経済も指揮していた。

しずはその街の高校を卒業して、その水力発電所の受付嬢に就いた。容姿は整い、知的で温厚な顔立ちの受付嬢は発電所を訪れる業者、来客の窓口にあざわしい存在だった。五年

ほどして、同じ総務課に所属する山野久志の強い求婚を受けた。しずは実母のよしを伴うことで久志の求婚を受け入れた。発電所の社宅に身を寄せたものの、母よしはこの同居に幾分ためらいがあった。しかしダム工事はすっかり残務も終り、工事村もその山麓の街も人口が急激に減った。よしの弟子のお針子達は次の北アルプスのダム工事に向かって引越した。だから、よしには娘夫婦と同居することは心強く安心だった。反面、夫幸吉が他界してしばらく他人との暮らしがなかったので娘夫婦との生活に遠慮があった。

しずが久志より帰宅の少し遅かった日、小さくなって同居していたよしに「お義母さん、もう遠慮はいりません。十月もすれば、こちらからお願いしなきゃいけないことになります」と久志は自分たちの子の誕生をよしに告げた。次の日「しずちゃん良かったね」早めに帰宅した娘によしは声をかけた。「うん、有難う、私、赤ちゃんが生まれても勤めは辞めないから、お母さんに育児のお手伝いをお願いすることになるわ」「そうね、私もただの居候じゃなくて、うれしいわ。任せて頂戴。あなたは私一人で育てたんだから自信があるよ。お孫ちゃんのお守りは私が半分受け持つからね。これからは共稼ぎの時代だね。私は子育て職人の宿老になるよ」

勤めから遅く帰宅した久志を交えての会話はなく、それぞれ別の日の二つの会話だけで将来の生活はスムーズに進んでいくように見えた。しかし、玉島よし、山野久志、山野しず、これから生まれて来る子の四人暮らしの期待や希望は七ヵ月

後に突然消えた。

玉島よしは思うこともなく、突然逝ってしまった。その日、しずが勤めから帰ると、よしは小ぶりの「裁ち板」の前に正座して、右手は「針山」に針を刺している恰好だった。さらに産着の運針に一息入れようとしているような後ろ姿だった。「お母さんたたいま」いつものように、母の振り返る動作はなかった。しずはほんの少し胸騒ぎを覚えた。それでも、昨日と同じように奥の部屋に行つて制服を着替えた。台所に戻りながら叫ぶように話しかけた。「お母さん今日は山には珍しく生きている太刀魚があつたわ。今から捌きますね」よしの返事はなかった。モノクロ映画の一場面だった。よしの享年は当時の平均寿命より少し若かつた。まばらな通夜の客が去つて、しずは久志に思い出語りを切り出した。哀しみはこれから先やってくるのかも知れないと思ひながら。「母さんは裸の座りダコを育てる一生だったわね」「お義父さんと一緒だ。『宿老』は果たせなかつたな」「子育ての宿老になるつて言っていたわ。私もずいぶんあてにしていたのに、でも母さんは苦勞の生活の中に楽しみも持っていたと思う。なんていつても、お針子の生徒さんや三線の仲間に慕われていたことが楽しかつたのね。何度も謝礼をもらいそこねたみたい。三線の謝礼を貰うのは心苦しいつて言つたわ。あの人が三線弾いても稼ぎにはならないでしようつて、ぽつりと。父さんが自分の命の代わりに残してくれたお金で少しはゆとりがあつたのかも知れない」「そう、俺たちが結婚して

お義母さんと同居する初日、持参金だと言つて、通帳とハンコを差し出してくれたな」「ご心配なく、それはお小遣いにしてください、これからのお義母さんの生活は私達に任してくださいって、あなたが言つてくれたこと、とっても嬉しかつたわ。甘えちゃいけない。母の食費くらいは私が稼ごうつて思つたわ」「早かつたな。逝くのは孫をちよつとも看でからにしてほしかつたな」

よしの四十九日の法要が済んで少し落ち着きを取り戻したころ、しずは女の子を生んだ。二人は、この子に「ひな」と名付けた。

ひなが生まれる前から育児の支援をあてにしていた実母よしが他界してしまい、しずはすっかり気落ちして、勤めを辞めようと決心していた。先の事は分からない。定年まで社宅暮らしも有るかもしれないと思つた。

そこへよしの代わりだつても言うように、良い話が降つて湧いた。山野久志の実母「よね」が同居を申し出た。しず達は渡りに船だとはつとして、よねの同居を歓迎した。

久志の実母よねの嫁ぎ先は隣県で「竹輪」の製造、販売をしている自営業だつた。夫は早々他界したが、その家業を継いだ長男夫婦と三人の孫と不自由無い生活をしていた。跡継ぎの長男の代になつてから家業は少しずつ上向き始めた。「見通しが利く」として竹輪の穴を覗く広告写真がヒットした。竹輪が贈答品の地位を得た。加えて、何としても、よねと長男がそろつて、卜占の指示に従つたから家業が発展したと、

よねは確信していた。

しずさん、北東の方角はこつちでいいわよね。お義母さんこの住まいは社宅です。壁や、柱に穴をあけたり、釘を打ったりしてはいけない決まりになっています。知っているわよ。だから、かまぼこの板をご飯粒で貼っているじゃない。ご飯粒は剥がした後、濡れ雑巾で拭けば元通りよ。そのかまぼこ板に釘を打つのだから、鴨居や柱に釘の跡は残っちゃしませんよ。でも、その作業は呪いの祈りのように見えて気が滅入ります。そのうち藁人形でも編み出されるのではないかと憂鬱です。それから、玄関先に盛り塩をするのも気持ちが悪くて、客商売のお店なら意味があるのかもしれないけど。普通の家庭で盛り塩は無いと思いませんか。このあいだ思いあまつた様子で、お隣さんが言っていました。お宅はナメクジが出るのかつて。

南の島のユタのように。北の地方のイタコのように、この地方にも「みとしゃ」と呼ばれる原始宗教の痕跡を残す「宣託師」が居た。シャーマニズム、ほぼ、預言者、予言者、占い師、おおよそ易者のような類である。その導師は人々の、日々起こる生活の悩みを占いで当てて見せ、さらに、助言して明るい将来を指し示す。よねの心酔する「みとしゃ」は独り暮らしの老婆だった。どうやら「見通し屋」が訛ったようだと聞く。客の悩みに耳を傾け、場合によってはその人に「お告げ」として希望や夢を伝える、「メンタルカウンセラー」業務の一部を担っていた。この「みとしゃ」は悩める人々の

話を聞くだけでなく、助言だけでも終わらない。ある行動で幸運の道が開けると告げた。しかもその行動を強いた。後で分かったことだが、よねはその「みとしゃ」の一番弟子だった。「みとしゃ」の師匠はよねの桁外れの謝礼金に自分の持つ技の全てを伝授した。それでも、よねはまだ他人に助言するだけの自信はない。茶色に変色した薄い冊子や、分度儀のような透明なセルロイドの丸い板、簡易的な六分儀もどき、方位磁石、小さな金槌、布袋に入った一寸釘の束などを手元に置いた。よねは久志一家を占い技量習得のための「実技演習」に使おうとした節があった。

「お義母さん、その方角に、その時間に壁に釘を打ってどんな効能があるのですか」しずは鴨居に張り付けたかまぼこ板に背伸びをして釘を打っているよねに詰問した。よねは踵を床に落としてしずを振り向いて答えた。

「今日は金星が月に一番近づく日です。その時間にその方角に釘を打てば、あの大きな月が小さな金星の眩しさを貰って、輝き続けます。その力を私達も貰うことが出来ます。そうすることで、ひなちゃんの将来も、久志のこれからも、安定して輝き続けることが出来ます。金星はただ一つ他の惑星と逆方向に自転しています。そうして月の自転にブレーキをかけています。そのブレーキが月の自転の速回りを抑えて、正確に二十九日の周期を守ります。そこに向けて釘を打つと人はその安定力を貰うことが出来ます。安定した輝きです。人は天体の動きに支配されています。何もしないで、そのま

まで居ると天体の支配力が弱ってしまいます。天体の永遠の活力が貰えません。見る見るうちに、私達の生活は崩れて行きます。その時間に、その方位に釘を打つことで、宇宙の星の強い支配力が私たちに伝わります。私の話や釘打ちはでたらめじゃありません。ましてや、呪いの祈りなどではありません。前向きな祈りです。これは学問に裏打ちされています。統計学と天文学です。あなたには、私がただ一心に釘を打つだけの幼稚な仕事に見えるかもしれませんが、でも、あなたが嫌がっても、私は釘を打ちます」

よねは胸を張って言い切った。
不安な気持ち、占いの結果だとして自分に都合よく解釈して、安堵して、必要以上に自信を持ってしまい、それを他人に向けて表現する人達は、ずうずうしいほどに、厚かましいくらいに、堂々と横柄な態度をとるものだと思つて、しずは気が沈んだ。

よねは話の終わりに、そう、しずさんだつてこれで幸せになれますよと、取つて付けた。

月は惑星ではなく地球の衛星だったような気がする、月と金星の大きさを地上からの見かけで比べるのは科学的に正しいのだろうか。金星も月も自ら輝く恒星ではない。しずは中学校の理科の記憶を辿ろうとしたが、月は夜を彩る大道具だとか、頭に浮かばなかった。以来、しずはこのことについて、久志に苦情を言うことをやめた。久志は自宅の部屋の鴨居や柱にかまぼこ板を土台にして、釘の頭をこつちに向け

た、「逆さ剣山」が張り付いていることを承知していた。その経緯は、いぶん前から長兄に聞かされていた。自分もおかげで、若輩なのに早めに総務課長に昇進出来たのかもしれない、ひなの健やかな生育も母の釘打ちのおかげかも知れない、と思うこともあった。しかし久志はしずの前では、その一寸釘の逆さ剣山を、吐き捨てるように軽蔑した。馬鹿にした発言の締め言葉はいつも、それで母は気が晴れているらしいので、そのままにしておいてくれないかと、そつと懇願した。しずは寂しく頷いた。

同居から半年もすると、よねはその釘打ちをしずが強要する事も、説得することも、真理の解説もしなくなった。黙つて独りで釘を打っていた。数年すると家中が逆さ剣山で飾られないように、かまぼこ板を使い回していた。再利用の釘の頭を撫ぜるようになり、当初の力強い釘打ちは歳とともに優しく、おとなしい作業になっていった。

相前後して、ひなが小学生になるころ。よねは奇妙な発言をした。「しずさん、あなた、本当は久志のお婆さんでしょ。

まるで本妻さんのような顔しているのね」これがよねの異常発言の始まりだった。また、このころ、しずは発電所の受付から電力資料館の受付係へ移籍した。電力資料館は発電会社の子会社になって、会社組織の主流から外れた。資料館は五年計画で独立採算が取れるようになることを目標に掲げた。しかし、誰もが暗黙の了解をしていた。これから先資料館にお客さんがこぞつて来訪するはずがない。高名な易者でなく

でも、それは普通に予想できた。もつとも、発電会社にとつて、この資料館の経費など問題視するような経理規模ではなかった。むしろ赤字計上でグループ全社の節税に貢献すると、赤字の存在意義を唱える身勝手な愛社精神を持つ経営者もいた。

高山、溪谷の水力発電所はその雄大な借景が観光資源になる。観光用のダム放流をして、経済発展とともに、年経るとに、観光客で賑わっていった。しかし、下流の水力発電所はそうはいかなかった。当初、異様な規模の構造物に圧倒されるが、数年すれば飽きられてしまう。コンクリートは所詮コンクリートに過ぎなかった。里山の溜池と同じような貧弱な観光資源だった。五年後に電力資料館を訪れる人々は地元の小学生の校外学習団体ばかりになった。それでも森林浴や、ハイキング、デートコースとしての客を迎えた。それは、とても細々としたものだった。

尻すばみの職場の切なさから、しずは上司に電力資料館再生の提案をした。「電力資料館と、麓の民俗芸術館を一緒にして、学術的な研究機関にして、行政から補助金を頂くような手立てはありませんでしょうか。この地には神楽、田楽、農村歌舞伎などがあちこちに残っています。ダム竣工から始まった湖上祭りだつて、今は短い歴史しかありませんが、あと百年もすればきつと立派な民族芸能、無形文化財になるのではないのでしょうか。これらが町の活性化につながりませんか」親会社の広報課の上司は「検討しよう。だけどまれに学

者が来るくらいじゃいけないかな。学者は新規性のある論文は書いても、お金は落さないものね。神楽、田楽、歌舞伎の披露だつて一年に五カ所くらいだし開催日は延べ十日程度でしょ」と言つたきり、その提案は放置された。しずは大企業の経理余力に畏敬の念を持つしかなかった。

ひなが中学に上がるころ、よねは長男の家に帰ることになった。そのころよねに徘徊の兆しが見え始めた。目指す先行は竹輪屋に嫁ぐ前の実家だった。徘徊行動で山中に迷い込むのではないかと心配したが、幸運にもいつも近場で見つけてもらつた。山野久志家はよねとの十年余の同居生活を終えた。ひながよねの釘打ちをどう思っていたか、しずは密かに心配していたが、よねの在宅でひなに寂しい思いもさせず、共稼ぎが続けられたことにありがたかつたとも思っていた。

久志としずはかねてから検討していた「社宅脱出大作戦」を実行した。会社でも「社宅定年制」を打ち出したくらいだから、ちよūdい頃合だった。ダム湖と麓の村の途中の山林造成分譲建売は電力会社社員と、別荘目的の都会人を対象に開発された。久志夫婦は久志の長兄の勧めがあつて、購入の頭金に母の生前贈与を充当した。これも母の釘打ちのせいだと久志は思った。生活を共にして来た社宅の残留組は久志夫婦の恵まれた財源を羨んだ。「お義母さんの老後の何もかも、全部受け入れて、十年以上も面倒見たんだからさ、あるものなら頂いて当たり前よね」と社宅仲間のボス主婦が言っ

た。しずは義母を乳母代わりにしていた申し訳なさや、老耄の兆しに対し満足なお世話ができなかつた恥ずかしさや、持ち家への感謝もあつて、後ろめたい心境だつた。良く晴れ上がった日、見送つてくれる社宅の人達に伏し目がちに別れを告げた。

しずが電力資料館に転動した当時提案した民俗芸術館との合弁案は放置されていたが、しずが新居から資料館にバイクで通勤するようになったころ、一つ上流のダムから技術者上がりの男性社員が資料館の「学芸員」の立場で転動してきた。しずより二つ三つ年上の井川暢明は四十に近い三十男だつた。度の強い黒縁の眼鏡をかけて、長身で知的な雰囲気を醸し出すひとり者だつた。前職は設備の改修ごとに、発電効率を試験する役目だつた。

井川は転動してきて三カ月も経つたころ、客のいない資料館の窓際の受付カウンターで、山野しずに話しかけた。

「聞きましたよ。山野さんの提案。民俗芸術館と電力資料館を一緒にする話。いくら発電所の前庭でも、こんな山奥に最先端の科学技術の資料館が一つじゃ、奇妙な雰囲気です。民族芸術と科学技術を融合させるアイデアはなかなかの提案じゃありませんか。科学と山村芸術のコラボレーションです」

「それでは井川さんはアートとサイエンスを融合させる新生資料館のために、転動されて来たのですか」

「一割はその目的を持って来ました。先ず融合の可能を見極めることです。これから一人で調査していきます。残り九割

は左遷です」

「まあ、この職場は左遷の受け皿なのです。私は左遷され続けてきたのですわね」

「ごめん、失礼。山野さんはこの職場は長いし、大胆な提案をしたりするから、とても良い職場ですよ」

「暇すぎるようにお見えになるでしょう。でも、私は充実した日々を過ごしています。いつもは、一日に二組か三組おいでになるお客様をご案内して、その方々の喫茶や軽食に対応します。説明係の技術員のおじさんと遅い昼食をとつて、一日の仕事はだいたい終つてしまいます。夕方戸締りをして、電灯のスイッチを切つてから、ガラス越しにダム湖を眺めます。一日一日、湖の表情が違つて見えます。季節によつて眺めが違つて来るのはお分かりいただけだと思います。冬は星が降り始めます。夏は油蟬が鳴き止むと、上手になつた鶯が正調で唄います。天候によつての違いは当たり前です。でも、昨日と今日、同じ静かな雨の降る日でも、ダム湖の湖面も、そこに踏ん張つて空を支える山の足元の表情も違つて見えます」

「それはあなたの心の中に浮かぶ情景が、日毎に違うからではないでしょうか。ある日は湖底に沈んだ村落の生活を思い返すでしょう。ある時は厳しい土木工事と、そのご家族の生活を想い出すかもしれません。上流から流れて来る湖面に浮かぶ生活用品を見ることもあるでしょう。きっとその時は流れ寄るヤシの実を口ずさんでいるかも知れません。豪雨によ

る緊急放流を知って、下流の人々の不安な気持ちを想像するでしょう。その一つ一つのあなたの心の眺めがダム湖の景色を無限に設定させるのだと思います」

「そのような高尚な話ではありませんけど、私の稚拙な妄想が、外の景色を様々に見せてくれることは確かです。大変失礼ですが、井川さんはどんな失敗をなさってこの地に転勤されたのですか」

「直球ですね。まあ、いいじゃないですか、失敗は私の心根にあったと思います。私はこの麓の地域の無形文化財にとっても興味があります。私の前任地はここから五十キロ上流の地でした。そこには炭焼き、練り鉢や椀の木地師、罨を使った狩猟などの日常生活があつたようです。もう百年も二百年も前の話で、今、彼等は住んでいません。もしその森林が針葉樹林として整備されていたら、林業が成り立っていたかも知れません。そこは広葉樹の雑木森林でした。どの生業も孤独な生活です。林業や農業、漁業のように、人々が助け合う集団行動は必要なかったのだと思います。一人でも、最大でも家族単位で生活が成り立ちます。ただ生きるための食生活だけだつたような気がします。だから、小さな村落も構成しなかつたのでしょう。民族芸能、芸術も生まれませんでした。彼らは生涯唄うことも、踊ることも無かつたと思います。どうしてこのような山中に孤独で寂しい生活を始めたのか分かりません。一説には平家の落人と言う話もあります。あるいは、村落からの『離れ物』だつたと言う説もあります。今、

私達は日々街の生活にあつて、つかの間この自然の景観を眺めてほつとします。ストレス解消の一服です。私達に三百六十五日、森林を這いずりまわる生活ができるでしょうか。このダムの麓のように村を挙げてお祭りを催す楽しみなど彼らには有り得なかつたと思います」

「だから、井川さんのいらした上流のダムは水没する村落もなく、とてもスムーズな運びのダム建設だつたと聞いています」

「はい、ダムの建設は工事以外とても円滑に進みました。その森林生活者はとくに途絶えていましたから。どのような経緯でその地に来たのか。いつ頃その山の生活は終わったのか、その理由は何だつたのか、少し調べましたが力及ばずで、まだ分かりません。これから先も続けて調べようと思っています。加えて、狩猟生活や木地師などの森林生活者と田楽との繋がりについても仮説を立て、証明していこうと思っています」

井川暢明は独身の特権で、休日は山麓の民族文化、芸能の聞き取り調査を広げていった。

「山野さん、来月十一月の三十日、土曜ですが、北の方角に一山越えた村の「湯立祭り」に行きませんか。田楽です。と言つても、味噌おでんは食べられません」

「そのお神楽は毎年、開催予定日が村外に公表されないと聞いています」

「よく知っていますね。その日ご都合はいかがですか」

「深夜でしよ」

「はい、夕方から明け方まで夜通しです」

「承知しました。現地でお会いしましょう」

積雪の地より、氷結する空気の方が身を切る寒さを感じる。月白を主題にして、闇の背景に星々が点在していた。

「山野さん、よくおいでになりました。しかも、バイクで、凍った道で滑ったらどうするのですか。私の車に同乗してくれたらよかったのに。お誘いの返事は、現地集合、自力で伺いますと言われましたが、てっきりおいでにならないと思っていました」

「楽しそうなお誘いを無下にするわけはありませんわ。何と言っても民俗芸術館との協働を提案した私ですから」

「ご家族には何て言って出て来たのですか」

「それは私の責任範囲ですわ。井川さんにお話しする事ではありません。ここに私が今居ることをお認めくださるだけで十分です」

「わかりました。でも、心配なことです」

「当然ですけど、帰日もバイクですわよ。どうぞご心配なさらないで。若いころモトクロスの真似事をしていたことししましよ」

「今、演目が五つ終わりました。これからクライマックス、鬼の舞いです。一番味わい深いところにおいでになりました」

使い古した鬼の面と装束は、関取のような緩慢な所作で煮

え滾る釜を周回し始めた。左手に張り子の金棒を構え、右手に榊の枝を持つ。榊を釜の湯に浸け、取り出しては衆人に向かつて湯の雫を浴びせ散らす。浴びる人々は、今年一年の不浄が清められ、これから先一年の健康が保証された気になる。祠の中では誰彼構わず、薄い酒が振る舞われている。

「神楽はもともと、貴人達の宣託行事でした。釜の周りで祈り舞うのは、音曲にあわせた巫女達でした。巫女の中の一人、特殊能力を持つ斎の巫女（いつきのみこ）が釜の湯の泡立ち具合を観て、神のお告げを聞き取って、芝居がかって、為政者に今後の指針を授けていたと言われていました。その貴人の行事を庶民が真似るようになって、神楽が田楽になったようです。また、貴人の厳肅な神事は、濃厚な娯楽に発展しました。『白拍子』と呼ばれる美貌集団は歌舞音曲で酒宴を盛り上げ、そのうち側室に登り詰める巫女も居ました。全国を巡業して興行に発展した巫女集団も居たようです。特に歌舞音曲に優れた才能を持つ南の国の人達が招かれたと言う説があります」

しずの父もダム建設のために、南の国からこの地に招聘されてきた。田楽と自分が南の国で繋がっていたと、しずは因縁を感じた。

「庶民の田楽は豊作のお告げを聞き、身を清め、健康であるように祈る神事だけで、貴人達のように娯楽への発展は無かったのですか」

「娯楽どころか田楽神事は厳しいものでした。貴人の宣託行

事では釜の周りを巫女が踊りました。でも、田楽では鬼が釜を廻ります。昨今は毎年鬼の舞いが演じられていますが、随分昔は鬼が舞う年もあれば、不在の年もありました。私は仮説を立てました。鬼の舞いは村人達が行う私刑だったとした「

「えっ、集団リンチですか」

「はい、その年、村の決まりを破った人を鬼に指名します。村の寄り合いの『宿老会議』で一ヶ月の間話し合い、鬼に相当する人を決めます。例えば、田圃の水路を切って自分に有利な水利をした人、稲の苗や、稲架の刈穂をこっそり盗んだ人、田圃の畔を故意に動かした人。そう、不義密通に及んだ人も鬼になったという説です」

「まあ、不義密通もですか、その年は赤鬼と青鬼がそろって舞いに出演しますね」

「そして鬼は舞いに晒されながら、そのまま村から山中に追放されます。これはあくまで、私の立てた仮説です」

井川の鬼の話には正義の凄みがあった。

「新説なら今から民俗芸術学会に論文を寄稿されるとよろしいのじゃないですか。でも、大昔の話とは言え、今に続く子孫の方々の人権問題が問われるかもしれませんわね。もし鬼の末裔がいらしたとすれば」

「そうなんです。その配慮はとても大切です。いくら民俗芸術の論文でも子孫の方々を傷つける刃物になってはまずいです。昔、家電メーカーが新商品に著名な白拍子の名前を付け

て売り出して、問題になったと聞きます」

湯立ち祭りの鬼の舞いは榊の枝で湯を撒き終えると、釜の周りを逡巡する所作に変わった。明らかに悔やんでいた。「俺はどちらにしてもこの村から出て行かなければならない。山に入って餓死、凍死するか、運よく、山の恵にありつけて生き永らえるか。田んぼの畔を少しばかり動かしたところで、粃米が一升増えるわけでもなかった。俺の体に鬼が取り付いた」後悔と不安の所作に見えた。

「最後の演舞は『花の舞』です。分野によっては『花』は桜の花を指しますが、田楽ではお米の花です。米の開花結実を祈ります」

湯立ち祭りは花の舞で静かに収まっていった。竈の下の太い薪が白く燻り煙は星の寒空に真つすぐ立ち登った。

「さて、お疲れさまでした。余韻を楽しみながら解散しましょうか」

井川としずの二人は地元の人達に追い抜かれながら、ゆっくり駐車広場に向かた。

「私は資料館の学芸員として、生活の役に立ちもしない民族芸術の研究職人になろうと思えます。生涯職の「宿老」を目指します。「人間の探究心を深く受け入れてくれる、科学技術の分野は人々の生活にとっても役立ちます。しかし、私はその緻密な攻めに飽きてしまいました。百分の三パーセントの発電効率向上の追求に意義を持ってなくなりました。これが私の左遷の理由です。百万円預けて、三百円の利息を貰

うのは徒勞な気がしてしまうのです。もちろん、そのわずかな値の積み上げが日々の生活に重要だと承知しています。私は地道な歩みに挑戦できない体質なのかもしれません。歌い踊るハレの日ばかりを追う習性があるようです。上司は気の毒だと思ったのでしよう。私を学芸員の身分で転勤させてくれました。職種変更は左遷です」

「はい、今日はお誘いありがとうございました。私達南の国の人達の歴史をひも解く良い切掛けになりました。村から追放された鬼のその後も想像してみたいと思います。月曜日また職場でお会いいたしましょう」

しずは立ち止まって井川に頭を下げて礼を言った。鳥居を潜り角が丸くなった不規則な間隔の石段を危なっかしげに降りた。暗い照明の駐車場に取り残された井川の車と、しずのバイクに透けた氷の膜が張り付いていた。

「待ってください、山野さんのモトクロス腕は確かでしょうが、この凍てつく山道は滑って転んでしまいます。そのバイクは私のワゴン車にいても簡単に積めます。御願いですから、私の車に同乗してください。お宅までお送りします」
「強情を張っては、ご心配をおかけするだけですわね。それでは甘えませす」

しずの返答は弾んでいた。不本意でも、理不尽でもなさそうだった。車内は眠気を覚ますように、一人、井川が饒舌になつていった。すこぶるおしゃべりで、レクチャー好きな人だと確信して、しずは可笑しくなつた。

「今日は、月が輝き過ぎて、星の数が減ってしまいました。

天文学は博物学の時代から発展し続けて、日蝕や、月蝕、彗星接近の予測など、お茶の子さいさいです。星占いのためではありません。真理の探究によるものだと思います。天体運動に比べて、気象現象は共通する『方程式』が少ないので、予報はなかなか困難です。台風の子報は膨大な過去の気象データから大型コンピュータに推測させます。台風を中心気圧は実測していません。なのに、九八〇ミリバルだと言います。風速も実測していません。でも、その台風は四十五メートル毎秒の強風を引つ提げてやって来ると放送しています。かつては軍の国の飛行機が台風の目に近づいて実測していません。時化する海の船上でも実測しました。その過去の雲量、雲形と、現在、山頂に構える気象レーダーの雲影情報を照合して、気圧や風速を実測値のように言つて予報します。過去の命がけの生データがあつて、今は実測の無い台風の気象計測がされています。最近打ち上げられた気象衛星が本格運用になれば、台風予報はもつと的確になると思います。台風以外の日々の天気予報では網の目に張つた、各地の、風力、風速、気温、湿度、雲量、雨量などを実測しています。上空もしかりです」

「まあ、外に洗濯物を干して出かけて良いものかの判断にそのような大掛かりなことをしているのですか」

「気象情報は災害対策や経済活動、軍事的戦略のための情報です。洗濯物や傘を持ち歩くための予報はおまけです。国に

よって地図や、気象情報は国の極秘です」

「すみません。わたし、とても浅はかでしたわ。今はもう雨乞いのお祈りは無用ですわね。ダムも溜池も灌漑用水も、すっかり整備されましたから、気まぐれな大雨でも、日照りでも水は必要な時いつでも栽培や、電力供給に使えますわ。毎日の生活でもう、神様に祈ることは無くなってしまったのでしょうか」

「そんなことは無いでしょう。あなたのお好きなクラシック音楽は、もともと教会音楽でしょ。あなたが敬虔な宗徒だとは思いませんが、時に大枚を叩いて遠くまでクラシックのコンサートに出かけると聞きます。楽曲に合わせて何をお祈りしているのでしょうか」

「いいえ、お祈りをしているわけではありません。コンサートのある荘厳な空気に触れると、二の腕に鳥肌が立ちます。胸が詰まります。涙が滲むこともあります。全身が快感に包まれます。祈りでは有りません」

「そうですね、祈りではなかったのですか。そうすると、クラシック曲は教会音楽から一抜けたですね。図書館の分類で言うと、宗教哲学類から芸術文学類に移籍したのでしょうか。教会音楽だけが祈りではないと思います。艶歌だって、軍歌だって、校歌だって、聴いていても、歌っても祈りそのものではないでしょうか。絵画を見て震える方も、小説に涙する人も、映画演劇を鑑賞して感激する人も居ます。芸術作品に触れて深い快感を持つのは『悟り』だと言う人もいます。私は

悟りではなく、ただ右脳の血の巡りが人一倍良い人達だと思っ
ています。悟りって、真理に行き着くことでしょ。豊かな
感性を持つていると、簡単に真理に辿り着けるのかな。真理
に到達すると、全身に快感が走るのかな。だいたい真理って
何でしょうね。私は日々の生活そのものが真理に基づいてい
る様な気がします。のっぴきならない嘘だって、想像や仮説
の中にだって、真理が有るような気がします。真理って一つ
じゃないでしょ。仏教が説く悟りは一つだけの様な気もしま
す。だから『快感』と『悟り』と『真理』はそれぞれ別もの
で考えてみませんか。快感は肉体界。悟りは精神界。真理は
両界ともに共通したものと整理したらいかがでしょう」

「井川さんは『分類』がお好きですわね。私は快感って、言
葉を失う時じゃないかって考えてみようかしら。歓びの感激
だったり、胸を突く驚きだったり。深い哀しみだったり。ど
れもこれも震えるような快感だと思います。悟りとは少し違
うかもしれませんわね」

「それでは、『祈り』はどうやってケリを付けましょう」

「私は悟りとはほど遠い生活をしていますけど、祈ることは
しますわ。風邪をひいて熱が出たときは、早く治って欲しい
って祈ります。誰に祈ると言うわけでもありません。もしか
して、熱が出たのは昨夜、邪見にした主人の罰が当たったの
かもしれないと後悔します」

「後悔、懺悔の類は立派な祈りだと思います。現に田楽の鬼
だって自分の悪行を悔やんで、逡巡の所作を表現していまし

た。後悔して許しを乞うのは懺悔の祈りでしょ」

「祈りには、叶いを願う将来への希望と、過去の過ちを許して欲しいと訴える、この二種類があるのかしら。前向きと、後ろ向きの祈りが混じって、私達の心が保たれているのかも知れませぬわ」

「決まりです。祈りは『虚構界』とします。少し話が飛びますが、祈りの例題です。前任地に一人だけ宿老がいらっしやいました。機械が不調な時、私たちは祈る気持ちで宿老の作業をじつと、立ったまま見えています。五〇センチくらいのピカピカ光る金属棒の両端にパチンコ玉くらいの球がついています。この音聴棒の片方を回転体の軸受けに当てます。反対側の球は自分の耳の穴に当てます。しゃがみ込んだ宿老はしばらく棒を伝わって来る回転音を聞いています。目はじつと瞑っています。私達はまさに、宿老に祈りを捧げています。この機械の不調の原因を言い当てて欲しいのです。やがて、おもむろに立ち上がった宿老は『お告げ』を口にします。『九時の方向のベアリングが割れている。定期修理日待つことなく、予備機に切り替えて、今すぐベアリングを交換しなさい』と。また、水車の羽根の米粒ほどの凹みも回転音の変調から探り当ててしまいます」

「すごいお方ですね。よほど、お耳の優れた方なのですね。皆さんはその方に祈りを捧げ、お告げを待たれていたのですね」

「はい、そして、その宿老は機械の前で祈っていた青年達に

向かって、さらに続けます。『いいか、青年、娘を好きになったら、まずその娘の家の墓に行け、墓石には幾筋か享年が彫ってある。八十八だとか九十とか、まあ八十以上だな。墓石にそんな数字が並んでいたら、一次試験は合格だ。次にその娘の家を訪ねろ。その家に書棚があつて、小説が並んでいたら二次試験も合格だ。本は図書館の借りものじゃだめだ。本を一家の財産だと思つていかどうかだ。次は二人で遠足だ。弁当を作つてもらえ。母親の作でも、本人作でも構わない。その弁当が旨かつたら三次試験が合格になる。そこから、所帯を持つことを考えろ。美人だ、不細工だと観てくれて結婚するな。好きになつたらすぐに結婚だと妄想する了見もつたら。長生きの家系は丈夫な遺伝子を持つている。本箱はその一家の教養の深さだ。小説を沢山読むと、人生はそう簡単なものじゃないと知る。これから先の困難を乗り切る知恵がついている。旨い食生活は豊かな器量を育てる。味覚が貧弱だと、心根も粗末になる。いいか。青年。解つたか、即刻ベアリングを交換せよ』宿老の青年達への祈りのメッセージだと思ひます。おかげさまで、私も未だに三次試験の合格に至っていません」

「その方は耳も目も口もとっても達者でいらっしやるから、ずいぶんお幸せなご家族をお持ちでしょ。うらやましいですわ。お孫さんも入れて、何人いらっしやるのでしょうか」

「それが笑っちゃいます。その宿老もまだ独身です。他人の墓参りは随分なさつたようですが、やはり三次試験が鬼門の

ようです。もう六十になるでしょうか」

「そうしますと、お祈りしても結婚は成り立たないのですね。現実的な条件を挙げて、それを満たす人を探せとおっしゃるのですね。ずいぶん一方的ですわ。愛情は探し出すもので、決して捧げるものではないと言ふことになりますわね」

「やたらに捧げられては世の中が乱れます。手順一は愛情を降り注いでも良い人を探し当てます。手順二でその人に愛情を受け取ってもらいます。そんな段取りです。祈りだけで結婚できるなら、私だってもうとつくに家庭持ちです。そう、『祈り』はやはり虚構界に分類して良い気がします」

幸せな結婚をしていながら、やむなく、病氣や事故で若死にされる方もいらつしやると思います。短命の遺伝子を持つ人は最初から結婚できないと言われてしまうと、なんだか差別にも聞こえますわ」

「差別ではありません。選別です。生物は競って強者の遺伝子を伝えようとします。それが『種の保存』です。高度な知能を持つヒトはおおむね価値観が合う男女で所帯を持つと、難儀は少なくなると思います。もともと、かなり価値観の違う夫婦も面白いかも知れません。二つの歯車は噛み合うことなく、お互いの回転を眺めているだけで良いのですから。実際に、工業分野では楕円形の歯車を二つ噛み合わせることがあります。オーバルギアと言います。重油など粘っこい液体を押し出す加圧ポンプや、流体の流量を計ります。この楕円形の歯車同士はある一点で噛み合わせると噛み合い続け、互

いの回転を伝導できます。でも決められたこの一点が外れると全く噛み合いません。当然回転は伝わりません。夫婦の『協同作業』は最初の噛み合う一点が合って回り始めますが、その点が何かのきっかけで外れてしまうと、つまり二人の間に価値観の違いが出てきてしまうと、歯車の噛み合いは外れてしまいます。長い時間をならして見ると、最初は力強く回って、その後、惰性で回って、ついに止まったりする生活もあるのでしょうか。黙って待っていると、また自然に、もしかしたら、知恵を以って故意に噛み合わせて、互いに伝導し合うようになるのかな。夫婦は楕円形の歯車のようなものでしょうか。すいません、また笑われてしまいます。未婚の私が夫婦の有り様を語ったところで説得力は在りませんでした」

「不思議な歯車があるものですね」

技術者らしく演繹的な思考手順で話す井川に、しずは少し寂しさを感じた。民族芸術を調査研究する彼はそこに出てくる歌舞音曲に身震いすることは無く、いつも冷静に歴史の連続性を探りあてて満足していく、終始客観的な研究者なのだろうか。しずの頭は井川の人柄を不規則に反芻した。

井川は自分の饒舌に疲れたのか、次第にトーンダウンしていった。

「この辺りは春になると、夜行性の獣達が雑木林の中から光る目でこちらを睨みます。山道に飛び込んできて、車に跳ねられることもあります。車のヘッドライトが獣の仲間に見えるのでしょうか。テン、オコジョ、イタチ、ハクビシン、彼

らを光る目だけで区別できません。今の時期、彼らは穴籠りです。だから光る目や交通事故の騒がしさはありません。

「その動物たちは冬眠しないのでしょうか」

「活動は随分低下するようですが、冬眠はしないようです」

しばらくの間、車内の空気は沈黙した。

「そうだわ、井川さん、私こう決めました。日常生活の『宿老』になろうと思います。ケの日々をこなす生活職人です。

ある時は活動的に、ある時は休眠して、その日その日を誠実に追い過ぎて、稀に来るハレの日も期待して、そうして歳を重ねて行きたいと思います。誰もがなさっていることです、その中でも『宿老』を目指したいと思います」

ワゴン車の荷台にゴムのロープできつく括り付けたバイクと、大きな車体の揺れは小気味よく同期した。あちこち舗装の欠けた狭い山道を鷹揚に捌く井川の運転に安堵したしずは睡魔に身をゆだねた。その眠りかけた頭の中を、神楽は解放された南の国の海の芸能、田楽は閉ざされた山村の密やかな文化、二つの対比がまだらに行き交わした。

月は沈み、東雲に逆転するあけ星が輝いた。

以上
(中区)

「入選」

遺品

高橋

祖父は、アマチュアの詩人であり小説家であった。らしい。らしい。らしい。祖父が頓着しない性質だったのか、作品をほとんど手元に残しておらず、書いたそれを見る機会がとうとうなかったからだ。

本人も、あまり自分の話をしてはくれなかった。

あとから母や祖母に聞いたところによれば、仲間と雑誌を手で刷って配布したり、会社の文学会報に寄稿したり、市民文芸に応募したりしていた、らしい。彼女らもよくは知らなかった。ただ、文学賞の楯を持って嬉しそうに笑う若き日の祖父の白黒写真がたった一葉、アルバムに挟まっていた。楯も賞状も、作品同様ひとつも残ってはいないが。

あまり話してくれなかったことに何か理由はあったのだろうか。分からない。もしかしたら、単に照れていただけかもしれない。

私が中学生になって小説のようなものを書き出して、家族が「じいちゃんの遺伝だ」と褒めそやしたときも、祖父自身はなにも言わなかった。黙って下を向いて足の爪を切っていた。でもその顔は仄かにやけていたから、案外嬉しかったのだろうと思う。やはり照れていたのか。

自分から話してくれることはなかったが、書いた小説を持って行けば必ず喜んで読んでくれた。高校の文芸部の部誌もわざわざ来て買ってくれた。感想は、たいてい顔をほころばせるばかりでなにも言わない。彼の目からすれば取るに足らない作品ばかりだっただろう。唯一、部誌に載っていた友人の詩を褒めたことがある。それも短い言葉だった。でも、褒めるときは褒めるのであり、作品に対しては真摯だった。たとえ可愛い孫の作品だろうと、世辞は言わない人だったのだ。

だから、祖父の作品を読んだことはないし、その活動も受賞歴も詳しく知らない。けれど、物書きの先輩として私は祖父を敬愛していたのだと思う。

ところが祖父は早くに認知症になってしまった。祖父を一人にできないからと二人での留守番を頼まれることが必然増えた。

喜ぶような事態ではない。だが、二人つきりで話せるというのはいさよと嬉しかった。そんなときに小説の話を持ち出すと、祖父はにやにやと喜んだ。今書いている小説の話、公

募の話、書きたいと思っている話、書きながら悩んでいること。些細なことでも、祖父はふんふんとよく聞いてくれた。そして、本当にとどき、小説を書く心構え、酷評を受けて悔しかった記憶、そんな自分の経験を話してくれた。自分のペンネームの秘密をこっそり教えてくれたこともある。母でさえ知らなかった秘密だ。

私は、自分も小説を書いているかぎり、祖父と同じ物書き仲間なのだと思っていられる。

祖父の認知症は進行し、祖父は字や文が書けなくなった。とはいえ、当時はその変化にあまり気づいていなかった。あとから見つけた手帳で私たち家族は知った。細かくびっしりと書き込まれていた随筆が、徐々に文字が崩れ、読めなくなり、少なくなっていた。それでもなにかが書き続けられていて、とにかく書くのが好きな人だったのは確かだ。

文机からは、封も開けられていない原稿用紙がそれはもう大量に出てきた。ちゃんとした原稿用紙じゃない、百均とかホームセンターで売っているチープなやつだ。たぶん買い置きが家にあることを忘れて、それに自分もはや書けなくなっていることも分らず、出かける度に買い求めていたのだろう。重なって山をなすほどだった。

書いたものも、書いているところも見たいことはないけれど、祖父は死ぬまで作家だった。

すっかり認知症に侵され、祖父はショートステイでそのほとんどもを過ごすようになった。晩年に差しかかったころだったと思う。私は祖父に会いに施設へ行った。調子の悪いときは孫も分からない祖父だったが、その日は比較的よかった。本当に分かっていたかどうかは定かではないものの、にこやかに迎えてくれた。

その日はとっておきの話題があった。私は市民文芸に応募したのだ。市民文芸は祖父がかつてなんども応募していた文芸賞で、悔しい思いをしたり受賞したりした思い入れのある賞のはずだ。この話に祖父は絶対食い付いてくる。あわよくば、という思いも無かったではない。運よく入選して文芸誌に掲載されでもすれば、それを見せることができる。祖父は喜ぶに違いなかった。それが無理で落ちるとしても、それすら二人の笑い話になるだろう。

会ったのはごちんまりとした談話室で、祖父はほかの利用者さんたちと一緒に座つてのんびり過ごしているところだった。ほかの人に聞かれるのは気恥ずかしかったが、小さい声では祖父が聞き取れない。得意げな顔を作つて「市民文芸に小説を送つてやった」と伝えた。案の定、祖父はにやにやと笑つて「そうか、そうか」と頷いた。その顔は昔とにも変わっていないかった。

プリントしてきた原稿を渡すと、読ませてもらうと嬉しうに受け取つた。祖父の様子を見て取つたスタッフさんが「お

孫さん、すごいねえ」なんて更に煽つたものだから、祖父の喜びようと言うか照れようはすごかった。

あんまり祖父が喜ぶものだから、私は少し調子に乗つた。にんまり笑いながら祖父の耳元に口を寄せ、まあでも特に声を潜めるでもなく言つた。

「文芸賞、取れるかねえ?」

祖父の返事は呵々大笑だった。ほかの利用者さんがびくびくして振り向くような大きな笑い声だった。私が賞を取るつてそんなに可笑しいか? 私は啞然として祖父を見つめた。でも、祖父は笑いながら、確かにこう言つた。

「取れるよ」

笑いすぎてでた涙を拭きながら、更に続けた。

「続けていけば、いつか」

取れるよ。続けていけば、いつか。まったくその通りだ。かつての祖父はそうしていたに違いない。祖父にはかなわない。それからもしばらく祖父の笑いはおさまらなかつた。祖父がそんなに爆笑しているのを見たのは、それが最後になった。

それから市民文芸の結果が出るより早く祖父は亡くなつた。どちらにしろ文芸賞にはかすりもしなかつたから、結果うんぬんはどうでもいいことだった。

祖父の残したたくさん原稿用紙は、私がそっくりもらい受けることにした。あと、一本のペンももらった。しかし、原稿用紙はその後とうとう使うことはなく、棚に差したまま

になつてしまった。祖父がいなくなつて、小説の話をする人がいなくなつて、共に喜んでくれる人がなくなつて、もはや書く意味も応募する意義も消失したからだ。

私はそもそも物書きではなかつた。だから小説を書くことなどもうないだろうし、まして公募に出すことなど二度とない。

今年はずいぶん祖父が亡くなつて十年である。原稿用紙は黄ばむに任せているけれど、ただ折に触れて想い出す祖父の言葉だけは未だ褪せる様子もない。

取れるよ。続けていけば、いつか。

続けられなかつた身には過ぎた贈り物に思えてならない。

だから。もし君がなにか文学賞とかプロ作家とか、そんなものを目指している物書きであるならば。この祖父の言葉を代わりに受け取ってはくれないだろうか。私が持っていてもう意味のないものだから。

取れるよ。続けていけば、いつか。

(東区)

竹腰幸夫

本年の応募作は11編。そのすべてが現代もの。時代作品は全く影を潜めた。家康ゆかりの当地、かつては豊かな力量の書き手が歴史事象に取り組み、みごとに成果をみせていたこと、そしてそのことが地方文芸誌の特徴だと感じ入ってきたことを考えると若干の寂しさを禁じ得ない。

だが、小説の目指す世界のひとつが、不条理のこの世に生きる人間の真実の追及・描写にあるとするとならば、現代という時代の諸相にその材を求めて試みるのはもちろん有効だしそのほうが説得力もあるというものだ。

今回の応募作を拝読しながら、つくづく私たちは、人間というものをよくわかつてはいなかったのだなあと思わされた。その不可思議な人間の闇と光をどうにかしてとらえようとすると試み・努力がよく窺えた。

人間の諸相を「四苦八苦」する存在と見たのはブツダだが、その四苦……生・老・病・死の苦しみに向き合う真摯な姿勢と工夫が、本年応募作、優秀作品の特徴だったということができそうである。それらの意欲作を見てみたい。

『あなたのすべては美しく』 死を目前にした老母に向き合う一人息子。老人ホームの施設長からその死が間近かなことを知らされるのを「朗報」「心が軽くなつた」と感じる息子。しかし、その母から懺悔のような一言を聞く。いまさら何を、と思いつつ、これまでの母の言動、母から受けた仕打ちなどを思い返す。やがて母の遺体を受け取りに行く。しめやか懇懇なホームの人々に見送られ、しかし彼は解放された「心地よ」さを感じている。だが、彼の車に積まれた遺骸と二人のドライブが始まると、濃密な母との関係、回想が展開される。

小学生の頃、彼は釣つてきたフナが偶然、骨格標本のように皮だけになることを発見する。実はカツオブシ虫によるのだが、それを自由研究として学校に提出。好評価を得る。その時彼は「まだ十歳にも達していない」のに「初めて、生命というものを意識したのだった。標本を見た母も「きれい」だと言う。現在の母の軽い肉体を眺めながらあのフナのように「死体は単なる物」だと思ふ彼……。回想のなかに巧みな比喩的・象徴的描写を織り交ぜながら、「いのちというしがらみ」を問うた秀作。

『猫に草』 渋谷のライブハウスを中心に活動するバンドのメンバーに恋する主人公。地方のライブ公演の追っかけをするうちに、二人は恋人同士で頻繁に連絡を取り合う中だと思ふ込む。しかし、公演後のデートはいつも拒絶され、取り残され、傷つく。

彼女は印刷会社勤務。月刊誌の表紙デザインを担当している。しかし周囲の人間関係は良好とは言えずいつも孤立している。思い違いや考え方の違いが排他を招くのだ。彼女の支えはある。しかしそれは妄想の中……。統合失調症候圈にあるかと思われる若い女性の心のあり様を、真正面からしかも多様に描いていて引き込まれた。人間、誰にも必ず内包される闇の世界を垣間見せてくれる。

『結合』 脳障害のために口を利くのが不自由な独身四十歳の男の物語。アルバイトで世を送っている。彼の日々を通して、善意というもの、忖度というものにどのくらい差があるのか。皮肉に冷静にしかもユーモラスに描く。

『A』人はどうやって自己を自覚するのか。人とその名前の関係はどうか。言葉と自己の不可思議な自覚の問題を、母胎に成長し始めた生命に尋ねようとする意欲作。

小説選評

柳本宗春

今年は応募作品が少なくなりました。ただ、「書いておきたい」という作者の意志は例年以上に強く感じられました。その気持ちだけでなく、伝えるべき内容をしっかりと伝えるためには、人物が物語の中で生きていくことを読者に実感してもらうのが大切だと思います。そこで重要なポイントの一つは会話でしょう。情景の描写だけでなく、それぞれの人物がどのように話すのか、よく考えてみてください。多くの作品で、会話が変れば、さらに良い作品になったという感想を持ちました。

それでは、各作品について一言ずつ述べておきます。

「A」

主観、主体性のありかについて考えさせられる作品。前半の描写のあり方、視点の不確かさによる効果、それらと読み手に対する心遣いのバランスが難しかったと思われる。

「せめてひととき」

着想が良く、読後の余韻もある。物語の始まりにもう少し余裕を持たせ、中盤のエピソードを刈り込むとっとと焦点がはっきりしてきたのではないか。

「夜の散歩 (1)」

前作に比して深いテーマ性を直接的に感じる。ただ、前作を読んでもいない人にも十分な理解ができる構成と、テーマに即した題名は必要だと思う。

「宿老」

興味深い内容。ダムの町を中心に、主人公を巡る様々な出来事が「宿老」というキーワードでつながっていく。やや消化不良

良の感があるので、エピソードを絞ることも必要だろう。

「遺品」

短い心に沁みる。エッセイと小説の融合を狙った表現なのか、純粹に小説として読むには気になるところもあるが、それだけでは終わらない佳作である。

「いとこの思い出」

人生のいろいろな局面をいとこの思い出で綴る作品。書くことによって昇華させたいという思いの強さは伝わる。

「あなたのすべては美しく」

平凡な日常を送る者からは考えられない内容だが、真実味を帯びた描写にすっかり取り込まれてしまう。作者の並々でない力量を感じた。

「結合」

連作として作風は確立してきたと思うが、言葉の使い方にやや違和感を覚えるところがある。例えば第三者の視点で書くなど、手法を変えると別の面白みが出てくるのではないか。

「猫に草」

主人公自身に分からないことが多く、状況の説明も不足している。物語の世界に引き込む仕掛けがほしい。

「ドリアンの旅」

冒頭は魅力的な小説として出発するのだが、紀行文と旅行メモの部分が多くなっていく。光るエピソードを生かしたい。

「ある旧友との出会い」

旧友の語るエピソードと自分の人生に対する思い、そして意外な結末。良い素材を生かすために、組み合わせ方を工夫し、丁寧に描いていく構成にすることが必要だろう。

児童文学

〔市民文芸賞〕

虹色のプール

河島 憲代

六月の日を浴びて、通学路ぞいを流れる小川がキラキラしている。

田んぼのあぜから、とのさまガエルがポチャンと小川に飛びこみ、スイーツと流れにのって泳いでいく。

久美は、橋の上からそれをながめていた。

放課後、プールで泳いでいたので、まだ髪がかわいていない。しずく受けに肩にブルーのタオルをかけてきた。

「カエルは、いいな。練習なんかしなくても泳げるんだもん
な」

おもわず、そんな言葉が口から出た。

五年生の久美は、泳ぎがにがてだった。

「息つぎが、どうしてもうまくできないんだよね、私」

鼻に水が入ってしまったときのつらさつたらないのだ。頭まで痛くなる。そのことが気になって、とちゅうで立ちあが

ってしまう。

だから、まだ、二十五メートル泳げていなかった。

そんな久美に、なんぎな問題がせまってきていた。

それは、七月の末におこなわれる三十分間回泳だった。市内のすべての小学校が参加する。五年生で初チャレンジ。不合格の子は、六年生で、もう一回チャレンジだ。

「あああ、いやだな。三十分間も泳ぐなんて」
小川を泳ぐカエルの手足を目で追い、せつない気分になる。

「お父さんは、小学生のとき、水泳選手だったって。お母さんは、クロールがとくいだし。私、どうして、水泳がうまくなるDNAを受けつがなかったんだろ……」
気持ちごとと落ちる。

そのうち、カエルは、どこかに行ってしまった。

三十分間回泳は、お父さんが子どもの頃のずっと前から行

われているらしい。

その日は、市の水泳場の大プールで開かれる。水深は、二メートルということだ。

「私の身長一四七センチ……背のびしたって、もぐっちゃやうじゃん」

久美の不安は、恐怖になっていた。

ふうつと、ためいきをつき空を見上げる。

遠くの空に、入道雲が立ち上がっていた。

「きつと、私、合格しない。『泳ぎ方は、なんでもいいの。』

とにかく三十分間、泳いでいる。クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、つかれたら、浮いている。いろいろ組み合せてかまわないから」

「順子先生は、そう言うけどさ。それが無理じゃん。今日、やっと、五分間の回泳練習して、オッケイもらったばかりだし。三十分なんて、ゆううつだあ」

口をへの字にして、足もとの小石をけとばした。

小石は、小川の方に飛んでいった。

「いてっ！」

川の中から、かすかな声が出た。

「えっ？ 誰かにあたっちゃったの？ だったら、ごめん。悪気で作ったわけじゃないの」

どきどきして、久美は、そつと小川をのぞきこむ。みると、

さっきのとのさまガエルが頭を押えてちぢこまっている。それから、

「ゆだんしたあ、おいらとしたことが。まだまだ修行がたり

ないんだ」

そういった。

「……あの、私のけつた石、もしかして、カエル君にあたったの？ けがしたあ？ほんとにごめん」

小川の岸にしゃがみ、久美は、たてつづけにカエルに声をかけて、あやまる。

「いいよ。とっさによけられなかったおいらがへまなんだから」

「そんなあ……いたかったよね、ごめん」

カエルは、手と足の動きを確かめるように、まげたり、のばしたりしている。

「ねえ、泳げそう？」

「ちよいと、ためしてみるか」

そういうと、カエルは、小川にジャンプ。足をしっかりと動かして、スイーッと進む。

「よかったあ！ちゃんと泳がっている」

久美は、胸をなでおろした。

カエルは、ひと泳ぎして、久美の前にピョンと出てきた。

「うわっ！ みごとなジャンプね、カエル君」

「まあな」

大きな目をクルツとして、久美を見上げた。

「いいなあ。私もカエル君のようにうまく泳げたらいいのに」

「おいおい。カエルが泳ぎがうまいってのは、おまえさんの

思いこみつてもんだ」

「うそおつ！ 平泳ぎつて、カエルの泳ぎ方でしょ」

「そんなことは、知らないよ。おいらたち、うしろ足には、水かきがあるから、泳げるけど、そんなにはやくは泳げない。せんすいもとくいじゃない。おたまじゃくしのときは、ほとんど水の中にいるけどさ」

「へえーっ、そうなの？」

久美が考えもしなかったことだ。

「おいらたち、泳ぐより、とくいなのはジャンプさあ」

と、とのさまガエルは、胸をはった。

しゃべるたび、とび出たような大きな目が、よく動く。久美は、楽しくなつて聞いた。

「ねえっ、カエル君。修行がたりないつて、なんの修行をするの？」

「自分の身を守る修行さ。もつとがんばらなきゃあ。いまだつて飛んできた石ころをよけられなかった。修行は、ご先祖様からのいいつたえなんだぞ」

「ご先祖様？」

「そうさあ。おいらたちは、生まれながらに敵がわかる。へびだろ、サギだろ、うっかりしていると、ノラ猫にだつてくわれちまう。だから、命がけさあ。はねたり、泳いだり、とにかく全力で逃げまくるわざをみがくんだ」

久美が、とのさまガエルのその話に答えようとしたとき、風が、どおっと吹いた。

「ひゃあ！ やばっ」

肩にかけていたタオルが、吹き飛ばされそうになる。あわてて首をすくめた。

ふっと、われにかえつた久美。

「私……いま、とのさまガエルとしゃべつたあ？」

わけがわからず、両手でほつぺたをベシヤベシヤとたたいた。

「夢か？ いや、夢は、寝ているときに見る。いまのは、まほろし。つかれてんのかなあ。私、へんかも」

そう考えながらも「命がけ」つて言つてたカエルの言葉が、妙に頭からはなれなかった。

風が、久美のぬれた長い髪をサラサラと後ろに流して吹いていく。

「四年生のときにやった着衣水泳訓練も、こんどの三十分間回泳も、自分の命を守るといふか、自分を助けるための修行なんだ」

そうひとりごとを言つて、久美は、家にむかつて歩きだす。

田んぼの稲には、もう小さな穂がのぞいている。どこかで、カエルの鳴く声があった。

それからしばらく、プールに入るには肌寒い日が続いた。

久美は、かぜをひいた。

「休んでなんかいられないのに……」

三階の教室の窓から、プールで泳ぐ五年生の姿をながめる

日々だった。

日曜日。

お父さんと、お母さんが、回泳をやる市のプールに連れて行ってくれた。

なぜがなおった久美の練習不足を思ってた。

「ねえ、お父さん。本番のときってさ、足のつかない深いプールだって……」

「そうだな。とにかく久美、今日は、二十五メートルプールで、まず平泳ぎで泳ぎされるようにしようぜ」

「わかった。私、がんばる」

お父さんは、先にプールに入って、手のかき方、足のけり方を久美にみせる。

「息をするとき、おもいきってパツと口を大きく開ける。パツとね」

お母さんもプールに入って、久美の横を泳ぎ言う。

プールには、子どもや、大人が何人も泳いでいた。となり的小プールで、小さい子たちのスイミング教室をやっている。

若いお兄さんの吹くホイッスルが鳴った。

「はい、バタ足の練習」

バシヤ バシヤ バシヤ

いきおいよく足をけり上げる子どもたち。プールサイドに、水しぶきの列ができた。

ピーツ

また、ホイッスルの音がする。

久美は、そのようすをときどき横目で見ては思った。

(小さい頃、スイミングスクールに行けば良かったかな……)

低学年の時、そんなチャンスがあったのに、

「いかない」

と、久美は、言ってたおぼえがあった。

久美は、泳いだ。何度も。

「おい、久美。うまくなったぞ。そのまま二十五メートル泳げそうじゃないか」

お父さんが、プールサイドで嬉しそうに言ってきた。お母さんも、ニコニコしている。

そして、その日、ついに嬉しいできごとが。

「泳げちゃったあ！ 二十五メートル！」

ゴールタッチして、おもわず久美は、プールの中でジャンプし両手を上げた。

「すごい、すごい！ 久美、おめでとう！」

「よし、次は、回泳練習だぞ」

自分のために、一生懸命応援してくれる、お父さんと、お母さんの気持が嬉しかった。

ゴーグルの中にあふれた、プールの水と涙を、久美は、そそっとこぼす。

いよいよ、三十分間回泳の日がきた。

その日、五年生全員参加とはいかなかった。一緒に練習してきた和香^{わか}が、熱を出して休んだ。

小学校から、市のプールまでバスに乗った。

久美は、とても緊張していて窓の外ばかり見ていた。バスは、町の中を通りすぎ、ひろい田んぼが西側にひろがる道を進む。

いちめんの緑の中に、すつくと立つ白サギの姿が目に入った。

久美は、はつとなった。

「命がけさあ」

と、言ったあのとのさまガエルの言葉が、ふいに心にひびいた。

銀色の屋根が光る市の水泳場が、ぐんぐん近づいて大きく見えた。

久美たちの小学校は、近隣の小学校二校と合同で泳ぐ。

いよいよ、着替えをすませた久美は、みんなと並んでプールサイドに行った。

なかよしの葉^{しおり}が、そつと来て耳うちした。

「久美ちゃん、ならんで泳ごうよ」

「う、うん。でも、はなれちゃうかも」

自信のない久美だ。とにかく、胸は、押えられないほどドキドキと高なっている。

これから入るプールが、とてつもなく大きく、深く深くす

いこまれそうに思えた。

お母さんが見に来ているはずだけど、応援席を見回す余裕はない。

「さあ、みんながんばろうね。大丈夫、ゆっくりでいいから。はい、深呼吸」

練習中、きびしかった順子先生が、とてもおだやかに言った。

久美は、吸って、はいて。吸って、はいてと、三回もした。それから、プールにそろそろと入って、プールのへりにつかまり合図をまった。

「よーい」

ピ——ッ

ホイッスルが鳴りわたった。いっせいに泳ぎだす。

みんなで二百人はいるだろうか。時計回りとは反対の一方通行。自然に泳ぐ子どもたちのゆるやかな流れができた。

久美は、ひたすら手をかき、足をける。ゴーグルの先を見すえて、夢中で泳ぐ。

お父さんに教えてもらった平泳ぎ。息が苦しくない。息づきもしている。不思議だった。

体が、前に前に進む。

ゆつたりと、久美は、ただただ泳いだ。どのくらいだったのだろうか。

さすがに、手も、足もつかれていて、そのとき。

「あと五分です。がんばって！」

係の人の声が聞こえた。メガホンを口にあて大声で言ってきたのだ。

プールの中の台に立っている見守りの先生たちも、

「そーれ！」「そーれ！」

と、声を出して久美たちを励ましてくる。

(あと五分だ。私、泳ぎされる)

つかれきっているはずの久美の体に、なにか力がみなぎった。

「命がけ」

あのカエルの声も、久美の気持ちを押ししていた。

カウントダウンが始まった。

係の先生たちが、マイクで、メガホンで、応援席にいる多くの大人たちが、プールを見つめ声をあわせている。

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1

「終了！」

ピー——ッ。長く長く、ホイッスルが鳴った。同時に、嵐のような拍手。

「がんばったね！」

の声が、久美たちプールの中にいる子どもたちの上に、ふってきた。

久美は、プールのへりまで泳いでいって、がっちりつつか

まった。気づくと、すぐ横に、葉がしがみついていた。

「久美ちゃん」

と、にっこりした。

「合格じゃん！ 葉ちゃん」

「うん。合格！」

いいあうふたりのゴーグルの中の目が、笑っていた。

泳いでいた子たちが、次々とプールサイドに上がって行く。

久美も、葉も上がった。

みんなが出たあとのプールの水がゆるる。

小さなさざ波がひろがって、久美には、虹色のプールに見えた。

(東区)

ぶんじいとぼく

内山文久

父さんや母さんから聞いた話によると、ぼくの住んでいる町はとても人口が少なくなつてしまつたようだ。昔は今から五倍、一万人くらいの人が住んでいて、それは、にぎやかだつたそうだ。町を通ると、しめてしまつて、カンバンだけが残っているお店が多くあつたりする。だから人がいないのだらう。今、多くの学校は六年年集めて三十五人しかないのだらう。三年生のぼくと同じなのは女の子がふたり、男の子はぼくをいれて三人、ぜんぶで五人なんだ。町で出会う大人から（たいへんだね）とよく言われるのだけれど、ぼくたちはそんなことは気にしていない。これがふつうだと思つているんだ。そう、こまつた時があることはたしかに、いっぱいある。だけれど、それはそれで、どうしようもないこと。たとえばソフトボールをしようにも、人数が足りない。でもそんな目の前にあるひとつの問題について、もしどうしてもできなければ

きつぱりやめてしまふしかない。できるかもしれないと思う場合は、ほかの学年の人たちや先生もいっしょに参加してもらつて、のりこえればいいのさ。それもまたふつうのことで、なんでもやろうとすれば（工夫次第でなんとかなるものさ）と思つている。

ぼくは町からはずれた、歩いて一時間くらいの山の中に住んでいる。いつもひとりで学校に行つている。ようち園の時からそうだったから別に気にしていない。学校に行くときも帰るときも、初めひとり、終わりひとりさ。とちゅう、町の通りが始まる場所に住んでいる一年生の弓ちゃんと二年生の良太くん、六年生の通学リーダー信一さんの四人で学校に行つたり来たりしている。たつた四人だけれど、これを集だん登校というんだ。いろんな話をしながら町にある一本道をまっすぐ通つて学校に行つたり、家に帰つてきたりしている。年

はみんな（まちまち）だけど楽しい。

みんなでいる時とちがつて、ひとりの時、ぼくはいつも、より道をする。だいたいどのくらい遊べばいいか、わかっているつもり。せいげん時間は暗くなる前。どう、わかりやすいだろう？ 春は春、夏は夏、秋は秋、冬は冬でいろんな楽しみがある。家に帰ってゲームもするけど、なぜかいつもそこらへんを飛びまわっているんだ。それはこんなことが、げんいんかもしれない。

家に帰るとちゆう、必ず行く小屋があるんだ。そこはプレハブで作られているという。プレハブ？ ぼくにはその意味がわからない。ぼくはかつてに「ぶんじい小屋」とよんでいるんだ。そこに「ぶんじい」という人が住んでいるからだ。文次というのが本当の名前だ。ぼくのうちの父さんのしんせきで父さんが「ぶんじい、ぶんじい」とよんでいるから、ぼくもそうよんでいる。ぶんじいは七十二才。おくさんがなくなってもう五年になるのだそうだ。

小屋のこと？ かんたんに言うけれど家の入り口を入るとすぐすいじ場と作業台があってその後ろに、ぶんじい手作りのベッドが見えるだけ。一部屋となっている。かべはうすい。それだけ。ぶんじいは二年前からそこに住み始めた。浜松に住んでいたらしいのだけれど、そこを売ってここに自分だけの家を建てたというわけなのさ。

ぼくがぶんじいを初めて見たのは、小屋のきそ工事のためセメントや鉄が帰り道のとちゆう、ちよっと広い場所（道

路から少し上がった）ふつうの車がやっと通れる丘みたいな場所（山窪・やまくぼ）に運ばれてきた時のことだった。秋の終わり、ちょうどその丘みたいな場所の近くにゴマガキの木が一本立っていた。学校の帰り、このころになると、そこからおやつがわりに三から五こぐらい、だまってそっと食べていたんだ。近づいてはみたんだけど車がある。「やれやれ今日は中止だな」と思っていると、一人のおじさんが声をかけてきた。

「学校帰りか。遠いだろう学校」

「まあね。でももう、なれちゃって何ともないよ」

「まあねか。面白い。名前はなんていうんだ」

「まつやま さとる」

「うん？ それじゃあ君が（よしたか）のむすこか」

「何で知っているの」

「そうかそうか。わかった。ありがとう」

そういつてふり返り、トラツクのほうにもどっていった。変なおじさん、と思った。

家に帰って夕飯が終わり、父さん、母さんに聞いた。

「父さん、今日山窪に鉄やセメントが運ばれていたけど何かできるの？」

「ああそうか、やっとできるんだ、ぶんじいの家」

「あんなところに人が住むの」

「そうよ、あの人はしんせき、私たちににとってはおじさん、さとるとっては、大おじさんね」

「ぶんじい、さん？」

「そうかみの毛はまっ白、あごひげも長くてまっ白い。とてもゆかいなひとさ」

「あのおじさんがそうなの。あの変なおじさん」

「なんだ、知っていたのか」

「うん、ちょうど軽トラックがやってきて。何かと近よってみていると、おじさんがこっちに來たんだ。名前を聞かれて答えたら父さんの名前を言われて、びっくりした」

「はは、ぶんじいらしいな」

「ほんと、いつも人をびっくりさせるのが得意だね」

「そうなのか」

とほくは思った。

しばらくして、ぶんじいの家が出来た。ほくはお祝いに行きなさいと言われ、ドキドキしながら山窪にある家に行った。ぶんじいが家のまわりをかたづけしている。

「こんにちは」

「おお、きみか。今日は何かな」

「うちから（お祝いを持って行け）と言われて、來た」

「そうか、持つて行けか。まったく面白いな、君は」

「どうして？」

「いやなんでもないさ。ありがとう」

「おおこれは、わしの好きなダルマとメビウスか。君の父さんなかなかやるな」

「一方はとても重くて、しょうがなかった」

「はは、君はいいやつだ。氣に入った。いつでも來な」

これが初めて話したことだった。それはすぐだった。今でも氣に入ってしまった。それから何度も学校の帰りに出会うことがあって、いつの間にか、ぶんじいがある時はず家に入ってしまった。ちなみにいる時は「犬」で、いないときは「ネコ」という、玄関にくぎを打ってひもでとめた、お店の「営業中」みたいな札がかかっていた。これは、ほくだけにしらせるためだけに、作ったのだ。ほくだけしか行かないのだろうか。

ほくは通い始めて、いろんなことを知った。ぶんじい子どもころ、ほくの家の近く、もう石がきだけが残っていて、草がぼうぼうと生えている場所に住んでいたこと、同じ学校に通っていたこと、大きくなって浜松に住んだこと、子供が二人、みなけっこんして、ほくと同じくらいのおまごさんが三人いること。この場所が好きで帰ってきたこと。まだいっぱいあるけれど、ま、そんなところかな。

ただ一つ不思議に思っている言葉がある。口ぐせで

「わしはこれといって、何もすることがない。要するに、わしはなにからも（自由）なんだ」

という。ほくにはどういう意味かさっぱりわからない。ぶんじいはふだん、ほとんど家の中にいて、しなきやいけないことをしているというのに。それ以外といえば、時々この部落の、ある家から借りた小さな畑に行つて自分の作つた、野菜

のようすを見たり、作業をしたり、食べ物やタバコが切れた時、町に（ぶんじいと言う）自分のポンコツ軽自動車で買い物に出かけたりすることもあるけれど。ぼくは、ぶんじい、なんでこんないなかきたんだろう、ふべんなのに、浜松だつたら何でもあるのにといつも思うのだ。

「ぶんじい、来たよ」

「おおさとの君、来たか。さて、今日は何がしたいんだ」

「きのうの続き」

いつも何かをしているぼくとぶんじいには、やりかけだったき、きのうまでに出上がつたものがある。そう、ぼくの下から物は小屋のまどの下、二段のたなの下にあるんだ。

「そうかそれじゃあ、物をよういしなさい」

そういわれて、ぼくは作業台の下をもぐって、まどぎわのいつもの箱から、竹のきれはしを二こ取り出した。きのう、ぶんじいの後について、竹やぶに行つた時、ぶんじいが竹を切り取つたんだ。ぼくが指を回して少しあまつてしまうくらい、そうだな、直径四センチくらいの真竹を一本。それとは別に矢竹という直径二センチ位の細い竹をそれぞれきとうに切つて、小屋の前に持つてきた。ぶんじいが

「太いほうはこのこぎりで三十センチの長さに切りな。節のところ切つてあるから」

「矢竹は四十五センチに切つておいたよ。それを使いな」

といったので、ものさしではかり、えんぴつで印をつけ、外用のいすや作業台としている切りかぶの上、足で竹を固定し

て、ガリガリとそのしるしにそつて切り落とした。竹はふうの木よりも表面がつるつるなのでなかなか切れない。だから切り口にはこのこぎりのあとがいくつかついている。また切り残しのケバケバもあつたけれど、それはぶんじいが（なた）できれいにふちどりしてくれた。それでどうにかやつと竹の切れはしができた。

「完成させよう。ふしのまん中にキリで穴をあけるのさ」

「なにができるの？」

「水をつぼうさ」

やつと作るものをおしえてくれた。いつもこんな調子なんだ。でもそれがぼくをととも気分良くしてくれる。ぶんじいがぼくに太いキリを出してくれる。

「節のまん中めがけてキリの先をさしてそれから自分のりょうひざで竹をささえ、それからおいのりするような感じ、りょう手でキリをすりまわすのさ」、

そう、ぶんじいがいうので、言われた通りキリをさし、すりまわした。すぐ、ちいさな、あながあいた。

「どうだ、かんたんだらう。あなをのぞいてみな」

ぶんじいがいうのでかおを近づけ、大きいあなのほうから右目をくつつけてのぞくと、暗い先に明るい光とけしきが見えた。

「すごい、飯田線のトンネルの中みたいだ」

「それならいいね。ごうかく」

ぶんじいのかおを見た。少し笑っている。ぼくも、にこつと、

笑った。今日はいつもあんまり笑わないぶんじいが笑った。それはどうやらぼくがあんまりのぞきすぎたため、まゆやほつぺにあとがついていたためだったらしい。その夜、風呂に入ると右目の周りがすこしヒリヒリした。

「次はこれ」

ぶんじいはそういつてまっすぐな矢竹を出した。ぶんじいも一本同じくらしいものを持っている。

「まずはこの竹の先にこうやってぬのを巻きつけるんだ」

ぶんじいはそう言つて作業台の上にもめんのぬの切れがいつぱい入った木箱を乗せ、そこからいろんな形のぬのを出し、まず細い帯のようなぬのをまき始めた。

「そうだな、五センチくらいのはばでまくんだ」

それを見ながらぼくは、木箱に入った、きれいにあらつてある、同じようなぬのをグルグルとまきはじめた。ぶんじいが、ぼくのやり方を見て

「さとの君、はじめはね、こうするんだ」

そういつて、竹の先をぬのでかぶせた。竹が小さなタオルを先にのせているような感じだった。

「こうしてからぐるぐるまいていけばいい」

そういつてぶんじいは親指と人差し指で竹とぬのをつまみながら手ぎわよくぬのをまいていつた。

「じょうずだね」ぼくがそういうと

「まあ、六十年以上も前から作つてきたからな」

「そうなの、すごい」

「いや、どこにもないから、自分で作るしかなかったのさ」

ぼくもトライ。まき方がゆるくてバラバラになつてしまう。

「一回一回、しつかりしめてまくんだよ」

ぼくは力を入れ、ぎゅうぎゅうと、一通りしめ終わった。

「いいね、じゃあ、続いて、先のほうからまこう」

ぬのは、ぼくの必死の思いとともに、二重にまかれて、でこぼこの、やきとりのようになった。

「いいねえ、そうしたらここにある、広げたぬので、全体を包むんだ。そうしたら、それを台の上に置きな」

「なんだか包帯をした大きな親指みたい」

「いいことを言うねえ。わしもそう思つていたんだ」

「次はこのタコ糸を使つてきつくしぼるんだ。先と真ん中、手元とね。ぬのの大きく出つぱつたやつはハサミで切るときれいだよ」

ぶんじいとぼくにそれぞれ、おおきなやきとりができた。

「それじゃあこのぬのの先を、さつきあなをあけた竹にさしこんでみよう」

そう言われてぼくはためらいながらぬのの先をさしこんでみた。少しゆるい感じだけど、ぬのと竹がすれる音がする。

「ぎゅうぎゅうじゃないんだけど」

ぼくがぶんじいに言うと、

「まあいいだろう。そんなもんさ」

「待つていな、今じゅんびをするから」

と、ぶんじいは言つて、小屋の外に行つてしまった。

「どうしたんだろう」

と思ひながらすわっていると、すぐに

「さどる君、それをもつて庭に出てきなよ」

と声が聞こえたので、急いで竹で作った、水でつぼうをもつて外に出た。ぶんじいは水色のおおきなつけもの用のポリバケツに、近くの沢から引いてためておいたタンクから、ホースで水を引いて、満タンにしていた。

「始めよう。まずぬのの部分にバケツの中につけるんだ」

ぼくはこわごわ自分の作った（ぼう）をつけてみる。初め少しういていたが、あわが出て水の中に入っていた。

「次はこの（ぼう）を真竹のあなのおくまで入れるんだよ」

ぼくが入れようとすると、さつきとちがつて入りにくい。

「さつきよりずいぶんきつくなつただけど」

と、何とかおくまで入れたぼくが言う

「それでいいのさ。じゃあそのまま全部バケツの中に入れてなよ。そしたら（ぼう）をぬのが見えるまで引くん」

ぼくの左手と竹セツトは水の中でいっしょになつてゐる。ぼくはゆつくりと（ぼう）を引こうとした。すると（ぼう）の

先が少し引っぱられる感じがしてびっくりした。水が竹の中に入ると同時に竹の中の水もぼくを引っぱつた。

「それでいい、次は左手に竹をしつかりもつて、右手で（ぼう）を押すんだ。ほらそこにあるトウモロコシめがけて」

ぼくはありつたけの力で（ぼう）を押した。というのは、はじめはかたくて（ぼう）が進まなかつたからだが、次第に速

くなつてきた。その動きにつれて、せんたんのあなからいきおいよく二メートル先のトウモロコシの葉に水がかかった。

（ただ、まだこの水でつぼう、調整がひつようだ。竹の中からぎやくりゆうする水があつて、僕の右手全体とはいいていた短パンの前は水びたしになつた）

でも、ぼくはとでもうれしかつた。教えられたり少し手伝つたりしてもらつたのだけれど、ほとんど自分の作った遊び道具が完成し、まがりなりにも動いたことが。

「最初としては上々だ。わしが作った時ほとんどの水がわしのおなかのシャツとズボンにどつさりさ。はっはっ」

「ほんと？ じゃあ、ぼく、自信をもつていいかな」

「もちろん」

それからというもの、しばらく、ぼくはむちゆうになつて水をすい上げ、何度も何度もトウモロコシめがけて水を、おし出してゐた。夏だつたから寒いなんてことはない。それどころか、とつても気持ちよかつたのだ。

気がつくともまた、ぶんじいがいかなかった。今度は家の中から声が出た。

「もういいだろう。家の中に入りな」

ぼくは体の右半分ぬれたまま、中に入つてぶんじいがぼくのために作ってくれたイスにすわつた。ぼくが家の中で作業しやすいようにと作業台に合せて作ってくれたものだ。どこからもらったのか買ったのかは知らないが、同じ大きさのきれいなピンク色の平らな皿が二つ。上にスイカがひとつずつ

つ置いてある。ぼくのほうが少し大きい。小屋の上の方にある、わき水用タンクで冷やしたスイカだ。

「食べな」

お皿のはしには塩が少し乗っかっている。ぶんじいはいつもステキだ。いつでも、こんな風に子どものほうが、塩でもうちよつと甘くしたいとか、これでいいとか、どうにでもなるようにしているのだ。

「甘い。冷たい。おいしい」

「そうか」

と言ってぶんじいも食べている。

ぶんじいが話しかけてきた。

「さどる君。いつも一人でいる時、さびしくない」

「まあね」

「まあねか」

本当のことを言うと、ぶんじいに会う前、ぼくはとでもさびしかった。学校から帰っても家にはだれもない。家のまわりで遊ぶ子どももない。いるのはとりの八十五才のおばあさんとそのとりの七十八才のおじいさん。二人とも一人でくらししている。うちのまわり、立っている家はこの二けんを入れて三けん。知ってはいるけれど、それぞれいそがしいから、その人たちと、もちろん遊ぶわけにはいかない。うちの父さんはダンブの運転手。そりゃあ雨の日とか家にいるけどその日は休みさ。一日中ゴロゴロしている。母さんは三時まで、町でたつたひとつの小さなスーパーでパートの仕事を

している。遊んでくれとはいえない。つまり二人からの「何かしよう」とさそいがあつた場合だけ、遊べるってことさ。だから学校に行くようになって、さらに母さんがパートに出るようになってから、さびしくて、まっすぐ家にかえらずその辺をうろろしていた。たしかにいろんなことをして遊ぶのだけれど、やっぱり一人じゃさびしい。だからぼくはそのことで、いつも父さんや母さんをこまらせているのかもしれない。こんな時、弟でも兄さんでも姉さんでも妹でもいたらいいのと思っていた。そうぼくは一人っ子なのだ。

「ぶんじいはさびしくないの」

ぼくがきくといつもぶんじいは言うのだった。

「さびしいといえばそうかもしれない。でもな「さどる君」君もいるし、きみのお父さん、お母さんをはじめ、このぶらぐのひとがいる。これはわしにとつて、とても大事なことになる。それに、ここにはわしの昔のたくさんのおもいでがつまっているし、まわりはどこからどこまでもしっているものや場所ばかり。だからさびしいことをわすれてしまうくらい、すばらしいことがいっぱいあるんだ。人間でも動物でも草でも石でも水でも何でも良い、その時そのひとたちと、そのものと友達になればいいんだ。でもこれはわしが決めたことじゃないんだよ。わしはずっと前に住んでいてそのことを教わつたんだ。一人でいてもそう思うからわしはここにいるんだよ」

ぼくは「ふううん」としか言えなかった。むずかしくてよく

わからないんだ。でもそんなぶんじいとあってからぼくは変わりつつあった。ぶんじいという友達ができたからということもある。でもそれだけじゃない、いつも見ていたものが少しちがつて見え始めたのだ。前は一人でいるときはいつも「だれかと遊ばないとつまらないな」と思いこんでいた。一人で遊んでもなんかものたりなさを感じていたのだ。今はちがう。一人でもおおいでも楽しかったり悲しかったりするところが、本当に自分のことと感じられるようになった。これはぶんじいのおかげかもしれない。

こんなこともあった。ぶんじいはどうしようもない時だけ、買ってきたものを使う。普段はその辺にあるもの、もったものを使って生活するだけ。ぶんじいがいうんだ。

「このいなかには、いっぱい物があるからね」

どうしてそう思うのか、これもはじめわからなかった。だつてここにはなにもない。テレビで見るファストフードの店もなければ、大きなスーパーもきつさ店さえもない。ないものばかりじゃないのかと思っていたのだ。

「どうして、ここには何も無いのに、そんなこというの」
ぼくがそういうと

「それは向こう、そう都会にあるものなんだ。だからこっちにはないのはあたりまえさ」

「ここにはここだけしか食べられないものがあるだろう」
つていうんだ。これもちよつとわけがわからない。

「だって、おいしそうなハンバーガー。いつでもほしい時た

べられたらいいもの」

そういうと、ぶんじいはちよつと下を向いてだまつている。

「それもそうだけれど、でもよくかんがえてごらん。君と同じように、今何か食べたいと思っている子供はせいかにはたくさんいる。それはわかるよね。でもね、聞くところによると、そのなかで、なにもたべられないでそのうち死んでしまう子供が大ぜい、いるんだよ。ぜんぜん、大人がたすけてあげられないんだ。それに大人だって何も食べてないらしいんだ」

とちよつと悲しげな顔をして言った。

「そうなの」

「だから、それに比べたら、君には学校帰りにちよつとつまむ、草イチゴやカキ、グミやビワもある。それに、おながへったからといって死ぬことなんかないだろう」

「でもやっぱりハンバーガーは食べたいんだなあ」
「はは 本当に君はよくばりだなあ」

そう言われて、ぼくは少しわかった。ぼくのように食べたかったら、どこかに行つて、お金を出して食べられる人、そしてお金もなく、食べたくても何か食べようにもその食べるものもお金もない人、が同じ時間に生きているんだと。これは運がいいとか悪いとかいうことだけではわからないことだ。だってその子ども達、もしかすると、このせいかからいなくなっちゃうんだ。生きていればその子達に、この後ぼくたちが大きくなった時、会えていろんなことをいっしょにして、

笑い、悲しみあえるのに。いろんな所に生まれるってどうい
うことなのかなあ。

時間がすぎさってしまった。ぼくはこの頃、ぶんじいのこ
とをいつも考えている。というのはぶんじいが病気になって
少し離れた天竜区の病院に入って、ここにはいなくなつたか
らだ。

あの日、いつものようにぶんじいの家に行った。「犬」マ
ークがついていたので「来たよ」と言つて中へ入つた。する
とぶんじいが作業台に顔をつけて苦しそうにしていた。

「ぶんじい、どうしたの」
変だつた。するとぶんじいはぼくに、作業台のすみにおいて
あるケイタイをふるえながら指さした。僕は急いでとつて、
ぶんじいにわたした。見ていると、ぎこちなく119と押し
た。「話してくれ」とぼそつと苦しいのか、小さな声で言つ
たままうずくまっている。
相手先から声が聞こえた。ぼくは必死で答えた。

「どうされましたか」

「早く来て！ ぶんじいさんが、苦しんでいます」

「おちついて、場所はどこですか」

「山窪・やまくぼ です」

「お名前は」

「南沢 文次です」

「わかりました。すぐ行きます」

十分後サイレンを鳴らした救急車がやってきて、ぶんじいを
みまもりながら、病院まで連れて行つた。救急車が来るまで
ぼくは、泣きながら

「ぶんじい、待つて、もうすぐ救急車来るから。がんばつて。
死んじやいやだ」

（こんなに悲しいことがあつてもいいのか、会つてまだ少し
なのに、別れるなんてかみ様はひどすぎる。ぶんじいはぼく
にとつてかけがえのない友達なんだ。生きてほしいんだ）と
思い、願ひ、声をかけ続けた。

その日の夕方、病院から家に電話があつた。

どうやらぶんじい、前から心臓が悪かつたらしい。（しんき
んこうそく）という病気だつたようだ。幸いなことに今のと
ころ命には問題なさそうだという。

「助かつてよかつた」

ぼくはそう思つたのだが、話によると一年ぐらいは様子を見
ないといけないらしい。しばらく小屋では会えない。

それでも、どうしても会いたくて、二週間経つた日曜日、
父さんといっしょに天竜の病院に面会に行つた。

「ぶんじい」

（はやく帰つてきて）と言いたかつたけれど言えなくて、泣
きながら名前を呼んだ。

「おいおいさとの君。わしは死んではいけないよ。きつと帰る
から待つていてくれよ」

ぶんじいが笑がおをぼくにくれた。せいっぱいの笑がおの

ようだった。

「ぶんじい」

ぼくは泣き続けた。

あれから一年半以上がすぎたんだ。ぶんじいはまだもどつてこない。時々病院に行つては見るのだが、少しずつ弱つているのがわかる。もうぼくのがわからないみたいで悲しい。ぼくはもう五年生が終わろうとしているんだ。もういちど、ぶんじいのいったことを思い出す。その中で一番わかりやすかったことがある。それは

「ぼくが周りを理解するのではなく、周りが教えてくれることを見極めなさい」

ということだった。例えばぶんじいに（花は何でさくのか）ということ聞かれてぼくが（きつとさきたいから）ということ、にこにこして（そう、そうなんだよ）と言ってくれた。ぼくだけじゃなく多くの人がそう答えるのかもしれない。でもいまになってやっと、そのほんとうのことがわかるようになってきた。花の話はこうなのだろう。（スミレ）という花がじゅくして、その子どもが種となって偶然ある地面に落ちる。子どもの種。がんばって生きるんだと、母さん・父さん花に言い聞かされた種は、その約束を生きようとしている。だからスミレの花（両親）が亡くなつても、必死で芽を出そうとする。ここまでで死んでしまうこともあるし、運よく芽を出しても大きくならないうちにかれてしまう場合もある。でも種はがんばろうと思つて、いろんなくるしみを乗りこえ

てやっと花となつてさく。そうやってさいたんだということ、それを知ることが花を知ること、つまり花がさくことを喜ぶことができるのだと。花だつて心があるんだ。なかつたら何もしないで死んでしまふだろう。ぶんじいはそう言いたかつたのだろう。

このいなかで仕事が見つからなければ、ぼくは大きくなつたら、おそらくここにはいないだろう。でもぼくはどこにいても、大きなケヤキの木がやさしく人々や下草を夏の暑さから守ろうとして、和らげようとして、葉を上げらせていることをわすれないようにしよう。ぼくの目にうつる、心のないと思われている土や石にもほかのものにとつてきつと安らぎの場所になること、つまり心を持つていることをわすれないようにしようと思う。

ぼくはぶんじいを待ち続けようと思う。

（中区）

「入選」

額にかざられた白いぞうり

宮島ひでこ

ある日のことです。

一まいのハガキが、ママあてに届きました。着物専門のお店から、セールの御案内です。そのハガキには、まん中に、白いぞうりの写真が大きく印刷され、ぞうりのまわりに、帯や帯じめなど、色とりどりの小物たちがのっています。

ママは、ハガキをながめながら、

「よかった。さがしていたぞうりは、これだった。やつと見つけたわ」

と、小さな声でつぶやきながら、その案内状をおりたたんで、財布のポケットにしまいました。

そして、翌朝。

テーブルの上に新聞をひろげ、ニュースをチェックしているパパに、ママは、にっこりしていました。

「わたし、今から着物の展示場へ行つてきます。あさつて、フランスの旅行へ持っていく着物にぴったりの白いぞうりが、このハガキにのっているので急いで行ってくるわ」

「ええっ！ まだ旅行の準備はできてないの？ いつものことだから、びっくりはしないけど、用意を先にすませること

が大事じゃないか？」

と、パパは、あきれた顔でママの方をみえています。

「そうだけど、ぎりぎりでも、いつもまにあうから大丈夫よ」

ママは、心の中で「ごめんなさいね」と反省しながら、頭の中は『白いぞうり』のことが気になっています。

ママは、アイちゃんと呼んでいる自分の車にエンジンをかけながら、そっと話しかけました。買ってから十年目になる車のアイちゃんは、一週間ほど前に、エンジントラブルをおこして、修理からもどつたばかりです。

「アイちゃん、駅の方まで安全運転でたのむわよ。よろしくね」

と、ハンドルをなでています。

三十分ほど車で走つたところに、駐車場があり、そこから歩いて五分ぐらいで、その展示場へつきました。

ビルの三階にある会場のロビーは、多ぜいの女の子たちで、にぎわっています。

親子づれの人たちは、来年、成人式をむかえる準備のようです。にこにこしながら鏡の前で、どんな着物が似あうか、色あわせをしています。

ママは、白いぞうりをさがして、きよろきよると、あたりを見まわしました。でも、近くには見あたりません。

「あのー、このハガキをいただいた者ですが、白いぞうりは、どこにありますか？」

と、ママが、そばにいたお店の人にたずねると、奥の方から

係の男の人がでてきて、

「いらっしやいませ、こちらでございます」

と、案内してくれました。

ひろびろとした部屋のあちら、こちらには、いろいろな着物が展示してあります。

そして、すみの方に帯あげ、帯じめ、たびや他の小物が箱に入れて重ねてありました。白いぞうりは、目立つように、少し高い場所におかれています。そのぞうりをとりかこむように、ピンク、オレンジ、茶や緑といった色とりどりのぞうりが、並べてあります。

ママは、まず、セール品で気になっていたモスグリーンの帯あげと、帯じめを手にとり自分のそばにおくと、白いぞうりを両手で包むように、正座している自分のひざの上のせました。

「わたし、この白いぞうりをいただきます。こちらの帯あげ、帯じめもいっしょにお願いします」

「ありがとうございます。お客さま、そちらの白いぞうりは、ずーっと、展示品でしたので、新しいお品物を数日中に、お届けさせていただきます」

「いいえ、このぞうりがほしいんです。ごらんください。こんなにびつたりですから」

ママは、うれしそうに、ぞうりをはいて鏡の前で歩いてみせました。

すると、お店の人は、

「お客さま、このぞうりは、ながい間、ほこりをかぶっていた品物でございますので、新しいお品物がよろしいかと思えます」

「すみません、お気持ちは、ありがたいのですが、あさつてフランスへ行く旅行が決まっています。出かけなければなりません。この白いぞうりは、私の着物と帯に、とてもあいます。どうしても、このぞうりをもって旅行に行きたいんです」

ママの話をきいた係の人が、呼んできた上司の人に、ママはくりかえし説明しました。その男の人は、にこにこしながら、

「わかりました。少しお安くしますので、こちらへサインをお願いします」

こうして、白いぞうりのぼくたちは、ママの子供になりました。

ママは、箱の中に入っているぼくたちに、こう話しました。

「はじめまして、ぞうりちゃんたち。ありがとうね。あなたたちがいないと、フランスのバリで、着物をきて歩けません。わたしは、むこうでひらかれるパーティに、どうしても日本の着物をきて参加したいと思っています。どうか、力になってね」

ママは、夕食の時、家族のみんなにぼくたちぞうりを見せました。そして、あだなをつけるのが好きなママは、数字の1, 2, 3がひらめいたので、左足のぞうりは『いっちゃん』、右足のぞうりは『にいちゃん』と、呼び名をつけました。

「いっちゃん」

「なあに、にいちゃん」

ぼくたちは、ママがつけてくれた名前で、呼びあうようになりしました。

いよいよ、ママは、本気で旅行の準備にとりかかりました。

ママは、おしほりで、ぞうりのぼくたちをきれいにふいた後、かわいた布で水気をふきとりピカピカにしてくれました。

着物のセツトの中に、ぼくたちも加わりました。

パパは、心配そうにママのところへ来て、「気をつけて、いってらっしゃい」

と、送ってくれました。

フランスへは、羽田空港から直行便です。前の日に、空港近くのホテルに泊まります。

ママにとって、一週間の旅行は、初めてなので、荷物の多いこと、そして、トランクが重たいこと。

ママは、少し不安な気持ちで夜をすごしました。

朝になると、もう、ママは元気がいっぱい。七時十五分の空港行きのバスに、ホテルの前から乗りました。

羽田空港国際線の待ちあう場所は、多ぜいの人たちでにぎやかです。しばらく、椅子に座って待っていると、フランス行きツアーの人たちが集まりはじめました。顔見知りの人たちが見えた時、ママは、ほっとしていつのまにか、心がはずんできました。

手続きを終えて、いよいよ飛行機に乗ります。

十三時間の空の旅です。

飛行機の中では、ママは、大好きな映画をずっとたのしんですごしました。

ドゴール空港へ着いたのは、夕方四時頃。空港内は、グリーン、白、こげ茶、三色のモダンなカラーです。ママは、そんな空港の中で友だちと話しています。

「フランスの空港って、上品で、モダンね」

「ほんと、おちついた気持ちになるわ」

疲れた友だちの顔が、いつのまにか笑顔になり、ママも、うれしくなりました。

手続きを終えて、初めて見あげるパリの空の色。やさしいブルーと、すき透った白い雲たち。

空港を出た時、ママは、深呼吸をして天をおおぎ見ました。

小型のバスにのり、オペラ座近くのホテルにむかいます。

ママは、バスにゆられていると、だんだんねむりたくなってきて、ガイドさんの説明もまったく頭の中まで届きません。

ママは、ホテルに到着するまでねむりこんでしまいました。

ボーっとしていたママは、日本の横浜にいる気分で目がさめました。

ここは、フランスのパリ。

ガイドさんは、チップが必要なこと、夕食の予定についてわかりやすく説明しています。ママは、同じ部屋の友だちをみて、ようやく気持ちがおちつきました。

ホテルの部屋は、六〇四号室。

ママは、部屋に着くと、トランクの中からぼくたちぞうりをとり出して、両手でなでながら言いました。

「おつかれさま。ぞうりのいっちゃん、にいちゃんたち。ここがフランスのバリですよ」

それから、しばらくして、ママは、ぼくたちをトランクにもしカギをかけました。

そして、おしゃれな洋服に着がえて、ツアーの人たちと、レストランへ食事に出かけていったのです。

次の日も、又、次の日も、ママは観光に出かけ、ぼくたちは、ずーっとトランクの中にいました。

パリに来て五日目になりました。
ママが、着物姿で、ぼくたち白いぞうりをはいてパーティに出かける日です。

ママは、朝からなんとなくそわそわしています。朝食を終えて、しばらくしてから、ママは長い髪を頭のうしろで、くるくるとたばね、まん丸いおまんじゅうの形にピンで止めました。それから、お化粧をすませると、着物を着て、帯をしめ、モスグリーンの帯あげ、帯じめでまとめ、ぼくたち白いぞうりの出番となりました。ママの白いたびが、ぼくたちをやさしく包んでくれているようです。

「いっちゃん、がんばろうね」

「うん、にいちゃん、わかってるよ」

左足のぞうり、右足のぞうりのぼくたちは、うれしくてたまりません。

ママは、そんなぼくたちにむかって声をかけました。
「きょうは、歩くことが多いと思うけど、いっちゃん、にいちゃんよろしくね」

「ママ、かっこいいよ。きれいな着物と帯だね。ぼくたちの白いぞうりをえらんでくれてありがとう。ママが、しっかり歩けるようにがんばるからね」

これから、ママたちがいくベルシー美術館は、歴史のあるクラシックな建物で、ホテルから電車で十分ぐらいのところにあります。でも、電車のストライキで、交通がみだれているようなので、タクシーで行くことになりました。

美術館へ続いている小道は、プラタナスの大きな樹の間を通っています。そして、明るい陽ざしの中をそよ風が、タクシーのまどから入ってきて、やさしくママのほほをなでています。

「あそこだね、美術館、あの赤い屋根……」

だけれが、指さしながら大きな声でいいました。

石だたみの美しさに、目をかがやかせているママは、ぼくたちぞうりを見つめ、うれしそうにうなずきます。

そして、友だちに言いました。

「なんだか、美術館が、よく来てくれましたねと、よろこんでむかえて下さってる気がするわ」

ママの友だちも、

「ほんと、そんな気がするわ。ありがたいわね。良い天気にも恵まれて」

ママと、友たちは、タクシーからおりて、寄りそうように、石だたみをながめながら、ゆつくり歩いていきました。十分ぐらい歩いたでしょうか。ようやく、何百年も生きてるような大木のプラタナスの樹々にかまれた美術館へやってきました。美術館入口の大きなプラタナスの枝に、白い木馬が、ぶらさがって風にゆれています。美術館の庭は、白い砂地で、左側に美術館の建物、左奥に、赤ちゃん、幼児、子供たちみんながよろこんで楽しめるメリーゴーランドがあります。多ぜいの親子づれが、長い列をつくって順番を待っています。赤、白、ピンク、ブルー、グリーン、黄色とカラフルな色で、くつきりと鮮やかに塗られて、いろいろな動物の形をした木馬たち。きゃつ、きゃつと空にひびくような声。笑ったり、泣いたり、さけんだり……。親子の楽しそうな姿は、ひろい庭を、より明るくしています。ママたちが、参加した絵の作品がシャンパンのラベルになって展示されるイベントは、美術館の入口近くで紹介されています。何台も、大きなつい立てが並び、日本の作家の、詩や書、絵、その他いろいろな分野の作品のラベルが、来場者によるこばれています。その姿は、日本とフランスの世界平和へのつながりを表しています。

いよいよ、パーティが始まります。会場は、同じ広場の入口近くに、細長い茶色のテーブルが置かれ、その上にラベルになったシャンパンが一列に並べられ、来場者の注目をあびています。大きな樽酒、四角い小さなます、プラスチックと紙のコップ、そして、ジュースや水も用意されています。

参加者、全員が席につきました。企画会社の社長さんが、まず壇上に立ち、フランスと日本の友好一六〇周年。そしてフランスでは、今日が、世界文化遺産の日であること。フランスのあちら、こちらで『ジャパンフェア』が行われていることなどを話されました。そして、すばらしい美術館で開かれたことについて館長さんへ感謝のお言葉をのべられました。この企画に参加してくれた人たちへのねぎらいのお言葉も話され、ママもじーっととききっていました。

そして、館長さんの御挨拶です。白い髪を頭のうしろにむすび、白い口ひげ、白いシャツ、黒い皮のパンツ姿の館長さんは、きれいな、やさしくてにこやかな目で、参加者を見つめて、ゆつくりとおじぎをされました。それから、ママたちツアーで参加した人たちに、通訳をとおしてフランスと日本の友情を語られました。

そのあとで、うらかたのスタッフの方々に感謝の気持ちをのべられました。

そして、遠い国フランスまで来てくれたみんなに、「記念の証」

を、ひとり、ひとりに下さいました。

名前が呼ばれ、館長さんから記念品をいただき写真さつえいをお願いします。

ママは、二番目に名前を呼ばれました。ママは、とても緊張していたのでしょうか。リズムカルな歩きではなく、小幅にちょよこ、ちょよこ歩くので、ぼくたちぞうりも、あわててしまいました。記念の品をいただき、深くおじぎをして椅子にこしかけたママは、ぼくたちぞうりに、

「ありがとうね、ぞうりちゃんたち」と、こえをかけてくれました。

「よかったね、ママ」と、いっちゃん。

「ママ、おめでとう」と、にいちゃん。

参加者全員に、記念の品が渡された頃、美術館の入口あたりから、多くのお客さんの列がつづいています。

（ありがとう）と印された小さなますに、そそがれたお祝いのお酒が、参加者に配られました。

「カンパニー」

「カンパニー、ありがとうございます」

大きな笑顔の人々の輪ができました。広場の中央で、ママたちと、いっしょにきた黒い衣装とハチマキをした若い男の人たちが、和太鼓をたたいています。

「ドン、ドン、ドドドン、ドンドンドン…」

空高くなりひびく太鼓の音に、多ぜいのフランスの親子づれが、次々とあつまってきました。ものめずらしそうに、太鼓をたたいてみる子供たちもいます。

しばらく、楽しいパーティーは続きます。

広場の右側のすみずみに植えられた花々も、風にゆれ、まるでパーティーに参加しているようです。

「きれいな花たちね。この花は、ひまわり、百日草、そしてサルビア。赤い色が濃いわね。日本のサルビアには、オレンジ色が入ってる気がするわ」

ママが、友だちの顔を見て話しかけました。

すると、友だちは、花々をさわりながら、

「そうね、ほんとにきれいな色ね。ステキ」

ママと、友だちは、花々の咲いてる姿をたのしみました。

しばらくして、パーティーは終わりました。

最後のあいさつが終わると、館長さんが、とつぜん出席者のみんなの前に立たれて、公開されていない美術品を見せてあげたいとおっしゃいました。

美術館から歩いて三分ぐらいのところ、その倉庫がありました。そこへ続く道も大きなプラタナスの樹々にかこまれています。

石だたみのステキな模様が、くつきりと映えて、歩いているみんなをくぎづけにしています。石の標本も道にそって飾られ、石だたみに使われた石の説明が、フランス語で書いてありました。

「さら、さら、さら」
プラタナスの樹から、風にふかれて舞い落ちてくる葉っぱの音が、ここちよく、ママは、足元に落ちた葉っぱを拾いながらめています。

倉庫の中には、歴史をきざんだ美術品が、数多く整理されています。舞台上使われたセツトや、いろんな動物の形をした数えきれない木馬たちが、きちんと並んでいます。

ママは、その木馬たちに、小さな声で話しかけました。
「こんにちはー、ボンジュール。お目にかかれてうれしいです。ありがとうございます」

ママの目に、涙がこみあげています。
倉庫から美術館へもどり、ママたちは、ホテルに帰ることになりました。

ぼくたちは、リズムカルに歩くママの足どりに、しあわせな気持ちでいました。

ホテルへ着いたのは、夕やけ色に空が染まりはじめた頃です。

ママは、お部屋へもどると、さっと着物をぬいで、帯や帯はじめ、小物全部をトランクの中にしまいカギをかけました。

でも、ぼくたちぞうりは、トランクの外にしています。
お化粧を急いで終えたママは

「ありがとうね。あなたたちのおかげで、パリの街を、日本の着物を着て歩くことができましたよ。つかれたでしょう、ゆっくりしてね」

と、ぼくたちを、タオルでふきながら話しかけ、ベッドのそばへ並べておきます。

「よかったね、いっちゃん」

「にいちゃん、ママは、とってもよろこんでいたね」

「うん、ぼくたち、しあわせだね」

その夜のことです。

洋服に着がえたママは、セーヌ川のクルージングへ出かけ、同じ部屋の友だちと話しながら帰ってきました。

そして、床にトランクをひろげると、荷物の整理をはじめました。そのせいで、ぼくたちは、ベッドの下の方に、かくれるようになってしまいました。

ママは、着物をトランクからとり出して、小さくたたみなおしました。トランクの中は、おみやげも増えたので、いっぱいになりました。

ママは、ぼくたち白いぞうりを、一番先にトランクに入れたと思っただけでしょうか？

すっかり、忘れていくようです。

「いっちゃん、ママは、ぼくたちのことを忘れたのかなあ？」

「にいちゃん、そんなことないよ。だって、ママの子どもになったんだから……」

「そうだよね」

ぼくたちは、何度も、ママが気づいてくれるようにさげばしました。

「ママー、ぼくたち、ここだよー」

ママは、床とベッドにひろげた荷物をぜんぶトランクにつめると、カギをかけました。

「やっと、つめ終わったわ」

「わたしも、全部準備はできました。パリは、とてもすてきだったわね」

ママは、同じ部屋にいる友だちと、たのしそうに話していきま

す。

つぎの日の朝。

いよいよ、日本へ帰るのです。ママは、ほくたちのことを、トランクの中だと思っていま

す。

「もう一度、忘れ物はないか、チェックするわね」

ママは、友だちに声をかけると、

「わすれものはないかなあ」と、言いながら、洗面所、シャワールーム、トイレ、鏡のまわり、ベッドの上、靴を置いていた所、衣類をかけてあったロッカー、全体を見てまわりました。

でも、ベッドのカバーで見えなくなっているほくたちには、気がつきません。

「ママ、ここだよ」

「ママ、ママ、ここにいるよ」

大きな声で、いくらさげんでも、ママの耳には届きません。

「いっちゃん、ほくたちどうなるのかな？」

「にいちゃん、どうなるかわからないけど、ママの子どもだ

からね、がんばろう」

ママは、カギのかかったトランクを、部屋の入口のドアの前に、友だちのトランクといっしょに並べました。

そして、最後に、もういちど忘れものの点検をしました。

それでも、ほくたちには気がつきません。ママは、部屋を見わたすと、深くおじぎをして、

「たいへん、お世話になりました」

そう声をかけると、おさいふから、ホテルのボーイさんたちにあげるチップを出して、ベッドのまくらもとにおき、部屋を出ていきました。

「いっちゃん、かなしいね」

「うん、かなしい。ママの子どもでずーっといたかったね。ほんとに泣きたいよ」

「にいちゃん、ほくたち、ずーっといっしょだよ。がんばろうね。きっと、いつかママにあえるよ。ママの子なんだから……」

しばらくして、知らない大きなおばちゃんが、ほくたちのいる部屋へやってきて掃除をはじめました。

ベッドのシーツをはずし掃除機を使いはじめたとき、ベッドの奥の方にいたほくたちに気がつきました。

「まあ、かわいいこと。日本人のものだわ。ゴミ箱が、近くにあるから捨てるつもりだったのかしら、かわいいそうに……」ほくたちは、小さな声でつぶやいているおばちゃんの声を、しっかりききました。

「日本人って、足が小さいのね。おもちゃみたいだわ。そう
だ、さっそく額に入れて飾ってあげましょう」

おばちゃんは、何でも額に入れ、飾って楽しんでる人
でした。

「ボンジュール。あなたたちを、すてきな額に入れて、みん
なが、よろこんでくれるお店に飾ってあげますよ」

ぼくたちは、そのおばちゃんに、もらわれていくことにな
りました。

おばちゃんの家につくと、ママが、ぼくたちにしてくれた
ように、おしほりでやさしくふいて乾いた布で、ボンボンと
かるくたたいて水気をとりました。そして、青い色をぬった
キャンパスの上に、ぼくたちを並べています。

(もう少し、濃い青がいいかな?)

おばちゃんのひとりごとの言葉は、わからないけど、ぼく
たちは、じーっとしていました。

おばちゃんは、キャンパスに、いろいろな色をまぜていき
ます。

しばらく、くりかえしていききました。

だんだん色が濃くなってきたキャンパス。ママが、大すき
な色です。ママの着物の裏地の色が、深い青い色「瑠璃色」
になっていたので、ぼくたちは、ママの色と思っています。

ママが、歩くたびに、ぼくたちは、そのママの着物の裏地
なでもらっています。

「ぼくたち、しあわせだね。にいちゃん」

「ほんとに、うれしいね。ママの色のキャンパスの上に、ず
ーっといるんだよ」

「ママと、いっしょにいたいかもね」

ぼくたちは、キャンパスの絵の具が、かわいてからシヤン
デリーゼ通りにあるレストランの柱の壁に、金色の額に入っ
て飾られました。「瑠璃色」のキャンパスはママです。

だから、ぼくたちは、いつまでもママといっしょにいます。

それから、うれしいことがもうひとつ、ママが日本へ帰っ
て三週間がすぎた頃、このレストランにありました。

ツアーで、フランスへ来たママたちのガイドをしてくれた
中川さんが、奥さんと、ぼくたちがいるレストランへお食事
に来たのです。ぼくたちの、すぐそばのテーブルに座ってほ
くたち白いぞうりを、ずーっと見つめています。

「ああっ、中川のおじちゃんだよ」

「そうだ、ママと話していたおじちゃんだ」

中川さんは、ぼくたちを見つめながら、ママから(白いぞ
うり)をさがしてほしいと会社を通して連絡があり、ホテル
やバスの中をさがしたけど、見つめることができなかったこ
とを奥さんに話しています。

「ここに飾ってある、こんなぞうりかもしれないな。このぞ
うりたち、大事にされてしあわせだね」

中川さんは、立ちあがって、ぼくたちを見つめています。

「日本へ連絡してあげたら。もしかしたら、どこかへ行って
しまったぞうりちゃんかもしれないから……」

中川さんへ語りかけながら、奥さんもほくたちを見つめて
います。

ゆつくり食事をしたあと、

「また、食事にくるからね。ぞうりちゃん」

「またね」

中川さんと奥さんは、ほくたちに手をふると帰っていきま
した。

「うれしいね。ママが、さがしていた白いぞうりが、ほくた
ちだつてわかったのかな？」

「きつとそうだよ。中川のおじちゃんに、また会えるんだよ
ね。たのしみだよ、ほく」

白いぞうりのいっちゃんとは、にいはちゃんは額に入れて飾っ
てくれたおばちゃんにも、ありがとうという気持ちでいます。

そして、日本に帰ってしまったママに、

『ママ、ほくたちここにいますよ。しあわせだから心配しない
でね。中川のおじちゃんに会えたんだよ。ママ、いつかきつ
と会えるよね、ずーっと待ってるよ』
と、心のメッセージをおくりました。

窓から、遠くに見えるエッフェル塔。

赤や、黄色や、緑や、むらさき色のやさしい光をはなつて、
パリの街を照らしています。

(中区)

「入選」

猫の喫茶店

金指芙美代

満開の桜の上から土手の菜の花畑に、朝日が差し込んでき
ました。

ダンボール箱の中で、からだを寄せ合って眠っていたくろ
助とみけ子の猫の兄妹は、あたたかな光に誘われて、目をさ
ました。

「くろ助兄ちゃん、おはよう、朝よ、お腹がすいたわ」

みけ子は大あくびをして、くろ助にすりよります。

くろ助もみけ子のあくびにつられるように大きなあくびを
すると、

「うーん、そうだな、ほくもお腹すいた」

ぐーんと、のびをして起き上りました。

兄妹は、ダンボール箱の中から外に出ると歩き始めました。

通りの居酒屋のゴミ箱の中をのぞいたり、ゴミの入ったポ
リ袋の中のおいをかいだりしながら食べ物をさがして歩き
ます。

カラスにつつかれたり、犬にほえられたり人間にどなられ
たりしながら、くろ助とみけ子兄妹は、くる日もくる日も食

べ物をさがして歩きました。

そして、秋も深まり枯葉が散り始める頃、くろ助が突然、

「みけ子、猫の喫茶店へ行ってみないか」

「えっ、猫の喫茶店？ それってなあに？」

「きのうね、すれちがった猫たちが、その喫茶店には、ごちそうがあるって、はなしてたんだ。たしか、あっちのほうだよ」

くろ助は、ずっとむこうにみえる急な坂道を指さしました。

「えっ！ くろ助兄ちゃん、ほんと？ その喫茶店、さがいこうよ」

「うん、いこう」

通りをぬけると、細い路地が坂道になっています。

北風が吹く中、途中までのぼってきた、くろ助とみけ子は、町を振り返り、見おろすと遠くにコスモスがゆらゆらゆれていました。

やつと小高い丘の上までのぼっていると、青い三角屋根の小さな喫茶店がありました。

「あそこだよ！ みけ子」

のら猫のくろ助が、三角屋根の喫茶店を指さし、長いしっぽをぐうつと高くのぼしました。

その青い三角の屋根には、ピンク色した猫の足あとがいくつも描かれていました。

喫茶店の入口の看板には、「猫の喫茶店」と、書いてあります。

「ほんと、『猫の喫茶店』だわ。兄ちゃんのいうとおりね」

みけ子は、そういうながらあたりをそっとみまわしました。

「ねえ、兄ちゃん、なんだか静かね」

喫茶店のちよつと先には、大きな一本のどんぐりの木がたっているだけで、あたりにはなにもありません。

サーと吹く風に、そのどんぐりの木から、実がコロリ、コロリと落ちました。

「ほんとに静かだね、あの喫茶店」

くろ助が、青い三角屋根の喫茶店をジッと、みつめます。

「兄ちゃん、だいじょうぶ？ なんだかこわいわ」

みけ子は、少し足をさげ、尾も、下にさがります。

「だいじょうぶさ、みけ子、あそこはね、猫だけが入れる特別な喫茶店だという、うわさも耳にしたのさ」

「えっ？ 猫だけの？」

「そうなんだ、きのう、猫たちが、ヒソヒソと、話してたのをきいたんだ。なんだかごちそうがあるらしいぞ、あの喫茶店。」

「わあ、ごちそう？ すごーい！」

「だろ？ だから、ちよつと入ってみるか」

「そうね、きょう、何も食べてなくて、兄ちゃん、わたし、お腹すいたわ」

「うん、おれも腹ペコさ」

くろ助は、妹のみけ子を連れて、おそろおそろ青い三角屋根の喫茶店に入っていました。

喫茶店の中は、猫たちが、楽しそうにおしゃべりをしたり、ごちそうを食べたりしていました。

奥のほうに長イスがあり、ところどころに丸テーブル、それにイスが二つずつあって、猫たちで満席でした。

くろ助とみけ子は、足おとも立てずに進みます。

すると、くろ助とみけ子に気づいた猫たちが、いっせいにジロツと、にらみました。

奥の長イスにながながとねていた太ったトラ猫が、ねそべったまま、ジイツと、くろ助たちをみると

「ここには、お前たちの席はないぞ、出ていけ！」

歯をむきだして、どなりました。

びつくりしたくろ助とみけ子は、一歩、一歩、あとずさりします。

すると、トラ猫の近くの丸テーブルのイスに座っていた美しい猫がのびをするように起き上りました。

「ちよっとあなたたち、待って」

ふんわりしたやわらかなグレーの毛、宝石のようなブルーの目が、やさしく、くろ助とみけ子に声をかけました。

「わたしは、大歓迎よ。ここは、入口の看板に書いてあるとおり、猫の喫茶店なの。のら猫と、飼い猫が集まる楽しい場所よ。毎日、みんなでなかよくおしゃべりをしたり、ごちそうを食べたりする、すてきな喫茶店。きつと、わたしたち、あなたたちともお友達になれるわ」

「ほくたちも、友達に？」

「ええ、そうよ、わたしの名前はダイアナ。飼い猫なの、でも、毎日、この喫茶店に遊びにきているの、よろしくね」

ダイアナは、くろ助とみけ子にさういうと

「ね、みんな、この子たちを仲間にしていいでしょう」

ダイアナのことばに、たちまちみんな、さうだ、さうだと、うなずきました。

するとさつきどなったトラ猫がサツと起き上り、すまし顔でダイアナの横にきて、

「ほくはトラ吉っていうんだ、君たち、どうぞこちらに座ってごちそうを食べて下さい。」

と、くろ助とみけ子にしつぽをふりました。

「ありがとう、わたし、のら猫のみけ子っていうの、このくろ助兄ちゃんもよろしくね」

みけ子は、テーブルに並べてあるごちそうをみて、

「わあ、おいしそう！ わたし、きょう何も食べてなくて、お腹ペコペコ」

さういうと、テーブルの上にとび上って、ごちそうを、むちゅうで食べはじめます。

くろ助は、

「おい、おい、みけ子、そんなに急いで食べると、のどにつかえるぞ」

と、いいながら、チャツと、えんりよがちに

「それじゃ、ほくも、いただきます。」

ダイアナとトラ吉にペコリとおじぎをしてテーブルの上に

とび上り、食べはじめました。

くろ助とみけ子兄妹は、カリカリ、ポリポリと、むちゅうで食べ、お腹いっぱいになり大満足！

まわりの猫たちが、そんなくろ助とみけ子を笑いながらながめていきます。

みんなに歓迎されたくろ助とみけ子は、大よろこびで、ポールをころがしたり、おいかけてこをします。

トラ吉は、元気にとびまわるみけ子のまわりをウロウロ、ノソノソ歩きながら見ていましたが、そのうちに、みけ子にむかつてしっぽをくるんとふりました。

「みけ子、どんぐりの木にいつて遊ぼうよ」

「あら、楽しそうね。わたし、トラ吉さんについていくわ」

みけ子は、にこにこしながら、トラ吉のあとに、ついていてしましました。

それにつられるように、ほかの猫たちも、外に出ていきましました。

やがて、にぎやかだった喫茶店も、いつのまにか、くろ助とダイアナだけになりました。

ダイアナは、長イスに座り静かに毛づくろいをしています。となりでくろ助は、ダイアナの毛づくろいを、きちんと座つてみつめています。

毛づくろいが終わったダイアナは、

「あなた飼いの猫なの？ すてきな黒い毛ね」

「ううん、ちがうよ、さつき、妹のみけ子がいったろ、ぼく、

のら猫さ。でも、いつも妹のみけ子がそばにいて毛づくろいしてくれるので、きれいにしていられるのさ」

「兄妹っていいわね」

ダイアナは、うらやましそうに首をくろ助のほうにかたむけました。

そのとき、ダイアナの真つ赤な首輪のラメがピカッと輝きました。

くろ助は、ダイアナの美しいブルーの瞳にみつめられたまま、うつとりした時間をすごしました。

少しあいている窓から風がカーテンをゆらし、そのすきまから小さな枯葉が、舞いながら入ってきて、部屋の床に音もなく落ちました。

そのとき、自転車のとまる音がして、パターンと、喫茶店の入口のドアがあき、ハンチング帽にGパンをはいた人間のおじいさんがゆつくり足をひきずり入ってきました。

「おや、きょうは静かだな」

と、おじいさんは立派にのばした白いあごひげをさすりながら、あたりをみまわしています。

「ミャーオー」

ダイアナは、一声なくと、おじいさんにすりより、あとについていきます。

くろ助は、おじいさんが急に喫茶店に入ってきたので、あわててテーブルのすみにかくれ、まるくなっていました。

でも、おじいさんはすぐ、くろ助をみつめました。

「あれ？ そこにいる猫は新人かな。ようこそ、いらつしゃい」

フードジャンパーをぬぎ、テーブルの上に置くと、ゆつくり近より、くろ助のあたまをそつとさすりました。

くろ助は、おじいさんの大きい手でなでられて、

(人間の手って、すごく、温かくてやさしいんだ)

と、おじいさんの足もとに、静かに何回もすりよりました。

「気持がいいなあ、おかげで若いころに痛めた足がなおりそうだよ」

おじいさんは、うれしそうに、もういちどくろ助のあたまをなでました。

そして、

「さあ、そうじ、そうじ」

と、チリトリとほうきを出して、足をひきずりながら楽しんで口に笛を吹き、テーブルやイスを片付けます。

でも、すぐに、

「わしは、ひざが痛くてね」

そうつぶやいて

「どっこいしょ」

おじいさんは、イスに座りひとやすみ。

そして、

「こっちへおいで」

くろ助を抱きました。

おじいさんは、抱いたくろ助をのぞきこんで

「わしは足が痛くても、この楽しい猫の喫茶店にきたくてねえ。」

そつとくろ助をなでて、につこり笑いかけます。

くろ助は、やさしい人間にはじめて抱かれほんわかして目をとじました。

この三角屋根の喫茶店は、おじいさんが、若いころ、奥さんのみやさんとふたりでひらいたお店です。

そこに、トラ吉が迷いこんできたのです。

おじいさんと奥さんのみやさんは、まだ、子猫でやせ細っていたトラ吉をとてかわいがり、毎日ミルクを飲ませながら、大切に育てました。

そのおかげで小さかったトラ吉は、まるまる太った猫になりました。

それから年月が立ち、元気だった奥さんのみやさんが腰を痛め、時々、喫茶店を休むようになりました。

そのうち、おじいさんも、店までの急な坂道を歩いてのぼるのがつらくなり、とうとう店を閉めることになりました。

でも、トラ吉の誘いで、いつのまにか店にのら猫たちが集まり、飼い猫もくるようになりました。

それで、おじいさんは、青い三角屋根の喫茶店の入口に、「猫の喫茶店」という看板をかけたおきました。

そして、時々、おじいさんが、猫たちのようすをみにくるのでした。

おじいさんは、くろ助をイスに置くと、

「さあ、食べておくれ、このミルクは、トラ吉の大好物だよ。トラ吉、きつと、よろこぶぞ」

そういつて、ごちそうをテーブルに並べました。

並び終えたおじいさんは、

「猫たち、よろこぶぞ」

また、にっこり、つぶやいて、ほっとしたように

「どっこらしよつと」

長イスに座りました。

そして、ダイアナと楽しそうにおしゃべりをします。

「そうか、そうか、トラ吉は、どんぐりの木のまわりで遊んでいるのか」

ダイアナは、

「そうよ、みけ子がトラ吉についていったわ」

「みけ子？」

「さよう、いま、おじいさんが抱いていた、くろ助と一緒にきた新しいお友達よ、みけ子っていうの」

「ほう、そうか、そうか、うんうん」

にっこり、うなずいて、

「トラ吉もよかったなあ。新しい友達ができて、よかった、よかった」

と、おじいさんは、ひとりごと。

そしてまた、

「どっこいしょ」

と、長イスから立ち上ると、

「ダイアナ、さあ帰るぞ、またな、トラ吉によるしくな」

足をひきずり外にでたおじいさんを、ダイアナとくろ助は、みおくります。

おじいさんは、両ひざをゆっくりなでてから、大きくのびをして、ドアの外に置いてある自転車に乗り、もういちど

「またな」

と、いうと、急な坂道をサアッと、おりにきました。

ダイアナとくろ助は、青い三角屋根の入口で、おじいさんのうしろすがたを、みおくります。

「たいへん、たいへん」

むこうから、みけ子があわてて走ってきました。

「みけ子、どうしたんだ」

くろ助がききました。

「トラ吉さんが、たいへん」

「トラ吉が？ たいへん？」

ダイアナは首をかしげます。

「あのね、トラ吉さんがね、ブルブルふるえてて……」

「えっ？ どうしてふるえてるの？」

「それが、どんぐり……」

「わかった！ どんぐりひろってたら雑木林から、また、トラ吉の大的苦手のへびが出たのね」

と、ダイアナはみけ子をつめめます。

すると、みけ子は、

「へび？ ちがうわ、へびじゃないわ、どんぐりの木のとっぺんで…」

と、いいかけます。

「やっぱり、へびよ。トラ吉、へびをとでもこわがるのよ。だから、へびのぬげがらをみたのよ。きつとそうだわ。木のとっぺんにかまっていたんじやないの」

みけ子は首を横にふりながら、

「ううん、ちがうの、ダイアナさん。あの雑木林のどんぐりの木とて、とても高くて大きいでしょう」

「ええ、そうよ。でも途中までのぼって行って、帰ってくるよ、とても楽しいわよ。だから、どうしたっていいのよ」

みけ子は、泣き声で、

「おられないの。トラ吉さんが、木のとっぺんにのぼったまま…。どうすればいいの」

「おられないって？ おかしいわね、サーっと、おられるはずよ」

「最初は、トラ吉さんと、どんぐりの木の下で遊んでいたの、そしてねトラ吉さんが、どんぐりの木で爪をとぎはじめたの、だから、わたしもトラ吉さんと並んで、むちゅうで爪をといで、とても楽しかったの」

「楽しかったって？ みけ子、よかったじゃないか」と、くろ助。

「でも、トラ吉さんたら、急に片目でウイंकして、木にのぼりはじめたの、どんどのぼっていくから、わたし、『トラ吉さん、あぶないわよ、おりてきて』っていったの。そして、またウイंकをして、とうとう、とっぺんまでのぼってしまつて…。」

「しょうがないトラ吉だこと」

ダイアナは、あきれています。

「それで？」

「それでね、トラ吉さんのぼったまま木のとっぺんにかじりついて、おりるのがこわいといつて、おりてこないの。早く、トラ吉さんを助けてあげて」

「わかったわ」

ダイアナは、くろ助といっしょに、みけ子のあとについて、どんぐりの木の下まで走ってきました。

すると、トラ吉がどんぐりの木のとっぺんから下をむいてブルブルふるえて木にしがみついています。

ダイアナは、トラ吉をみあげて、

「トラ吉、なにやっつんのよ！ 早くおりてきなさいよ！ いつもとっぺんまでこわくてのぼれなかったのに、どうしてのぼっちゃったのよ」

（どうしてつていったって…。みけ子にいいところ、みせてあげたかったんだ）

トラ吉は、木に両手をまわし、動こうとしません。

「トラ吉、しっかり木につかまりながら、おしりのほうから、

サツサツサーと、おりてきなさいよ」

ダイアナが、またそういうと、

「おしりからって？ どうやって？」

「どうやってっていったって、こうやって、ね、くろ助、くろ助、やってみせてあげて」

「うん、わかった」

くろ助は、どんぐりの木の途中までのぼって、おしりからスルスルスリとさがって、ストーンと地面に着地。

「ほうらね、くろ助のようにやるのよ」

「だいじょうぶだよ、トラ吉さん」

と、くろ助。

「トラ吉さん、こわくないからおりてきて！」

と、みけ子も励まします。

しかし、トラ吉は、木のてっぺんでしがみついたまま、下をむいてふるえています。

「困ったわね」

ダイアナもくろ助もみけ子も、心配そうにトラ吉をみあげています。

「そうだわ！」

ダイアナは、手を打つてうなずきました。

そして、大きな声でいいました。

「トラ吉！ 今ね、おじいさんがきたの。ごちそういっぱい持ってきたわ、おいしそうよ、それにね、トラ吉の大好物のミルクも、たっぷりあるわよ」

ダイアナが、そういったとたん、
(ミルク、久しぶりだな)

トラ吉は、ミルクミルクといいながら、スルスルストーンと、大きなどんぐりの木のてっぺんからとびおけると、三角屋根の喫茶店にむかつて走りだします。

「トラ吉さん、まってよ！」

みけ子があわててトラ吉をおいかけていきました。

「あんなにふるえていたのに、トラ吉ったらミルクつてきたとたん、あつというまに、おりてくるんだから、まったくあされたわ」

ダイアナは、素晴らしいながら、くろ助に、にっこり笑いかけました。

くろ助も、ダイアナをみて、にっこり。

喫茶店の中には、おじいさんが持つてきたごちそうが、テーブルのあちらこちらに並べられています。

ミルクも、たっぷり、うつわに注がれています。

トラ吉は、猛スピードで喫茶店の中に入ると、甘いミルクのにおいがプーンとしました。

「ピチャピチャピチャ、おいしいな、ピチャピチャピチャ、おじいさんありがとう」

トラ吉は、勢いよくミルクを飲みます。

ダイアナも、ふわふわの口もとの毛が、白いミルクにつつまれています。

くろ助もみけ子も、むちゅうで飲んだり、食べたりしました。

そのうち、ごちそうやミルクのにおいを、かぎつけて、つぎからつぎへと、猫たちが、喫茶店に帰ってきました。

ミャーオー、ミャーオーと、とてもにぎやかになりました。窓のすきまから、さわやかな風について、赤い枯葉が一枚、ミルクの上にポトリと落ちて、ゆらゆらゆれていきます。

猫たちは、三角屋根の喫茶店の中で、みんな、なかよく、おしゃべりをしたり、ボール遊びをしたり、枯葉をおって、じゃれあっています。

くろ助は、ミルクをたつぷりのんで、まるくなっています。まにかねてしまいました。

そのくろ助に寄りそうように、ダイアナもきもちよさそうに目をとじます。

そして、冬がすぎ、また、春がきて、桜の花がぼつぼつ開き始めたころ、ダイアナにみそめられたくろ助は、ダイアナと結婚しました。

そして、トラ吉も、みけ子のかわいらしさに一目惚れして、結婚したのでした。

あたたかな春の日。

青い三角屋根の喫茶店の中では、くろ助とダイアナ、トラ吉とみけ子の披露宴が、なかまの猫たちによって、盛大に、

おこなわれました。

おじいさんと奥さんのみやさんも披露宴に招待されました。

みやさんの手作りの、クローバーの花束を持って、幸せそうにみつめあう二組のカップルに、みんな、よろこびいっぱい笑顔で拍手をおくっています。

すきとおった空からの光に、青い三角屋根の「猫の喫茶店」は、やさしくつつまれていきました。

(南区)

うさぎのあやとりうた

如月はるの

むかしむかし、あるところに、太助という若者がおりました。

太助は、びょうきでねたきりの、年をとったおかあさんと二人でくらしています。

ある日太助が、おかあさんのために、くすりを買いに町まで行つたときのこと。

家にかえるとちゆう、山道をくだっていました。

すると、どこからともなく、かわいい歌がきこえてくるではありませんか。

「おや？」

太助が声のほうに近づいていくと、うさぎが、歌いながらあやとりをしていました。

あやとり あやとり やつてみて

世界中のみんなが すきになる

あやとり あやとり やつてみて

と、歌っています。

うさぎが「日本の花よ」と歌うと、ふしぎふしぎ、あやとり糸は、菊の花のかたちになりました。

太助は、目をみはりました。

つぎに「日本の山よ」と歌うと、ふしぎふしぎ、うさぎのあやとり糸が、こんどは、ふじの山のかたちにかわっていききました。

それから、うさぎのあやとり糸は、まるでうちあげ花火のように、つぎつぎと、ちがうかたちをつくりだしていききました。

太助がむちゆうになつて、うさぎのあやとりを見てみると、いつのまにか、あたりがうす暗くなっていました。

「あつ、もう帰らなくっちゃ」

太助がひとりごとをいうと、もうそこにはうさぎはおらず、ただ一本のあやとり糸が、草の上においてありました。

太助は、そのあやとり糸を、そつとひろいました。

そして、その糸をにぎりしめると、はしつて家に帰りました。

家にはいると、さつそく太助は、うさぎがやっていたことを思い出して、あやとりで、いろいろな形をつくらうとしました。

なかなか、うまくいきません。

そこで、太助はまずひとつ、菊の花をつくれるようにしようと思いました。

「一生けんめいに行っている、ようやく、できるようになりました。」

「日本の花」と歌うと、太助の手の中に菊の花のかたちのできたのです。

そうすると次は、あやとり糸で、ふじ山がつくりたくなりました。

できると太助は、たのしくなってきた、

「そうだ、かあさんにも、ふしぎなあやとりを見せたい」と思いました。

太助は、いそいで、ねたきりのおかあさんのそばまでいきました。

そして、ひざをおつてきちんとすわると、うさぎのあやとりうたを、うたいました。

あやとり あやとり やつてみて

世界中のみんなが すきになる

あやとり あやとり やつてみて

おかあさんは、目をとじたまま、きいていましたが、そのうちに、ちよつとほえんだようでした。

太助は、またつぎの日も、おかあさんの枕もとにすわって、うさぎのあやとりうたを、歌いました。

そして「日本の花よ」と歌いながら、あやとりで、菊の花のかたちをつくりました。

何回もくりかえしてつくっていると、あらふしぎ。おかあさんは、目をひらき、太助のつくったあやとりの菊の花を、ここにこしながらみているではありませんか。

太助は、うれしくなつて、つぎの日も、またつぎの日もうたいながら、あやとりの菊の花をつくつてみせました。

そんなある日、太助はそろそろちがう形のをみせたくなつて、次はふじ山だなど、思いました。

いつものように太助は、おかあさんの枕もとにきちんとすわつて、あやとり糸でふじ山のかたちをつくつてみせました。

ねたまま太助のつくつたふじ山をみていたおかあさんは、ふしぎふしぎ。

ひとりでおきあがり、太助とむきあつて、すわりました。おかあさんは、太助があやとりでこしらえるふじの山を、

やさしくほほえみながら、みつめています。

太助は、おどろいて、またなんでもくりかえして、ふじ山のかたちをつくつてみせました。「日本の山よ」とうたいながら。

すると、おかあさんは「あやとり糸を、わたしにかしてごらん。」といって、手をさしだしました。

太助が、あやとり糸をわたすと、おかあさんは、にっこりほほえんで、すらすらと菊の花をつくるではありませんか。

太助の目はまるくなりました。

おかあさんの手は、あのうさぎのように、器用に動いて、つぎつぎといろいろな形をつくつていきました。

太助はうたいました。

うさぎのあやとり糸は、うたにあわせて、おかあさんの手
の中でおどっているようです。

太助は夢をみているようでした。

ついでこのまえまで、ねたきりだったおかあさんのすがたは
もうありません。

ふしぎだなあ すごいなあ

太助は、たのしくてたのしくて、おかあさんと、うたった
りつくったりしていると、いつのまにか、あたりがすっかり
暗くなっていました。

太助は、はじめてうさぎに会った日のことを思い出してい
ました。

すると、どこからともなく、うさぎの歌声がきこえてきま
した。

あやとり あやとり やってみて

世界中のみんなが すきになる

あやとり あやとり やってみて

太助は、うさぎをおもって、そと手をあわせました。
そしてこう歌うのです。

美しい花 菊の花

あやとり糸で つくりましょ

日本一の ふじの山

うさぎの糸で つくりましょ

あやとりしましょ おかあさん

花が咲くよに つぎつぎと

あやとりしましょ うたいましょ

たのしい時は 夢のよう

うさぎはどこに いったのか

太助はきょうも うたいます

あやとり糸を おどらせて

母のしあわせ ねがいつつ。

おわり

(中区)

「入選」

空の神様の贈り物

生崎 美雪

六月の日曜日、窓のむこうから、ポツリポツリと、雨の音が聞こえてきました。

奈津美は、ふとんの中で、そっと目を覚ましました。

「雨降ってる。せつかくの日曜日なのに。」

奈津美は、つまらないな、と、思いながらも仕方なく布団から起き上がって、パジャマのまま、窓のそばまでいくと、

白いレースのカーテンを開けました。

「雨、やんでくれるといいのに……。」

その時、空の上の方から、声が聞こえてきました。

「奈津美ちゃん。お庭をよおく見ていてごらん。素敵な魔法をかけてあげるよ。」

奈津美は、びっくりして、空を見上げました。

白いひげをはやしただおじいさんが、ふわふわと浮かぶ雲に乗って、にっこり笑っているのが見えました。おじいさんは、長い木の杖を、ゆっくりとふると、

「空の上の神様からの贈り物だよ。素敵な六月の雨の日曜日になりますように。」

そう言って、雲に乗ったまま、ふわりと空を飛んでいきました。

すると、雨の音が、きれいな音楽になって、奈津美の庭に響き渡りました。

奈津美が庭を見ると、大きな紫陽花の緑色の葉っぱの中に、小さな紫陽花の赤ちゃんたちが、たくさん、顔を出していました。

ピンク、薄紫、水色、白。いろいろな色の小さなお花たち。仲良く寄りそうように咲いています。

「まあ、素敵。お花の赤ちゃんたち。」

雨の音楽は、優しい子守り歌をかなでて、庭の紫陽花の花たちに、

「こんにちは、お花の赤ちゃんたち。」

と、話しかけているようです。

奈津美は、うれしくなりました。

「雨が降って、なんだか憂うつな日曜日になりそうだなって、思ったけれど、こんなに素敵な贈り物を、空の神様が、お庭に届けてくれるなんて……。」

奈津美は、パジャマから、お気に入りの白いブラウスと、小花模様のスカートに着がえて、階段をおりていきました。リビングには、もう朝ごはんの支度が出来ています。

「おはよう、奈津美。」

「おはよう、奈津美ちゃん。」

お父さんとお母さんが、奈津美に、にっこり笑いました。

「おはよう、お父さん、お母さん。」

奈津美は、テーブルの上の朝ごはんを見て、

「コーンスープとトーストにサラダ。おいしそうな朝ごはん。」

と、言つて、にっこり笑いました。

「ワン、ワン、ワン。」

奈津美の足もとで、マルチーズのバニラが、奈津美を見上げて、啼きました。

「バニラ、おはよう。」

奈津美は、朝ごはんを食べながら、お父さんとお母さんに、言いました。

「今朝、私、空の上の神様から、素敵な贈り物もらったの。」

「へえ、どんな贈り物かい。」

お父さんが、奈津美の顔をのぞきこんで、聞きました。

「あのね。私が、雨が降つて、せつかくの日曜日なのに、つまらないなつて思つていたら、空から、神様の声が聞こえてきたの。」

「まあ、不思議。」

お母さんは、続きが聞きたくて、奈津美を見ます。

「お庭に、雨の音楽が、響き渡つて、紫陽花の小さなかわいい赤ちゃんたちが、いっぱい顔をだしたの。」

「あら、素敵。」

お母さんが、目を輝かせました。

「朝ごはんのあとに、みんなで一緒にお庭に出て、紫陽花の

咲いている庭を見てみよう。」

お父さんが、言いました。

「そうね。そうしましょう。」

お母さんは、奈津美にむかつて、にっこり笑いました。

「ワン、ワン、ワン。」

バニラもうれしそうに、しつぽをふっています。

朝ごはんがすむと、奈津美は、お父さんと、お母さんと、バニラと一緒に、ベランダから、庭に出ました。

雨音が、庭に流れて、響いています。

その雨の音楽に、優しくつつまられるように、紫陽花の小さな花の赤ちゃんが、緑色の葉っぱのお布団の中で、スヤスヤと寝息をたてて眠っています。

「かわいい。」

奈津美は、そう言うと、空を見上げました。空の上から、また、空の神様の声が聞こえてきました。

「奈津美ちゃん。もう一つの贈り物だよ。」

雨がやんで、おひさまの光が降り注ぎました。すると、キラキラと輝やく七色の虹の橋が、紫陽花の赤ちゃんたちが、眠っている庭に、かかりました。

(中区)

「入選」

またねー

かまくらゆきこ

「行つてきまーす」

ソウタは小学二年生。

けさもソウタの元気な声が聞こえます。

「行つてらっしゃい、車に気を付けるんだよ」と、お父さん。

「ソウタ早ーい。もう行くの?」

これはお姉ちゃん。

「忘れものはない? 宿題はちゃんとやってあるの?」

心配性のお母さんは玄関まで見送ります。

「大丈夫!」

そう言うと、テレビコマーシャルで見て欲しくなり、買っ

てもらったばかりの

「早く走れる様になる」

と評判のジョギングシューズをはきました。

そして

「今日もいるかな?」

と、ワクワクしながら外に出ました。
なぜって……

ソウタが住んでいるマンションでは、まいあさ

「チュン、チュン」

と、にぎやかなスズメたちのこえが聞こえてきます。いつも決まって、そのうちの二羽が、屋根にとまってソウタを見下ろしているのです。

そーっと見上げると……

いました! スズメたちが

「チュン、チュン」

と、鳴いています。

「ソウちゃんおはよう。行つてらっしゃい。今日も楽しくね」
こんな風にソウタには聞こえるのです。

「うん、行つてくるよ。スズメさんたちも楽しい一日になる
といいね」

いつもの様に、そう声を掛けて

「バイバイ」

と、大きく手を振って、マンションのエレベーターに乗って一階まで下り、学校に向かいました。

一時間目は、こくごの授業です。

先生が

「今日は『舌切りすずめ』の本を読みます」

と、言いました。

「えっ、舌切りすずめって……」

ソウタはおどろいて先生を見つめました。

昔々、せんたくに使おうとおばあさんが用意した『ごはんのり』を食べてしまったすずめが、怒ったおばあさんに舌を切られ、やさしいおじいさんに助けられ恩返しをする、という物語で

「舌を切るなんて、ひどいじゃないか！」

と、ソウタは悲しくなりました。

でもその後、おばあさんはとても恐い目に合うので

「いいぞ、すずめさん！」

と、うれしくなりました。

そして、

「ぼくをまいあさ見送ってくれるスズメさんたちは、いつも何をしているのかなあ？」

と、思いました。

次の日のあさ、いつもの様にソウタは

「行ってきまーす」

と、いきおいよく玄関のドアを開け、屋根を見上げました。

「あれっ？」

きのうまで

「チユン、チユン」

と、にぎやかだったのに、今日はシーンとしていて、スズメたちの姿も見えません。

「まだ寝ているのかなあ、それとも、もうお出掛けしちゃったのかなあ……」

ソウタはさみしくなり、学校でも、家に帰ってからも、スズメたちの事を考えていました。

なんだか気になってあさ早く目が覚めてしまったので、パジャマ姿のまま外に出て、ドキドキしながらそーっと屋根を見上げると……

いました、いました！

「よかったー。もう、いなかったから心配してたんだよー、ぼく」

ホッとしてそう声を掛けよく見ると、なんだか前よりも汚れていて、羽もバサバサしているのに気づきました。

するとスズメは

「ソウちゃん、おはよう。あさはずいぶん涼しくなってきたね。少しあたたかくして行ってらっしゃい」

と、いつもより小さなこえで言いました。

「なんだか元気ないな……」

と、ソウタは思いました

「うん、ありがとう。困った事があったら言ってね、ぼくが助けるから」

そう言って、学校に行くしたくをしました。

あんなに暑くて長い夏が続いていたのに、いつの間にか、

季節は少しずつ秋から冬へと向かっていたのでした。

次の日は、スズメたちのにぎやかなこえで目がさめしました。カーテン越しに、やわらかで明るい光があたたかく差し込んでいます。

「わーっ、なんていいお天気！」

ソウタはうれしくなつてベッドからとび起きました。

早くスズメたちに会いたくて、お母さんがあさごはんを用意してくれた、イチゴジャムをたっぷりつけたバタートーストをおおいそぎで食べました。

「ほらほら、もつとゆつくり食べないと、のどにつかえてしまうわよ」

お母さんは心配そうに見ています。

「平気だよ、ごちそうさまでした。行ってきまーす」

と言つてランドセルを背負い、かけ出して行きました。

「ソウちゃんおはよう。今日は私たちのお父さんとお母さんも一緒に来たよ。マラソン大会がんばつてね」

と、スズメが応援してくれました。

「わすれてたー、今日はマラソン大会があるんだつた。ぼく、ちつとも早く走れないんだもん。イヤだなあ……」

走るのが苦手なソウタはすっかり悲しくなつてしまいました。

でも、今日はスズメたちのお父さんとお母さんにも会えたと、マラソンの応援もしてもらえたので、何だかがんばれる

気がしてきました。

「ありがとう。ぼく最後まであきらめないで走るよ」

ソウタは大きな声でこたえました。

よく朝も、スズメたちはお父さんとお母さんと一緒にいました。

「ソウちゃん、いつも子スズメたちと仲よくおはなししてくれてありがとう。もうすぐ寒い冬がやってくるから、私たちは今のうちにたくさん食べて、もう少し広い所にひっこすつもりです。もうすぐ、かわいいヒナも生まれます。あたたかい春になったら、また会いに来ますね」

と、お父さんスズメが言いました。

「そうか、雨の日や寒い日は、ごはんが食べられなくて大変だったんだね」

ソウタは、スズメたちが汚れていたり羽がバサバサしていたわけが分かった気がしました。

「うん、さみしいけど、ヒナに会えるのを楽しみにしているよ。またねー」

そう言うと、ソウタは元気に学校へ向かいました。

春になって桜が咲く頃、ソウタは三年生になります。

ほほにあたる風は冷たかったけれど、またスズメの家族に会える日まで、ほんの少しのお別れです。

おしまい

(西区)

〔入選〕

ビードロを吹く少女

関根 栄二

「小宮徹くん」

先生から名前を呼ばれて、徹の胸は、ドキドキと鳴っていました。

「はい」

徹は返事をして、起立しました。そして先生の机のところに、通信簿をもらいに行きました。

「よくがんばったね」

先生はそう言って、にっこりとほほえみながら、徹に通信簿を渡してくれました。徹は自分の席に戻ると、通信簿を、そつと開きました。

「徹、どうだった？」

前の席から、祐二が、徹の通信簿をのぞきながら言いました。

「見るなよ！」

徹は、ボタンと通信簿を閉じました。

今日は、三学期の終業式です。通信簿をもらう時は、胸がドキドキするものです。でも今日の徹は、一学期や二学期の

終業式とは比べものにならないほど、ドキドキしていました。それは、おとうさんから、「三重丸が二十個以上あったら、新しい自転車を買ってあげる」と言われていたからです。徹は、祐二にのぞかれないように気をつけながら、もう一度、そつと通信簿を開きました。そして、

「一、二、三、四……」

と、三重丸の数を数えていきました。

「十八、十九……二十！」

三重丸の数は、ちょうど二十個でした。

「やったーっ！」

徹はうれしくて、思わず大声で叫んでしまいました。その声の大きさといつたら、クラスのみんながびっくりして、いっせいに徹の方をふり向いたほどでした。

「これで、新しい自転車が、買ってもらえるぞ！」

徹は大喜びで、学校が終わると、走って家に帰りました。

「おかあさん、おかあさん、やったよ！三重丸、二十個あったよ！」

徹は、家の中かけ込むと、台所にいる、おかあさんに向かって叫びました。

「そう、よかったね。これで、新しい自転車、買ってもらえるわね」

おかあさんは、台所から出てきて、喜んでくれました。「うん！ ああ、おとうさん、早く帰ってこないかなあ」

徹は、早く晩になって、おとうさんが帰ってくるのが、待ち遠しくてたまりませんでした。

ようやく晩になって、おとうさんが帰ってきました。いつもは、おとうさんが帰ってきてても、知らん顔をして居間でテレビを観ている徹ですが、今日ばかりは、玄関へ迎えに出ました。

「おとうさん、お帰りなさい。通信簿、もらったよ」

徹はニコニコして、おとうさんに言いました。

「三重丸、ちょうど二十個だったよ」

「そうか、ギリギリだったなあ」

と、おとうさんは笑って言いました。

こうして徹は、おとうさんとの約束通り、新しい自転車を買ってもらいました。最新式のスポーツ自転車です。

「徹には、ちょっと大きすぎたかな？」

と、おとうさんが言いました。徹はまだ三年生で、今度、四年生になるところなのです。おとうさんは、自転車のサドルを、一番低く調整してくれました。徹がまたがると、なんとか両足のつま先が、地面に届きました。

「ああ、よかった！」

徹は、とてもうれしくなりました。

「徹、新しい自転車を買ってもらったからって、春休み、毎日遊んでばかりじゃあ、だめよ。」

おかあさんに注意されて、徹は、

「わかってるって」

と答えました。でも、できることなら、春休み中はずっと、朝から夕方まで、自転車を乗り回していたいなと思いました。

徹は、新しい自転車に乗って、あちらこちらに、出かけるようになりしました。友達の家も、一通り、全部回りました。

おかあさんに注意されたことなど、もうすっかり忘れて、一日中自転車で走り回っていました。もう行くところがなくなってしまうほど、あちらこちらに行きました。

「どこかほかに、行く所はないかな？」

と、徹は考えました。そして、

「そうだ、こんびら様の丘へ行ってみよう」

と、思いつきました。

「こんびら様」とは、徹が通う小学校から、歩いて三十分ぐらいの所にある、神社のことです。境内の奥が丘のようになっています。「こんびら様の丘」と呼ばれているのです。去年の秋、学校で写生大会があつて、徹たちは、こんびら様の丘へ行きました。とても景色がよくて、いい所だなと、徹は思いました。写生が終わったあとは、ビニールふるしきを広げて、お弁当を食べました。ちょっとした遠足気分を味わうことができ、楽しい一日でした。その時のことを思い出して、久しぶりに行ってみたいくなったのでした。徹は自転車にまたがると、はりきって出発しました。

こんびら様へ向かう道は、途中から砂利道になります。そして、かなり急な坂になっています。徹は、いっしょうけんめいに、自転車をごぎました。三月としては暖かい日だったので、徹のおでこには、汗が光っていました。道の両側には、ツクシがたくさん、顔を出していました。

「ああ、やっと着いた！」

徹は自転車をおりて、まずはこんびら様に、お参りをしました。このところ、暖かい日々が続いていたせいか、あたりには、もうタンポポがたくさん咲いていました。徹は、タンポポの綿毛を散らしながら、丘の上へと歩いていきました。すると、その時、

「ポッペン、ポッペン」

という、聞き慣れない音が聞こえました。

「何の音だろう？」

徹は、音のする方へ、行ってみました。すると、腰かけぐらしいの高さの、大きな石に、知らない女の子が座っていました。ちょうど、徹と同じぐらいの歳でしょう。そして、笛のような形のを、手に持っていました。

「誰だろう？」

その少女が、笛のようなものを吹くと、

「ポッペン、ポッペン」

と、不思議な音がするのです。

徹は、少し離れた木陰から、しばらくその様子を見ていました。すると、その少女は、徹に気がついて、ちょっとびっ

くりしたような顔をしました。そして、手に笛のようなものを持ったまま走り出して、丘の下の方にある森の中に、姿を消してしまいました。徹は、なんだかあつけにとられてしまいました。それで、しばらくポカーンと口を開けたまま、木陰につつ立っていました。

徹は家に帰ってきてから、ポッツとして、今日会った少女のことを考えていました。考えれば考えるほど、不思議でした。あの子はいつたい、だれなのだろう？ どうして、あんな所にいたのだろう？ どうして、森の中へ消えていったのだろう？ そして、持っていた、あの笛のような物は、何なのだろう？

もしも本当に笛だったら、「ピーツ」とか、「ピューツ」という音がするはずです。それなのに、「ポッペン、ポッペン」なんていう、聞いたこともないような音がするなんて……。もしかしたら、あの少女は、森の妖精だったのではないかと、徹は思いました。

次の日、徹はもう一度、あの少女に会いたいと思いました。そして、自転車に乗って、こんびら様の丘へと向かいました。こんびら様の境内に自転車をとめて、丘の上へと歩いていくと、昨日と同じように、

「ポッペン、ポッペン」

という音が聞こえてきました。

「あの子だ！」

徹は足音をしのばせて、丘の上に出ました。あの少女が、昨日と同じように、大きな石に座っていました。そして、あの不思議な、笛のようなものを吹いていました。

少女は、すぐに徹に気がつきました。そして、徹に向かって、にっこりとほえんだのです。まるで、徹が来るのが、わかっていたかのようでした。

徹はドキッと、立ち止まりました。すると少女は、急に立ち上がり、走り出しました。そして昨日と同じように、森の中に、姿を消してしまいました。

「ああ、また見失った！」

と、徹はがっかりしました。そして、今度会えた時には、思い切って話しかけてみようと思いました。

次の日は、朝から天気がよくありませんでした。どんよりとした雲が空いっぱい広がって、今にも雨が降ってきそうでした。テレビの天気予報でも、「今日は、昼過ぎから雨が降るでしょう」と言っていました。それでも徹は、こんぴら様の丘へ行きたくて、たまりませんでした。また今日も、あの少女に会えるかもしれないと思ったからです。

でも、天気はますます悪くなるばかりでした。黒い雲がもくもくと立ちのぼり、空はどんどん暗くなってきました。

「これじゃあ、今日はもう、無理かなあ……」

雨が降りそうだったら、あの少女だって、こんぴら様の丘に来ないでしょう。でも、行くだけ行ってみようと思つて、

外へ出ようとすると、

「徹、どこへ行くの？」

と、おかあさんが呼び止めました。

「ちよつと……自転車で、散歩してくる」

「やめなさい。もうすぐ雨が降ってくるよ」

「すぐに帰ってくるよ」

徹は、おかあさんが止めるのも聞かずに、自転車でまたがりました。すると、その時、雨が一つぶ、ポツンと、徹のおでこに当たりました。

「あつ、雨だ」

そして、すぐに大つぶの雨が、ザーザーと音をたてて、降ってきてしまいました。

これではもう、今日は、こんぴら様の丘へ行くのをあきらめるしかありませんでした。徹は、まっ暗な空を、うらめしそうに眺めました。降り続ける雨の中に、あの少女の横顔が、うつすらと浮かんでいるような気がしました。

次の日の昼過ぎになって、雨はようやく上がりました。徹は、こんぴら様の丘へ行きたくて行きたくて、たまりませんでした。雨が降っている間は、ずっとウズウズとしていたのですが、ようやく雨が止んだので、待ってましたとばかりに、自転車で乗って、走り出しました。

もちろん、こんぴら様の丘へ行つたからといって、必ずあの少女に会えるとは限りません。でも徹は、会えると思いた

かったのです。「ポッペン、ポッペン」という音がする、不思議な笛を吹いていた、あの少女……。徹は、少女の横顔を思い浮べながら、自転車をこぎ続けました。

こんびら様の境内に自転車をとめて、丘の上に向かってきも、あの、「ポッペン、ポッペン」という音は、聞こえてきませんでした。「今日は、来ていないのかな……」と、徹は思いました。そして、丘の上に出て、あたり一面を見まわしてみましたが、あの少女の姿はありませんでした。

まだ雨が上がったばかりだったので、あたり一面は雨に濡れて、どこもビツシヨリでした。あの少女が座っていた大きな石も、雨に濡れていて、上の方にたまった雨水が、したたり落ちていました。「もしかしたら、座るところがないから、帰っちゃったのかな？」などと、考えたりもしました。今日もあの少女は、一度はここに来たことを、徹は信じたかったのです。

「あつ、虹だ」
徹が空を見上げると、きれいな虹が出ていました。その虹を見ていると、徹は、明日は必ず、あの少女に会えるような気がしたのです。

「徹、いくら春休みだからって、自転車で遊びに行っ
てばかりじゃあ、だめじゃないの。」

家に帰ると、徹はおかあさんに、叱られてしまいました。「いったい、どこへ行っているの?」

おかあさんに問いつめられて、徹は、しぶしぶ答えました。
「……こんびら様の丘」

「こんびら様の丘? どうして、そんな所へ行くの?」

「……去年、学校の写生大会の時に行つて、いい所だったから」

「しようがない子ねえ」

徹は、あの少女のことを、おかあさんに話すことはできませんでした。それで、ちよつと後ろめたい気持ちになりました。どうして、こんびら様の丘に行くのかといえば、あの少女に会いたいからなのですから。

「徹、本当は、ほかに理由があるんだろう?」

徹とおかあさんの話をきいていたおばあちゃんが、おかあさんのいない所で、こっそり徹に話しかけてきました。徹は、おばあちゃんには本当の理由を話そうと思いました。

「こんびら様の丘にね、知らない子がいて、笛みたいな物を持っていったんだ」

「えっ、笛みたいな物?」

「うん。それを吹くとね、『ポッペン、ポッペン』っていう音がするんだ」

「きつと、それは『ビードロ』だねえ。確か、長崎のおみやげだったと思うよ」

「えっ、長崎?」

長崎のおみやげ品を吹く、見知らぬ少女……。徹は、ますま

す不思議に思いました。

「その子って、もしかして女の子？」

「……うん」

おばあちゃんに聞かれて、徹は下を向いて、小さな声で答えました。おばあちゃんは、にっこりとほほえんで、

「きつとその子は、お友達がほしいんだね」

と言いました。おばあちゃんにそう言われると、徹には、本当にそうかもしれないなど、思えるのでした。

次の日も徹は、こんぴら様の丘に向かって、自転車を走らせていました。もう春休みも、残り少なくなってきました。春休みが終わって学校が始まったら、もうこの時間に、こんぴら様の丘へ行くことはできません。そうしたら、もうあの少女にも、会えなくなってしまうかもしれません。徹は、今日こそは会えることを祈って、自転車をこぎ続けました。

こんぴら様に着いた徹は、自転車をとめて、丘の上へと歩いていきました。すると、あの音が聞こえてきました。

「ポッペン、ポッペン」

少女は、何日か前と同じように、大きな石の上に腰かけて、ビードロを吹いていたのです。徹は、今日こそは話しかけようとして、ドキドキしながら、少女に近づいていきました。

「君はだれ？ どこから来たの？」

徹がそう言おうと思った、ちょうどその時です。

「また、会えたね」

少女はそう言って、にっこりとほほえみました。すると、突然立ち上がり、森の方へ向かって、走って行ってしまいました。そして、徹があっけにとられているうちに、あっという間に、姿が見えなくなっていました。

「しまった！」

徹は、森の中をさがしてみました。いくらさがしても、少女の姿はありませんでした。

「これでもう、会えないかもしれないな……」

徹は、残念でたまりませんでした。

徹は、春休みの残りの日々、毎日のようにこんぴら様の丘へ行きましたが、もう二度と、あの少女に会うことはできませんでした。

春休みが終わりました。今日から徹は、四年生です。徹の学校では、三年生から四年生になる時には、クラス替えはありません。担任の先生も、変わりません。それで、徹は、あまり新学年になるといって、実感がありませんでした。徹は教室に入ると、自分の席に着いて、先生が来るのを待っていました。

すると前の席から、祐二が話しかけてきました。

「おい、徹、知ってるか？ 転校生が来るんだってさ」

「えっ、転校生？」

ちょうどその時、先生が転校生を連れて、教室に入ってきました。転校生の顔を見て、徹は思わず「あっ」と、声を

あげました。こんびら様の丘でビードロを吹いていた、あの少女だったのです！少女も徹に気がついて、最初は驚いたようでした。でも、すぐに徹に向かって、にっこりとほほえみました。徹は、あわてて少女から目をそらせました。

「天野咲子さんです。おとうさんの仕事の都合で、長崎から引越してきました」

先生がクラスのみんなに少女を紹介すると、少女は黒板に、自分の名前を書きました。そして、

「天野咲子です。よろしくお願いします」

と、あいさつをしました。徹は、口をポカーンと開けて、その様子を見ていました。

「天野さんの席は……徹君の隣が空いているわね」

先生はそう言って、咲子を、徹の隣の席に、座らせました。

「よろしくね」

咲子は、徹にほほえみかけました。徹は、またあわてて目をそらせました。すると、咲子は徹に、こう言ったのです。

「今日、学校が終わったら、こんびら様の丘に来てね」

学校から帰る途中、徹は、信じられない気持ちでいっぱいでした。だって、こんびら様の丘でビードロを吹いていた、あの少女が、転校生として、自分のクラスに現れたのですから！しかも、席が隣になって、「学校が終わったら、こんびら様の丘に来てね」なんて、いきなり言われたのですから！でも徹は、咲子がどうして「こんびら様の丘に来てね」な

んて言ったのか、いくら考えてもわかりませんでした。ビードロを吹いているのを、徹に見られたのを、怒っているようでもありませんでした。何か、学校では言えないことでもあったのでしょうか？

徹は家に着くと、すぐに自転車に乗って、こんびら様に向かいました。自転車をとめて、丘の上に出ると、咲子がいつもの大きな石に座って、ビードロを吹いていました。「何度聞いても、不思議な音だなあ」と、徹は思いました。徹が咲子に近づいていくと、咲子にはっこりほほえんで、

「来てくれてありがとう」

と言いました。徹は何と返事してよいかわからず、咲子の前につつ立っていました。すると咲子が

「座ったら？」

と言ったので、徹は、咲子の横に腰をおろしました。咲子が座っていた大きな石は、幅も広かったので、二人並んで座ることができました。徹はとても緊張して、つい、こんなことを聞いてしまいました。

「君は、森の中に住んでいるの？もしかして、森の妖精？」

「えっ？」

咲子は、驚いた様子でした。

「この前、森の中に、走っていったから」

徹が言うと、咲子は笑って答えました。

「森の中を通ると、近道なの。あまり帰りが遅くなると、お

かあさんに叱られてしまいうから」

「なんだ、そうだったのか」

徹も、そう言って笑いました。

「ここは、引越してきてから最初に見つけた、私のお気に入りの場所なの」

「僕も、ここが気に入っているんだよ」

徹は、咲子とは、気が合いそうだなと思いました。

「私、引越してきたばかりで、まだ、お友達がいらないの。だから、お友達になってね」

咲子がそう言ったので、徹はうれしくなって、

「うん！」

と、とびきり元気のよい返事をしました。そして、心の中で「あっ！」と叫びました。何日前か前、徹は、こんぴら様の丘で笛のような物を吹く少女のことを、おばあちゃんに話しました。その時おばあちゃんは、「きっとその子は、お友達がほしいんだね」と言いました。本当に、おばあちゃんが言う通りだったかと、徹は思いました。

咲子は、

「これ、あげる」

と言って、紙袋の包みを、徹に差し出しました。

「ありがとう……」

徹は、少しとまどいながら、咲子から包みを受け取りました。咲子が言いました。

「開けてみて」

徹が包みを開くと、咲子が持っているのと同じ、ビードロが入っていました。

「こんなにいい物、もらっているの？」

「うん。引越して最初にできたお友達にあげようと思って、長崎から持ってきたの。長崎のおみやげなのよ」

徹はビードロを手を取って、しげしげと眺めました。理科の実験で使うフラスコを、一回りも二回りも、小さくしたような形です。側面には、教会の窓のような、ステンドグラス模様を描かれています。太陽にかざすと、キラキラと光って、とてもきれいです。

「吹いてみて」

咲子に言われて、徹はそつと、ビードロを吹いてみました。すると、底の部分が少しだけ出っばったり、くぼんだりして、「ポッペン」という音が出ました。徹は、どうしてこんな音がするのかわかりませんでした。徹は、ようやく謎がとけました。底の部分はとても薄いガラスでできているのに、よく割れないなと思いました。

徹はこうして、新しくできた咲子という友達といっしょに、暖かい春の日ざしの下で、ビードロを吹きました。全く同じビードロなのに、咲子が吹いたほうが、ずっときれいな音に聞こえるので、徹は、不思議だなと思いました。代わりばんこでビードロを吹くと、まるで、追いかけるかのように

るみたいです。

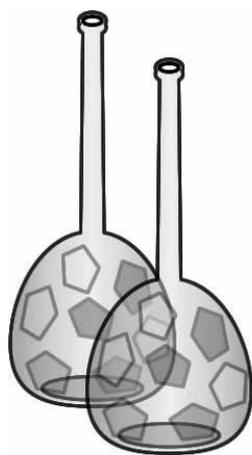
徹は、空に浮かんでいる雲の上で、咲子と、追いかけてつを
をしているような気分でした。そして、いつまでもずっと、
こうしていられたらいいのになと、思いました。

(北区)

「入選」

アサギマダラの冒険

大橋 淑子



わたしは生まれて間もない、アサギマダラの女の子です。
アサギマダラは蝶の仲間です。

わたしをよく知っている人間は、ステンドグラスを思わせる
ような透きとうったあさぎ色の翅と、黒とこい茶色のまだ
ら模様があるきれいな蝶だと言います。大きさも、翅を広げ
ると十センチくらいあります。あさぎ色は薄い藍色のことで
す。

そして、アサギマダラは旅をする蝶だと言われています。
春は南から北へ、秋は北から南へ旅をします。

人間が、わたしたちが旅をするのを、どうして知ったかと
言うと、わたしたちの仲間の何匹かの翅に、油性ペンで標し
をつけて飛ばしたら、その仲間が南の島で見つかって旅をす
るのがわかったそうです。

わたしは、八月の初めころ、涼しい高原のお花がいっぱい
咲いている原っぱで生まれました。

同じころに生まれた仲間もたくさんいます。みんな仲良く

暮らしていました。

ある時、群れのリーダーさんが、

「これから浜辺へ降りて、海を渡って南の島へ行くよ。よかつたらついておいで！」と、言いました。

リーダーさんはわたしより何カ月も前に生まれました。そして南の島からこの高原へ渡って来たそうです。だからいろいろなことを知っています。

わたしは少し怖かったけれど、心の中のもう一人のわたしが「行こう、行こう」って言うので、みんなといっしょに飛び立ちました。

途中お花の咲いている所で休んだり、木の葉のかけで眠ったりしながら飛びました。

「みんな、見てごらん、海が見えてきたよ。それに白い塔とうのようなものが見えるだろう、あれは灯台と言うんだよ。灯台は夜になると灯りがついて海からの目標になるんだ。あの近くの堤防に『フジバカマ』のいっばい咲いている所があるから休んで行こう」

と、リーダーさんが言いました。

フジバカマのいっばい咲いている堤防はすぐに見つかりました。

この近くに住んでいる人たちは、わたしたちアサギマダラが、毎年フジバカマのお花の蜜を吸いに来るので、草刈りをする時、フジバカマは残しておいてくれるのだそうです。

お腹いっぱいお花の蜜を吸って休んでいると、

「今日は、このあたりで泊ることにしよう」と、リーダーさんが言いました。

わたしはフジバカマの木に止まって空を見上げました。空は真っ青に晴れて白い雲が二つも、三つも浮かんでいました。

その一つが、ふわふわしたおいしそうな、蜜をためたお花のように思えて、思わず舞い上がってしまいました。

下からの風にあおられて、どんどん舞い上がりました。

舞い上がっても、舞い上がっても、雲のお花には届きませんでした。

気がつくとき、おいしそうなお花の雲は無くなっていました。青い空だけが広がっています。

「きれいな蝶々さんね」

急に耳もとで声がありました。

わたしがキョロキョロして見まわしていると、

「わたしは、南風よ。南の島の方から吹いて来たのよ。蝶々さんこんなに上の方までどうしたの？」

と、南風さんが聞きました。

「ふわふわしたお花の様な雲が浮かんでいたのよ、きっと、おいしい蜜があるんじゃないかと思って舞い上がったら、お花の雲は無くなってしまったの」

「そうなんだ…さっきわたしが、北のお山の方へ行こうとして急いでいたので、お花の雲を吹き飛ばしてしまったのかしら？ 蝶々さんごめんなさいね。おわびに下までお送りする

わ」
 そう言つて南風さんは、下に向かつて、やさしく、やさしく吹いてくれました。
 わたしは南風さんといつしよに、下へ下へと舞い降りました。

下に舞い降りると、先ほどの場所とは、ぜんぜん違つていて、一面に、重たそうに穂のたれた田んぼ、ばかりでした。

わたしは稲の穂に止まつて休みながらあたりを見回していると、一団の赤とんぼが飛んできました。その中の一匹が、「おーい！ 蝶々さんどうしたんだい？ この辺ではあまり見かけない蝶々さんだけ」と、声をかけてくれました。

「わたしはアサギマダラと言う蝶々よ。雲に向かつて舞い上がったら、みんなとはぐれてしまったの、わたしと同じ蝶々を見なかった？」

「ぼくはこの近くの田んぼの上を飛んでいる赤とんぼだよ。稲の中から出てくる虫を食べているんだよ。でも、君のような蝶々は見なかったよ」

「困つたわ、のどもかわいたし！」
 「あそこにビニールハウスが見えるだろう。近くに花がいっぱい咲いていたから、行つてみる？」

もう一匹の赤とんぼがそう言つて、スイースイーと先になつて飛んでくれました。

わたしも赤とんぼさんの後から、ビニールハウスの所ま

で、飛んでいくと、コスモスやオミナエシ、フジバカマなどの、秋の草花が風にゆれて咲いていました。

わたしが夢中になつてフジバカマの蜜を吸っていると、

「ねえ！ 見なれない蝶がいるわ。きれいな蝶々ね」

「おお、そうだな」

人間の声がありました。

「ひよつとして、アサギマダラかしら、フジバカマの蜜を私が近づいても逃げもしないで吸っているし」

「フジバカマの花が好きだと言うから、そうかも知れないな。そつとしておきな」

こんな声がして、人間はどこかへ行つてしまいました。

おなががいっぱいになると、わたしの上に先ほどの赤とんぼたちが飛んできました。

「おーい蝶々さん、僕たちの仲間が、浜の方の灯台の近くで、君と一緒に蝶々がたくさんいるのを見かけたと言つていたよ。案内してあげるよ」

「ありがとう、赤とんぼさんお願いするわ」

わたしは、赤とんぼさんたちについていきました。そして、フジバカマの草むらの中で休んでいるみんなと会うことが出来ました。

次の日の朝、リーダーさんからお話がありました。

「いまから海を渡つて南の島へ行くけれど、とつても遠いので、疲れたら海の波の上で休まなくてはいけない。翅はねを広げ

て、波の上に上手に浮かんで休むんだよ、こんなふうだね」と言つて、翅を広げて草の上に四つんばいになって、休んで見せてくれました。

わたしは出来るかしら？ と心配になつたけれど、やるしかない！ と思ひました。

わたしたちアサギマダラの一群は、一せいに飛び立ちました。

大きな波のたつている海の上や、きれいな砂の光っている浜辺の上を何時間も何時間も飛びました。

「このあたりは、波も小さいし風も吹いていないから、少し休もう」

リーダーさんが言つて、波の上に翅を広げて浮かびました。みんなもつぎつぎに浮かびました。

わたしも波の上に、翅を広げて体を浮かべました。上手に出来ました。

波はうねうねとして、体をゆらしします。そのうちに眠たくなつて眠つてしまいました。

「おい、みんな起きろー！ 船が来たぞ、大きな波が来るから、その前に飛ぶぞ」

リーダーさんの声でみんな目を覚まして飛び立ちました。大きな船が通つて行きました。船が通つた後には大きな波がぶつかりあつて、泡をたてていました。

こんな波にのみこまれたら、逃げ出すことはできません。

リーダーさんのおかげで、波にのまれなくてすみました。

あくる日わたしたちは、お花のたくさん咲いている『沖の姫島』と言う所に着きました。

そこには、何百、何千ものわたしたちの仲間のアサギマダラが飛んでいました。

「みんなごくろうだったね。ここは冬も暖かいし、花もたくさん咲くから、ゆっくり休みなさい」

リーダーさんが言ひました。

わたしは花に止まつて、充分に花の蜜を吸ひ休みました。他の所から来たアサギマダラたちとも、すぐに仲良しになりました。

わたしたちの仲間の中には、ここから、さらに、もっと、もっと遠い南の島に向かつて、飛び立つて行くものもいます。けれどもわたしは、ここ『沖の姫島』でしばらく暮らしたいと思ひます。

リーダーさん、南風さん、赤とんぼさん、人間のおじさんとおばさん、お世話になりました。わたしは今、いろいろな事を体験して少し大きくなりました。そしてとつても幸せです。

(中区)

児童文学選評

那須田 稔

今年度の「児童文学」には、十二編の作品が寄せられ、選考に楽しい時間を過ごすことができたことを嬉しく思います。「平成」が終わり、新たな「時代」の幕があきます。

子どもたちの未来に、児童文学がどのような贈り物をつくり出せるか、みなさんと共に努力していきたいと思えます。今年度の「市民文芸賞」と「入選」作は次の通りです。

○市民文芸賞「虹色のプール」

小学高学年の少女を主人公に、水泳にチャレンジする姿を描くことで成長のすばらしさを確かめていく作品。生き生きとした描写に感心しました。

市民文芸賞「ぶんじいとぼく」

過疎地に住む少年が、老人から「ほんとうの心の豊かさとは何か」を学ぶ感動作。今こそ、このような物語が必要です。

○入選「額にかざられた白いぞうり」

パリでの体験をもとに描かれたユーモア漂う作品。意欲作。

入選「猫の喫茶店」

のらねこの兄妹を主人公に展開する楽しい物語。生き生き

とした描写に感心。

入選「うさぎのあやとりうた」

うさぎがうたっていた歌がつむぎ出す楽しい物語。

入選「空の神様の贈り物」

ひとりの少女に訪れた朝のプレゼント。日常の中にふくらむ奇跡を描く。

入選「またねー」

男の子のすずめたちへ寄せる愛。やさしさがにじみ出ている佳品。

入選「ビードロを吹く少女」

ふしぎな笛を吹く少女に心ときめく少年を的確にとらえた作品。

入選「アサギマダラの冒険」

旅をする蝶で知られているアサギマダラ。そのやさしい姿を楽しく描いた物語。

以上、心あたたまる作品を読んで、日常の中から子どもたちへの心の贈り物をつむぎ出していくみなさんの努力に改めて感動しました。拍手をおくります。

評論

『市民文芸賞』

芭蕉の虚と実について

伊藤 空

近松門左衛門は

「芸といふものは実と虚との被膜の間にあるもの也」(『難波土産』発端)とした。近松は「実と虚との被膜の間」についてどのように考えていたのだろうか。

まず考えるべき事は「歌舞伎の役者」はたとえ実在する人物を演じていたとしても、自分以外の誰かを演じるという虚構において行為している点である。「真の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ」家老その人ではない以上、その役者に出ることは彼に出来るだけ近づくことである。ではどこまで近づくかという事になるが、そこで、「被膜の間」ということが問われると思う。

虚実皮膜論を思わせることが『難波土産』では挙げられている。さる御所方の女中が恋人の代わりに作らせた人形に愛想を尽かす話である。その理由というのが、あまりにも本人

に似せすぎた結果であるという。確かにいくら恋い焦がれている人とはいえ、まるで蠟人形のようにそっくりの代物と暮らすなど、なかなか気味が悪くて出来た事ではないであろう。

近松は以前京で坂田藤十郎のために歌舞伎狂言を書いているが、藤十郎は『賢外集』で、「乞食の役め」は「大概に致し、正真のことにならざるやうにすべし」と説いている。「乞食の正真は。形までよろしからざるものなれば、眼にふれておもしろからず。慰にはならぬものなり」としている。近松と同じく写実の限界を述べている。「実」に肉薄しつつそれをそっくりそのまま模すことを否定していると考えられる。何故「正真のこと」では面白くないのか。何故御所方の女中は興醒めしてしまったのか。私はそこには彼女が想像する余地がなくなってしまったからではないかと考える。人間は何かを見れば、言われなくても勝手にあれこれ想像する生き物の

ようである。

近松とほぼ作家活動を同じくする芭蕉は、虚と実についてどのように考えをめぐらせているだろうか。

芭蕉は「虚に居て実を行ふべし」「俳諧は上手にうそをつく事なり」と述べている。

近松と芭蕉が同時代に虚と実について述べているのは単なる偶然だろうか。それとも何かその時代背景によるところがあるのだろうか。

芭蕉の句には「実」と「虚」の取り合わせの句がある。

荒海や佐渡によこたふ天河

芭蕉は元禄二年『おくの細道』の道中、出雲崎でこの句の着想を得たとされる。しかし出雲崎から佐渡は見えない。この句で芭蕉が実際に見たものは荒海と天の川だけということになる。それを見た芭蕉が想像を膨らませて遠く佐渡に横たわる天の川を詠んだことになるのだ。古来遠流の島として知られる佐渡。芭蕉の心は時空を超えてそこへ流された日蓮、世阿弥らの中に分け入り、彼らに成り代わるという虚構に身を置き、荒海に囲まれて佇み、そして孤独のなか見上げた天の川を詠んだのではないだろうか。おくのほそ道の旅の後、芭蕉はこの句を詠んだ時のこととして「銀河の序」で、「たましいけづるがごとく、腸ちぎれて、そぞろにかなしびきたれば、草の枕も定まらず、墨の袂なにゆへとはなくて、しほ

るばかりになむ侍る」とまで書いている。まるで本人に成り代わったような悲しみ様である。

「荒海や」では芭蕉であった主体が「佐渡によこたふ天の川」ではその主体は佐渡に流された人々ということになる。芭蕉は一句の中に主体の転換を取り入れることで、思いがけない、それでいて言われてみればなるほどそうかと思わせる句を多く詠んでいる。

古池や蛙飛こむ水のおと

貞享三年、蛙合（はるの日・あつめ句）の句である。貞享二年に成った上五「山吹や」は、翌年「古池や」に改められる。「山吹や」は万葉集、古今集以来の和歌の伝統にのつたものである。

かはづ鳴く甘無備河にかけ見えて今か咲くらむ山吹の花
厚見王（万葉集）

かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を 読人知らず（古今集）

その伝統は連歌、俳諧と引き継がれた。『古今集』仮名序では「水に棲む蛙の声聞けば、……いづれか歌をよまざりける」と、歌を歌う代表的な生き物として蛙が挙げられている。和歌の「鳴く蛙」に対する「飛ぶ蛙」は初期俳諧にも散見される。しかし芭蕉は「飛こむ」として周囲の人を驚かせたのではないだろうか。

山吹や蛙飛こむ水のおと

ところが、芭蕉はそれでよいとは思わなかった。芭蕉の門人各務支考による「葛の松原」には、「弥生も名残おしき比にやありけむ、蛙の水に落ちる音しばしばならねば、言外の風情この筋にうかびて、『蛙飛こむ水のおと』といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、『山吹』といふ五文字をかふむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯、『古池』とは定まりぬ」とある。まず七五「蛙飛こむ水のおと」が出来、そこへ門人の其角が伝統にのっとって「山吹や」と上五をつけた。このようにして貞享二年に成った「山吹や」が翌年改められるまでの間に芭蕉の心にとどのような変化があったのだろうか。

芭蕉は、俳諧に悩み心の晴れぬ日々を送っていたのではないかと推測される。「山吹や」はあくまで人間の世界で確立された美学である。「蛙飛こむ水のおと」を聞いた芭蕉にとつて、そこへありもしない山吹をただ伝統にのっとつてつけることは、「虚に居て実を行ふべし」とする芭蕉にとつて、「実」がないと感じたのではないかと思われる。だからこそ、芭蕉は鬱屈した思いを抱えていた。自分の目指す俳諧の道は、伝統をなぞるだけのものではないはずだ。古典を下敷きにして完結する世界ではなく、もっと深い何かを求めて、芭蕉の心は彷徨っていたのではないだろうか。

長谷川權『俳句の誕生』には「発句とは歌仙の句と句の『間』、そこで起くる主体の転換を一句の内部にとりこんだもの」とある。そして芭蕉は「発句は畢竟取合物とおもひ侍るべし」(俳諧問答)としている。ここで歌仙の句と句の「間」が重要となるが、去来抄には「蕉門の付句は、前句の情を引き来たるを嫌ふ。ただ、前句は是いかなる人と、その業その位を能く見定め、前句をつきはなして付くべし」とある。このように発句を歌仙の句と句の「間」、そこで起くる主体の転換を一句に取り入れたものと解するとき、「蛙飛こむ水のおと」の主体は、上五でほかの何かに転換される。

芭蕉はひとり物思いに沈みながら考え抜き、それでも答えがでないまま、考え疲れてふらりと散歩に出たかもしれない。芭蕉は繰り返し蛙が池に飛びこむ音を聞いていたに違いない。芭蕉の心はほんやりと自らを離れ蛙の世界に遊んだのではないだろうか。

「弥生も名残おしき此」といえば現在の四月下旬ごろにあたる。その蛙がいかなる蛙であるか、その業、その位を能く見定め、七五からつきはなして付けなければならぬ。ラフカディオ・ハーンが、「a frog」ではなく、「frogs」と訳したことにより、以下蛙たちという。しかしそのままその蛙たちを主体にしたのでは「つきはなして付く」ことにはならない。「弥生も名残おしき此」の蛙たちがいかなる蛙たちかとその中に分け入ってみると、池に飛びこむという営みを大昔からずっと変わらず続けてきた蛙たちである。ド

ナルド・キーンは、「old」ではなく「ancient」という言葉を使っている。旺文社古語辞典で「古し」をひいてみると①遠い昔のことである。古代のことである。とある。

芭蕉は大昔から延々と繰り返されてきた蛙たちの営みに思いを馳せたのではないだろうか。芭蕉は「古池や」としか言っていないが、その「古池」には確かに飛びこんだ蛙たちが実在し、それは現実に芭蕉がその飛びこむ音を聞いた時の蛙たちではなく、芭蕉がその中に分け入ることで体験した「遠い昔の池に飛びこむ蛙たち」であり、芭蕉は時空を旅し、遙かなものを詠んだのではないだろうか。「遠い昔から変わらぬ池に飛びこむ蛙たち」と、「鳴く蛙」から「飛びこむ蛙」へ。「不易」と流行」。古池の句は芭蕉自身、不易流行の句として自負していたという。ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説によれば、「不易は俳諧の実現すべき価値の永遠性、流行はその実践における不断の変貌を意味するとも説かれる」。こうして芭蕉は「蛙飛びこむ水のおと」から、つきはなして付く、「古池や」に辿り着いたのではないかと考える。

芭蕉がここで「古池に」としなかったことも注目値する。ただその一瞬一刹那を詠むのであれば、「古池に」でもよかつたはずである。しかし芭蕉は「古池や」と切れ字を使い「蛙飛びこむ水のおと」から深く切り離れた。その理由は、「古池や」では飛びこむ蛙たちが「遠い昔の蛙たち」に転換されたからではないかと思う。芭蕉は「蛙飛びこむ水のおと」の蛙たちにもっともふさわしい五文字として、時空を旅して「古池や」

と置いたのではないかと考える。

このように飛びこむ主体を転換することにより、七五から「つきはなして付く」ことが可能となった。そうだとすれば、これは革新的であったに違いない。蕉風開眼の句といわれる所以と考えられないだろうか。「蛙飛びこむ水のおと」という現実と、「古池や」では、蛙たちのなかに分け入るという虚構のなか、「遠い昔の池」に飛びこむ、実在の蛙たちを詠んだ、「虚に居て実を行ふべし」を實踐したという見方もできるのではないだろうか。支考は、俳諧十論のなかで古池の句を「さびしき風情をその中に含める風雅の余情とは此いひ也」と、余剰としての「さびしさ」を見ており、現代もその見解が継承されている。蛙が池に飛びこむ。太古の昔から変わらぬ続くその繰り返し、これからも続いていくであろうその果てしない繰り返しに思いを馳せる時、人はどのような思いに捉われるのだろうか。

正岡子規は「古池の句は実に其ありの儘を詠ぜり、否ありのままが句となりたるならん」と評した。

子規は「古池の句は単に聴覚より感じ来れる知覚神経の報告に過ぎずして、其間毫も自家の主観的思想、形体的運動を雑へざるのみならず、而も此知覚的作用は一瞬一刹那に止まりしを以て、此句は殆ど空間の延長をも時間の継続をも有せざるなり」とも述べている。

何故子規はこのように考えたのだろうか。それは子規が提唱する「写生」に関係していると思われる。子規は、写生に

よってありのままを嘘偽りなく句とすることを主張し、主観を徹底的に排すべきとした。子規にしてみれば「何ぞや。芭蕉の意は下二句にて己に尽くせり。(中略)其『古池や』といへる者は特に下二句の為に場所を指定せる者のみ」ということになる。

子規は「古池に蛙が飛びこんでキャプンの音のしたのを聞きて芭蕉がしかく詠みしものなり」とした。

しかしながら「古池」をただ「古い池」という場所の指定に過ぎないと解するのであれば主体の転換が起ころ「古池や」ではなく、「古池に」と詠んで然るべきではないだろうか。

一貫して「写生」を主張した正岡子規であるが、私の最も心惹かれる子規の句は、純粹な写生の句とは思えない。

糸瓜咲て淡のつまりし仏かな

この句で子規が実際に見たものは子規庵の糸瓜棚に咲く糸瓜の花である。死期が間近に迫っていることを悟り、まだ咲いているに違いない糸瓜の花と自らの死後の姿を俯瞰して詠じた句ではないだろうか。死後自らを抜け出した魂に分け入り、自らの死体を見下ろしているのだろうか。糸瓜の花に没入し自らの死体を見下ろしているようにも読める。或いは子規の死に直面している人の中へ分け入ったのだろうか。私は糸瓜の花に子規が分け入ったように思う。いずれにしても、

「虚に居て実を行ふ」子規の姿をみるように感じるのだ。それは子規が写生を超えた写生、何かを凝視するあまり自らを離れ、その対象のなかへと没入するという現象が起きたからではないだろうか。それは近松の浄瑠璃においても、芭蕉の俳句においても、演じる側と見る側、詠む側と読む側を問わず起こりうる現象である。人々は自らを離れ、他の誰かに感情移入し、演じ、詠み、そして見て、読む。感情移入する時に必要なもの、それが想像力であり想像を掻き立てる文学、役者こそ、本物であると思う。

ここでもう一度近松と芭蕉の同時代性について考えてみたい。彼らの生きた時代は文化が一部の知識人や特権階級から大衆へと広がっていく時代であった。芭蕉はさまざまな身分の人々と交わり歌仙を巻いている。俳諧は幅広い階級の人々に受け入れられつつあった。近松もまた一般市民を対象とした戯曲を書いている。

近松は虚実皮膜論において芸というものは虚と実の被膜の間にあり、ただ正真を写すものではないとした。芭蕉は虚に居ては、歌舞伎や浄瑠璃で役者や人形がそうであるように自分以外の何かに分け入り、その微かな情を句に詠んだ。その際、「発句はくまぐま迄謂つくす物にあらざ」「謂応せて何か有」とした。虚に居て実を行いつつ、単にその正真を写生するだけではなく、その正真に肉薄しつつ誠に至ることを目指したといえるのではないだろうか。

人は感情移入する時、想像力を働かせるものである。想像

の余地がないとつまらない。だからこそ芭蕉は余白を残さなくしてはならないと考えた。虚だけではない。実ばかりでもない。虚に居て実を行うものと実居て実を行うものの取り合わせなど、虚実織り交ぜ、そして言い尽くさない。あとは想像に委ねる。私はその想像力は虚と実の被膜の間に存すると考える。本当のリァリティーとはそのようなところに生まれるのではないだろうか。近松の虚実皮膜論との共通点はここに見出されると思うのだ。「謂応せて何か有」。これは国や時代を超えてゆく作品にみられる共通点でもある。

西洋美術史をみると、ミロのヴィーナス、未完成のミケランジェロの「ピエタ・ロンダニーニ」はいずれも完璧な姿ではなく、今も人々の想像を掻き立ててやまない。フェルメールは「眠る女」で酔い潰れて眠る女のもとから立ち去る男を描き、後にわざわざその男を消していることが、X線による調査で明らかになった。

本物の芸術は自己完結するのではなく、見る者、読者といった第三者によって、つまり彼らの想像力によって時代を超えてゆくものではないだろうか。

芭蕉は虚と実を追い求めることにより、時代を超えてゆく作品を目指したのではないかと考える。

参考文献

『近松への招待』鳥越文蔵 内山美樹子 信多純一 井口

洋 岩波セミナーブックス

『近松と浄瑠璃』森修 塙書房

『松尾芭蕉』稲垣安伸 勉誠出版

『正岡子規』俳句の出発 中村草田男 みすず書房

『俳句の誕生』長谷川權 筑摩書房

『古池に蛙は飛び込んだか』長谷川權 中公文庫

『芭蕉全句集』雲英末雄 佐藤勝明 訳注 角川ソフィア

文庫

(中区)

「市民文芸賞」

応仁の乱と下剋上

滝澤 幸一

はじめに

室町時代といえ、私には「南北朝、応仁の乱と不毛の戦いが長く、諸大名が経済的に疲弊して、下剋上を迎え、やがて戦国時代を招き、滅んだ」印象が強い。

一方で京都では、金閣寺、銀閣寺など今に残る東山文化が花開き、戦乱は公家の娘を、地方大名に降嫁させ、知識人を地方に放ち、文化の底上げがなされた時代でもある。

昨年はNHKの大河ドラマ『女城主・直虎』が放映されたが、この井伊家には過って後醍醐天皇の皇子宗良親王が、水窪の高根城には宗良親王の子・尹良親王が籠った。奥山方広寺を開基した無文元選は後醍醐帝の二十七番目の子であり、都田には都田御厨が、気賀の庄は大覚寺統の所領地でもあった。遠州は南朝の拠点でも在った。

平成三十年六月号の『文藝春秋』には東京大学教授・本郷和人氏による『応仁の乱は東軍が勝った』が載った。氏は乱の起こりは、細川頼之管領と義満に仕組まれたお家騒動で没落した氏族が、細川打倒のため起こしたものであるが、目的が叶わなかったのだから、西軍の負けだと断じる。果たしてそれだけであろうか。順を追って視てみよう。

第一章、争乱の室町時代

一、鎌倉幕府滅亡

後醍醐天皇は「公家（天皇）一統」政治を標榜したため、武士の政治を認められなかった。平安時代の醍醐天皇、村上天皇の延喜・天曆の治を理想として、大覚寺嫡流派と持明院統派が相互に継承する現状を打破し、皇統を自己への一本化にするため、両派の排除とそれを支持する鎌倉幕府打倒を

図り、一三二四年正中の変、一三三一年元弘の乱を謀るが、二度とも發覚。元弘の乱では捕われ、隱岐に流される。

幕府により光嚴天皇が即位した。後醍醐天皇の倒幕運動に呼応した楠木正成や後醍醐天皇の子・護良親王、親王を支援した赤松則村らが、幕府に対抗した。これを奉じる形で新田貞義、足利高氏が朝廷側に就き、諸国の反幕勢力を集めた。

一三三三年、後醍醐は隱岐脱出。伯耆の名和長年に迎えられ船上山で討幕の兵を挙げる。足利高氏は、京都で赤松則村、千種忠顕、石井末忠らと六波羅探題を滅ぼした。

新田貞義は鎌倉を攻め、北条高時から北条一族を滅ぼし、鎌倉幕府は滅亡した。

尊氏は天皇の諱名「尊治」の一字を賜り、尊氏と改名した。

二、後醍醐天皇の政治姿勢

①総領制の崩れ

一族を二分した戦いといえは、保元の乱で、平家・源氏とも二派に分かれて戦った。勝利を治めた後白河は勝利の立役者であった源義朝に、敵に就いた父の首を討たせた。平家にも同様であった。私はこれを、穢れを嫌う風潮のため検非違使が不在だったなどの諸説あるが、後白河は敵味方二派に分かれての闘いは浅ましい、醜いとしたのではないかと取る。

鎌倉時代、総領制は一族の問題として幕府は介入しない方針を取った。処が、後醍醐天皇は王権強化、中央集権のため総領の変更を断行した。倒幕に功のあった者に総領を与えた。

一族間の領地は、負けた側の領地を取り上げ、勝った側に

褒賞として与えた。一族の滅亡を避け、力も温存できるとすれば、一族を二分するという選択肢が生まれる。武家のしきたりの変化が生まれた。

②綸旨万能

後醍醐天皇は帰京して、今次の戦乱で奪われた所領を、次いで鎌倉幕府下での幕府の褒賞などでの所領の変更を認めない朝敵所領没収令。裁判の誤りを正し敗訴人の救済を目的とする誤判再審令。幕府の建立した寺院の寺領没収令など次々に発布する。結果は百年も前の訴訟の再審など噴出、混乱した。判決後二十年を経たものは再審しないという「不易法」も廃棄され支配権が安定しない状況が生まれた。

朝敵所領没収令は、高氏（後の尊氏）も寝返り倒幕に加わっている。尊氏以降の帰参者の動搖を誘った。

③建武の新政

後醍醐天皇は資金や制度を整えること無く、次々に思い付いたことを指示し、貨幣の鑄造、内裏の造営と新たな事業を起せば、混乱や資金調達のための増税が必要になる。

前の論旨を後の論旨で取り消すようになると信は低下する。ついには「天皇の論旨を得てから一カ月以内に、決断所の確認証を取らなくてはならない」制度が出るようになる。

④天皇、尊氏、護良親王

天皇は武家の政治参加を認めない考えだが、尊氏は鎌倉時代の幕府と朝廷の関係を築きたい。護良親王は、当初より尊氏を警戒していた。尊氏は天皇に護良親王に謀反の志を訴

え、建武元年（一三三三）十月親王は捕縛され、尊氏に引き渡される。翌建武二年七月、中先代の乱の折り、親王は尊氏の弟直義により殺害される。

護良親王の死は、天皇と尊氏が直接対峙する局面を迎える。

一方で地方の反乱が相次ぐ。主な反乱は、北条一族が支配していた地方で、その一族や家人が関わっている。朝敵の烙印を押され、所領を失い、機を見ての蜂起と、加えて尊氏への裏切りに対する怨念もあった。

また重税に反発し、帰参した者が加わる場合や、中央の混乱を見て乗ずる場合もあった。

護良親王の失脚で、尊氏とのバランスを崩した天皇は、体制強化策を取ろうとする。既成貴族層の解体と再組織を、宋朝の科挙かきよに求めようとするが、宋と日本では条件が違い過ぎ、出来なかつた。

後醍醐天皇の施策は、武士や貴族層からの信用を失い、反発を買った。

三、新政の瓦解

建武二年（一三三五）六月内裏造宮に取り掛かうという時に、中先代の乱が起る。七月二十五日鎌倉占拠。鎮圧には二十日間ほど要した。鎌倉に居た直義はこの折り護良親王を殺害した。

乱鎮圧に東下する尊氏は、征東將軍の号を賜る。この乱を治めた後、尊氏は直義の意見も入れて後醍醐天皇と離反する。

新田義貞、義良親王、北畠顯家あきいえらに尊氏追討を命ずるが果

たせず、京都争奪戦になる。

二月には尊氏が九州に敗走するなど、一進一退するが、この時破れた尊氏の後を追う兵が続出した。追従する武士は後醍醐の方針には付いていけなかつたのだ。

延元と年号を改めた十二月、後醍醐天皇は花山院に向かう。

四、皇統の二派

少し前に戻るが、後嵯峨天皇の後、後深草天皇に始まり、北朝初代天皇光厳天皇に繋がる持明院統と、龜山天皇から後醍醐天皇に繋がる大覚寺統の二派があり、互譲する建前だったが、後醍醐天皇は閔白を解任し、幕府の強制による光厳天皇を認めなかつた。

後醍醐天皇が吉野に走った後の京都では、尊氏により持明院統の高厳上皇、光明天皇の擁立が図られ、尊氏は年号を建武に戻し、引き継ぐ。ここに南朝は延元、北朝は建武と違う年号を持つことになる。

その後、北朝と南朝の和睦、統一の話し合いがあり、後醍醐天皇は受け入れ、建武三年（一三三六）十一月二日、光明天皇への神器の授受の儀が行われ、後醍醐は讓位した天皇を示す太政天皇の称号を得て、後醍醐太政→光明天皇の形が整ったが、その前に後醍醐天皇は秘密裏に、皇太子恒良親王に帝位を譲り、新田貞義に帯同させていた。

この年の十二月、後醍醐は北畠親房の勧めで花山院を後にして、楠木一族の案内で吉野に脱出した。以後五十六年に及ぶ南北朝時代の始まりである。

五、建武式目

後醍醐天皇と光明天皇の間に神器の授受が行われ、尊氏の政権を合法化する形式的手続きが出来たのは建武三年（一三三六）十一月二日。その五日後に尊氏は建武式目十七条を制定した。

武士を頭首とする一定の内容を持った政権を幕府と呼ぶなら、この日が室町幕府・足利幕府の始まりである。

六、南朝側の事情

① 布陣

後醍醐と光明両帝で神器の授受が行われていた頃、北陸には新田義貞に新帝恒良と尊良親王も付けた。伊勢には北畠親房に尊澄親王。大和の吉野には懷良親王。紀伊に廷臣・四条隆資。中院定平は河内、奥州には畠山顕家を配置していた。

北陸の新田義貞は金ヶ崎城に籠るが、斯波と援軍・高師泰に包囲され、建武四年三月陥落。嫡子義顕、尊良親王は自害。新帝恒良は捕縛され京に送られた。その五カ月後奥州の畠山義顕が出陣する。延元二年（一三三七）八月中旬であった。遅れた理由は奥州でも反乱や足利への寝返りがあり対応した事と、年貢収入を待った可能性もある。

翌暦応元年・延元三年正月二日鎌倉攻略。青野原（関ヶ原と同じ）で勝利した後、越後の新田義貞救援には向かわず、伊勢路に進軍し、五月二十日和泉堺浦で戦死した。

越前では新田義貞は金ヶ崎城奪還を試みるが、七月矢疵を受けて自害した。

② 新田義貞・北畠顕家を相次いで失った南朝は、地方勢力の再建が急務となった。

③ 奥州―北畠顕家の弟・顕信を鎮守府將軍に取り上げ、将来皇太子とする義良親王を奉じて、陸奥を守らせ、親房、結城宗広を副える。

④ 遠州―尊良（宗良と改名、以下宗良）を再び、豪族井伊氏に下ろす。都田の御厨は、南朝の廷臣・西園寺公重・洞院実世の所領。気賀庄は大覚寺の所領と南朝の拠点であった。

⑤ 四国―懷良親王に四国を治めさせ、九州南軍を統括させた。肥後の菊池は南軍の主力。

ここで注目したいのは、南朝と海賊（以下は水軍）の関係だ。義良、宗良、懷良親王や、北畠顕信、結城宗広らを海路それぞれの地に運ぶ、その水軍が伊勢や、瀬戸内にも味方として居た。九鬼水軍も南朝方であったという。

延元三年九月、伊勢大湊から義良親王、宗良親王、北畠親房、顕信親子、結城宗広ら一行は出航するが、遠州灘で暴風に遭い、宗良親王は井伊城に、親房は常陸に着くが、義良親王、北畠顕信、結城宗広は伊勢に戻る。義良親王は皇太子になるが、宗広は病死する。

③ 後醍醐天皇没

翌、延元四年八月十六日、後醍醐天皇は吉野の行宮で御逝去。五十二歳。遺志どおり後醍醐天皇・後醍醐院の諡名が定まる。

儒学、漢文学、歌道、書道、管弦に優れ、神道、仏教にも

関心を示した天皇であった。

崩御の前日、皇太子義良に帝位を譲った。新帝・後村上天皇は十二歳の少年であった。

七、幕府側の事情

①武士の変化

「武士に二言無い」とか、忠義という言葉があるが、これらは戦いが無くなった江戸時代に出来た諺や言われ方である。争乱の世では、「武士は渡り者」勝利を治めそうな側に、損得勘定や感情から主人を選ぶことが多かった。「降参半分の法」というのがあって、降参してきたら、所領の半分とか、三分の一を削って受け入れるのが普通だった。

前述したが、家名と家産の保持には、一族を敵味方に配するのにも、有効な手段であった。敗者側の闕所（没収地）は勝者側の同族に与えるのが、この頃の習慣だった。

また鎌倉時代末期から、南北朝時代に、庶子が総領を圧倒し、総領になろうとする傾向が強くなった。これらは同族であるから、家紋や旗挿し物が同じになり、敵味方の見分けが付き難いという理由で、家紋の種類が増えた。

名利に生きる。自分を評価してくれる主人に仕えても仕方が無い。評価してくれる主人を探すのも武士の努力であった。

はじめは、分割相続をしていた者も、繰り返すと所領が小さくなる。単独相続として、庶子は家臣になる傾向が出て来る。これがまた総領を狙う傾向に繋がる。

②足軽の誕生と武器の変化

足軽には安価な武器として、櫓や軽量の打刀が作られる。一方で武士の太刀の反りは小さく、長さ、幅、重さが増し、平地での戦いに合わせた。甲冑も兜の鉢が深くなり、内側に皮を付け、衝撃に耐えるようにした。射戦から斬撃への変化が見られる。

③陣営の中の対立

尊氏は軍事、直義は事務方と分担して来たが、立場の違いは食い違いも出るし、性格や見識の違いもあった。尊氏の評価が高い高師直・師泰兄弟は、莊園・寺社から不評で、直義が禁令を出さざるを得なくなる。

直義には、官僚派や総領が集まり、師直には武闘派や庶子が寄った。また足利一門は直義に、家柄が低く秩序を破らなると出世出来ない者は師直に付いた。

直義が師直の執事権を罷免させると、師直はクーデターを起こす。直義の養子直冬は九州で協力者を得て、更に中国地方にも協力者が続出する。直冬討伐が師直、師泰などで敢行されるが、観応二年二月、摂津・打出浜で師直は股に、師泰は頭と胸に傷を追い、戦意喪失、上杉能憲に親の仇と討たれる。

直義は正平七年二月二十日尊氏に討たれる。

尊氏が直義討伐に鎌倉遠征中、閏二月、南軍は義詮を翻弄して入京、三上皇と廢太子を捕え、神器を奪還する。

北朝では、新帝擁立を画策するが、神器は無い、皇位を与える役をする上皇は居ない。高厳天皇の第三皇子・弥仁王を選び、王の祖母広義門院に上皇の代わりをさせ、神器を入れた。空箱を神器の代用として、後高厳天皇十五歳が即位した。

幕府は都合四回京都を奪われた。直ぐに奪還はしたものの、京が護り難い地形にもあるが、守備態勢にも問題がある。幕府の権限低下を及ぼした。

領地を強要し、叶わねば帰国する。畿内大社寺からは権利回復要求が相次ぐ。こうした中で、尊氏が逝去した。延文三年四月三十日。享年五十四歳。

斯波管領Ⅱ貞治元年（一二六二）七月斯波義将管領、父高経後見就任。赤松則祐など怨念を抱き、提訴。貞治五年（一二六六）八月斯波管領失脚。

細川管領Ⅱ貞治六年（一二六七）九月細川頼之管領就任。前管領派と大奥勢力を削ぎ、仏教対策変更。永和四年（一二七八）閏四月細川管領下野。

八、足利義満

義満になって、直轄軍の増強がなされた。これは財政的な裏付けが出来たことを示す。管領クラスの大大名が二―三百の供回りなのに、三千騎と十倍とし、執事・侍所・直轄軍から、将軍が直接統括する体制を作った。

三職、四職、国持衆、番頭に任ずる家柄・家格を定めた。また、北小路室町の新邸完成。永徳元年（一二八一）四月

落慶供養を行い、諸国遊覧、行脚も行き、政情の安定を誇示し、帰路、細川頼之と会談。頼之復帰を決めると、土岐と山名を叩く。山名時義が没すると内部抗争を仕組む。この時、三千騎の直轄軍が活躍する。また、大内政弘の反乱を画策する。大きくなった勢力を討つ、義満の政策だった。

九、日本国王

十歳で将軍就任の義満は、苦渋の中で育んだ財力と権力で直轄軍を増強させ、花の御所を築き、大きくなった守護の勢力を叩き、将軍の地位向上を目指した。母が天皇に繋がるのも出世を早めた。大内を叩くと、自ら対明外交・貿易に乗り出し、卑屈な対応ではあったが、明に铸造させた「明銭」で、日本の発行権を独占するような、割の良い商売だった。

応永十五年五月四日逝去。五十一歳。相国寺には「鹿苑院太上天皇」臨川寺の位牌は、「鹿苑院太上法王」。後小松天皇の祖父になる。

第二章、応仁の乱

義満の死から七十年ほどで、応仁の乱が起こる。長々と「争乱の室町時代」を認めた。幕府政治の管領交代劇は、決して円満なものではなかった。ことに初代斯波管領は将軍の権威と権利の付託を努力する余り、諸將に疎まれたのだが、将軍の裁定は過酷だった。

応仁の乱の布陣を見てみよう。

東軍Ⅱ細川勝元の軍は、二十四万国、十六万人。細川一門

と盟友畠山政長、京極持清、それに反山名派の糾合である。西軍は山名宗全の軍は、二十万、九万人とも十一万ともいう。山名一門の大部分と斯波義廉、畠山義就で後に大内政弘が加わるが、山名宗全と畠山義就、一色義直は密接な関係ではなく、反細川や所領地の関係による。

応仁の乱は、常時二十五万とか二十七万の兵では無く、部隊の補充・入れ替えが必要で、開戦時は五万位と見る歴史家もいる。

乱が始まってから、早い段階で西軍からの寝返りが出た。また和平の話も出たが、將軍の曖昧な態度や、細川勝元には応仁の乱が始まる前年、文正元年十二月將軍の命で、助太刀無用とされた畠山の内紛に、山名宗全、斯波義廉が命を無視し援軍を送った。命に従った勝元はそのことで面目を失っていた。山名宗全や管領のままの、斯波義廉に打撃を与える必要があり、和平交渉には進まなかった。

足利義視は戦功を立て、次期將軍の立場を築く必要があり、將軍義政と異なり積極的だったが、將軍の正妻日野富子は幼い息子・義尚の將軍継承を望み、反発を強められた義視は、応仁元年八月伊勢に逃れる。

翌年十一月二十三日足利義視は西軍に降下。西幕府が作られ將軍に祭り上げられる。

『応仁の乱』『日本の歴史⑨』を見ると、西軍の山名宗全の積極性と共に、戦乱を通じての西軍・畠山義就と、応仁元年八月に入京した大内政弘の存在が大きい。

応仁の乱は雌雄を決することも無く、十一年を要した。その理由は戦法の変化が大きい。

水窪の高根城にもある、井楼が作られ、敵陣の偵察や、弓矢の攻撃、投石、火矢が使われ、攻城塔で城壁を越える攻撃が出来るようになると、市街には塹壕を掘り巡らし、守備を固めた。塹壕戦になり一気に攻め落とすことが困難になった。投石機の使われた記述もある。火薬を使わない大砲だ。古代ギリシヤや中国の武器が使われることになった。

足軽が重用され戦場の様子も変わったが、これは南北朝の記述にも入れた。この頃になると、侍分の百姓が現れる。名字を持ち、指図や指揮を取る纏め役の登場だ。一揆とは団結するというような意味だが、百姓にも、地侍たちにも、一揆を興して要求を叶えようとする。一揆は応仁の乱の期間中、奈良では興るが京都では起きなくなり、乱が終わると再燃する。ここに一揆衆と足軽の立場が見える。

一揆衆が足軽になる素地があった。足軽は兵站の遮断や、物資調達を帯びる場合もあったが、勝手に略奪もした。軽量の太刀や槍など、安価な武器を使用した。將の馬へ、槍での攻撃も有効だった。

我國の馬は、木曾駒とか、信州上田辺りの馬であっても、大きさはポニークラス(体高一三〇センチ、体重三五〇キロ)だったというから、甲冑や鞍の四五キロ、体重五〇キロ、計九五キロを背負うと速歩(分速一五〇メートル)に落ち、十分もすると大きく首を振りだすという。(NHKTV「歴史

への招待」。一匹の馬では無く、替え馬を用意してあった筈だという。この馬を足軽が槍で狙うという。替え馬の、替え馬の手配も思いやられる。

第一章で紹介した『文春六月号』は次のように述べる。一人一日三合の米として、一万の兵は三万合。三十石。一石は百五十キロ。四千五百キロは二百二十五万円。一月では、六千七百五十万円。武器の調達を入れれば、一億円以上だがある。多分この計算には、馬の損料は含まれてはいないだろう。

略奪もあり得る。半済はんさいという手もあるとしても、全てをそれに頼る訳にはいかない。

戦いの費用は莫大なのだ。京都の民衆の損失は言を待たない。従来の仕事は出来なくなる。

第三章、下剋上の例

室町時代は戦乱の時代だ。鎌倉幕府の倒幕の闘いから、直ぐ南北朝の争乱が六十年近くに及び、応仁の乱に近くなる。百姓にも指揮や指図を取る、苗字を名乗る者が出て来る。土一揆など民衆が声を挙げるようになる。將軍義教は一色義貴、土岐持頼を討ち、赤松満祐に圧力を掛けると、逆に將軍が殺される事件（嘉吉の乱）が起こる。頼りの部下が勝手に独立してしまう。

秩序の乱れは、権力の低下と、財力の低下による場合が多い。応永二十七年（一四二〇）朝鮮回礼使・宋希璟は「国に

府庫なし、ただ富人をして支持せしむ」と看過された。「富豪」有徳人たちの財力で支えられているにすぎない」と言われたのだ。国（幕府）にしてそうなのだから、地方守護の窮状や知るべし。

戦乱相次ぐ中で、土倉、酒屋と称する、主に高利貸が応永三十二年（一四二五）北野神社に名があるだけで、三四二軒とある。これらが土一揆の主たる対象になった。

一方で守護大名の困窮も、『戦国時代の百姓思想』に近畿・近江地方の研究から、垣間見る事が出来る。

百姓が侍になるための三カ条が載る。

第一の条件は富裕であること。

第二条は芸能を習得していること。芸能や詩歌管弦は侍の必修の教養であって、上司も長けている。

第三条は系図を購入し、侍の由緒を証明する事とある。

裏側を見れば、武士や大名の家系図が担保や金になったことが窺える。これは下級武士に限らず、戦国時代の大名は神社への奉納が出来なくなる様が各地の寺社暦に見て取れる。

一旦下剋上で立身した者は、地域安定のために、それ以降の成り上がり者を防ぐため、自らが否定して来た、既存の権力の存続を求めるようになる。近江・狭川氏でいえば、興福寺の管理下に入る事である。

まとめ

室町時代は、史上最も波乱に満ちた時代だった。

後醍醐天皇は、天皇自らの政治を行おうとした。天皇は武士が政治を司る中での傀儡を怖れていたと考ええる。それは日本の政治史の中で、希有なことであった。後醍醐天皇の理想では、尊氏の幕府開基を容認出来なかった。

尊氏は後醍醐を追いやる。室町時代の中で、安定盤石は三代義満だ。三代は財力と理念を通して、直轄軍の増強、御所の建立で將軍絶対の地位を固めた。国王を名乗って貿易も行った。しかし、四代義持はこれらを覆す。

鎌倉幕府の倒幕以降の混乱は、統治の乱れを生み、下剋上の機運を醸成した。

下剋上の条件に、「裕福である」ことがある。財が権威や権力を呼ぶのだ。

武家も百姓の中にも、それに気付き、立身出世を考える者が出て来る。一揆という形の団結によって、地位や権力さえも手にすることが出来るようになった。

強い権力者が出現するまでの、束の間の一時が室町という時代なのかもしれない。際立った強い権力者不在の、成りあがろうとする者には、夢見る事の出来る時代だったのだ。

参考にした書籍ほか

- 中公文庫 『日本の歴史⑨南北朝の動乱』 佐藤進一著
- 中公文庫 『日本の歴史⑩下剋上の時代』 永原慶二著
- 東北大学出版会 『戦国時代の百姓思想』 永井隆之著
- 中公新書 『応仁の乱』 呉座勇一著

岩波新書 『武士の日本史』 高橋昌明著

中公新書編集部編 『日本史の論点』

講談社現代新書 『戦乱と民衆』 磯田道史・呉座勇一ほか

岩波新書 『戦国大名と分国法』 清水克行著

『文藝春秋』 二〇一八年六月号

自由国民社 『読める年表日本史』

角川書店 『角川日本姓氏歴史人物大辞典』

角川書店 『角川日本地名大辞典』

学研 『ハイベスト教科事典⑦日本史』

学研 『エリア教科事典①日本の歴史』

他。

(北区)

「入選」

経験にとって美とは何か

木俣 統裕

他者の美的経験へのアプローチは、その美しさを自分自身に再現することの難しさのうちにある。

実際に、アントワーブ大聖堂のルーベンスの絵画を見たネロ少年の感動について何事かを語ることは可能だろうし、「地球は青かった」と語ったガガーリンの驚きについても同様であろう。

しかし、他者の美的経験は自己にとっては必然的に追体験であり妄想であることを免れない。その意味で芸術作品一般に対する評価と異なり、実際に経験した者と追体験した者が同じ地平で対象を論ずることは原理的に不可能であり、両者は常に不均衡な関係にある。

試みにある美的経験を呼び起こしてみよう。

吉田（満）「死ぬ確率と生きる確率の間には適正配分がありません……（略）……特攻というのは、そういう原則を破るものですね。だからみんな止むを得ず、無理をしてその中をくぐりぬけるわけでしょう……（略）」

……

島尾（敏雄）「あれをくぐると歪んじゃうんですね」

吉田「歪まないとかくれないようなところがありますね」

島尾「……（略）……一見美しく見えるものをつくるために、やはり歪みをくぐりぬけることが必要というふう

なことが必要となると、ぼくはやはりどこか間違っているんじゃないか、という気がしますね。ほんとうはその中に行かないものがでてくるんですけど、ああいふ極限にはとくに実にはきれいなものででてくるんですね。そこがちょっと怖いような気がしますね」

吉田「そういうものの全体が、これはもう非常に大きな悲劇なんですね」（吉田満 島尾敏雄『新編 特攻体験と戦後』）

島尾敏雄は海軍の特攻兵器「震洋」の乗員として終戦まで出撃命令を待つ日々を過ごし、吉田満は戦艦大和の乗員として海上特攻に参加した。両者の対談では、不本意ながらも生きながらにして死者となった者の内面を知ることができる。ともに、避けられない死を受け入れたとき、美しい存在が己のうちに生じる可能性が語られている。

その場合「美しく見えるもの」が創出されるプロセスは「歪みをくぐり抜けることが必要」であるため「間違っている」。しかし創出された「実にきれいなもの」はまぎれもなく美しい。ゆえに「怖いような気が」するのである。

そして理解の難しさは、美しいものが実際に生じた瞬間の具体例をあげることにより鮮明になる。

(白淵警大尉)「敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ 今日覚メズシテイツ救ワレルカ 俺タチ Hansonノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサ二本望ジヤナイカ」

彼白淵大尉ノ持論ニシテ、マタ連日「ガングルーム」に沸騰セル死生談義ノ一応ノ結論ナリ 敢エテコレニ反駁を加工得ル者ナシ……〔略〕……白淵大尉ノ右ノ結論ハ、出撃ノ直前、ヨクコノ論戦ヲ制シテ、収拾ニ成功セルモノナリ (吉田満『戦艦大和ノ最期』)

吉田は、敗戦が濃厚であるにもかかわらず特攻死を迫られた士官たちの葛藤を描いた。無意味な死の耐えられなさに抗うとき、心理的欲求を満たすことのできる可能性のひとつが死の理由の美しさである。それは死生談義に終止符を打つほどの説得力をもつ美しさでなくてはならなかった。

一方島尾は、いつ出撃命令がでてもおかしくない状況下にある特攻隊員の心境を次のように描写した。

生涯の設計の骨組みが具合よくすべて支え合い、そのどの部分も繊細過ぎるので全体が微妙な釣合いを保っていたが、今夜ちょうど最後の仕上げのときに来たと思えた。今

夜出發すれば私の生涯は終わりを全うすることができる。彼女の涙や入り江奥の部落の女の子たちのおどりの中の或るしぐさが、おかしい細密画の一こまになって全体の構成を助けていた。すべてが大きな布切れをかぶせたような悲しみの中でここにこ笑って遠くの果てに遠ざかって行くが、壮烈な死に賛歌をささげていた。でももし今夜も昨夜の繰返しに終って私たちの出發が無視されたら、すべてはむしろ悪化し腐りはじめるだろう。(島尾敏雄『出發は遂に訪れず』)

いま命令が出れば美しい心象とともに出撃することができ。しかし出撃が延期されるのであれば、張り詰めた緊張の糸は急速に腐っていくであろうことが予想されている。

吉田と島尾が語る重要なことのひとつは、経験した美の確かさについての控えめな告白である。確かに美しい対象に直面したことを、ためらいながらも告白している。全体主義や戦争が生と死の極限で見せる美しさは、その欺瞞性ゆえに恐ろしい。そして本当に怖いのはその美しさに徹底的に没入することである。だから「非常に大きな悲劇」なのだ。

吉田や島尾と同じく戦中派世代にあたる吉村昭も銃後からみた戦時中の美しさについて戦後の著作で忌憚なく述べている。一方で想像を絶するほどの過酷な地上戦を経験した大岡昇平たちの作品に美しさの叙述を認めることができないうのは、戦争を通して発露される美が欺瞞であることの証左であ

るとともに、特攻体験がいかに特殊であったかということの裏返しでもある。

また、戦時中の人と社会の美しさを指摘した代表的な評論として坂口安吾の「墮落論」が想起される。安吾は、男を戦地に見送る女性たちの美しさ、また特攻隊員の潔さなどを例にあげ、戦時中の日本に否定しえない美しいものがあつたと吉田たち以上に明言する。

そのうえで戦後は人が人であるが故に美しさから墮ちるのだと述べる。安吾の挑発的ともいえる語り口は吉田と鳥尾の対談の語り口とは対照的である。しかし両者が見ている美しさは近似である。

現代においてこれらの美的経験はどのように受けとめられているであろうか。時代を経た時点にいる我々は、敗戦とそれに続く平和な社会の到来という歴史的事実を踏まえたうえで戦時中の美しさを追体験する。

ときに特攻体験の美しさは、「平和の礎となつたがゆえに美しい」、「負けたにもかかわらず美しい」と評される。もしくは「もののあはれ」の美しさとして、あたかも平家物語に近い悲劇として捉えられる。一方でその美的経験は正常な判断から逸脱しているが故に偽であり、むしろ歪みから生じる醜悪なものであると語られる。

いずれにせよ歴史的事実を前提としていることは明らかであり、戦争や特攻の価値判断を除いたとしても、吉田たちが感じたオリジナルな経験からは乖離していると思われる。

このような他者の美的経験の受容のされ方は、美の受容のされ方としては根源的であると思われる。それは美学においてコンセプチュアル・アートが受容される過程のアナロジーとして見る事が可能だからである。

1964年ニューヨークのステイブル・ギャラリーにおいて衆目を集めた美術作品があつた。「プリロ・ボックス」と名付けられたアンデイ・ウォーホルの作品である。「プリロ・ボックス」は、実際に研磨剤入れとして使用される段ボールの箱を、大きさとデザインをそのままに木の箱で再現したものであつた。それまでデュシャンのようにレディ・メイドそのものを美術作品とした例はあつたものの、実用性のあるレディ・メイドを模することによって美術作品とすることについては、あらためて様々な評価がなされた。

「プリロ・ボックス」を評価したひとりアーサー・C・ダントーは、対象となる作品の外観だけでは芸術性や本質を判断できないことを認め、棟方志功のことは引用して美術作品と非美術作品における差異の端緒を見出す。

彫られていない版画に墨を広げて、その上に紙を置き、刷るように私は素人に勧める。そのひとは黒い版画を得るだろうが、結果は墨の黒ではなく、刷りの黒である。さて目的は表面を彫ることで、この版画により大きな命とより大

きな力を与えることである。何を彫るにせよ、彫られていない版画とそれを比べ、こう自問する「美、力、深み、大きさ、動き、静けさはどちらに多くあるか」。彫られていない版木に劣るものがあるならば、私は版画をつくったことにはならない。私は版木に負けたのである。(アーサー・C・ダントー 松尾大訳『ありふれたものの変容』)

ダントーは、美の概念を内側から食い破ろうとする「プリロ・ボックス」を、志功の彫らない状態の版画と比べたうえで芸術性をもつ作品として位置付ける。作品が内包するメタファーなどのレトリックを芸術性の根拠とすることで、明確にプラトニズム的な概念を重視する。現代の美術作品は外観だけでは評価が左右され得ず、必ず人の企図を要するということを明らかにした。

一方で、芸術作品から外観上の特殊性という自明な価値を奪われつつある時代において、ダントーの評価は美の定義を変更する作業であったといえるだろう。

「プリロ・ボックス」がつけつけた主題の根本は、美という現象そのものを問うような批判や懐疑であった。トリックスターともいえるダントーは、レトリックの有無によって美の外延を拡張し、「プリロ・ボックス」的なものを美の定義のうちに取り込んだのである。

そして現代を生きる者に対して、他者の美的経験は常に「プリロ・ボックス」的であることを突きつけている。

特に、「プリロ・ボックス」をはじめとするコンセプチュアル・アートは実際に対象の鑑賞を要しないという点、および他者の美的経験は自己にとつて経験しえない点において象徴的である。

逆説的ではあるが、美に対して外延の拡張を迫る対象が創出されるとき、対象は必ずしも外見的な美しさを求められていない。

むしろアーティストと美術作品または、他者と美的経験のような、美の創出者と対象との関係性が大きくフォーカスされる傾向にある。結果、コンセプチュアル・アートが作品に対して美しさの判断を保留されるのと同様に、他者の美的経験も結果的に評価を留保されている。

海上特攻へと向かう戦艦大和に乗船した吉田たち士官たちにとつての新たな目標である「新生日本のさきがけ」たらんとする意識は、「アジアや世界のため」という戦時中に大上段に構えた大義の延長線上にある。大東亜共栄圏の樹立およびアジアの解放から、新生日本のさきがけへと目標が変更されたのである。

戦争に勝利するために特攻作戦があるのだとすれば、前件が達せられない場合に後件は無為の烙印をおされるはずである。しかし吉田たち特攻に参加した者たちはそのパラダイムを転換した。この戦争は敗北するであろう、またはどんなに

見積もつても勝ちはないだろう。しかし自分たちの特攻死は日本の目覚めのために有意であると。新生日本の礎となるという美しさを新たに共有したのである。

その美しさは、そのままでは現代においては危険な美しさである。

危険な美しさは時代の要請によって希釈される。戦死者の最期の言葉の多くが天皇陛下万歳ではなく家族を想う言葉であったことが強調され、志半ばで世を辞す学徒兵の無念の日記が紹介される。戦争を肯定し戦争に没入していた言動の数々は差し控えられる。

同時に戦争中に表明された美しさは反戦平和的な解釈のうちに収斂していき、「プリロ・ボックス」の受谷と同様に少なくとも誰しもが扱うことのできる無害なものとなる。他者の美的経験に対するこのような理解の求心力を超えることは可能であろうか。

ヒントは吉田と鳥尾の語るためらいの正体のうちにあると思われる。たとえ美しさが反時代的なものであったとしても実際に美しかったことを知る者の緊張感である。

実感として戦時中の美しさは当時においては継戦の原動力となり、戦後においては戦争美化へと直結しかねないがゆえに当事者の語りがためらわれている。

しかし、ためらいこそヒントがあるのではないだろうか。敗戦後、安吾は堕ちることを積極的に肯定した。安吾の快刀乱麻な物言いは戦後社会で広く受け入れられたが、本

当に支持されるべきは「ためらい」であるべきではなかったか。安吾の言説はあまりに多くの人々を緊張感から解放してしまつた。

吉田たちは戦時中に感じた美しさに歪みを感じ否定することで堕ちたのである。ただし彼らは安吾が勧めるほどには徹底的に堕ちることはできなかったと思われる。

美しさを棄て墮落へ走つた者は、また簡単に墮落を棄て美しさへ走る可能性と同居していることに気づいているだろうか。美しさがひとつの価値観だとすれば、墮落もまたひとつの価値観なのだから。

また、失われた命に鎮魂の祈りをささげるとき、戦中派にとつて安吾の墮落を身に纏うことが許されているであろうか。生き残つた者にとつて、死者は美しさの中で時をとめているのだから。

他者の美的経験を自分自身に再現することは極めて困難である。しかしその美しさに「ためらい」という名の臆病さをもつて接することが許されるのならば、私たちが他者理解と称して切り落としているものを救いあげることができるはずである。

参考文献

- アーサー・C・ダントー 松尾大訳「ありふれたものの変容」慶応義塾大学出版会
- 鳥尾敏雄 吉田満「新編 特攻体験と戦後」中央公論新社

- 吉田満「吉田満著作集」文藝春秋
○紅野敏郎 紅野謙介 千葉俊二 宗像和重 山田俊治編
「日本近代短編小説選 昭和篇3」岩波書店
○坂口安吾「墮落論」角川書店

(浜北区)

「入選」

二つの展覧会から読み解く ジャポニスム研究の成果と課題

―国立西洋美術館「北斎とジャポニスム HOKUSAIが西洋に与えた衝撃」展 東京都美術館「ゴッホ展 巡りゆく日本の旅」―より

山下 裕子

ジャポニスム研究が注目を集める中、二〇一七年初秋から二〇一八年初冬にかけて、同じ上野公園内で、片や西洋のジャポニスムを北斎の影響から読み解く展覧会と、ファン・ゴッホと言う一人の作家の中でのジャポニスムについて探る展覧会が同時に開催された。鑑賞者にとっては二つのジャポニスムに対する視点を体感出来るまたない好機に恵まれる事となった。ここでは二つの展覧会を通して、現在のジャポニスム研究の実情と今後の方向性について展望したいと思う。

近年、世界的に一八七〇年代から一八八〇年代にかけてのジャポニスムの研究が進展している。ジャポニスムの中でも最も人気を博したのが北斎であった。北斎の影響は絵画だけでなく、彫刻・グラフィックデザイン・工芸の様々な分野に及んでいる。国立西洋美術館「北斎とジャポニスム HOKUSAIが西洋に与えた衝撃」展では北斎作品約二一〇点(錦

絵約四〇点・版本約七〇点」と、それらからインスピレーションを得て創作されたと思われる西洋美術の名品約二二〇点を対比させながらジャポニスムを読み解く展覧会が構成されている。具体的には、

1. 北斎の浸透
2. 北斎と人物
3. 北斎と動物
4. 北斎と植物
5. 北斎と風景
6. 波と富士

の六章立てにより、モテーフ毎の具体的な影響について検証が行われた。北斎作品が西洋の芸術家たちに如何に衝撃を与えたのか、ジャポニスムを北斎に焦点を当てて見て行き、西洋のジャポニスムの実態に迫る展覧会である。

日本の開国後、今から約一五〇年前の一八六〇年代のパリを中心に浮世絵が持て囃される様になる。一八七〇年パリ万国博覧会では日本の美術品が数多く展示され、西洋の芸術家に刺激を与えた。そうした西洋へ紹介された日本美術の中で何故「北斎」が群を抜いて持て囃され、「偉大な北斎」像が形成されたのか。その理由を本展は解き明かしてくれている。

まず人物画の分野では、それまでの西洋美術の人物画の立体的で写実的表現に対し、日本美術は少ない筆致で簡潔に、しかも表情や動作、体の作りを表現した。同じ写実と言って両者の表現方法は全く異なっていた。西洋におけるヌード

は、神から与えられた人間の美しい理想的な姿として描くと言う大義名分の下で、本来ならば隠されるべき裸体を描き、見る事が可能となっていた。マネやクールベらは、その欺瞞を暴き立て、ヌードの意義が問われる時代となっていた。北斎は「日常の身体」つまり、人々の寛いだポーズや少し滑稽な姿（人の作る形の面白さ）と言った人々の極日常の様子を多く描写している。ルールに囚われない北斎の人体表現は西洋の多くの美術家に刺激を与えた。北斎が描く飾らない在りのままの動作は、ドガやモリゾ、カサット、ロートレック、シエラら多くの画家が参照する事となり、各々が新しい表現方法を導き出す手立てとなった。また北斎の描いた幽霊や妖怪は、世紀末の象徴主義の作家やその流れを汲む表現主義の作家の創作意欲を大いに刺激し、幻想的な世界の表現へと置き換えられた。本展ではオデイロン・ルドンやアルフレート・クーピンの作品と北斎作品が並立して展示されている。

北斎の人物表現が受け入れられた理由の一つは、その新しさの中にも、人体の骨格や筋肉の動きの観察と言った西洋的な人体研究の発想を背景に制作をしていた事にあるのかもしれない。『北斎漫画』は西洋では「北斎スケッチ」と呼ばれ、ジャポニスムを引き起こすきっかけとなったとも言われている。取り分け人物については、あらゆる姿が撮らられている。日常的な姿からアクロバティックな姿勢まで、瞬間瞬間の体の動きを捉えているので、繋ぎ合わせればアニメーションにもなる。本展ではエドガー・ドガ「背中を拭く女」「踊

り子たち、ピンクと緑「朝の入浴」や、メアリー・カサット「青い肘掛け椅子に座る少女」等を『北斎漫画』を並べ、類似点や着眼点について比較しながら鑑賞出来る展示となっている。

続いて動植物画の分野についてであるが、『北斎漫画』の中でも衝撃を与えたのは、莫大な種類の動植物画が生き生きとした姿で描かれていた点である。西洋ではキリスト教の神を頂点とした考えに基づき、絵画ジャンルに階層付けが行われていた。最高位は聖書や古代文学を扱う歴史画、続いて神の創造物の中で最も優れた存在としての人間を中心としたヒエラルキーとしての肖像画、風俗画・風景画、そして遥かに低い地位に自然を対象とした動物画・植物画があった。小動物や魚・鳥・昆虫と言った小さな生物は、宗教的な象徴や寓意或いは静物画の添え物として、植物は自然から切り離され、「死んだ自然」として「死を忘れるな（メント・モリ）」と言うキリスト教のメッセージが託される。それと比べ日本美術は花鳥画を始め、自然への親しき、観察力と表現力の豊かさを備えていた。『北斎漫画』には今にも飛び出して来るような生命感に溢れる絵が数多くあり、当時の西洋の人間には、とても新鮮で輝いて見えただろう。ゴッホやモネは植物の真実の姿を感じ取り、自ら花へと歩み寄り、その姿をクローズアップで描き出した。

そして早くから最も大きな影響を受けたのは、装飾工芸の分野だろう。西洋でも小動物や植物を図案に取り込む伝統は

あった。エミール・ガレは象徴派の世界観を表す為に、北斎を取り込む。例えば本展のガレの初期の作品では、北斎の絵をそのまま借用したものがあつた。「双耳鉢・鯉」の、うねる様な鯉の姿は『北斎漫画』にある。しかし「花器・トンボ」では、この頃になるとガレのオリジナルとなつて行く事が解る。ガレは日本の自然観に深く共鳴していたと言ふ。

日本美術に学ぶことで、西洋において伝統的に象徴的意味の伝達物あるいは主題的情景の従属物でしかなかった動植物はそれ自体活きた主題となつた。日本の花鳥画の、人が植物に歩み寄り描く方法は、構図やモチーフの新しさを超え、自然と人がどう向き合うかの提示でもあつた。

風景画の分野では、北斎の風景はそれまでに西洋に無かつた表現として驚きを持つて取り入れられた。人間の視覚的体験を基に、意表を突く構図や、影の無い鮮やかな色面による構成、同じモチーフの繰り返しや連作で描く発想。そして普通に誰もが視覚的に体験するものがそこに描かれていたのだつた。浮世絵の視覚的表現は、実は自分たちの経験と重なり合うものであつた。それは西洋風景画の在るべき姿を打ち破る大きなきっかけとなつた。西洋ルネサンス以来の風景画の規範は画面中心に消失点を想定し、そこに画面両脇からの直線が交わるように構図を組み立てる奥行きのある広い空間を描き出す事が基本であり、その中に遠山、海や湖、岩山、道、全面の両脇に大きな木々が配される決まりとなつていた。これは近代においては、形骸化されたものと思われるよ

うになって行く。具体的に構図としての影響は、本展出品のカミーユ・クロードル「波」やクリストファー・ドレッツァー「波型鉢」と北斎《神奈川沖浪裏》との類似。「富嶽三十六景」など連作の発想は西洋に無いもので、アンリ・リヴィエール「エツフェル塔三十六景」やポール・セザンヌのサント＝ヴイクトワール山の連作、クロード・モネ「ノルウエーのコールサース山」十三点等へと発展する。それは対象の本質に迫る手段として有効であった。北斎の「木の間越」と言う感覚的体験は、モネ「木の間越しの春」へと結実する。西洋の美術家たちは北斎から得た表現を、制作過程で創造のヒントとし、自らの物として消化して行った。北斎を始めとする日本美術の自然表現は、その後の非具象絵画の出発点ともなっていく。北斎のリアリズムは西洋が渴望していた近代性を満たすものだったのである。

北斎が評価された一因は、ジャポニスムの評論家たちが思想的に共和主義の論客であり、民衆出身で民衆の日常を描く画家として北斎が高く評価されたからであった。そして十九世紀後半の美術史学の誕生によって、美術家たちを優れた個人の巨匠として語り、その巨匠を点として繋ぎ合わせ語る傾向が強くなった事によって、北斎が巨匠として祭り上げられ利用されたと言う背景を忘れてはならない。ジャポニスムにおける北斎の名声は、ある意味では人為的に創り上げられたものではあった。しかしながらそうした側面を考慮に入れた上でも、北斎の表現と作品に向けた眼差しは、日本美術の典

型の一つとして西洋美術を変革する大きな要因となった事は、本展にて充分感じ取ることが出来るであろう。

日本美術は、西洋のルネサンス以来の、遠近法による空間表現や対象の写実的表現、理想化され形骸化した人体表現、限られた色彩と言う規定や枠組みから抜け出すきっかけの一つとなった。規範を打破する契機として稚拙な美術・プリミティブな美術・中世裝飾写本そして日本美術等の幾つかの要因があったが、その中でも大きなものとなったのが、北斎を始めとする日本美術であり、「ジャポニスム」と言う一大潮流が出来上がったのであろう。北斎は馬淵明子氏が語るように、その主題の多様さ、正確な動きの表現、ユーモアと諧謔、意匠の面白さや奇抜さ、鋭い観察力によって、西洋において唯一無二の才能として意識される事となる。初めは「ジャポニザン」から始まった西洋の日本美術受容も、美術家たちの努力によって北斎や日本美術を消化し、独自のものにする高みにまで、つまり「ジャポニスム」と言う一つの改革の域まで引き上げられた。

日本人の、自然の中にあり自然と共にその折々の季節を感じながら生活し、自然の中の生物を慈しみ自然の移ろいの情感を愛でると言う自然との関わり方が、結果として西洋の芸術家の心にも受け入れられ、各々の独自の解釈を可能とした。そして日本美術や日本人画家の自然への眼差しに巡り合う事で、西洋の自然を神や人の下と見、自然を人為的に操作し、表現の一つとして利用するやり方、その不自然さに気付

く事が出来たのではないか。「北齋現象」は新しい美術の世界を切り拓き、西洋美術に定着して行った。本展はそうした事実を改めて確認する機会を我々に与えてくれている。

そして同時に開催された東京都美術館「ゴッホ展 巡りゆく日本の旅」展はファン・ゴッホの受容したジャポニスムにスポットを当て、ファン・ゴッホに影響を与えた日本の浮世絵版画や日本をテーマにした小説とそのファン・ゴッホによる解釈、そしてその深化の過程及び没後における日本人の側からのゴッホ巡礼の紹介を通し、ファン・ゴッホの生涯と作品における日本の影響を検証している。出展されたのは同時代の画家の作品や浮世絵作品約五十点、ファン・ゴッホの油彩画・デッサン約四十点、加えて映像を含めた関連資料の数々だ。

ファン・ゴッホと日本との関係について、二〇一三年より蘭日研究者の共同研究が始まり、その成果を受けて、両国で展覧会が開催される運びとなった。日本巡回展では、それに合わせファン・ゴッホに憧れた日本人のゴッホ巡礼の紹介を加えている。本展は日本初のファン・ゴッホ美術館との国際共同プロジェクトである。

祖国オランダからパリに出たファン・ゴッホを待っていたのはパリに花開いた印象派絵画と日本の浮世絵との出逢いであった。画商ジークフリート・ビングの屋根裏部屋での浮世絵との出逢いは、ファン・ゴッホを陽光溢れる南仏アルヘと向かわせる事となった。ファン・ゴッホにとって日本は創

造の源でありユートピアとなり、アルルを日本と重ね合わせた。一八八八年から没する一八九〇年までの南仏での生活は、狂気と不安の中での創造と捉われがちであるが、彼にとつては、浮世絵の明るい性格を自身の作品の中に取り入れる事で心身の回復を図り、幸福で快活な存在を夢想出来た、生涯の中でも非常に幸福感と喜びに満ちた至福の時間であった事を本展は物語っている。

我が国においてゴッホの名は明治時代末より広く知られるようになり、実際の作品によって紹介する本格的な展覧会は戦後一九五八年、一九七〇〜七七年に行われている。第三回は一九八五〜八六年の「ゴッホ展」で、この展覧会は、それまでの研究の方向性の転機とも言うべき節目の展覧会であったと位置付けられるだろう。即ち、人間ゴッホへ偏重しがちであった視点から、様々な研究の方向性を踏まえ、ファン・ゴッホの芸術の展開の契機となった影響源に着目し、展示を構成した。そして、二〇〇五年の「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」により、ファン・ゴッホ作品を歴史的・文化的背景に正しく位置付け、同時代の他の芸術家の作品と比較検証する試みが行われ、二〇一〇〜一一年の「没後二〇〇年ゴッホ展」では素描や油彩による彼の様式と技法の発展を追う展示が行われた。こうして、自らの耳を切り落とし、生前に真価を認められなかった悲劇の天才と言う孤高の画家と言うイメージから、構築的で絶えず様式と技法の発展に邁進し、敢然と制作に真摯に取り組んだ画家であり、同時代の数多くの

人々によって確かに重要な画家と見なされていたと言う認識が広がり始めて三十年近い歳月が流れようとしている。

さてファン・ゴッホに於いてジャポニスムの影響は、図様の引用・モティーフ・構図・色彩・視点・連作形式・日本人画家達の精神性への傾倒と言う点に現れる。具体的には、モティーフとしての南仏を象徴する花「アイリス」は、日本を起草させるものであり（参照1）、南仏に広く分布した「夾竹桃」は日本に対する憧れを重ね合わせたモティーフであった（参照2）。日本の鳥瞰図の水平線・地平線を高く取る構図（参照3）、画面中央に遠景を配した構図（参照4）、画面の端でモティーフが大胆に断ち切られる構図（参照5）、日本の花鳥画を想起させる、小さな自然のモティーフをクロウズアップの非対称で描く構図等の採用（参照6）。また、輪郭線を描き平坦な色面で彩色する技法、浮世絵のような陰影の無い平板な色彩表現を取り入れ（参照7）、色彩の表現性を重視しただけでなく、彼は筆致の特異性を増し、感情的な意味を更に強調するようになる（参照8）。浮世絵の日常的なモティーフの一つ一つを細かい線で小さく描きこむ繊細な線描、日本人画家の運筆の素早さと簡潔な線描の取り入れ。江戸時代後期に移入された西洋の遠近法を浮世絵絵師が誇張して用いた浮世絵版画の極端な遠近表現（参照9）。東海道五十三次に見られる様な山水を歩く人物が風景に溶け込むように小さく描かれている点（参照10）。そして浮世絵の大首絵や美人画の影響による人物画や静物画の簡略化された背景

（参照11）。浮世絵の人物画からは、明るい色面の背景や人物の性格や感情表現を学んだ（同）。低い植生に焦点を当てた視点は、自然の片隅に目を向ける日本人画家への共感を反映している（参照5）。また、例えば一八八九年のオリイ園のテーマは、浮世絵の「百景」の様な連作として、色調や構図の異なる作品を複数残した（参照12）。そして簡素な部屋で暮らし、日本人の共同生活をモデルとした芸術家の共同体を作る夢と言った、日本人画家の精神性への傾倒（参照13、14）。この様に浮世絵はジャンルを問わず、ファン・ゴッホの手下となった。

アルルでの数か月の生活は、ファン・ゴッホ自身の眼を「日本人の眼」に変えた。しかし彼の日本へのイメージは曲解され形成されたイメージでしかなかった。ファン・ゴッホにとっての「日本」は芸術的・社会的・倫理的・宗教的理想社会としてのユートピアであり、ファン・ゴッホのジャポニスムの最大の特徴は自身の想像の世界にそのユートピアを作り上げた点である。自身の全存在を架空の「日本」に懸けた点が同時代の他の美術家との違いであった。

ファン・ゴッホにとって南仏行きは、北方に生まれ育った人間が南方に抱く憧れの域を脱するものではなかったのかもしれない。残された手紙等の資料に、南仏をましてやアルルを理想の地と見なしていた痕跡は無い。しかし南仏を、アルルを自分の理想の地とする事を決意しパリを離れた。ファン・ゴッホの「日本のようだ」という言葉は、自分自身に向

けられた暗示にも似た思い込みだったのだろうか。これ程素晴らしい環境に居るのだから、必ず傑作を生み出さなければいけないと言う、自らへの重圧でもあった。

厚く盛り上げられた絵具、平坦で強烈な色面、単純にして率直なモチーフへのアプローチと言った彼独特の様式が完成したのがアルルであった。ファン・ゴッホは重圧を跳ね除け、自らの芸術をこの南仏で開花させた。そして日本絵画の明るい性格を取り入れる事で、自身の創作への喜びを見出すことが出来た。彼のジャポニスムは、終生彼自身の芸術を支えた。ファン・ゴッホの「日本の夢」は誤解に満ちたものであったにせよ、南仏での創作活動は意欲に富んだ非常に幸福な期間であった事が、本展から充分に伺う事が出来るだろう。

一九八五年の「ゴッホ展」にて指摘されているように、ゴッホ研究では

- ① 象徴的言語を聞かせようとする試み
- ② 革新的な造形言語の意味合いを探る試み
- ③ 一人間の生として、精神の動きの軌跡として作品を読み解く試み
- ④ 象徴主義、後期印象派、表現主義等、近現代美術史の動きの中に作品を位置付ける試み
- ⑤ 作品の美術史的背景、精神的・社会的背景を探る試み

この時点で既に以上の取り組みがなされ、それらの統合が進み、更にジャポニスム研究の進展が本展を導いた。

約十年と言う短い画業の中で常に画法を変化させ、その芸術性を高めていったファン・ゴッホ。最晩年の二年で飛躍的に技法を習熟させる事が出来た、その支えとなったのが浮世絵を始めとする日本絵画と日本のイメージであった事は、我々日本人にとって非常に歓迎すべき報であり、日本と彼の繋がりが幸福に満ちたものであった事を、改めて見直す時に来ているのではないか。日本でのファン・ゴッホ展の軌跡は、彼の中の「日本」を探る道程であったと言えるのかもしれない。ファン・ゴッホと言う一人の芸術家の作品群の捉え方は人々々ではあるが、彼の芸術性の本質を探る努力は今後益々進められ、彼の作品の真の評価が今まで以上に高まる時が近い将来来る事を期待して止まない。

以上、二つの展覧会を通じて得られたジャポニスム研究の成果から、今後の課題を探ろう。日本の開国以降、西洋の美術家は日本美術の新しさ・美しさに・珍しさに魅了され、そのエッセンスを消化しながら、自らの創作活動を展開した。ルネサンス以来の遠近法による空間表現や対象の写実表現、限定された色彩、理想と言う名の下に形骸化された人物表現等の形式や規範に縛られた西洋画の中にあり日本絵画の自由さとの出逢いは、非常に幸運であったと言える。また自然表現の深化と言う点から言っても、自然は神が作ったもの、人間の下位に位置すると言う規範から、十七世紀オランダで風景画が自立して以来、ジャポニスムにおいて、更に自然の細部への関心が向くようになると言った、表現の進展が見られ

た事も大きな収穫だったと言えるだろう。

十九世紀後半の西洋は日本美術を取り入れ、一つの資産とした。比べて日本は、古来より海外の文化を取り入れ吸収し、自らの物として独自の文化を築き上げて来た伝統を保持している。外国からの影響とその需要については、各方面から様々な研究が行われて来たのではあるが、日本文化・日本美術・日本人の感性が海外にどの様な影響を与えたのかと言う視点は、前者に比べ少なかったように思われる。日本についての研究が海外において進む一方、日本でも今後更に日本が海外に与えた影響について分析する様々な論点・視点・視覚・切り口を見つげながら、異文化同士の出会いがもたらす新しい価値の創造について熟考して行く事が必要な時に差し掛かっているのではないか。二展はその気付きの場を提供してくれている様に感じられるのである。

参照（本展出品作品より）

1. アイリスの咲くアルルの風景 一八八八年油彩、カンヴァス ファン・ゴッホ美術館
2. 夾竹桃と本のある静物 一八八八年 油彩、カンヴァス メトロポリタン美術館
3. 雪景色 一八八八年 油彩、カンヴァス 個人蔵
麦畑 一八八八年 油彩、カンヴァス デ・ブルー財団（アムステルダム）
サントマリイの海 一八八八年 油彩、カンヴァス

プーシキン美術館

4. 渓谷（レ・ペイルレ） 一八八九年 油彩、カンヴァス クレラー・ミュラー美術館
5. 蝶の舞う庭の片隅 一八八七年頃 油彩、カンヴァス 個人蔵
6. 花咲くアーモンドの木 一八八八年 油彩、カンヴァス ファン・ゴッホ美術館
7. 糸杉の見える花咲く果樹園 一八八八年 油彩、カンヴァス クレラー・ミュラー美術館
8. 河岸の木々 一八八七年 油彩、カンヴァス デ・ブルー財団（アムステルダム）
9. 種をまく人 一八八八年 油彩、カンヴァス ファン・ゴッホ美術館
10. ヴィゲラ運河にかかるグレーズ橋 一八八八年 油彩、カンヴァス ポーラ美術館
11. 渓谷（レ・ペイルレ） 一八八九年 油彩、カンヴァス クレラー・ミュラー美術館
12. 男の肖像 一八八八年 油彩、カンヴァス クレラー・ミュラー美術館
13. アルルの女（ジヌー夫人） 一八九〇年 油彩、カンヴァス ローマ国立近代美術館
- オリイブ園 一八八九年 油彩、カンヴァス クレラー・ミュラー美術館
- オリイブを摘む人々 一八八九年 油彩、カンヴァス

14

クレラー・ミュラー美術館
寢室 一八八八年 油彩、カンヴァス ファン・ゴッホ
美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）

（中区）

「入選」

風立ちぬ

中谷 節三

堀辰雄

堀辰雄は、明治三十七年十二月二十八日、東京市麹町区平河町（本籍は世田谷区砧）で父―堀浜之助、母―西村志気の長男として生れた。父の戸籍妻こうは広島で病の身を休めていた。父は辰雄を嫡男として届け出た。（正式の夫婦の子）辰年だった。辰雄は成人になるまで、父の恩給を受領出来た。父は東京裁判所の書記を務めていた。そのうちこうが東京してくるというので、辰雄は実母と共に、向島小梅町（川向ふ）の母志気の妹の家に身をよせた。（二才のときであった。）

その後、父と戸籍母こうが死去したので、父の恩給は辰雄が二十才の年まで受領ることになった。向島小梅町には政府の官舎があった。ここは私の祖父一家が陸軍省経理局員（陸軍経理曹長だった明治二十―三十年代―東京都赤羽台の陸軍被服廠勤務）として入所したところであった。

堀は大正六年（十三才）向島の牛島小学校より、東京府立第三中学校（現在の両国高校）に入学、数学に興味を持ち、旧制第一高等学校は文科甲類（ドイツ語）を選び、将来数学者ならんと志ざした。当時、旧制高等学校は全員寄宿生活と義務づけられていた。そこで堀辰雄は「数学」より「文学」の道へと手引されたのが神西清であった。彼とは以後、終生良き文学的僚友となった。

大正十二年（大正十年に卒業した旧制中学校の校長）―広瀬雄より作家の室生犀星を紹介され、彼の別宅のある軽井沢を訪ねてみた。

軽井沢は中仙道なかせんの宿場町として栄えたが、明治になって一時衰退した。ところが、夏でも涼しい気候に着眼した外国の宣教師らが相次いで別荘を建て、避暑地としてにぎわふようになつた。日本の文人もそれを見習い、エアコンの無い時代、夏の執筆に適しているのを実感した。今や長野新幹線が止まる。

大正十二年は関東大震災（九月一日）の年である。堀は母、志気しげを失つた。その衝撃は大きかつた。シヨックのため、肋膜炎を起こし、一高をしばらく休学した。堀の胸の病いの最初の兆候であつた。戦前、薬の無かつた時代、自然にまかせるしかなかつた。死といふものを考えるしか無かつた悲しい現実をしばらく見つめて見よう。空気のきれいな軽井沢や信州の高原地帯は最適地帯であつた。堀は療養方々文学の勉強

をした。スタンダール（赤と黒）、メリメ（カルメン）、ジイド（狭き門、背徳者）などを原書で読んだ。我々はロマン（真の小説）を書かねばならぬと日記に書きとめた。

大正十四年四月、東京帝国大学文学部国文科に入学した。大正十四年四月は堀辰雄の文学生誕の母体となつた年である。四月から九月にかけて軽井沢の「つるや旅館」に部屋を借りた。毎夏のように定宿となり、満員の場合には支配人が空いている宿に声をかけていた。

カフカ「カルメン」、「コロンバ」、アナトル・フランス「赤い百合」、レニエ「燃え上る青春」、ジイド「狭き門」「背徳者」などをこの夏読んだ。（何れも原書である。）彼は従来の自然主義の私小説にあきたらず、虚構の西欧風の本格的な小説を志した。

夏（昭和八年六月）

私の家の面している中庭の、とつくにもう花を失つていつつじの茂みの向うの、別館の窓ぎわに一輪の向日葵ひまわりが咲きでもしたかのように、日にさらさらとかがやき出したように思えた。私はやつとそこに、黄色の麦藁帽子をかぶつた背の高いやせすぎな一人の少女が立っているのだということを知ることが出来た。―やがて別館から彼女の父らしい人が姿を現した。二人は私の窓の前を斜めに横切つていったが、見ると彼女は父よりも背が高いくらいであつた。

ふと気がつくくと、私の知らぬ間に、そこいらじゅう一面に

夏らしい匂いが漂い出しているのだった。とうとう夏夏になった。裏の雑木林では、蟬がひねもす鳴きやまなかった。

ある日の午後、ちよつとした晴れ間を見て、ポツポツ外人たちの入り出した別荘の並んでいる水車の道のほとりを散歩していると、チェコスロバキア公使館の別荘の中から誰かピアノのけいこをしているらしい音が聞えてきた。それに耳を傾けていると、それはバツハのト短調遁走曲らしかった。そのメロデーが、くり返されているうちに、そのピアノのたゆたいがち（心がゆれる）な効果が、その頃の私の小説の考えや、なやんでいた筋が発展しそうな気がした。

ホテルに泊り乍ら、病気の治療に努めている娘と、付きそいの父親は、東京・世田谷砦の矢野透・綾子の親子であった。堀家と同番地で旧知の間柄であった。娘の綾子は女子美術学校に学び、油絵を描いていた。堀は白樺の木蔭に身を横たえてそれを見ていた。

綾子の病状は日々に悪化した。父の透は堀に相談して見た。「費用は私が負担するから、療養所に一所に入所してもらえないかしら」堀は綾子の病状を考えると、その為に婚約という形式だけではあるが取った。綾子には婚約者が別にいたので、それは解約してもらった。入所先は、堀が一昨年略血したとき、利用した八ヶ岳の富士見高原療養所であった。

健康保険の無い時代、入所者は限られていた。堀は当時、作品を書かねば、収入の無い状況であったが、入院中は綾子の看護に集中すれば良かった。

四月下旬の薄雲りの朝、停車場まで父に見送られて私達はあたかも蜜月の旅にでも出かけるように、中央線の二等車に乗り込んだ。プラットフォームには、急に年とつたような父が一人残されて立っていた。

芥川竜之介

大正十二年十月、(堀の文学の師)室生犀星は故郷金沢へ引揚げるため、同じく軽井沢に住いのある芥川竜之介を堀に紹介した。堀はしばしば芥川家を訪ね、本について質問した。これに対する芥川の返事である。

「わたしは安心してあなたと芸術の話の出来る気がしました。わたしの書架にある本で読みたい本があればお使い下さい。遠慮しちやいけません。どんどんお使い下さい。」

『羅生門』(大正六年) 第一短篇集

『奉教人の死』(大正七年) 第二短篇集

芥川は人に対して弱みを見せず、常にさつそうとしているように見えたが、実は気の弱い、気のまわる、気を病む人であった。神に同情するのは神は自殺することが出来ない事である。芥川の最后を考えれば、真剣であり、悲愴な感じがあるのではないか。芥川の病気は「神経衰弱」であった。なおることはなかった。

昭和二年七月二十四日、師の芥川竜之介が自殺した。人間として、作家として理想的存在であった芥川の突然の死は堀辰雄(理想的文学を目ざしていた)にとつても突然のことで

言語に絶する大打撃であった。やさしい人であった。親切な人であった。しみじみした人であった。芥川のおしゃべり、気が弱かった。神経衰弱は大きな欠点であった。

住いの北区田端は住宅街で文士村であった。三人の男子を残した。(長男)比呂志―俳優(次男)多加志―戦死(三男)也寸志―作曲家。皆、芸術家であった。(父親に似て)

人間として、作家として理想的存在であった芥川の突然の死は、堀辰雄にとつても突然のことで言語に絶する大打撃であった。重い肋膜炎を発症して死に瀕した。箱根湯河原で静養、東京帝国大学は昭和四年三月卒業した。卒論は「芥川竜之介」であった。その後、軽井沢で静養し、自宅へ戻った。落ち着いた。

風立ちぬ いざ生きまやも
(フランスの詩人 ポール・バレリーノ)

信州富士見高原療養所で、辰雄は綾子の病状を気づかないながら注意した。少ししわがれた声、ほてった様な顔、とき折り出す熱、食欲を失いややせた頬は、熱のせいではら色を帯び、はげしい咳、少し血痰を出す病状など、絶対安静の日々が続いた。看護婦たちも注意して歩いた。堀は入院患者たちから「ほりたっちゃん」と呼ばれるように親しまれた。

堀の病室は綾子の隣りで、緊急の場合すぐ飛び出すことが出来た。堀の病状は安定していた。綾子の胸のレントゲン写真を院長より見せられ「思ったより病果が拡がっている。本

院でも二番目位の重症かも知れない。」と。綾子は入院以来、安静を命ぜられずと寝ついたきりだったが、悪化したとも思えなかった。婦長は毎朝、病室から病室へと患者たちの夫々の特殊な人間性を見極め乍ら、体調を観察し診断の参考とした。

サナトリウムは八ヶ岳の大きなびのびした代赭色の裾野がその勾配と弛めようとするとところに、いくつかの側翼を並行に揚げながら、南を向いて建っていた。サナトリウムに着くと、私たちはその一番奥の方の裏がすぐ雑木林になっている病棟の二階の第一号室へ入れられた。簡単な診察後、綾子はすぐベットに寝ているように命じられた。リノリウムで床を張った病室には、全て真白に塗られたベットと卓・椅子があった。やつとランプがついた。私たちは看護婦の運んで来てくれた食事に向い合った。少しわびしかった。外はもうまっ暗だったので気づかなかったが、雪が降り出しかかった。翌朝、南に開いたバルコニーから見渡すと、南アルプスとその二、三の支脈とが、雲のなかに見えかくれしていた。綾子はすでに目をさましていて、ほてったような顔をしていた。「ゆうべ睡眠剤を飲んだの、少し頭が痛いわ」私は窓を開け放した。軽い水蒸気が立っていた。

旅行中の綾子の父から手紙が届いた。その帰途サナトリウムに寄るといふ。十月のよく晴れた、しかし少し風の強い日であった。近頃、寝たきりだったので、食欲が衰る、やせが目につくようになった彼女は、その日から努めて食事をと

り、ときどきベッドの上に起きたり、腰かけたりして元気をためていた。父はやつとやって来た。幾分前より老いが増えた。目立ったのは背中が丸くなったことであつた。病室へ入ると、父は私がいとも坐りつけている病人の枕元の椅子に腰を下した。疲れたであろう。彼女は少し熱を出し、医師より安静を命ぜられていた。もう直りかけているものと思つていた父は少し不安であつた。綾子は自分が興奮のため、熱のせいで頬がバラ色になつたのを感じて自身は良い感じと納得させたいかのように、それはかり、繰り返していた。

私は用事を口実に室を出て、親子を二人きりにさせた。しばらくして帰つて見ると、綾子はベッドの上に起き直つていた。掛け布の上に、父のみやげ物を拡げていた。少女時代から彼女の好きだと思つているものはかりだつた。彼女はいたずらを見つつけられた少女のように顔を赤くしながらそれを片づけた。

父は二日程滞在した。出発する前、私は父と二人で相談するため、サナトリウムの廻りを歩いて案内した。「もう半年になつたのだから、良くなつていそうなものだが……」

「山の療養所は冬の方が良いと言いますが」

「しかし、あれは冬まで我慢できないと思うが」

「しかし、自分は冬までいる気ですが」

「あなたは、いま仕事をしておられますか」

「いいえ……」

「あなたも、少しは仕事をされないと、いけないのでは？」

「そう、おれは随分、長いこと仕事を放つていた。少し何とかしよう」

やがて二人は、すっかり木の葉の黄ばんだ雑木林の中を通りぬけて裏手から病院へ帰つた。

夕方、停車場まで父を見送りに行つて帰つて見ると、綾子はベッドの中で身体を横向きにしながら、激しい咳にむせつていた。今まで一度もない位だつた。「お水を頂だい」

私はプラスチックからコップに水を少し注いで、彼女の口もとに持つていった。そのあと前より烈しい発作が起きた。私は看護婦を呼んだ。のどの発作は止まつたらしかつた。看護婦は彼女を支えていた手を少しづつ放しながら「もう止まつたわね、そのままじいとしてらっしゃいね。今、注射を頼んであるわ」

部屋を出るとき、私にちよつと耳打ちした。

「少し、血痰を出してよ」

綾子はぼんやり目を見開いていたが、何だかねむつているとしか思えなかつた。絶対安静の日々が続いた。病室の窓は黄色いカーテンが卸され、室はうす暗かつた。看護婦たちも足を伴立って歩いた。しかしその危機も一週間ほどで済んだ。ある朝、やつとカーテンを揚げて室は明るくなつた。

夕方になると、戸外で少しでも楽な呼吸をするために、バルコニまでベットを引き出す患者たちが多かつた。綾子は、この頃暑さのためにすっかり食欲を失ひ、夜もよく寝られなことが多かつた。私は彼女が眠りながら呼吸を速くしたり

弛くしたりする変化をはつきりと感ずるのだった。ときどき短い呼吸困難が襲ふらしかった。そんな時は、手を少しけいれんさせながら喉の所まで持つていつもそれを抑えるような手つきをする。苦しいときのあとは、静かな息づかいになる。

「あなた、そこにいたの」

「あ、僕もここで少しウツラウツラしていたんだ」

「ここにいて頂戴！」

病人は気弱そうに私に言った。

「なんだか寝られそうもないわ」二、三分すると彼女がベッドの中で独り言のように言った。私は明かりを消して立上ると、彼女の手をとって、しばらくそうしたまま、暗の中に黙り合っていた。

何も知らずにいたのは私だけだったのだ。午前の診察が済んだ後で、私は看護婦長に廊下と呼び出された。そして私ははじめて綾子がけさ私の知らない間に少量の咯血をしたことを聞かされた。彼女は私にそれを黙っていたのだ。咯血は危険という程度ではないが、用心のためにしばらく付添看護婦をつけて置くようにと、院長が言ひつけて行ったという。

私はそれに同意する他はなかった。綾子のそばを離れることは不本意なことであった。耐え難いことであった。私は丁度空いている隣の室に、その間だけ引き移っていることにした。

私は毎日、二―三時間おきぐらいに、隣の病室に行き、

病人の枕もとにしばらく坐っている。しかし病人にしゃべらせることは好くないので、殆んどものを言わずいることが多い。二人で黙って手を取り合つて、目も合わせないようにしている。がどうかして目を合わせるようなことがあると、彼女は最初の日々に見せたような、一寸気まりの悪そうな微笑み方を私にして見せる。彼女は私が代つて彼女の父に手紙を出すことさえ拒んでいる。「お前、家へ帰りたいのだろう」私はついと心に浮かんだ言葉を思はず口に出した。「ええ、なんだか帰りたくなつちやつたわ」と聞えるか聞えない位のかすれた声で言った。私は窓の所に両手を組んで、言葉も無く立っていた。山々の麓にはもう暗が塊まっていた。しかし山頂にはまだ幽かな光が漂っていた。

彼女は両手で顔を押えていた。高いほどな額、もう静かな光さえ見せている目、引きしまった口もと―何一ついつもと変つていず、いつもより犯し難いように私には思われた。私は急に力がぬけてしまったようになって、ガックリと膝をついてベッドの縁に顔を埋めた。病人の手が私の髪の毛を軽くなでているのを感じながら、部屋の中も薄暗くなった。

綾子は昭和十年十二月六日、その短い生涯を長野県の富士見高原療養所で終えた。二十五才。堀は三十一才であった。

堀辰雄の『風立ちぬ』では結核という字は一度も出てこないが、戦前この病気は国民病であり亡国病であった。咳、微熱、咯血の症状は肺結核のことであった。二センチの空洞が

あれば三年以内に死亡したという。結核予防会は戦前から国
 際的に組織されていた。戦後は患者も新薬が出て格段に減つ
 た。生活の質が充実したことにもよった。

堀の自然描写もすばらしい。

「そんなある夕暮れ、私はバルコニーから、そして綾子のベ
 ッドの上から、同じように、向かうの山の背に入って間もな
 い夕日を受けて、そのあたりの山だの丘だの松林だの山畑だ
 のが、半ば鮮かな茜色を帯びながら徐々にねずみ色に侵され
 ているのを、うっとりとして眺めていた。ときどき思い出し
 たようにその森の上へ小鳥たちが放物線を描いて飛び上がつ
 た。―私はこのような初夏の夕暮れがほんの一瞬生じさせて
 いる一帯の景色は、すべていつも見なれた道具だてながら、
 恐らく今を措いてはこれほどの溢れるような幸福の感じを以
 て私達自身にすら眺められないだろうことを考えていた。」

どこか北の方の山がしきりに吹雪ふゆいているらしい。きのう
 は手に取るように見えていた浅間山も、きょうはすっかり雪
 雲に掩われ、その奥でさかんに荒れていると見え、この山麓
 の村までその巻添えを食らって、ちらちらと雪が舞ってい
 る。ときどき日が明るく射しながら、ちらちらと絶えず雪が
 舞っている。そんな谷の変化する光景を窓の所にいつて眺め
 ていた。

その浅間山が、今から二百三十五年前の天明三年に噴火かん
 した。熱い泥流は草津温泉にまで押寄せ、死者二千名に及んだ。

一方、降灰は関東、奥羽一帯に及び、凶作となつて多勢の死
 者を出した。これに対し幕府は米俵を出して救済した。吾人
 の及ばざるところであつた。それから現在まで煙はあがつて
 いるが、静かである。

きのう読み終えたリルケの「レクイエム」の最後の数行が
 自分の口をついて出るのがままに任せていた。本当に静かな晩
 だ。私は今夜もこんな考えがひとり心に浮かんでくるが
 ままにさせていた。おれは人並み以上に幸福でもなければ、
 又不幸でもないようだ。おれがいかに何気なさそうに生き
 ていられるのも、なるだけ世間とは交まじわらずに、たった一
 人で暮しているせいかも知れないけど、そんなことがこの意
 気地なしのおれに出来ていられるのは、本当にみんなお前まへ
 のお蔭だ。お前はおれに何も求めずに、おれを愛してくれたの
 だろうか？……

そんなことを考え続けているうちに、私はふと何か思い立
 ったように立ち上がりながら、小屋の外へ出た。

風がしきりにざわめいているのが、非常に遠くからのよう
 に聞えてくる。私はヴェランダに、あたかもその風の音をわ
 ざわざ聞きに出でもしたかのように、それに耳を傾けながら
 立ち続けていた。ここだけは、谷の向う側はあんなにも風が
 ざわめいているというのに、本当に静かだこと。まあ、とき
 おり私の小屋のすぐ裏の方で何か小さな音を軋きらせている
 ようだけど、あれは恐らくそんな遠くからやつと届いた風の
 ために木の枝と枝とがふれ合っているのだろう。又どうかす

るとそんな風の余りらしいものが、私の足もとでも二つ三つの落葉を他の落葉の上にさらさらと弱い音を立てながら移している。

昭和八年の夏、堀辰雄は軽井沢で、一人の少女とめぐり逢った。九年の夏の末には、この病める少女と婚約をし、十年の夏には、その許嫁を伴って富士見高原の療養に赴いた。

病める少女は、堀辰雄を完全に精神的危機から救いはした。不幸にしてその冬、高原の療養所で短い一生を終った。

『風立ちぬ』の文脈には、多くの感動がひしめくように描かれていて、一句一句の句切りも以前の作品より長くなつて来ている。浅間山麓の今も旧幕時代の面影を残した油屋旅館の一室で、一人厳しい冬を過し乍ら十二年の冬、漸く一篇の小説に完成した。

それは、私達をはじめて出会ったもう二年前になる夏の頃、不意に私の口をついて出た。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

といふ詩句が、ひよっこりと私達によみがえつて来たほどのいはば人生に先立った、人生そのものよりかもっと生き生きと、もっと切ないまでに愉しい日々であった。最も大きな驚きは、風のように去つてゆく時の流れを、見事に文字に刻み上げて、人間の実体を、その流れの裡に捉えて示してくれた事である。

完

註 文中、看護婦となつておりますが、現在は看護師です。

ですが当時の看護婦を使いました。ご了承下さい。その後、堀氏は昭和十三年四月、室生犀星御夫妻の媒酌で加藤多恵と結婚、軽井沢に居住し、昭和十九年咯血して安静の状態がづき、四十才の昭和二十八年のとき病状悪化し五月二十八日、死去され四十八才でした。

六月三日、東京芝の増上寺で、川端康成が葬儀委員長として告別式をあげられ、昭和三十年五月二十八日、多摩霊園に墓碑を建てて納骨され一生を終えました。

(おわり)

参考図書

○新潮社(新汐日本文学アルバム)

堀辰雄。

○新潮文庫(堀辰雄)風立ちぬ。

美しい村。

(中区)

評論選評

中西美沙子

「書く」という行為は、「内なるもの」の呼びかけを捉える処から始まるといえます。「内なるもの」とは、単なる情動や印象ではなく「抑制」によって生まれると考えられます。その「抑制」は、社会に溢れている様々なノイズを整理することを指します。そこから「問いを立てる」ということが始まるのです。

社会学者の上野千鶴子が『情報生産者になる』という本で、「書く人」、所謂論を為す者の立ち位置を示唆的に語っています。論文を書くために必要なのは、「教養」や「知識」よりも、「センス（感覚）」が重要だと。

センスとは、社会や時代への「疑問」や「不信」、「理不尽さ」に対して鋭敏であることを指しているのでしょうか。そのセンスがなければ、「教養」も「知識」も生きたものとならない。「教養」や「知識」などは、後から幾らでも学ぶことができます。

評論を始めるためには、「問いを立てる」が重要です。その「問い」が、これから述べる内容のすべてを決定するからです。上野千鶴子のいう「センス」もそこにあると考えます。予め答えが用意される問いではない問いに挑戦するのが、評論ではないでしょうか。誰かが考えたものではない「困難」

な「問い」を自ら置くことによって、「新たな論」が動き始めるのでは、と思えるのです。

今年応募された評論は、歴史や古典、哲学、美学など様々なものでした。多様なジャンルのものを読むのは、「快楽」でもあります。書かれたものを的確に読み解くことの基本に評者が置いているのは、「文体」と「理念」です。言葉を換えれば、考えと表現が「書きたいもの」に向かって、熱を帯びているかを敏感に察知することです。

『芭蕉の虚と実について』

芭蕉の俳句が画期的だったのは、表現の中にある「虚」と「実」を通して句を作ったことです。その意義を筆者は丁寧に描いています。芭蕉と同時代の劇作家である近松門左衛門の「虚実被膜論」を下敷きに置いたことで、彼らが生きた時代の文芸の息吹きを感じることができました。芭蕉を筆頭に蕉門たちが、「虚」を意識して俳句にあたったのは、「実」としての新たなリアリティーを獲得するためであったと、筆者は論を進めます。名高い「古池や 蛙とびこむ水のおと」の中にある「虚構」と、そこから生まれる「実」の分析を究めてゆけば、より芭蕉の意図が明確になったのではと考えます。本来は俳句や戯曲、小説などの文芸は「虚」としてあります。その「虚」を梃子にして「実」というリアリティーを表現します。そのリアリティーとは、想像の深層に眠っているものと呼ばれます。ただでなく、「実」の彼方に誕生する新

たな感覚を、到来させるものではないでしょうか。

「応仁の乱と下剋上」

筆者の評論の仕方の魅力は、単に自分の見解を述べるのではなく、歴史的な事実を時系列として置いたところ。その為に筆者は、集めた資料を吟味して、取捨選択することの工夫をしています。中途半端な「見識」は論を破綻させます。摂関政治と武家との狭間で生きた後白河上皇から論を始め、その後裔である後醍醐天皇の「天皇親政」への意志が「応仁の乱」の起源であると、筆者は論を進めます。その政治的混乱が「下剋上」であったと。

「応仁の乱」がブームになっているせい、か、それに関わる書籍が多く出版されています。このような先行書物に飲まれることなく、自己の論を書くことができたのは、視点の向け方にあったと筆者の論を読み納得しました。

「応仁の乱」に関わった小大名の生活、生きるための策謀などが簡潔に述べられているところの工夫が、論を成り立たせたものといえるでしょう。

「経験にとって美とは何か」

「他者の美的体験」を論ずることは原理的に不可能であるという設定で、この論は起こされています。

小説家にとっての美意識と画家の美意識はどこに生まれるか。言語を通して自己の世界観を描く小説家と視覚としての

アート、「読み解くこと」と「見ること」という異次元なものを、意図的に対置させた試みに敬意を表します。

ですが吉田満と島尾敏雄の対談から、特に島尾のいったところから「他者の美的経験」を感受するのは、少し無理があるのではないのでしょうか。対談からではなく、一篇の小説を読み解くことの方が筆者の求めている世界が見えて来ると思っています。

引用されている島尾の『出發は遂に訪れず』を読むと、「戦争」という過酷な状況を包み込むようにして平凡な日常が描かれています。その日常を島尾は透徹した目で見つめています。そこにあるのは、「違和感」と「慈しみ」というアンビバレンツな感覚です。言葉を換えれば、その感覚を辿れば「経験」としての「美」が見えてくると思うのです。

また筆者は、アメリカカンポップのウォーホルの絵画表現に「経験」から起こる「美」を捉えようとしています。その為にA・C・ダントーの『ありふれたものの変容』を引用していることで、ウォーホルの試みが浮かんできました。ウォーホルは、日常的に使用されている事物や素材を使って表現したことがこの論にも述べられています。彼が世界に与えた衝撃は、「ありふれたもの」を神格化するところにあつたといえるでしょう。文学や絵画の表現は多様であり、それを自らの「センス」で捉え論ずるには、「熟成という時」が必要なのかも知れません。

「二つの展覧会から読み解くジャポニスム研究の成果と課題」

絵画展を見る楽しみは、学芸員の企画と、対象となる「絵画」との関わりを見ることでしよう。評者も展覧会に出かけることはよくあります。その経験の中で、鮮やかな印象とピントの外れた企画のあり方を感じることがあります。

筆者は、二つの展覧会からジャポニスムの意味を述べています。「北斎とジャポニスム」展を通して、葛飾北斎の浮世絵がヨーロッパの画家に多大な衝撃を与えたことを、「北斎漫画」や有名な風景画などを素材にして語っています。さらに「ゴッホ展と巡りゆく日本の旅」展を見て、筆者は広重などの浮世絵から受けたゴッホの驚きを、ゴッホが描いた日本的な草花を援用しながら論じています。そしてジャポニスムの誕生を、西洋絵画の基である遠近法と浮世絵の平面的なものとの対比として論じます。北斎や広重の大胆な構図や明るい色感に、マネやゴッホたちは、自分たちのアカデミックなものの閉塞感を見たといえます。筆者の意図は確かに伝わってくるのですが、「ジャポニスム」とは何か、明確な形として浮かんできません。それは展覧会を立ち上げた企画に凭れたところにあるからと考えます。展覧会を見て読み解くという行為には、企画者の意図を「離れて見る」ことが求められます。

論じることは、視点の転換から始まると考えると、「新たな視野」が今ひとつこの論文には出ていない気がします。丁

寧な読み解きがされているのですが、惜しいことです。

「風立ちぬ」

堀辰雄という小説家を読む人はさほど多くないと思われます。著名であっても、「失われた作家」として見捨てられる時代になったからかも知れません。文学も消費の対象となり、「売れる」ことが最優先されるからでしょうか。

この論を見て驚いたのは、「手で書く（ペン書き）」ことの圧倒的なりアリティでした。文を刻むという営為の凄さに、目が洗われる思いでした。

『風立ちぬ』に対する筆者のスタンスは、「オーソドックス」ともいえる論じ方です。堀辰雄の出自から死までを淡々と描き、その中に小説『風立ちぬ』がかなり長く引用されています。時には堀と親交のあった芥川龍之介が現れ、通読すると、どこかコラーージュのようで不思議な感慨が起りました。

つぶさに読んでゆくと、筆者の意識の背後に流れているのは、「死」という自然な営みについての思いでした。「死」は不可避なものです。堀の『風立ちぬ』は「死」の文学の一つであり、それを論ずるということの意味は、作家や登場人物が慰撫されるだけでなく、論ずる人も優しく抱かれるということだと、読みながら理解しました。

やや引用文が長いのが残念です。

随筆

〔市民文芸賞〕

伯父の声

吉川摩里子

浜松では珍しく一面に雪が積もった日、まだ幼い私は飽きもせず伯父が作ってくれた雪兎を眺めていた。目は南天の赤い実、耳は南天の葉っぱをつけた真っ白な雪兎が、黒いお盆の上になうづくまっていた。庭の雪にもこの手で触ったはずだが、雪の感触よりもこのかわいらしい雪兎ばかりが強く印象に残っている。

父方の伯父とは小学校半ばまで一緒に暮らした。幼い私にはサラリーマンの父よりも、専業農家である彼と一緒に過ごす時間の方が確実に長かった。軒先で収穫物を束ねる作業をする傍らでよく遊んだものだ。

「摩里子」。

伯父はいつも私をこう呼んだ。「ちゃん」でも「さん」でもない遠州弁だ。ひよろりと背が高く、セルロイドの眼鏡は牛乳瓶の底のように厚い。伯母との間に子供がいなかったこともあり愛情を掛けてもなかった。伯父が亡くなって久しい今、慈しまれた一日いち日が温かな心持ちで思い出される。

伯父は手先が器用だったようだ。凧や竹馬を作ってもらった覚えがある。だが、凧にしても竹馬にしても私の興味は出来上がった直後だけ。すぐに飽きて放り出したままになってしまった。伯父が

作ってくれた物で長く愛用した品は、空き缶を利用した絵具用の筆洗である。空き缶三つを針金で束ねたものに、やはり針金で作った持ち手が付いていた。空き缶と針金といっても見た目に洗練された意匠で、何より、子供がむやみに触れても怪我をしないよう丁寧に加工がなされていた。クラスメイトたちはただの小さなバケツを使っていたので、どうしても汚れた水で筆を洗うことになる。だが、伯父の特製品は水が三ヶ所に隔られる構造なので、一気に汚れることなく重宝したものだ。

田畑へも時々付いていった。近場には一緒に歩いて行き、少し遠い場所へは耕運機に乗せてもらった。点在する田畑の場所は今でも覚えていたが、手伝いはせずその辺で遊んでいただけなので農作業のことは全然わからない。ただ、伯父の働くさまさまな姿は目に焼き付いている。昭和四十年頃の農作業は随分大変だったことだろう。肥溜めを天秤棒で運んでいた姿も、蛭がピタッと吸い付いていた脛も、遙か遠い記憶ではあるが厳然と

私の脳裏にある。

夏、農作業を終えると毎日鈴虫の世話をしていく。伯父が飼育箱を土間からおえに持つてくると、私は遊んでいた人形を放り出し、傍に行つていそいそとお手伝いをしたものだ。食べ残されて茶色に変色した胡瓜や茄子を新鮮なものに取り換え、鱈節を補充した。その間には逃げそうになる鈴虫がいて飼育箱から目が離せない。鈴虫は始終鬚をゆらゆらと揺らしている。飼育箱からは独特な臭いが微かに上ってくる。

伯父と一緒に飼育箱を覗き込む夕べは、季節の移ろいとともに終わる。いつの間にか飼育箱には覆いが被せられ、土間の片隅に静かに置かれたままになっている。長袖を着こんだ私は、ある日そのことにふと気づくのだった。

怒られた記憶など一度もない。だが、近寄りがたく感じられた姿があった。それは風呂上がりなど伯父が上半身裸の時である。お腹に大層長い傷跡が縦一直線に残っていた。いつもの伯父とは違うようにでなんだか薄気味悪く、胃潰瘍の手術

痕だというその焦げ茶色の線を私は遠くから横目で見ていたものだ。

ある日、二人で出かけた帰りのバスに、お気に入りのバッグを忘れてしまったことがある。バスを降りた途端に気づいたがもう遅い。バス会社に連絡を取り、掛塚にある営業所まで伯父が自転車で取りに行つてくれた。こうして赤いバッグは無事手元に戻ったが、今考えると、自転車では片道四十分ぐらいかかったはずである。当時郊外の農家で車を運転する人はめつたにいなかった。会社勤めの父でもマイカーを購入したのはこの後のことである。伯父は耕運機こそ運転したが、車には乗らずじまいだった。

農作業から離れた晩年には目が見えなくなつてしまった。既に結婚して子育てに忙しく過ごしていた私に、母が伯父の見舞いに行くようにと伝えてきた。

「伯父さん目が見えないんだよ。あんなにきれいな目をしているのに。」

と母は言う。

半信半疑で伯父の家を訪うと、庭先に伯父が一人で座つていた。牛乳瓶の底の

ようなあの眼鏡は掛けていない。見えないうちに眼鏡は必要がないのだと、瞬時に私は悟つた。

その後、ますます具合が悪くなつた伯父を父と二人で見舞つた。早春の日だけは燦々と降り注いではいたが、春の暖かさにはまだ間がある頃だった。伯父が臥せている座敷へと縁側から訪うた。声を掛けると、生憎ポータブルトイレを使つた直後だったようだ。伯父は蒲団の上になぐりを出したまま胡坐をかいて座つていた。介添えの伯母は私たちの姿を認めると、手に伯父のパンツを持つたまま、まるで機関銃のようにしゃべり始めた。父が見かねて

「まず履かせてやってくれ」と言い出すまで。普段は本当に控えめで物静かな伯母なのに、介護で疲れていたのかもしれない。伯父はその間一言も発せずただじつと座つていた。姪の前であられもない恰好を晒していても声も上げず、その後の会話も伯母に任せっぱなしの伯父の姿に、呆けてしまったのかと私は危ぶんだ。しかし、別れ際になつて絞

り出すように礼を言う伯父の姿に、訪ねた私たち二人をしつかり判っていたのだと確信した。自分の身体だけは何とか自分で支えられてはいたが、声を出す気力が湧かないほどにまで衰弱していたのだろう。

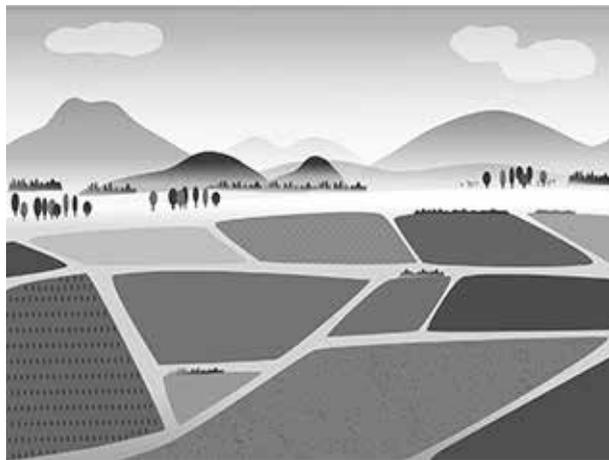
間もなく伯父は亡くなった。葬儀では涙がとめどなく溢れた。伯父との思い出が次々と脳裏に浮かび鳴咽を抑えられなかった。

あれから十年以上が経つ。今でもふとした時に伯父のことが思い出される。そのたびに、幸せな幼少期を過ごさせてもらった感謝の思いが湧いてくる。

「摩里」。

伯父の声は今でも聞こえる。

(中区)



「市民文芸賞」

我が家の雛祭り

福代善彦

先週、雛祭りが終わった。とうとう我が家は今年雛人形を飾らずじまいであった。長女が生まれて初めてのことである。三月三日の数日前に雛人形が飾つてないことに気づいた。忘れてはいけないと思ひ、その場で妻にその事をLINEで伝えた。しかし、その後の反応がなまま三月三日になってしまった。

三日の夕食時、テレビでも節句が話題になっていた。私は思ひ出したように「今年には雛人形を飾らないのか？」と切り出してみた。即座に妻が「お父さん、そんなに飾りたいのなら自分が飾ってもいいんだよ」と答えた。そして「私なんか中学生ぐらいの時からもう飾らなかつたよ、それが世間では普通だよ」「福代家

は特別だよ」と妻から立て続けに返ってきた。

「本当にそうかなあ？」とは思いつつも「いつまでも飾っていると嫁に行きそびれると言うからね」と私が言うとう度は「それを言うなら早くしまわないとお嫁にいくのが遅れるって、言うんだよ、残念でした」とさらに妻は続けた。

妻の「福代家は特別だよ」はそのとおりかもしれない。私の実家では三月・五月の節句の飾りは父親が亡くなるまで毎年欠かさず飾っていた。さすがに雛段は買ったときものでは大きすぎるため、父親の手作りの小型の雛段に変わってはいた。私はそのようなものだと思ひ、違和感を感じることもなく今まできた。

たしかに、飾ったあと、しまう妻にとっては面倒なことなのだろう。たまたま数日前に職場の同年代のご婦人に聞いた話では、娘さんが嫁にいったあととは、お寺さんに持って行って処分をしたとのことであった。やはり世間ではそんなものなのだろうか。

そんな私と妻との会話を、長女は少し離れたところで黙って聞いていた。そして「今日はちらし寿司が食べたかった」と一言だけ言った。

私は子どもの頃、祖母といっしょになつて段飾りの雛人形を飾つたのを覚えてゐる。長女のもものは三段ぐらいであり、比較的簡単に飾ることができたから、たぶん妻が、今まで一人で飾ってきたのだろう。そのため長女には雛人形に対して思ひ入れが、あまりないのかもしれない。私の父も母も大正生まれの昔の人間である。特に父は季節の行事には敏感に反応していた。そのうえ思ひ入れも強く、こだわりも強かつた。雛飾りも段飾りだけでは満足せず、雛段の脇にいくつものケースの人形を飾っていた。

また父は一つ一つの行事に完璧を求めたので、周りが大変であった。父が興味を持つている行事には周りも興味を持たないと大変である。何か気に入らないと、一つの事が家の中では大事件になることさえもしばしばあった。その度に私は、行事がない方が、事件がなくて気楽でいいと思ったものだ。

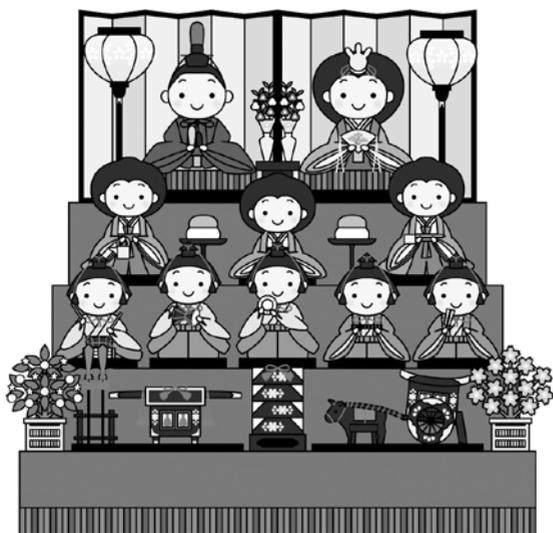
そんな子供時代を過ごした私には、季節の行事がなんとなく通り過ぎていくのに、寂しさを感じる。昔より今の方が行事やイベントが多い。その反面、一つ一つの行事に対する思いが希薄になっているように思える。時代も変わり仕方ないことなのかもしれない。

そんなことを思いつつ、普段通りの土曜日の夕食は終わった。そして、誰もいなくなった食卓で、自分でお茶を入れて飲んだ三月三日であった。

しばらくして妻が仏壇から下げた「桜餅」を持ってきた。我が家は「季節行事のお供え」は最初に仏壇に上げるからだ。和菓子は家族の好物だ。ふたりで今日の主役の長女の幼い頃の話になった。

そして、また来年から長女がお嫁にくまでは雛人形を飾ろうかという話になった。私も手伝う覚悟を決めた。

(中区)



「市民文芸賞」

捨てる神あれば拾う神あり

松田 健

古希にも近い年齢となり、今でこそ平気で笑い話として語れるようになったが、私の心の中では、長い間、他人にまでは知られたくない辛い過去があった。

私は昭和二五年一月、この温暖な静岡県とは真逆の雪深い日本海側の京都府某市に生まれてしたが、多感な思春期の十五歳の春、志願さえすれば、誰でも合格できて当たり前ぐらいに言われていた地元の府立高校への入学試験に、失敗してしまっていたのだった。

当時、私の父は革新系の政治活動をしていて、それこそ「十五の春に泣かせるな」という謳い文句をかざし、高校受験生の全入を訴える運動もしていて、地元の教職員組合の集会でも演説をぶつこと

があり、担任の教師から「おまえのオヤジは……」なんて、嫌味を言われたことがあったが、まさかそんな活動をしていた男の息子である私が、落とされるとは皮肉な話だった。

その上、狭い町でのことである。実家は父が家業を倒産させてしまつて以来、貧乏のどん底にあったが、それでも元々が地元の旧家で、郷里が誇る偉人とされた大学者を輩出しているような家柄だったので、それを矜持として何とか体面を繕っていた。

そんなところに思いがけない私のしくじりは、他の家族にとつても更なる屈辱となつてしまった。特に結婚を間近に控えていた姉や、少しでも家計を助けるた

めに、地元の保育園で保母として働き始めていた母には、顔に泥を塗らせてしまったようである。辛かった。

以来、私は逃げるように郷里を離れ、十数年に渡り各地を流浪する生活が続いた。

★
初めに移り住んだ京都市内で、働きながら夜間の定時制高校だけは何とか卒業を果たし、その後は中学時代から得意だったギターで身を立てることを目指し上京した。プロのギタリストにでもなれば高校入試に落第の劣等感など、簡単に払拭できるだろうと短絡的に考えていたのだった。

昼間、印刷会社で働きながら、夜、新宿や池袋のスナック、クラブに、ギターを持ち込み弾いていた。まだカラオケの無かった時代なので重宝にされ、ひと弾きする度に客も飲んでくれるので、幾らでもただ酒は飲ませてもらえた。しかし残念ながら、所詮はそこまでのこと。ギヤラまでは貰えない中途半端なレベルの

ものだった。

三十路を目前にして、いよいよ未来への展望が見いだせず自暴自棄になった私は、自分は富士の樹海の苔か、はたまた日本海の藻屑になるしかないと覚悟を決めた。

★

そんな自らの人生を諦めようとしていた二九歳の時、この数年来、遠距離ながら付き合っていたTが、当面の私の生活援助を約束してくれた上で、心機一転を図るべく彼女の地元、浜松への移住を強く勧めてくれたのだった。

Tはその頃、まだ二五歳の若さだったが、音大を出てすぐに地元浜松で音楽講師になる傍ら、自らも数十人の生徒を抱えるピアノとエレクトーンの教室を運営し、恐いもの知らずの勢いがあった。景気の良い時代で子どもの習い事も盛んだった。どうせ自分の故郷にも戻れない私は、彼女の提案を素直に受け入れ、この浜松に移住してきたのだった。
やがて転地療法ではないが、私はここ

で新たな勤務先にも恵まれ、精神的にも徐々に立ち直ることが出来た。ギターもこれからは純然たる趣味として楽しめば良いことだった。

そして私はTと結婚し、同時に彼女の実家から現・北区井伊谷の土地を提供され、すぐにマイホームも構えることが出来た。

終の棲家を構えたこの井伊谷の地が、この後、NHKの大河ドラマ「おんな城主・直虎」の舞台となり、一時的にせよ脚光を浴びる時代が来ようとは、その頃は、つゆ夢にも思わなかった。

★

結婚後、子どもにも恵まれ五年も経った頃、家族写真のアルバムに貼り付けたキャプションの私のコメントを読んでいた妻が、突然、私には文才があると真顔で進言してくれた。

まさかとは思ったが、せっかく言ってくれたので、たまたまその頃、地元自治体が公募していた、ふるさと創生論文へ応募してみた。妻の後押しで半信半疑な

がらも提出したその論文が、首尾よく最優秀に選ばれた。

しかし私は当初、嬉しさよりも自分のような落ちこぼれ男が、地域の晴れがましい賞を受賞してしまったことに戸惑ってしまった。主催者に対して大変申し訳ない思いにもかられ、懸賞のヨーロッパ旅行も辞退した。

それでも尚、妻に励まされた私は、翌年、今度は県レベルのある懸賞論文にも応募してみた。すると、また運よく最優秀になった。

こんなことが起こるのかと、我ながら不思議だったが、これに自信を得て気良くした私は、これ以降も仕事の合間に、小説や童話の創作まで試みる様になり、幾度か入選を繰り返す間に、思春期以来、己の身体に沁み付いていた劣等感も、すっかり消し去ることが出来たのだ。

★

そして先年の思いがけない「おんな城主・直虎」のドラマで、私にとっては妻

こそが、わが心の井伊直虎だったのだと確信した。

目先の先入観に囚われず、性格さえ悪くなければ……と、救いの手を差し伸べ懐深く招き入れてくれて、本人がやるべきこと出来そうなことを引き出し、粘り強く何年も何年も自信を取り戻すまで、見守り続けてくれた様は、まさに直虎そのものだった。

勿論、己の妻を歴史的な人物を重ねてみるのはおこがましいが、奇しくも私自身、直虎と同じこの井伊谷出身の妻に、こうして生命を救われてきたことだけは、間違いのない事実だった。



私は今でも、ふと結婚当時の妻の心境を察すると無条件に頭が上がらない。後にこそ私の兄が国立大の教授になっていたとして、実家の出自自体は間違いのないものとして、彼女の親戚側にも認識してもらえるところとなったが、当時は、どうみても新妻にそぐわない私の様な男を夫とするには、相当な覚悟がいっただ

ろう。

この時の妻に対する恩義を、私は決して忘れる訳にはいかなかった。

また容姿も端麗だったと伝えられる直虎のように、若き日の妻もまた周りの人から美しい女性だと誉められていたことを、ここに付記しておきたい。

(北区)



一度だけ着てみたかったセーラー服

恩田 恭子

秋になり、衣替えの時期が来た。

嫁いできた時、母が持たせてくれた着物を今も毎年虫干しをしている。母逝きて三十年。懐かしく母との思い出に心を遊ばせていると数枚の写真が封筒に入ってきた。

その写真には木製の滑り台の前に集まった大勢の子どもたちがいた。はるちゃん、こうちゃん、つねちゃん、むねちゃん、みんな今の面影を残している。かわいい貴重な記念写真だ。昭和十八年春の一枚である。今はみんなどうしているだろう。

小学校に入学した頃、私は元禄袖の着物を着ていた。丸い元禄袖の袂はさんざん噛んで縫い目が見えていた。そういう人たちも結構大勢いたから気にもならない

かった。校長先生の娘でさえも進級写真には着物を着て写っていた。着物は縫い上げて大きめの調節ができるのでとても便利だが活動的ではなかった。

小学四年生の夏、終戦を迎えた。六年生の二月のある日

「明日は写真屋さんがきて卒業写真を撮ります」とだけ先生が言った。服装についての話はいっさいなかった。

翌日、先生は教室に入ってきて子どもたちを見回し

「今から写真を撮るから、髪を整えましょう」と言った。窓ガラスに顔をくっつけるようにして髪を手でなでた。

ほとんどの友達がこの日だけはセーラー服を着ていた。私は新しい服などないので、いつもと一緒の服だった。私は

セーラー服は手の届かない高級品だった。先生は教室の白とは程遠いセピア色のカーテンを破ってセーラー服の女の子たちに一枚ずつ配った。それを三角にしてセーラー服の襟元を飾った。友達がみんな輝いて見え、私はもう写真など写りたくないと思った。その時初めて山持ちの資産家がうらやましかった。私もセーラー服がほしい。家に帰って学校での出来事を話したが、どうしても胸が収まらなかった。

やがて、写真ができてきた。セーラー服の黒、ネクタイの白、みんなきれいだった。私は悲しかった。どうしたらみんなと同じような生活ができるのかな、セーラー服が買えるのかな……

そして、中学生になった。入学式には特別な写真をとることはなかった。私は自分が貧しさからみじめにならないためにはどうしたらいいのかを考えた。

中学校には二つの小学校から生徒が集まってくるので大勢だった。破れた服を着てみじめになるよりも何かで一等をと

ればいい。百メートル競走のように自分の道を真面目にしっかりとまっすぐ歩いていこう、そう思った。

勉強は教科もたくさんになった。一つでもいい、誰にも負けないうで一位をとろう、そう決めた。国語は好きだからできる。数学はその日の授業を必ず覚えること。英語はみんな同じ出発点だから頑張れば大丈夫。この三つの教科を頑張ることにし、後はどうでもいいことにした。

小学校の卒業写真を見るたびに、この決意が思い出される。

この頃は戦後で、世の中がまだまだ安定していなかった。わら草履や下駄をはいて通学した。家族みんな夜なべをして明日のわら草履を作ることが常だった。雨の日には父が下駄を作った。母の帯を崩してズボンに作り直し、帯芯で掛けかばんを作った。なかにはこいのぼりで洋服を作っている子もいた。穴が開いている服を着ている子もいた。誰も笑ったりはしなかった。私はいつも同じ服だった。毎日の通学時には兄が作った籠の配達をし、休みの日には草刈りや薪

背負いで背負子を使うことが日常であったため、ズボンの膝と腰の部分の布が薄くなって穴が開いてしまい、いつもそこには当て布がされていた。当て布は、私だけではないから誰も何も言わなかった。中学三年の時の記念写真には膝がひけてそこだけ色が変わって見えるズボンと母が借りてきてくれた窮屈なセーラー服を着た私の姿があった。

卒業式の前日、家族の誰が卒業式に出席するのかという話になった。

私は親が用意してくれたサイズの合わない小さなセーラー服と姉の唯一のタイトスカートをはいっていくことになった。自分の体にあつたセーラー服とひだのスカートを一度だけでも着てみたかったけれど、口に出すことは到底できなかった。父は作業着一枚あるだけで外出用の服などなかった。母も同様であった。姉の外出用のスカートは私がかくため、他にはなかった。結局、私は家族に「来ない人もあるから、誰も来なくてもいいよ」と言った。

翌日、私は姉のタイトスカートをはい

て寂しい思いで登校した。来なくてもいいと言ったものの、家族の誰かがこっそり見に来てくれるかと式の最中も後ろを振り返ってみたが、やはり誰も来てはくれなかった。友達の父が

「ヤアコの家の人は来なかったねえ。ヤアコはあんなに立派な賞状を貰ったのに。見せてやりたかったねえ。ヤアコ、立派だったよ」とほめてくれた。

私は黙って頭をさげた。どんな格好でもいい、私の最後の卒業式にやっぱり来てほしかった。

二枚の卒業記念写真を私はしばらく見ることができなかった。悲しい思い出がいっぱい詰まっているからだ。

セーラー服ほしいと泣いてせがんだ日はるかになりて八十路を迎ふ

(天竜区)

「入選」

遠い日

山田知明

「山ちゃん、又昨晚寝小便をしてしまったよ」

と、後ろから武智さんの声、そうすると横から大庭君が

「そんな事誰でもあるよ、心配ないよ」と、言っている。

これは、サーフィンを始めた頃の私達の海の上の会話だった。大の大人が、と思う人がいるかも知れないが、私自身何度か大波が襲って来る夢を見て飛び起き、汗になったパジャマを着替えて寝た経験がある。

この頃はまだサーフボードには上手に乗れず、パドリングをするも、前に乗り過ぎて海中に落ちたり、又後ろに乗り過ぎてボードを宙に飛ばしたりしていた。

しかし、そのサーフィンも三年から四

年が過ぎる頃になると、サーフボードを一回転させてそのまま元来た方に戻る者、又二人して併行に乗りもう一人のボードに移る者、大きなチューブの下を潜り、まるで世界を征服した様な顔をする者まで現れた。

そうなるに当然、仲間は大きな大会に出場したり、時には伊豆の新島やハワイにまで足を伸ばす者まで出て来た。私達も競って大きな波を求めて、東は御前崎、西は伊良湖崎付近まで出掛ける様になつていた。

ボードに乗り一瞬間になる。ほんの数秒ではあるが波に手を当てると彼等はいつも優しく答えてくれた。

そして、あの日が来た。当時誰もがそうしていたのだが、休日の二日、三日前から波を楽しむ為天気予報を徹底してチェックしていた。この時、沖合に大きな台風が現れていた。しかも、今度の休日に接近して来る。私は胸がわくわくしていた。

当日早朝いつもの海岸に車を走らせた。既に仲間が集まっており沖を見てい

た。さすが台風、とてつもない波が私達を迎えてくれた。波はいつもの日の五倍程高く、既にうねりも入っており、昨夜からの雨も川から濁流となつて流れ込み、まるで海中には悪魔が潜んでいる様であった。

誰かがぼつりと言った。

「この波ではだめだ。仮にうまくパドリングして沖へ出ても、波の強さに巻かれてしまふだろう」

しかしサーフインはしたい。今迄もそうしていた様に私達はこの後内海である相良、静波海岸へと足を向けた。

やがて目的の海岸に到着。波は外海程でも無いにしても、いつもの三倍位の高さで押し寄せており、横殴りの雨も加わっていた。気の早い大庭君はもう沖に向かってパドリングしており、私も皆に負けまいとウェットスーツに着替え素早く海へ入った。

想像以上に波が強く沖に出れない。いつもの数倍のエネルギーが必要だった。やっと波の立つ位置に来たものの、ボードに座るともう一つ波の後ろは見えない

大波が来ていた。「よし、この波に乗ろう」大きくパドリングしてうまくボードに乗れたが、波の高さと強さの為ボードは山の急斜面から落ちる様に急降下を始めた。凄まじいスピードに珍らしく恐怖が加わってしまい「うあつ」と声が出る間もなく、そのまま海中に突き落とされてしまった。

腕き苦しむ必死で海上に浮き上がろうとするのだが、いつもの数倍の強い波に巻かれて苦しいばかりだった。「だめだ、息が続かない」やっとの事で海上に頭が出た瞬間、物凄い勢いで何かが私の額に激突した。

「ああつ」声も出さず息も出来ないまま海中へ戻された所へ、大波が襲い海中を体が回転している事が分かった。必死に浮き上がろうとするも、既に体力は限界、意識も薄れて来た。このままでは溺れ死にしてしまう。「生きなければ」最後の力を振り絞り浮上しようとした時、誰かが自分を持ち上げてくれた様な気がした。

気が付くとボードにしがみつき、岸に

向かってパドリングしていた。しかし、いつもと違う。普通は海水が目と口に入り塩辛いのだが、今生温かい物が目と口に入ってくる。「血だ」安全の為パワーコードで足を縛り、繋いでいたサーフボードが、運悪く私が浮かび上がった時に額を目掛けて激突したのだった。

この後、瀕死の思いで岸に辿り着いた。残っていた仲間が駆け付けて

「うあーこれは酷い」

と叫んだ。直ぐに一人が自分のタオルで額に鉢巻をしてくれ

「医者へ行け」

と叫んだ。「ああ、そうするよ」小さな声で答えた後、海水パンツ一枚で車を運転し従兄弟の家迄向かった。医者へ行くのに気が引けたのと、嫁が看護士をしており、まず傷を見て欲しかったからだった。

玄関を開けると嫁が丁度出て来て、額を見るなり、

「あなた、何やってるの、早く病院へ行かなきゃだめだよ」

近所まで聞こえる声で叫んだ。

その後、彼女がびしょ濡れの運転席で運転、私は助手席に座ったまま彼女の病院へ直行した。そして、そのまま額を十六針縫う手術となった。

若い医者が最後に言った。

「君、もしボードが額の三センチ下を直撃したら失明していたよ」

自分は運の良い男だと神に感謝した。

それから一箇月後、私は仲間と御前崎近くの海にいた。この日の海は何処迄も青く、又太陽は私の背中であつても笑っていた。

この日、私は思う存分サーフィンを楽しみ仲間に「ではまた明日な」と言っ別れたままその日を境に止めてしまった。

この頃、私にも新しい家族が出来、新居が海より遠くなった事に加え、何よりも相方の一言である

「あなた、今度海へ行ったら離婚だからね」

の、一撃がサーフボードよりも深く額に突き刺さっていたからだだった。

あれから四十年、海では不思議な事に

多々出会った。

現在我が友は親子でサーフィンを楽しむ者、又「自分より年上の人が一人でも海に入る限り自分も入る」と、言い切る者がいる。私はそんな彼等に、豊かな自然と何処迄も続く静かな海が永遠に彼等を包んでくれる事を祈る。

(中区)

「入選」

明日は我が身

中村 淳子

朝刊を広げたら、北海道で震度7の地震という大きな見出しが載っている。テレビをつければ地滑りで山肌がむき出しになっている画面が映っている。その瞬間、美江さんは大丈夫？ という思いがわいてきた。

まず、固定電話をかけたが通じない。停電している。携帯電話はどうかなくもかけたがだめ。しばらくして、メールを送ったら、

「今、外にいます。近所の人たちが集まっていっしょにいます。応援よろしくお願います」と返事が来た。よかった。無事だった。

次の日、固定電話をかけたが通じない。携帯電話を彼女がかけてくれたが、私は気づかなかった。翌朝、こちらから

連絡したらようやく声が聞けた。

「北広島は震度5と新聞に出ていたけれど、大丈夫ですか」と聞くと、

「大丈夫よ。寝ている時に大きく揺れたの。それで暗闇で、懐中電灯を探るのが大変だったの。ぐるぐる手回しするラジオも見つからなくて時間がかったの。自分の側に常に置いておかないとね」

「御主人といっしょで心強かったですね」と言うと、

「そうね。一人だともっと怖かったと思う」

「停電が続いて、食べることも大変だったでしょう」と聞くと、

「今は便利な物があつてね。水を入れるだけのパスタとかチャーハンがあるの。あと、カセットコンロが、とても役立ったよ。すぐお湯を沸かせて、備蓄のレトルト食品を温めることができたのよ」と。

「何が困りましたか」と聞くと、

「そうね。トイレが使えないので、2ℓの空きペットボトルを切つて、袋を入れて代用したのよ。ペットボトルは水も運べるし、役に立ったわ。水はとても大切。」

結構使うのよ。幸い、水道の水が出たので、助かったけど、断水した地域の人が、もらい水に来たのよ。炊事、洗濯等、いろいろ使うものね」

「とにかく、無事で安心しました。ガラスが割れたり、物が倒れたりしましたか」と聞く。

「家の中は大丈夫だったけど、公園や庭の木が倒れて、畑の作物や草花もすべて倒れてしまったの。これから、片付けなくちゃ。九月六日、七日は動けて自分は大丈夫って思っていたの。でも、今日は何だか疲れちゃってね」

「大変でしたね。無理しないでね。片付けは少しずついいよ。台風21号の強風や、雨の後の地震だから、地盤がゆるくなっていたかもしれないね。気をつけることがあったら、教えてください」と言う。

「今回、余震も続いて怖かったけど、近所の人とは、仲良くなれたのよ。お互いに助け合えて。今まで顔も知らず話さなかった人とも話せたし、みんな大変なんだったって思ったら強くなれるね。近所の人

とは、日頃から仲良くしておくといいわ」と。

電話の後、私は水のペットボトルを二箱注文した。それから、備蓄の缶詰とレトルト食品も買った。台所の戸棚を片付けたら、ビスケットの缶が出てきた。こんな所にも思ってみたら、賞味期限は二〇一六年。あらあらとくに過ぎている。いつでも出せる所に置いて買いたすようにしよう。

「台風24号は夜中に一番ひどくなるらしいから、風呂に入って早く寝よう」と夫に言われて、九月三十日の夜は九時半頃床についた。その頃から、少しずつ風の音が激しくなってきた。バリバリと何かめくれるような音、ドーンと倒れる音が夜中まで続いた。うとうととしてもすぐ眼が覚めてしまった。

トイレに行ったら、いきなり電気が消えた。夫が電気を消してしまったのかなと思つたが静かで心配がない。これは停電だ。闇の中を壁を伝って部屋に戻った。

翌朝、御飯を電子レンジで温めることができない。オール電化なので味噌汁も

作れない。「コンビニに行つて、何か買ってくるよ」と夫が出かけた。パンとカップ麺しかなかった。甘いパンだが、おいしかった。

庭に出てみると、西隣りのカーポートの屋根が強風でめくられて、塀の近くに飛ばされていた。ポードを支える資材も落ちてきている。隣りの建物の屋上には、資材が乗っている。東隣りの家に鉄製の門があった。大きな門は倒れて歩道を塞いでいた。

まだ早朝だが、両隣りの方に、携帯電話をかけて見たままの状態を伝えた。何事かとびっくりされたろう。道路には飛ばされた木の葉や枝が脇に吹きだまりとなっていた。夫はごみ袋二袋分を集めてごみ置き場へ運んだ。私はたまった洗濯物を手洗いにすることにした。

夫は予約してある病院に電話をかけたが、つながらない。九時頃に歩いていくよと言つて出発した。信号機が消えているので車で行くのはやめると言う。

夫の出かけた後、ずっと手洗いをした。いつもは洗濯機におまかせだった

が、二時間かけてようやく干した。昼になつて、カセットコンロで湯を沸かしカップ麺を食べた。冷蔵庫のバナナとりんごも食べた。朝はパンだけだったので幸せな気持ちになつた。

夫は二時頃、帰つてきた。途中の信号機は皆消えていたし、道には瓦やトタン板、看板の落ちてゐる所もあったそうだ。携帯電話の充電器（電池式）を買つてきた。私と話している時、いきなり切れてしまつたので買ったさうだ。

オール電化の家を建てた時、安全で便利になると思つたが、停電では手も足も出ないことがわかつた。今回は室温が27度あつたから寒くなかつたが、冬だと寒くてたまらないだろう。灯油のストーブも一台必要だ。

十二時四十分頃、電気がついた。夜になつても停電の地域がある。娘は孫をお風呂に入れてほしいと言つて連れてきたし、息子の家には、嫁の実家の家族がもらい風呂にきた。北海道の友人は入浴できないことが何より辛かつたさうだ。いつもはスイッチを押しておく、「お風呂

呂が沸きました」と知らせてくれる便利さに慣れきつてゐる。全道でブラックアウトになつたとき、友人は大変だろうと心配したが、それは他人事であつた。それが自分も大停電という体験をすること自分事になつた。地震もいつ起きるか予測不能である。明日は我が身だ。友人の話を参考に、日頃から備蓄をして、いざという時すぐ使えるようにしなくては。必要な物は身の回りに置き使い回そう。近所の人とも、日常的に助け合える関係を作りたい。

電気がついたとき、ほつとした。冷凍庫の少しとけてきたアイスを食べながら、夕御飯は何を作ろうかなと考えていた。

（南区）

「入選」

旅する理由

犬塚賢治郎

机の上に新聞広告の切り抜きが置いてある。《添乗員と行くフランス紀行七日間十五万九千八百円より》。妻はよくこの手で旅行に誘う。

四年続けて海外旅行をしている。イタリア、ロンドン、アメリカ、そして今年フランスのパリとその近郊。片道十時間以上飛行機に乗る。一週間もの旅行は本当にキツイ。こんな旅行はもうできないな、と思つたのが七年前のスペイン。しかし懲りずに翌年には乗り継ぎ二回でトルコへ。そして旅行から帰ると一週間ぐらい半死半生で起きたり寝たりで過す。もう終りにしよう、これを最後にしよう、いつも思う。それを振り払うように旅行広告を探し続け、また切り抜きが机に置かれる。もう止めたと言いな

ら、なんで出掛けるのと聞かれる。自分でもよく分からない。

十代の終わりごろ、小田実の『何でも見てやろう』を定制のうす暗い図書室で読んだ。フルブライト留学から日本へ帰国する途中、一年間かけて一日一ドル旅行する話は、指名解雇反対で大争議渦中の暗い毎日の中、一筋の光だった。いつか同じことをやれたらいいなと思っ

た。
二男は学生時代、食べるものを切り詰めて旅行し「スイスでは馬小屋に泊まり、ドイツではじゃがいもばかり食べ、フランスでは犬のクソを踏んで」などと面白い話を聞かせてくれた。親父のヨーロッパへの憧れはこれで更に深まったといえる。ただし年に一度、航空祭に帰ってくるだけの今では、冷蔵庫からビールを取り出しながら「また旅行の話？ 他に何かいい話は無いの」と冷ややかで、火付け役だったことなど知らぬ顔である。

後期高齢者になり運転免許更新には認知検査が必要になった。やっと三年の更

新はできたが、くるぶしまで水に浸かった気分。それを振り払いたい。「歳をとっても旅行が止まぬ、止まぬ筈だよ先が無い」友人はそう言うてからかう。否定できない。

日常から跳び出たい気持ちがある。親は見送った、息子たちは独立した。出歩きが不自由になって、知り合いと話す機会も減った。だからツアー旅行に一期一会のふれあいを求める。旅する理由をそう締め括っておこう。

件のフランス旅行を決めてから、急に忙しくなった。添乗員や現地ガイドの案内でコースを巡っているうちはいい。問題はパリ市内で一日半のフリータイム。行きたいところや見たいところ、やりたことは山ほどある。しかし時間は限られる。地理、歴史、名所旧跡、費用計算、ユーロの手配。迷子になったときに落ち合う場所から、無料トイレの場所、メトロ切符の買い方、直近のテロ発生の有無、会話予習まで出発前に調べておくとは実に多い。

湿布・カイロに正露丸、カメラ・トラ

ンス・延長コード、カード・ユーロとパスポート、マスク・腹巻・腰痛バンド。機種と座席と天気予報。細々とした持ち物をつぶやきながらポソポソと支度をしていく。

こうした準備を通じて夫婦の価値観を擦り合わせていく。それは年々落ちてゆく喜怒哀楽の感性をチェックする演習みたいなもの。去年感じた街歩き楽しさを、今年も感じることができるか。

旅行中に四十五回目の結婚記念日を迎え、セーヌ川沿いのモネの睡蓮があるオランジュリー美術館のカフェで、二人分十六ユーロ(二千二百円)の夕食をとった。二万円のデイナークルーズや、シャンゼリゼ通りで抱えきれないほどの買い物をする夢をみながら。

行けただけでいい、行けない人だっている。モンサンミシエルに杖を突いて登り、ツアー同行者が背中を押し上げてくれた。来年は北欧クルーズにでも行こうか、歩行器に把まりながら。明日も知れぬのに、もう次の旅行を想うのである。

明日をも知れぬ、だからこそという理

屈を付ける。心配しはじめればキリがないのだ。

〔入選〕

(西区)

銭の要らん趣味

石山 武

結婚してから半世紀余、娘も嫁いで妻との二人暮らしも十四年が過ぎた。

お互いに枯尾花と姥桜だ。

テレビを観て「此の人は誰だったかな！ お前わかるか？」

「うーん、私も顔はわかるけど名前がね！」

お互いに「〇〇さんじゃないか」

「そりゃ！ 違うよ！ お父さん」と、想い出した名前を言うのだが正解は出てこない。

こんな日々に思い浮かんだのは、五十年代当時の同窓会だ。

酒を飲んで久しぶりに会った「A君」と中学時代に「タイムスリップ」して話

は盛り上がっていると、

「あんなな！ 顔はわかるけど名前が出

て来んだよ、誰だったかな！」

「石山だよ、クラスも一緒だったじゃん」

「そうか！ タケちゃんだよな、言われてやっとなかった、そうだったなアハハ……」

顔がわかってても、肝心の名前が出てこないと笑いとばすA君には呆れてしまった。

俺の名前も忘れて話してたのか、そうなら最初に「誰だったかな！」と言えば良かったのにと、A君の顔を見てしまった。

他人の名前を覚えるのが好きだった私は、彼の言葉が信じられなかった。

それは中学生の頃、担任の先生が「NHK」ラジオで放送していた「私は誰でしょう」形式のクイズを出した。

肝心の学業はまるで駄目だったが、この「私は誰でしょう」だけは正解が多かった。

級友たちからは「良くわかったな！ お前すごいじゃんか！」と言われて何とも良い気になった。

テレビの無い時代でラジオは良く聴い

た。中でも「私は誰でしょう」は大好きな番組だ。

この番組に対する想いが叶って「昭和三十九年十二月十二日」私は浜松市内の「児童会館」で行われたNHKラジオの「私は誰でしょう」の予選会に参加することができた。

二十余名の人たちが参加した予選会を、私は全問正解で公開録音の出場者五名に入った。

信じられない結果に「狐につままれだ」ような状態で「NHK」の職員の内で控室へ、そこには司会者の木村アナウンサーが居た。

木村氏からは、公開録音の流れについて説明があった。今でも覚えている一言が

「○○さんには、こんな質問をしますから答えて下さい」

こうして木村氏との「やりとり」を何回も練習をして舞台に出たが、全てが初体験で客席を見たと同時に「心ここにあらず」だ。

本番開始となって覚えているのは、

「もう十二月ですね、Kさんボーナスはもう支給されましたか？」木村氏の問いかけに、

「は！ はい近い将来には出ると思います」

K氏も「心ここにあらず」か、珍答に会場は大爆笑となり私も笑いの中に入っていた。

こうして張り詰めた気持もチョッピリやわらいだが、結果は散々で全国切符はあえなく消えた。

収録後、再び控室に戻ると、木村氏より劳いの言葉があつて最後に、

「本当にお疲れさまでした、NHKはお金が無いものですからこんな物しか皆さんにお渡し出来ません」

収録が終了後のことで軽妙な「トーク」に皆さん大笑いして目覚まし時計を頂いた。

後日、ラジオから私の声が流れたときにはこれまでに体験したことの無い心地よい気分になった。

だが一緒に放送を聞いた両親からは、一言のコメントも無かった。其の後、誰

からも「ラジオを聴いたよ」と言われなかった。

両親からも「ノーコメント」で他人からあるはずも無いと納得した。

ラジオ放送から数年後、仕事仲間との雑談で「趣味」が話題になった。Y先輩から

「ところで石山君は何が趣味だな！」

「そうだね、俺の趣味って言えば他人の名前を覚えることかね！」

ちよつぱり得意気に答えると、

「そりゃ！ 石山君ゼニの要らん趣味だよなー」

Y先輩の「一刀両断」の迷ゼリフに言葉も無い、一緒に居た人たちも大爆笑だった。

だがY氏の迷言を聴いた後も「ゼニの要らん趣味」は継続している。それ故にA君の言った「顔はわかるが名前が出てこんよ」は、私には理解できなかつた。

だが、六十代後半から趣味の正解率も怪しくなつたが気にもしなかつた。

だが「後期高齢者」の認証を頂いてからはA君の言葉が「よく」理解ができ

た。

それは「喜寿」を過ぎて、故郷の掛川市で中学校の同窓会が開かれたときだった。

掛川駅で、中学時代からの親友M君と待合せて会場の「ホテル」へと向った。

ロビーには、幹事のK君とS君が笑顔で「お久しぶり、元気か！」と迎えてくれた。

受付には、四名の女性幹事がいた。ロビーに居た男性はすぐにわかったが、女性四人は名前どころか、顔もまったく思い浮かばずに受付を済ませた。

此の日は四十人ほどの同級生が、酒を飲んで気分が良くなった私はいきなり「ところでアンタは誰だっけかな!？」

そんな私を見かねたM君が、

「タケちゃ、○○君だよ」と、名前を教えてくれたが、名前どころか顔も思い出せない自分に再びA君を思い出した。

久しぶりに出席した同窓会もこんな塩梅で「M君」を含め現在も交流のある人だけに声をかけていた。

こうして、唯一の楽しみでもあった他

人の名前を記憶する特技も完全に過去となった。

だが他人の名前に対する執着心？は衰えずテレビに出演している人の名前を思い出すが現在の趣味となっている。

Y先輩に言われた「ゼニの要らん趣味」もかろうじて保っているが、昔日の面影はまったく無くなってきた。

今宵もテレビの前で

「なあ！此の人は○○さんじゃないか！」

「そうだよね、お父さんよくわかったじゃん」

こうして、枯尾花と姥桜は「銭の要らない」に加えて花の咲かない「トーク」を楽しんでいる。

(東区)

随筆選評

たかはたけいこ

絆

数年前から『絆』という言葉をはひんばんに見聞きするようになったが、へそ曲がりの私には陳腐な言葉に聞こえた。

けれど平成三十年分の入賞作品を読み返してみると、絆という言葉が一番似合う。

書き手たちの日常にあるのは伴侶、親戚、知人たちとの絆である。生まれてきたこと、生きてきたことを言葉という手段で紡ぎ出し、残していくことこそが絆のだと、改めて考えさせられた今回の応募作品群だった。

市民文芸賞

伯父の声

「伯父と姪」という関係は時に、両親のものより、魂のなかで深く結ばれることがある。筆者である姪が伯父を眩しげにみつめ、この眼差しに応える伯父がいる。

他界した伯父の墓前に捧げたい一遍ができあがった。

我が家の雛祭り

本編を読んで改めて、夫婦とは、家族とは、を私自身が考えさせられた。生い立ちも価値観も違う他人同士が夫婦という自身の半身になり、その証のように子供が生まれる。

日常のなかで起きる小さなずれを互いが感じ、譲ったり、歩み寄ったりすることが、家族という絆を強めていくのだと、改めて気づかされた作品になった。

捨てる神あれば拾う神あり

筆者が生きてきた道がつづられた一遍。思うようにならなかった青春時代、生涯の伴侶となる女性に出会い、浜松で新生活を始める。筆者を信じ、見つめ続ける奥様の眼差しの人とあたたかいことか。愛はこういう形なのかもしれない。

一度だけ着てみたかったセーラー服

物資不足のなかを生き抜いている多感で賢明な少女。モノがない分を知恵で補おうと考える逞しさ。今、私たちはたかさんのモノに囲まれた生活をしているけれど、そうでなかった時代が確かにあったのだよと本編は物語っている。

入選

遠い日

サーフィンのなんたるかを全く知らない私だが、本編を読んで、思った。なるほど、サーフィンはこういう風に楽しむものなのだ。同時に事故の怖さと隣り合わせていて、その隣り合わせ感も含めてサーフィンの魅力なのだと教えてもらった。

明日は我が身

平成三十年は災害が多い年だった。北海道地震の被害者を案じていた筆者自身が、浜松を襲った台風被害に遭う。停電になり、右往左往しながらも、筆者は冷静に今をみて、行動し、日常生活へと戻っていく。同じ思いをした人を代表して描かれた作品になった。

旅する理由

「歳をとっても旅行が止まらぬ、止まらぬ筈だよ先が無い」本文のなかの一文にくぎ付けになった。そうして人は生きていくのではなく、生きていくのだと考えた。老人と呼ばれるときがきていても、奥様とともに身体が動く限り。筆者ご夫婦の旅はパンフレットを繰っている時から始まっている。

銭の要らん趣味

プロフィールの一部をヒントにして、その人の名前を当てていく「私は誰でしょう」はクイズの原型として、今でも多用されている。

筆者はヒントを手掛かりにして、人物を特定することが得意だったうえに、知り合いや友人も次々と覚えることができていたが、高齢になるに従って、忘れてしまうことが増えた。それでもいいのである。夫婦仲良く寄り添って生きていることそのものが幸せなのだから。

詩

「市民文芸賞」

旅のはじまり

竹内としみ

けだるい夏の名残の空気に
ひそかに混じる秋の気配
カタカタカタカタと軋みながら
ゆっくり回る三つの羽根
ゆるくて優しい風が頬をなでる

そんな風を乗客に送りながら
マツチ箱のように小さな一両だけの車両は
くすんだ色の車体を前に進めていく
運ぶのは
夏休み気分をいまだ抱えた学生たち
心地よい揺れに身を任せるお年寄りたち
誰も言葉を発しないのに
寄り添いたくなる空気を纏っている

そしてひとり
異邦人のごとく、その身をやや固くする私
違う世界からひよっこりやってきた
さすらいびとに目を向ける人はいない
きつと幸せな人たちなのだ
人を羨むこともなく
変わらぬ日常に溶け込んで
日々丹念に時を刻む
北の国の自然がそうさせるのか
厳しい冬の時もあるのに
異邦人の私を
そつと包んでくれる見えないオブジェクト
それすら意識しないひとたち
列車の進む先は終着駅
かつて鯨漁で賑わった漁村は
人の気配を消して
切れたレールが存在感を放つ
夜になれば
海の彼方にちらちらと漁り火
まるで無人のような村に

ひっそりと日々のなりわいは残る

寂しさを求め旅に出た

肩に降り積もった重い埃を振り払い

自分を無にする旅は、こうして始まった

生きるとはきつとこういうこと

日々を淡々と過ごし

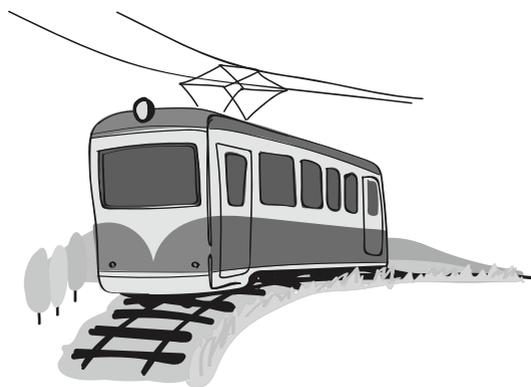
自分を愛すること、人を慈しむこと

そんな想いをポケットにしまい

これから起きる物語に胸ときめかせながら

ちっぽけな終着駅に降り立った

(中区)



「市民文芸賞」

汚点^{しみ}

色あせたノートの十ページ目に
汚点がある

まだ堅い かわいい果実が
熟れはじめたとき
誰もふりむく者はいなかった
実は青臭いにおいと かわいい音をたて
あっちへ コロリ こっちへ コトリ
やがて
黒ずんだ痣^{あざ}をぬって
膿はたれはじめた
つぎの日も そのつぎの日も

トンネルの入口は暗く
震える身を三回 五回
ふりはらっただろうか
闇の中に化身したようにつつ立っていたのは

オカダ アイ

担任のM先生だった
Mは板チョコを黙って
手の平にのせた
その甘い香りは
堅くなった骨のすみまで
唾液でうるおった
おもい腕とやにくさい息
大人の臭いは
湿っぽいトンネルの中で
ひどくたのもしく思えた
心地よくやわらかくなりはじめていく
掌の板チョコ

出口は遠くはなかった
湿った空気と 乾いた空気の接点で
信じあって行こうや と一言
その声はトンネルの中でぶつかりあい
いく重にもかさなり
身体の中を走った
上目づかいで声の方をさぐったが
その顔はなかった

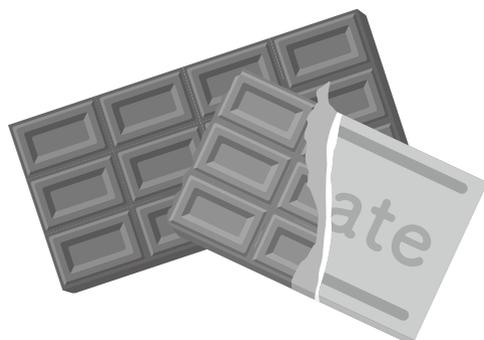
トンネルを出た日から
汚点の輪はづつとそのまま

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

すっかりページ数の増えたいま
 消しても 破いても ずっとそのまんま
 たった十ページ目に
 落してきた汚点
 若いその汚点

ほら いまも
 トンネルの入口で
 青い実が コロリ コトリ
 ぶつかりあっている音がする
 トンネルの中に誰かいてくれるのでしょうか
 とても気になります
 コロリ コトリ
 あの音が

(天竜区)



〔市民文芸賞〕

宇宙に穴

ヒメ巴勢里

宇宙に穴があるのなら 地球は
穴の手前で倒れるボーリングのピンの一つ
ピンは倒されて 転がり
穴へ吸い取られていく
おお！ 地球！ どこへゆく？！

ヒューン
僕は地球とともに落ちた
掃除機の穴に吸い込まれるように
ものすごいスピードで
ものすごい強烈な風が吹いて
放り出されたところは 台風の目！

今度、台風が来たら 君！
台風目を凝視して！
僕が居る、かもしれない

え?! 僕は誰だって?!
宇宙が食べたゴミだよ

体は摂氏一〇〇〇度で燃やされた
煙が高く昇る
と、飛び出した！
その羽を生やした魂さ

奇跡的に現れた
大きく孤を描いた 虹の橋
渡る僕を 僕は眺めながら
永遠の中を飛んでいる……

(中区)

回答

清泉 陽子

陽子はなぜここに住んでいるのか

八十八の父が

八十三の母に

たまりかねて問うたという

ほんとうに暑い 夏の朝

嫁に出した娘

息子を持つ母となった娘

孫の成長を楽しみにしている娘

父の頭の中にはどのへんの私がいるのだろうか

長女だからだよ

生まれ育った庭のない街中の家で

ふた親を見届けるのが私の役目

見送らねばと思っているよ

幼いころから意識下にある得体のしれない宿命に

腹を括りきれているのかは未だ曖昧なまま

父母が建てた築五十余年の家で

たたききゅうりと卵焼きをつくり

汚れるトイレをばっばと清め

繰り返される昔話に耳を傾ける

規則正しい生活を毎日並べているけれど

永久でないことは明白

いつか打たれるピリオドに向けて

厳しくも静かに打ち寄せる波のリズムは

朝涼 炎暑 雨

軒下の風鈴 熱帯夜

私たちの日々の上で移り変わりながら

じゅんばん、じゅんばん、じゅんばん、と律するように

丸腰の私にささやく

(中区)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

夕暮れの 八百屋で

吉川 愛

少々古くなって 大いに安くなったバナナを十も買とおい求めようものなら

「まいどおおきに！」と威勢のいい八百屋の兄ちゃん

「いや、猿を飼っているのですね。」普段めつたに笑わない

私の精一杯のジョークは

兄ちゃんに通じず ポカンと宙に浮いてしまった

「いや：猿を：」よせばいいのに野暮な私に

「ああ！」と合点の兄ちゃん

「：えーと！ 面白いですね！」兄ちゃんの爽やかな気遣いに 照れてしまって

私は急に年を取り

猿はバナナと一緒に熟れてしまった

目当てだったレタスとトマトを買いそびれたことに気付いた

のは 玄関に鍵を差し込んだ時だった

さて、夕飯はどうする、と問えば どこかの猿が答える

「ダンナ、バナナ！ バナナ！ バナナですぞ！」

とりあえず一つ するりと剥いて食はむと
猿は上機嫌で

鼻歌なんか歌いながら

ささやかな日常に舞い戻るのであった

(中区)

「入選」

乗り遅れたっていいじゃない

遠藤 ゆき

乗り遅れたっていいじゃない

バスの一本、二本だけの

乗り遅れたっていいじゃない

次のバスにまで

まだまだ時間があるのなら

ゆっくりとこの街を

歩いてみたっていいじゃない

だって、私

本当はこの街のこと良く知らないのだから

バス停の前に

ほら、お好み焼き屋があるよ

イカ玉ひとつお願いします

半月型におられて

出てきたコイツには

きざんだタクアンがたくさん入っていた

遠州焼きというそうだ

人生というバスに

乗り遅れた遠い街の

お好み焼きには

マヨネーズがかけられていて

高校をおりたばかりの私には

ただただ目を丸くするような

不思議な味わいだった

あの街も今は遠い

都会に出て

マヨネーズのお好み焼きを食べる

そんな人生に乗り遅れて

はや何年がたっただろう

だけど、今

バスを一本、二本

乗り遅れて

今、ここで食べている

タクアンの入ったお好み焼き

コイツはコイツでおいしくないか

乗り遅れたっていいじゃない

だって、あなたはこの街のこと

まだまだ何にも知らないのだから

半月型のタクアンのお好み焼きを

食べながら

ゆっくりゆっくり

次のバスが来るのを

待ってもいいじゃない

乗り遅れたっていいじゃない

だって、ここはあなたの故郷なのだから

(西区)

〔入選〕

回復

水川 亜輝羅

五十代に交通事故に遭遇して
総合病院に八月から十二月迄
五ヶ月間入院した

私はバイクで相手は青年の乗用車
野球の試合に向う途中であった
私は10M程 飛ばされていたそうだ
尿道にパイプを埋められて垂れ流し
左足は複雑骨折でギブス
身動き出来ない有様

二ヶ月程 点滴で過す時期があった
これ迄 過して来た中で これ程 一日が
永いとは とつくづく思ったものだ
看護師が点滴を取り換える変化の他は
雑音が聞えるものの 身体の傷みは
薄らいでいて 只々退屈なのである

うとうとと 居眠りばかりしているので
ぐっすり眠る事が 仲々出来ない
夜中に看護師が懐中電灯をつけて
歩き廻っているのを 眼で追っている

朝になるのが実に永く感じるのである
時間はたっぶりある あり余っている

それは現状から離脱する術を求める事だ
想像である 自分の足で動き廻りたい
何も出来ない状態に居ると

気分迄抑圧されたものになる
自分の現状を意識すればする程
抑圧感も強くなるし想像は薄くなる
寝たきりの疲労感欲望さえ忘却する
想像が乏しいものとなってしまふ

若しも火事が発生したら 大パニックになる
思い切った発想でもしないと抜け出せない
両手を抜げて飛んでみた 病室の天窓の
すき間からでも 外に飛び出せる
外の世界が見える様になったら成功である
十月には足の手術も終えポルトも入れた
暮には再手術をしてポルトを抜いた

年内にどうにか退院出来た

リハビリに一年掛ったが歩けるようになった
想像を超える発想はしてみるものだ

〔入選〕

(南区)

野良猫エリート家

古谷 とく

何か頂戴

三匹で玄関に勢ぞろい

行儀よく座って待っている

思わず

可愛い!! と口に出る

そしてキャットフードを差し出す

食べ終れば身づくろいして帰る

夕方の四時半頃お父さん現れる

程なくして茶一坊・ちび黒もやってくる

時計はどこに持っているの

どうして時間がわかるの

昼はどこにいるの

なぜ朝夕の食事にくるの

聞きたくなる

雨の中も背中を濡らし走りくる

野良なのに決まった食事生活

本当に野良猫

いいや君達はエリートだ

半分飼主のおばあちゃんも楽しみもらっているよ

又明日も待ってるよ

(南区)

一番だ

ぼくは通称お父さん

早くおばあちゃん起きないかなあ

朝早いんだから少し寝るか

おやおや二番手のちび黒だ

早く早くとよく泣きなあ

ミヤーミヤーとうるさいぞ

きらわれるぞ

あ、茶とらの茶一坊だ

これで皆んな集まった

おばあちゃん!!

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

あの頂きに

石黒 實

日本の尾根と言われる北アルプス
その最高峰である槍ヶ岳への
挑戦はまさに苦難を伴う
君自身との闘いにもなった
槍沢を起点とするルートは
ドラゴンの背をよじ登るような
起伏激しい難関な岩場のコースだ

老いた君の身体に標高の高さは
思わぬ苦しみを与えた
頭痛、胃痛、そして気だるさが全身を襲う
気象予報に反して俄かに現れる嵐し雲
岩壁から吹き降ろす雨と風
高所の気温は君から笑みと体温を奪い取る
真紅の唇は紫色に変わり果てた

ああ、怖気づくなかれ
薄れ行く意識を呼び戻そうと

岩に寄り添って君は呼吸を整える
疲労しきった身体から
必死に自分を取り戻そうと
パンパンと頬を叩き拳を握る

疲れを知らずに登り抜いた
若き日の肉体は今既に無い
それでも未だ心は老いてはいない
しっかりと見開いた両眼は
天空にそびえ立つ三一八〇メートルの
槍ヶ岳の穂先を向く
「あの山頂に立つのだ」と
挑戦の意欲は熱き熱情は失せてはいない

その心持って
この身体でこの脚で
前に歩み行くならば
その脚を止めること無く
進み続けるならば
ドラゴンの頂きに
必ずや辿りつける筈だ

岩場に立って大きく息を吸い
君はまた一歩一歩と
歩みを始めた

(中区)

橋本由紀子

沢山の応募者から、それぞれの思いを込めた作品が寄せられました。最も多かったのは、日常の身辺雑記を題材にしたものでした。個人にとっては大切な切り取りであつても、それを簡条書き又は、報告のみでは読み手に深い感動を与えることは出来ません。読み手が「なるほど」と思う感情を共有してもらうには、書きたいことを全部書いて、その中から大切な事だけに言葉をふくらませながら、削っていけばいいと思います。また喩ということも大切で、人間の悲しみやストレス、流れ去る時間、それらを包み込んで、宇宙ロケットに搭載する事も出来るのが、喩です。「旅のはじまり」は簡潔な描写の中に、時間と空間と旅人の思いを書き込み静寂な質感を描けているのは、秀逸と思いました。「汚点」は青春の頁の中で、常に手を差し伸べてくれた教師に、意に反して、思わず与えてしまった苦痛への苦い悔恨と痛みの思い。「宇宙に穴」は最初のチリに戻る事と共に？億年後には地球がやがて消滅する事が計算されています。

短 歌

〔市民文芸賞〕

浜北区

すずきとしやす

山^{おやしう}囲む山に護られ山住の表札書ける「山住」の文字
御社の家名引き継ぐ山住家 午前十時に朝日差し込む
「山住」は山棲むならむ地名付き屋敷の脇に里宮建てり
若き日の折口信夫も泊りたり石組み語る遠き昔日
秋の日の山は静かに熟れ行きて誰にも見せぬ化粧^{まじ}を纏ふ

西区

河合 和子

叱られてふくれっ面をする孫の心をほぐす言葉を探す
商いのラッパ鳴らして豆腐屋の橋渡りくる夕焼け連れて
独りがいい気楽さがいいと強がりを言つて別れ来枯葉舞う道
渾身の響きは怒涛のごとくして水軍太鼓の魂に触る

不動寺の石段上るこの春は手摺を二度も捉まり立ちて
組長の褪せし木札に新しき紐を結はへて役目引き継ぐ
軒花を鉢に挿すあり縛るあり常静かなる町の祭りに
職人の道具袋は整理され鑿のみに鉋がずらりと詰る

東区

鈴木 壽子

歲月は人との距離を遠ざけり消極的な生き方故に
同時代生さし思い入れ読み返し封書ハガキの処分出来ずに
枕辺に立ちし人なり若き日に出会いしままの姿一瞬
若き日の軍服姿凜凜しきや叔父の遺影の生家和室に

南区

井浪 マリエ

「入選」

クラス会領くだけで白露のきらり耀ふ生き方の人
 中區 清水 紫津

木隠れてうすき紅さす山茶花の初冬をつげる
 山寺の庭
 逝きし夫貝風鈴に語らせる遥かな夏の旅の想
 い出

「ご飯だよ」子を呼ぶ母の声がして路地に子
 中區 内藤久仁茂
 供の時間終りぬ
 母に呼ばれ仲間ら帰りて路地裏にひとりぼつちの夕焼けこやけ
 日暮れまで遊び過ごしし路地裏に忘れし心まう見つけられず

塩辛き大海原に出たのです 僕の名前は「水一滴」です
 中區 内山 文久
 「何も知らずに生きていくんだ」そう覚悟め
 た時飲んだ黒冷珈琲
 嗚呼！ 川のひとつが生き死ぬように 僕も
 生き死ぬ川になりたい

赤々とアロエは咲けり我が庭に君への思い色濃く染めて
 南區 杉山 勝治
 人々の助けいだきよろのろと卒寿の坂の花
 見て登る
 大正や昭和平成動乱のみ代三代を生きて悔いなし

「私も家が欲しい」と言う妻の声を背中に
 中區 石黒 實
 夜業に出向く
 如何様に家と車と幸せを手にするやらと他所の庭見る
 東京にて真面な職に就いたかと息子案じつ夜業に勞す

北区 鈴木 弘子
車窓には心配ごとが移りゆく五月の景色にカーテン降ろし
ここにだけ伸び放題の自由あり雑草愛する夫のいる家
心ある草の命を引き抜いて無心になれる私の草取り

中区 大山 啓

来し方を声の静かに語りたる傍の君をすべてと聞かむ
寄り添ひてぼうつと眺むる茜空時よ止まれと思ひの募る
かすれたる声に歌ひし「矢切の渡し」傍の君を忘るることなし

北区 伊藤 美代

ほ灯りが般若心経つつむ部屋家族の絆怯まぬように
忽然と消えし六年七回忌導き給え吾が子の未来
秋彼岸亡き子の使者の黒揚羽未練の棲家刻惜しみ舞ふ

西区 伊藤 友治
大榎の切り株巡り顔を出す またも切られるひこばえのあり
サピエンスの進化を超えたアリ社会一億年の唄を歌うか
三高の寄宿思はず吉田寮見た目はレトロ中身はカオス

北区 鈴木 健示

崩される白い校舎の伽藍堂窓に青空窓に青空
思い切り鉄気の強い水道水 初任の頃の苦い
思い出
セメントの瓦礫の山に雨が降るおそらくあそこは亀のいた池

中区 山本 勝彦

午後十時いまだ沈まぬ太陽は船室ふかく明るく照らす
海面はかがみとなりぬフィヨルドの虚実はいまいただにみとれる
まっ白なライオン伏せるかたちして浮かぶ流水ベルアイル海峡

北区 後藤 とも

奥山の暗き谷間の赤松もゆるがぬ家の柱ともなる
眞日中に風ひと一しきりおとなひて窓辺にやさし
風鈴の音
何時の日か貰いし赤きガーベラに今日幾つか
の花を見るなり

中区 柳 光子

何事か語りかけつつみどりごを湯浴みさせお
り新米の父が
牛乳とオリブオイルの湯を浴びる黒髪男児
異国に生れて
全身を我に預けて眠る子の深き呼吸が腹に伝
い来

浜北区 suiien

五月雨の碧の雫つらつらと流れるままに思い
も募る
宵闇の空をうずめる桜雨薄紅色に水もしたた
る
灼けついたアスファルト濡らす通り雨火照る
頬冷まし汗ぬぐう午後

南区 荒木 きぬ

岩石に刻みし詩の数々に伊良湖の海は碧くか
がやく
鷹渡る岬の今日はおだやかに潮風うけて秋あ
ざみ咲く

東区 井口 絹子

正座して写経始むる吾の背に「下手で良い
よ」と僧侶やさしく
散歩の歩止めて一息大樹の根木漏れ陽やさし
五感を包む

中区 石井 泰子

うす紙をほどきゆく母の手を見つめ男雛女雛
のあらわれを待つ
幼き日胸おどらせし雛人形今はいずこに知る
よしもなし

中区 石原新一郎

漁師逝く「誰かのための腐葉土に」と山に木
を植ゑ海を育てて
「死者は二度死ぬ」とふ言葉かみしめるわれ
の死までを母は生きをる

南区 太田あき子

完熟の無花果数葍の実をみるも持ち去り行き
ぬ台風の跡
窓明けて入り来る風の心地よさ鳥のさえずり
秋は深まり

南区 内山 智康

かがり火の燃えたつ時を闇に浮き神楽の天狗
面光り舞う
幾連の筏曳きて帰り来る船音いくつ谷にひび
かう

南区 大庭 拓郎

すずめらが庭をあるくと餌をとると雨戸あけ
ずにさえずりを聞く
足伸ばし田に降りるとき白鷺はたまゆら人の
顔して見るも

中区 内山 文子

この橋は都会へ巣立つ関所なり古里を捨てて母
をもすてて
必需品心に優し手にやさし吾子の好みのガー
ゼの布団

西区 岡部 政治

心臓は肋骨を開きオペします事も無しげに医
師は言いおり
戦場におもむく兵士の心情でバイパス術のベ
ッドに横たう

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

中区 織田 恵子

草を抜く力弱れど時くれば赤きガーベラ白き
桔梗
塩害に枯葉となりし楓の木秋の陽射しに新緑
萌ゆる

中区 加藤貴代美

母介護文句言われて怒られて耐えてる父はボ
ケていられず
体調でデイを休むと言った母迎えが来ればい
そいそと行く

中区 金取ミチ子

卒寿過ぎ残り少ない人生は寸刻惜しみ楽しき
日々を
疎開地の龍田川原の吾亦紅今は平和にゆらぎ
いるかも

中区 神谷 淳子

花を追う桜の季節の遠回り面影だけの君を恋
せり
薄命の詩人を遠く憧憬せん「汚れつちまつた
悲しみ」我に有れば

中区 川上 啓子

急変に向かふ車のフロントに秋霖しきりアク
セル強目
何ひとつ触れてもあなたの声がする今日は受
話器のカバーを替える

浜北区 川島百合子

母の忌に墓まいりせし子ら四人後光のごとく
木洩れ日受く
四季のない国の子ら連れ紅葉狩歓声あげてひ
とみ輝く

中區 河田 琴栄
工廠は目に染むほどの青芝になりぬと祖父の
墓前に告げつ
習ひしは少年院の教会と プラハの駅にピア
ノが流る

東區 寒風澤 毅
お上がりとシルバー仲間が口にする吾子のお
古のコート着ている
スタスタと動く心身それだけで豊さ実感歩こ
うの会

中區 阪口佳寿子
「おみえになりましたたつていうの」小一の我
が初めて知りたる敬語
「萩」と「萩」間違え印鑑買いと聞き漢字
に恐れを抱きし小二

西區 柴田千賀子
ガサガサとえぞ鹿二頭現れて大きな瞳は我を
見つめる
裾を引く姿そのまま島となり凜とそびえる利
尻の富士は

中區 坂口 ちせ
包序を研げば心のわだかまり消えて胡瓜の酢
のものの美味し
跡継げる若き僧侶の背をみて拙なき経を励ま
しつつ聞く

中區 新谷三江子
背の君の遺志こころざし 継ぎてネパールの医療にと寄
付金届けゆきし友
王室の晩餐会に招かれて堂々たりき夫人はわ
が友

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

中区 鈴木 和子

「月光」のすすき野照らす様うかびピアノ演
奏のり出して聴く
大香炉振り子のように高く舞い香りかすかに
頭上を過ぎる

東区 ストロベリー

風花が舞うだけでもう歌いたい、雪やこんこ
のふしぎな響
雨垂れはワルツの調べ奏でたり乾いたところ
潤すごとく

中区 高橋 幸

この後をいく度叶わん墓参かも閑伽水そそぐ
晩秋の里
吠えるごと冬將軍の虎落笛パンジーの花打ち
揺れ止まず

浜北区 竹内オリエ

回復を待ちて日々過ぐ病棟に眠りも浅き夫の
夜明けよ
素晴らしき大谷翔平はばたきて吾をも野球フ
ァンにさせし

中区 土屋香代子

母隠し愛犬までをも隠したる神よあなたは
つたい何者
覗きたい逢魔が時の向こう側逢いたい人がい
るやも知れぬ

中区 鴉多 健

桃源の上阿多古にて鮎を食み蕎麦仲間との談
笑楽し
今は亡きさくらももこの合唱曲『ぜんぶ』を
仲間と我も歌へり

中区 鳥井 美代
亡き叔父に伝えたき事一つあり祖母の心は孫
に生きおりと
信念を支えとなして今日のありはや十二年施
設ボランティア

南区 中津川 久子
ひよひよいと地下たび軽き足場屋の幼なの
残るピアスの眩し
介護する側の幸せ己に課せぐつと呑み込む苛
立ちまたも

中区 中村 弘枝
写楽の顔背中一面にプリントのTシャツが立
つ孫に圧される
味噌汁の冷めない離れに住みて居り見えるが
よいも見えないもよし

中区 猫田 伸
この朝を拒むごとくに万年青咲く反骨心は抑
えつつ持て
軸ばかり空を仰いでいるパセリ美味かつたん
や、青虫よ、なあ

東区 根本 文子
思いきり捨ててすつきりしたいけど母の洋服
今年も仕舞う
マスクして帽子をかぶりメガネかけスーパ
ーで会うあなたは誰か

北区 平井 要子
摘みに来し青菜のジュース今日も又マグカッ
プ一杯君に供える
ずっしりと古いアルバムその中に貴方と築い
たこれまでがある

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

早起きして旅に出掛けしをととひのままの目
 覚し時計が鳴りぬ
 三杯酢つくる合間をああでもないかうでもな
 いと若布が潤ぶ

中区 松浦ふみ子

真夜中にピシッと鋭い音のするゴミ箱の中塩
 ビが撥ねる
 人の名が思い浮ばぬ事がある待合室で浮び出
 て来る

南区 水川あきら

子の頬を打った平手は夕べには台所にて豆腐
 をのせる
 縁側で見やる十月の夕焼けとろりと煮詰めた
 みりんのよう

浜北区 峯村友香里

法多山の長き石段のほりきる老いの歩みの子
 に支えられ
 心経を唱え写経の堂しづか濃き墨の香に心澄
 みゆく

東区 宮澤 秀子

天板と脚はどつしり無垢材にてわれの世代の
 坐卓重たし
 古き坐卓たうたう処分せむとして思ひ起こせ
 り父の在りし日

中区 宮本 恵司

吾も子も忘却の人じつと見しどちら様かと聞
 く母は悲し
 果しなき旅に逝く君が好きな花一輪そえし五
 月雨の朝

中区 米澤寿鶴子

病める子の見舞い終えて帰りしな小さく笑みて見送る瞳
南区 相曾多加根

草とりや一心なれば気配消えエサをあさりに鳥も近づく
南区 あゆのつか碧

一瞬で死の街となりヒロシマのあの日を語る被爆電車は
南区 赤堀 進

にわか雨はじいてゆれるランドセル君のゆくてにこわきものなし
中区 荒石由記美

倉敷の軋む櫓先に渦白く柳微笑む美術の街へ
西区 渥美 進

手術後の入院病棟夜更けて管理モニター闇に働く
中区 安藤 圭子

入院の5階ロビー朝一番富士山拝し心ハレバ
中区 渥美 佳子

カラカラとビー玉光る飲む子らの汗も光りて飲み干した瓶
浜北区 池 蜻蛉

幼き日れん華畑に寝転びし青空仰ぎ手を広げたり
北区 あひる

天遠く^{そら}私のこし逝く君の命許しを請わぬ蒼き唇
北区 伊藤 順子

西区 伊藤 米子
蒸し野菜に朝の厨に湯気立ちて夫の気合いの
お得意料理

西区 大塚賢治郎
わが裡の火薬庫開ける朝がきた新聞拡げて足
の爪切る

中区 今駒 隆次
あこがれの高校野球何時見ても球児の気概天
にも届く

浜北区 岩城 悦子
握りしむ君が小指の温かく花冷えの日の心和
ませ

中区 内田 一郎
月例のシニアクラブの団らんにごこぞと交わ
すお達者談義

南区 内山 貴則
月一度髪染めて来し妻の声 さあ行きましょ
う何処へでも

中区 内山 由貴
風そよぐ遠つ淡海あふみの陵みさとしは古人こひとの薫る青風の杜もり

南区 太田 静子
チャイム鳴り玄関かしらテレビかと迷えるこ
との多くなりたり

天竜区 太田 初恵
独り居の友となりたる電子本かゝる楽しさ知
るに遅すぎ

中区 岡本 蓉子
満開のさくら眺める幸せを心おどらせ八十路
を行く

天竜区 恩田 利子
退職しゆとりあるはず弾けるはずなれど鍵盤
ただに恐ろし

東区 川合 妙子
鯉組の練り隊が来しさぎの宮オイショ万歳三
唱したり

天竜区 恩田 恭子
『暮しの手帖』にわが作品も載せられて夢に
も思わぬ全国発売

中区 川上 とよ
ひと夏の咲き朝顔蔓枯れる一花残す花色思ひ
種を採りたり

南区 影山 ふみ
せまき庭人参みのりネギもあり朝のたのしみ
ババの水やり

中区 川上 勝
いつからか異国語ばかりの大根引三方ヶ原の
風物詩となる

西区 加茂 智子
万灯に慣れし我が目にろうそくの火はあまり
にも心細くて

東区 北島 はな
バラ色の空に向ひて手を合わす生かさされてい
る命信じて

南区 カモメン
暗闇でオレンジ炎吹き上る勇む男の手筒の花
火

中区 木下 文子
元日のスーパームーン孫と見る今年は佳き事
あれと願ひて

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳
----	------	----	----	---	----	------	-------	----

小春日に見つけし萩の花一輪優しい孫の髪飾りたし
東区 栗原 恵子

台風の被害防ぎのあれやこれ口調も荒く夫婦
言い合い
中区 畔柳 晴康

あつ苦しき真夜に寝返る窓越しに月光炯炯天
しろしめす
西区 近藤 茂樹

おはようと挨拶交わし走り去る乙女の香りか
ぐわしきなり
中区 柴谷 俊行

千年を目光に立つ杉に倚る短かくもある人の
一生は
北区 清水 孜郎

窓の外覗くと町は漆黒に小さな明り新聞屋さ
ん
南区 白井 忠宏

鈴虫が仲を取り持つ義母と母声が聞こえる
「よう鳴いとるで」
中区 白柳ますみ

発熱にデイサービスから帰されつ百歳の姑
飄々として
南区 鈴木美代子

野良どものうおーんと鳴く十二夜我の慕情は
密かに消ゆる
北区 高田 圭

街角の電光板に光射しオウム事件の終焉迎ふ
中区 高橋 紘一

風花にテンション高く鬼ごっこ園児汗ばむ我
はほっこり
中区 高山 紀恵

枯野にあり乙女のごとき冬いちごナイスガイ
なら見つけられるはず
中区 中村 照美

紺と白桔梗供えた仏壇は爽やかにして初夏の
趣
北区 滝澤 幸一

掌てのひらに納むる程の浜名湖を見おろす山はみか
ん色みどりいろに染む
西区 野島 謙司

孫と遊ぶ学校ごっこで教えられかの字の角は
丸くかくよし
中区 田中 貞夫

紫陽花の絵柄の傘を購えり花咲くを待ち雨降
るを待つ
南区 袴田 成子

羽音立て集まり来たる花虻のほろほろ散らす
金柑の花
中区 手塚 みよ

われ怯ひるみ追ふさへ厭いとふに老ひし母はゴキブリ
追ひ詰め見事に仕留む
浜北区 橋本まさや

母となりし孫の動作の頼母しや
の襦袢ムツキ替え居て
中区 寺田 久子

病室の羽毛布団に抱かれて病みし身体からだの癒さ
れてゆく
浜北区 浜 美乃里

暮れなずむ空いっぱいの紅が立ちバルビゾン
派の絵画のごとし
中区 飛天女

毎日の匂染み込む組板を秋の日射しの中に干
したる
中区 平野 旭

膝痛の番組あるけど入れておく？録画担当の
夫が問いくる
中区 福田美津子

簡潔な画像解説医師の顔宿痂の手術受けると
決意す
北区 藤生 好則

一粒の種より育て風船かずら祭り提灯連らな
る如し
北区 藤原 孝志

正月に富士山眺め写真撮る今年の計は麗しき
かな
中区 前田 繁喜

台風に真裸となる庭の銀杏ことしは黄葉の楽
しみもなし
東区 村木 幸子

散歩道見つけた野菊三日待ち手折りて挿せり
ジャムの空ビン
東区 もりみやこ

叱りたき事はあれども出勤の子の運転に黙つ
て座る
東区 森岡 豊秋

田植する乙女の白きふくらはぎ昭和時代の吾
のときめき
浜北区 山下 晏義

中区 山中 伸夫
あり余る富と海水以たるもの飲めば飲むほど
渴き覚える

南区 由倉 典之
出ぬ本音隠す言葉の包装紙出する真実その身
のこなし

天竜区 リコリス
間違えて笑い合った同窓生面影さがす還暦の
会

中区 和久田 俊文
幼子の成らぬ言の葉離し立て野原駆け行く靴
の音軽き

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

短歌選評

村木道彦

台風二十四号の強風の影響であろうか、庭の樹木の紅葉、とりわけ満天星の彩りが例年と違う、なんとなくくすんで見えるのである。自然災害の多い年であった。植物もひとつもその時どきの状況、環境に順応して生きていくのである。そんなことをあらためて感じさせられた。

ささやかな歓喜と、ともすれば悲哀や倦怠のまざる日常とを、三十二文字のこぼれにおとしこむことによつて、生きた作品として示すことがわたしたちの営為である。内省に向かう目が、定型という名の強固なやすりによつて磨き込まれることを期待したい。市民文芸賞は次の四名の方。

山廻む山に護られ山住の表札書ける「山住」の文字
御社の家名引き継ぐ山住家 午前十時に朝日差し込む

「山住」は山棲むならむ地名付き屋敷の脇に里宮建てり
若き日の折口信夫も泊りたり石組み語る遠き昔日

秋の日の山は静かに熟れ行きて誰にも見せぬ化粧を纏ふ
二首目「午前十時に朝日差し込む」が「山住」の現実を端的に伝えて来る。四首目、「石組み」に語らせたというものを射た表現だが、五首目、「誰にも見せぬ化粧を纏ふ」が神秘

的な秋を伝えてことさら美しい。

叱られてふくれっ面をする孫の心をほくす言葉を探す
商いのラッパ鳴らして豆腐屋の橋渡りくる夕焼け連れて
独りがいい気楽さがいいと強がりを持って別れ来枯葉舞う道
渾身の響きは怒涛のごとくして水軍太鼓の魂に触る

二首目「夕焼け連れて」がおもしろい。陳腐になりがちな場面を軽妙にかわすことができた

不動寺の石段上るこの春は手摺を二度も捉まり立ちて
組長の褪せし木札に新しき紐を結はへて役目引き継ぐ
軒花を鉢に挿すあり縛るあり常静かなる町の祭りに
職人の道具袋は整理され整に飽がずらりと詰る

二首目「組長の褪せし木札に」、細かい描写によつて読者もたちまち臨場感に包まれる。

歳月は人との距離を遠ざけり消極的な生き方故に
同時代生きし思い入れ読み返し封書ハガキの処分出来ずに
枕辺に立ちし人なり若き日に出会いしままの姿一瞬
若き日の軍服姿凛凛しきや叔父の遺影の生家和室に

三首目・四首目は同じ人物を詠んだものと思われるが、歳月を超えて記憶として定着していることの痛ましさを、感じないわけにはいかなかった。ある人々にとっては現在も未来も永遠に戦後なのである。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

冷まじや顔面土器の発す声

浜北区

松本 重延

十六夜の能面にある炎かな

蕎麦の花手を結び会ふ道祖神

父の残す樹形のままに松手入

落武者のごとく手負ひの枯蠨螂

鼓動聞く真赤なセーター着るたびに

中区

澤木 幸子

これ以上大きく咲けぬ蓮の花

野の道の風知り尽くす猫じやらし

曼珠沙華大事なものは蕊の中

遠き日や火鉢一つにみんなゐて

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

体当りして熊蟬の大あわて

南区

藤田 節子

片頬の笑まふ仏や梅の花

荒梅雨の天気予報凶蛇行せり

鷹の目に光となれる一湖かな

山茶花の蕊の金色日和かな

パリパリの皮に箸入れ秋刀魚食む

南区

鈴木やよい

祭人雪駄響かせ急ぎ足

父の日や父亡きことにまだ慣れぬ

短調の調べに揺れる秋簾

少年のピアノ音凜と梅雨明くる

どこからか秋の香水エアポート

西区

佐久間優子

さはさはと青菜を洗ふ春厨

やんはりと断りにけり夏扇

どの部屋も野菊を活けし鄙の宿

自転する星に生まれて初日の出

陣取のひとりに広き花筵

西区

西尾 わさ

天主への梯子垂直桜東風

台風のそれたる空の蒼さかな

ゲレンデを転がり来しと初電話

落葉掃く作務衣の僧の遠会釈

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

種袋静かに呼吸してをりぬ

中区

中村 瑞枝

生きて来て生きて行くなり酔芙蓉

鰐口の新しき繩千草揺る

蚕豆蒔く頭少しを天に向け

新月や往還楚楚と黒猫行く

マチス見し美術館より夏の蝶

中区

大平 悦子

初燕まぶしき靴が玄関に

玫瑰やまた雨が降る北の海

午前四時蚊に聴力試さるる

さうめんの束をほどくや二人分

「入選」

花ひとつ赤子の指にとまりけり

中区

池谷 静子

手みやげの貝にやどかり黙りし子

転がりし空蟬見詰む幼き子

子供らと土手に一列彼岸花

ふらここや空へ消えゆく子らのこゑ

西区

刑部 末松

みどり児の瞳かがよふ初櫻

首塚へ誘ふごとし曼珠沙華

托鉢や一衣一鉢寒の道

大桜昭和四年の木札立つ

中区

大村千鶴子

ポケットの木の実一杯母を呼ぶ

北区

梶村 初代

宇野千代とデザイン名の夏帽子

長編の終りに近し秋灯下

それぞれに翻へる過去枯蓮

かれはらす

際やかに連山の影障子貼る
寒肥の光撒かるる棚田かな

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川

柳

夏の海よせくる波に姉妹あねいもと 中区

糟谷 修子

転びては成長する子山笑ふ 南区

神谷知恵子

夏来る命託され母となる

風鈴の音色に開く世界地図

友の声我呼びし声山粧う

雄大な筆の開閉鳴日和

秋の暮追わるる日々ははるかなり

冬木の芽真直ぐ天を目ざしをり

北区

金子千江子

西区

加茂 智子

まっすぐに来し鬼やんま少年に

手に取るは珠玉の作の春隣

雷鳴の振動残る検査室

退紅あらせめといふ色を知る弥生かな

裸婦のごと立ちつくすなり曼珠沙華

麻暖簾幼き兄の笑ひ声

秋の日や親しき顔の羅漢さま

広き背の端から端へ汗取粉

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

秋の陽たつぷり友と居るベンチ

中区

河合 文子

烏賊大根ほっこり煮えて今日の幸

「直立」と風の号令曼珠沙華

東区

川口八重子

縮こまる背伸ばし行く秋夕焼

ここだけの話色なき風孕む

桜しべ降りて斜に色添へん

寡黙なる少年の眼よ石路の花

真青なる海の孤独や忘れ潮

ニユートンも拍手送るや梯子乗

中区

川上 勝

初日の出舳先の松とかざりゆく

西区

佐藤 健

母の日やひと駅星と歩きをり

朝顔の鉢提げ帰る終業日

秋の暮畑鋤く間合ひ一徹に

廃舟や浜昼顔の沖平ら

母国語の三種飛び交ふ大根引

花魁の簪の如曼珠沙華

Ohtaniの総身の一打メジャー夏
中区 佐野 朋旦

夏燕この地に下車し半世紀

南瓜畑取り残したる大物や

届きたる冬蟹の脚動きけり

花とべら島より高き船の影
天竜区 鈴木 利久

黒竹といふ今年竹まだ青し

手花火の匂ひを眉に子は睡る

落し水獣の臭ひ濃きぬた場

西区 柴田ミドリ

つばめ来る駅舎は記憶のままにあり

無人駅靴脱ぎて受く青田風

みづうみは蛹のかたち葦青む

端居して誰に呼ばるることもなく

西区 鈴木 智子

春彼岸赤き頭巾の六地藏

菩提寺の供花に跳ねたる青蛙

低鉄棒少し離れて彼岸花

磨崖仏裾にひとひら紅葉かな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

群生の十葉の花闇妖し 西区

鈴木 嘉子

葛の花かき分け子らの現るる 西区

竹平 和枝

一陣の風に水馬四股を踏む

十粒ほど剥いて明日へ栗ご飯

初掘りの蓮根の白く透きとほり

金曜はカレーの日なり秋あかね

途中下車いつもと違ふ秋に会ふ

図書館のフェンスに屁糞葛群れ

西区

竹内 定八

野島 謙司

雛あられ子の成長の早さかな

浦々に椿散りたるへんろみち遍路路 西区

遠泳の赤旗一つ見えかくれ

彼岸過ぎの雪にも会いし札所かな

悠然と女王の如く錦鯉

菜の花の中行く遍路の背のまろき

凜乎たる菊人形の揃ひ踏み

国宝に雀も遊ぶ札所かな

発酵のすすむ穀雨や醤油樽

中区

伴 周子

豆飯や昭和はどこも子沢山

西区

山崎 暁子

虹追ひて隣の町まで虹の中

空蟬やあんなところに上りをり

月の夜は母の魂来て語り合ふ

北区

宮本 葉子

百千鳥こぼれるやうに舞ひ降りる

柚子坊の尻をふりふり頭ふり

吾子描く秋刀魚の似合ふ皿二つ

フラスコの狗尾草とニット帽

Tシャツのするりと脱げる今朝の秋
群れてなほひとつひとつの曼珠沙華

悴^{かじか}みて錠剤一つ転がりぬ

西区

山本晏規子

蛙鳴く都市計画は栖家追う

腹這ひてカメラをむけり犬ふぐり

もつれあひ止り木さがす蜻蛉かな

寒灯のあかりの如きアロエ咲く

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

大風車ぐんぐん猛暑かきませる

西区

山本ふさ子

地面這ふ蟬の幼虫木に這はす

あめんぼの滑走楽しむビオトープ

中区

和田 有彦

かなかなの山にどつぷり漬かりたる

跪き神輿迎へる古老かな

着地して草に溶け込む蟻蛸かな

落柿舎の叡山すみれ咲き初むる

擦れ違ふシベリア犬の息白し

行き先を胸に抱きて雁帰る

西区

横井弥一郎

狛犬の踏ん張ってゐる神の留守

南区

渡辺きぬ代

柏餅蒸したる湯気に祖母の顔

初蝶の日差しに翅を透かしつつ

紺碧の空に溶け込む秋の山

せんべいを持ってば囲まる鹿鹿鹿

秋晴の一糸乱れぬ鼓笛隊

ひっそりと誰を待つのか落し文

訊けること訊きかねること梅雨に入る
西区 縣 裕子

摘み放題ポピー畑に日の照つて

硝子戸にをりをり時雨の音の束

父の忌を目安にははずす簾かな
南区 赤堀 進

空気まであおあおとして夏野菜

木と土の息づく家や夏料理

梅雨晴れや見下ろす町に人を見ず
西区 池谷 和廣

戦死者はみんな若人敗戦忌

いざ問はむ写生の真糸瓜忌は

若水をふふめば大古思はるる
北区 一 灯

巻き癖のまだ残りゐる初暦

冬の蛾と晩学の灯を供にせり

ゴンドラの漕ぎ出す春の水光る
東区 井出くみ子

福笑母の耳朶祖父譲り

卒業の色とりどりの袴かな

路地裏に珈琲の香や春愁
中区 伊藤サト江

願はくはいくさなき世へ水の秋

茶の花のあふるるほどの金の蕊

停電に戦時偲びし九月尽 東区

伊藤 俊夫

大夕焼浜名の湖の広さかな 中区

今駒 隆次

花梨の実思い思いの空眺む

打ち水や日蔭にも撒く律義者

AIを相手に碁打つ夜の長き

干支は申亡父の好みし熟柿かな

中区

伊藤 好子

浜北区

岩城 悦子

新競技場クレーン延びる秋天へ

特攻の三角兵舎蟬時雨

袋にも新米シール貼られけり

パンドラの箱に詰めたし原爆日

蔵元の六代つづく小春かな

闇夜から天使の便り初蛩

南区

井浪 マリエ

中区

右崎 容子

緊張し医師と向き合う春寒し

赤とんぼ行つたり来たり河馬の背

海近き風力機五基風光る

目の合ひしペンギン爽やかな眼

五月田や三三五五の登校児

大空へひとひらの雲秋立てり

ばんざいの寝姿の吾子初節句

中区

内山 文子

松手入れ赤い法被の好々爺

春燈や歌舞伎役者の白映ゆる

ちひろ描く「おつむてんてん」天高し

中区

梅原 栄子

みどり児を胸に抱けば小鳥くる

秋の雨アラン・ドロンとひと時を

南区

大田 勝子

父祖の地を守りて生きん春怒濤

槌音の四方に広がる寒の入り

囀りやパッチワークの手を休め

のら猫の通ひたる道竜の玉

西区

太田沙知子

岩肌の足裏くすぐる磯遊び

般若心経筆に力の秋天下

蠟梅の香り漂う散歩道

南区

太田 静子

猛暑日の日々草に励まされ

曼珠沙華ぐいぐいと顔を出す

中区

大屋 智代

劉生の麗子の像やシヨール息づく

空晴れて黄金稲穂田視野いっぱい

雲みぞれ降る平和活動同志らと

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

路を煮て若味にがみがよいと微笑む子

中区

岡本 蓉子

シャボン玉ついて行きたい広い空

すず虫の鳴き声がして手をとめる

中区

小川 恵子

風までも菜の花色に染まりけり

花曇り路面電車の軋む音

北陸路右も左も吊し柿

中区

小楠 恵津子

自転車の補助輪取れて豆ご飯

看護師の笑顔に安堵菊日和

七五三赴任先から父帰る

出格子の連なる宿場蝉しぐれ

中区

小楠 達司

指先が染まるほど摘む若菜かな

女工越ゆ野麦峠の草紅葉

中区

小野田みさ子

蔓引けば螺旋解かれし烏瓜

まばたきもせずに見入りしきよ月の

唯ひとり辞書を片手に夜学生

南区

影山 ふみ

大人びたエナメルの靴七五三

よみがえる思い出の中ヒナかざる

コーバイの花は香りも透て見え

工場となりし母校や大蘇鉄

中区

勝田 洋子

ひとつとて同じ顔なきむかごかな

こぶしにて叩けど割れぬ初氷

南区

金田 みき

白シャツの青空楽団楽の街

椋鳥の空動きたる繁華街

縄文人の抜歯の跡や秋深む

南区

金子 典子

七色の夢ころころとしやぼん玉

青柚子の香り脳波を解かしけり

新米のむすびがぶりと女の子かな

連発の花火数へて闇となり

浜北区

金子眞美子

母の日や母となりしも母慕ふ

爽やかな笑顔送れば微笑返る

南区

カモメン

燕舞うみつけし宿に雛の声

穂が揺れる光遮る枯芒

朝顔やラツパの音色出はせぬか

中区

河合千代子

百日紅奥に夕日の眩しけり

おでん鍋少し足したり三河味噌

秋日和一步一步と急階段

原爆忌「イマジン」を弾く駅のピアノ
南区 河合三代子

ゆらゆらと蓮田の緑眩しけれ

どこからか刈田の株の匂ひかな

啄ばみし青菜の畝も春の土
中区 川島 泰子

臘梅の匂ひ立つ庭月あかり

熟れ鮓を受け継ぐ里や鳩の海

虫の音も小さくなりて秋惜しむ
西区 川原 弘美

魯田に白鷺遊ぶ秋夕焼

雨上り東の空に虹のアーチ

茎太き皇帝ダリア天を突く
南区 金原はるゑ

鬼灯を兄の墓前に手向けたり

枸杞の実の小さきが赤で目立ちけり

東風吹きて深き緑のお茶を摘む
中区 畔柳 晴康

見事なり月下美人の夏ひと夜

眞白なる穂ならば揺るる枯尾花

子たわむれダイヤごとき水鉄砲
東区 紺田みどり

向日葵と我子の見上げる未来かな

250CCで髪なびかせてサクラ舞ふ
にいほん

白南風やライオンの仔を抱きあぐる

西区

坂田 松枝

記念写真獅子を真中に夏の富士

無患子や夫の爪切る音堅し

また一戸空家となりし竹の秋

中区

佐藤たえ子

しんしんと冷えこむ夜の軋みかな

顔洗ふ水の硬さよ冬に入る

ふるさとへ短き便り秋の暮

南区

小 百 合

静かなる山門前の彼岸花

コスモスの休耕田の花ざかり

鋸の目立ての音や春隣

北区

清水 孜郎

蜆汁蜆の艶の石一つ

露万朶返らぬことの多かりき

雷鳴や駆け出す子らの響く声

西区

清水 康成

辻巡る一人夜半の風の盆

コンバイン役目果たして秋深し

大花野風に透けゆくわが鼓動

中区

白井 宜子

落葉踏む一步一步の深き音

枯野行く明日へつづく道のあり

境内の日向に憩ふ春の鹿

西区

新村みち子

パレットのみどり豊かや若葉風

花冷やワイン片手に膝を抱く

中区

鈴木かや子

住み慣れし故郷を去りて春まぢか

駄菓子屋は昭和の味のかき氷

名月や椅子二つおき所在なし

菜の花につづく遍路の女かな

北区

鈴木 章子

つなく手にぼつんと木の実落ちて来し

中区

鈴木みちゑ

夢にくる母健やかに花の下

折紙の山谷しかと鳥渡る

その昔女子校なりし花ふぶき

冬風やとほつあふみの鏡晴

境内に満つる児の声春彼岸

西区

鈴木 和

雛の間の王朝の色具合せ

中区

鈴木由紀子

蚯蚓鳴く赤提灯に灯の点る

空堀の中さまよへる秋の蝶

ほのぼのと過疎地広がる月明り

かなな屑くるり丸まる春隣

秋澄めり女鵜匠の綱さばき

東区

ストロベリー

病室の窓一面に秋夕焼

椋鳥の群街路樹を埋め尽くす

南区

高林 佑治

木枯らしや急ぐ靴音響きけり

空蟬や爪しっかりと幹つかむ

迫り来る台風の目のくつきりと

東区

砂間 達也

北区

滝澤 幸一

若衆も空も焦がすやひよんどり

楡紅葉一本ごとの個性かな

遠雷の雑音混じるラジオかな

ひよどりが大きく見えし柿熟るる

秋めくや棚田に赤き耕運機

活き活きと恋蘇えるいちじく果

西区

平 幸子

西区

竹山 すす子

十葉を煎じて恙なくを乞ふ

あれこれと思ひめぐらす春炬燵

天高し玉の男の子を授りぬ

うそ寒や子の遺したるもの羽織る

読み書きも日課のひとつ一葉忌

寒燈にバスの時刻を確かめる

ふらここの立ち漕ぎ宇宙散歩かな

東区

田中美保子

担ぎ手は主役になれず吾亦紅

秋桜や風に吹かるる一筆箋

中区

徳澄 英樹

枯蟻螂風によろけてしまひけり

ポロポロとけふといふひの彼岸花

風鈴や創作料理の古刹かな

霜柱足でふみつけ音色聞く

北区

鶴見 佳子

今日の日が一番若しと桜花

中区

鳥井 美代

さえずりは数多の小鳥あたたかや

着地して遊具をすべる黄葉かな

子ら遊ぶ釣り竿多し夏来たる

どこまでも秋の色どりたずねけり

芝桜見白寿の母の笑顔かな

中区

鴫多 健

露光るしかと大地に試歩半歩

南区

中津川 久子

蛙起さ楸振る我に挨拶か

一灯で足りる生活や冬隣

父の歳わづかに越えて木の葉髪

初しぐれ旧仮名まじりの妣の文

中区
日永し外湯巡りの地図を手に

二橋 記久

花栗や異国学生円座組む

浜北区
木蓮の陽をいっばいにかざしをり

浜 美乃里

手術室扉閉ざされ梅雨の朝

鯛雲「昼のいこい」のあのメロデイ

西区
花万朶人それぞれの思ひあり

野嶋 蔦子

中区
病室に夫在りし日や春の雪

林田 昭子

広島忌被爆アオギリ語り継ぐ

朝顔や米寿の姉の誕生日

安曇野の空あおおと初林檎

夕涼み鼻緒のかたき下駄を履き

西区

野中 芙美子

西区

平井しづゑ

デザートは苺ときめて朝の卓

行く雁の群れより遅る一羽かな

石楠花や小夜の中山夜泣き石

木の実独楽回す幼の面構へ

太鼓打ち湖西連峯山開き

青空の吾子はじめての運動会

涌く雲や舟虫動くだけの島 中区

平野 旭

黙々と星を磨けり寒気かな

手袋のまま握手して汽車に乗る 中区

藤本 幸子

一葉の浮く水瓶や路地の秋

道端の地藏にも願ひ受験生

帰る子を待ちて晦日の蕎麦を打つ

東区

平野 道子

南区

古谷 とく

古今集の和綴ぢの軽さ蝶の昼

野遊びの丘に広がる塩むすび

膝立てて小机寄する獺祭忌

日記買ふ善きも悪しきも我が暮し

座して見る硝子戸越しの糸瓜棚

恋猫の首輪なくして帰りけり

北区

藤生 君江

西区

堀内 一枝

逝きし娘のチエック柄傘春の雨

さくさくと歯応えのよきレタスかな

年の暮パワーシヨベルの首置む

夜の更けて窓辺の虫の音の清か

百歳の唱歌も混じる花見酒

萎えし身の友垣集ふクリスマス

公園に太極拳や梅雨の風

南区

堀川千代子

歌ごゑは隣家にもれて青葡萄

日脚伸ぶ猫のみさうな路地抜けて

真砂

母逝きぬ白玉草風の秋

北区

すこやかに愛づる好みの福寿草

西区

山口久江

塩害や枝はらわれて空高し

児ら寝入り点字打つ音夜長かな

春落葉木木の営む力かな

百歳を見据えて虫の声を聴く

松本憲資郎

秋潮や角立網のピンと張り

西区

寒鯉の池に籠りて動かざる

北区

山口英男

天を突くバット一本秋季戦

鎌の刃をそしらぬ顔の枯蟻螂

名のり合ふ生国遠き遍路笠

零余子飯話の弾む夕餉かな

宮澤秀子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

風吹けば雨降れば又花の舞

中区

山田 知明

秋天に赤いハイヒールの響く

天竜区

渥美 朋可

深山にも田畑のありて遠蛙

秋澄んで喧騒の中女学生

濡れ縁に角つつかれて蝸牛

トーマス号桜吹雪と競いけり

北区

あ ひ る

秋出水くちなはの首走りけり

中区

吉野 民子

猫渡る丸太の先に赤トンボ

ふらと出ではせをの文に会ふ小春

北区

安間 あい子

喧嘩しいしい帰る姉妹や鴉日和

米をとぐ音さわさわと秋の水

倉敷の画板に映る柳かな

西区

渥美 進

木漏れ日に赤蜻蛉舞う水神池

彼岸花野火の如くに群れ咲けり

東区

井口 絹子

白き皿色とりどりの秋を盛る

春の夕「じゃあね」と子等は走り去り
西区 池田 智子

地下道の迷路脱出初夏の風

天高し歓声空へゴールイン
中区 石塚 茂雄

秋時雨空家の続く田舎道

散歩する春の夜風に立てる襟
中区 池田 稔

山里に着飾る案山子誰の作
北区 伊藤アツ子

深夜業終えて汗ひく窓明かり

夏めくや馬上の吾子のりりしさよ

ものの芽や神の計らい無限大
中区 石井 泰子

あのイワシ雲何処いずこまでいくのかな
北区 伊藤 順子

秋深し隅に転がる三輪車

崖を背に群れず立ちたる曼珠沙華

ブツポウソウの鳴き声何処ぞ鳳来路
中区 石黒 實

匂い立つ金木屋に頭垂れ
浜北区 伊藤 正

こんこんとこげら木を突く夏の森

遠江さらなる風は野分かな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

熱爛や距離ある友を近くする

中区

岩崎 五郎

彼岸花土手を真紅に染めて咲く

天竜区

太田 結花

阿智村の空の近さや星月夜

鈴虫の音色消したる街の音

本堂に涼風を呼ぶ大西瓜

中区

内田 一郎

紅葉降る木下に集ふカメラマン

東区

岡本 久榮

公園のベンチの空きて蝉しぐれ

神前に新藁匂ふ大鳥居

高層や想いを馳せる蟻の塚

中区

内山 文久

梅一輪初恋かたる八十路かな

中区

小楠 勝代

省電内スマホに背向け眺む葛の花

茶稽古を終えて春雨蛇の目傘

中区

内山 由貴

中区

加藤貴代美

われひとり音を聴きあふる遠火花

カキ氷ツンと頭にひびく味

秋葉道父の背中としやがの花

となりの子プール遊びで真っ黒に

稚あどけなき鼓笛のひびき春日かな

中区

加藤 雅子

父と子が空豆とばし競い合い

北区

北村 友秀

いにしへの花舞ひおりる石舞台

切干しを筵に広げ空あおぎ

眞赤なるばらを愛めでつゝばらの歌

中区

金取ミチ子

部活動休まず通ふ日焼の子

東区

切畠 正子

名月はあまねく平和照らすごと

虎落笛夜なべの母を偲びけり

緋毛氈木目込雛の顔まろし

中区

川合 泰子

糸瓜水取って娘につけさせる

北区

後藤 とも

施餓鬼経僧侶の声の清清し

直売所日除け角度がずれており

子つばめの高さに合わせ親燕

中区

川上 啓子

糸魚川烈火のやうな紅葉もみじかな

南区

コルプス

今朝の秋ベンチの端の茱舞ふ

空いずこの下何処を見てもすすきかな

風和ぎて闇を狭しと虫時雨 中区

齊藤三重子

小春日うしおや潮の如く子らの声 中区

白柳ますみ

二度三度今宵の月に佇めり

楠若葉さやさや揺れて雛かえる

南区

佐原智洲子

西区

新村ふみ子

ねねの道にスターバックス菊日和

空高し家紋入りなる祝風

海道や新藁の香と松の風

窓開ける金木屋の香に酔ひて

西区

清水よ志江

西区

新村 幸

信州の山路彩る遅桜

端然と僧侶の額に汗ひかる

秋晴の浮雲風の吹くままに

三秋をしみじみ語るいろり端

中区

不知火

南区

すずき

故郷へ夾竹桃の道しるべ

夕暮れの里に映えるや赤蜻蛉

ランドセル写る瞳も桜色

シャッターを切る手震える冬の月

庭に見るときを知らせに彼岸花

北区

鈴木うた子

句帳には秋を葉に挿みをり

中区

高橋 敏彦

稲おわりひらめき走る赤トンボ

乱れ萩いよいよ道は狭まりぬ

冷へし手に匂う柄杓の彼岸西風

西区

鈴木きぬえ

ラッパ隊闇夜に高く練り蛇行

中区

高山 紀恵

秋日和散策をして匂と逢ふ

祭りあと五月の空に法被干し

中区

鈴木 賢三

浜北区

竹内オリエ

沖暮れて磯にくだける土用波

在祭粋な若衆太鼓打つ

稲光るわがまほらなる遠州路

終電車カタコト夏の仕舞い風呂

中区

高橋 常子

中区

竹下 勝子

初日浴び我に似た顔羅漢さん

蠟燭や雑炊旨き夜更なり

誘はれて何か摘みたく春の野へ

秋出水明善翁命原の治水今

油照三和土の猫は腹這いに中区 竹田 道廣
 棟上げの槌音高し梅雨晴間北区 田辺百合江

盪澄む五彩の鱗寒に入る 鈴木 鳴く籠ひとつ野に放つ

夕空にひとり残りし案山子かな西区 竹平 安則
 赤まんま見向きもしない子供達中区 土屋香代子

老いてなほ試験の夢の霜夜かな きちきちや我が頭上を天に飛ぶ

冷奴夕餉はいつも飽きもせず中区 館石 照子
 畦道に星屑のごといぬふぐり南区 黒葛原千恵子

万両や見せたき赤は黄泉の人 何事もなにごともなく秋の暮

待ちました花三輪のシクラメン中区 田中 貞夫
 鯛割く手許確かや夕厨中区 寺田 久子

浜木綿の誰が運び来し白き花 頬赤く動作きびきび新園児

房咲きの水仙の香に歩を止むる

西区

徳増 貴子

芝焼の広がる速さ風まかせ

恐山秋の風吹く風車

東区

根本 文子

二冊目の十年日記去年今年

幼き日かやに集めた蛍かな

北区

鳥居 きく子

鳳仙花さわらぬ前に種飛ばす

北区

中村 寿

鯉のぼり空きらめける屋根の上

白粉花朽骨のごと枯れ果てん

初稽古的射る音の遠くまで

天竜区

鳥居 有子

大灘へ夕日傾く菊畑

西区

西山 良子

沈丁香看的かんてきの子のじつと待つ

夫逝きて咲き乱れしは曼珠沙華

風に舞ふ花卉集めし花筏

中区

永田 恵子

六月やすぐ甦る大空襲

中区

野田多満子

味噌おでん結び昆布は鍋の底

蛙啼く銀河に星のこぼれけり

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

小さき手を大きく振って夏終る

西区

野田 俊枝

墓石に思いを寄せる初彼岸

東区

藤井 星子

葵紋石に刻んで夏の果て

盆踊吸い寄せられて輪に入る

浜北区

橋本まさや

北区

藤原 孝志

小刻みに時をかぞふる夏あざみ

見失うかまきり背に隠れ居り

入道雲ひろがる青へ修正液

そよ風になびく稲穂や田のアート

中区

長谷川絹代

中区

松江佐千子

老いてまだ叱られてをりつくつくし

元朝の日を映しをり漉にわたすみ

ゴキブリを打ち逃したる四つん這い

蕊降るやシニアハウスへ転居の報

北区

東 直子

天竜区

松田 千愛

ほうほけきよこの一声に春動く

山裏に響きて渡る鹿の声

鶯の一声ほしき梅林

祖父が採り姉妹で食べる甘い柿

景二分して湖の紅葉かな
南区

水川 放鮎

風にのり蒲公英の絮旅に出る
西区

森下 綾香

刈跡の夕焼鷺の染まり居る

ゴキブリと闘ふ母の強さかな

すだれごしきれいに見える家の中
北区

水島 邦子

しあわせは家事出来ること冬うらら
中区

山下アサ子

栗ごはんかぞえて食べるおいしさよ

遠雷のさらに遠のきミシン踏む

拍手や乾いた音の寒の入り
北区

村松 和憲

畦道のお喋り弾む夏帽子
中区

山下 静子

柗のとげに向いて豆をまき

行く春の足元照らす常夜灯

帰り道吹きたる風の肌寒し
天竜区

森坂 芳喜

捨てがたきものの多さよ更衣
中区

横田 照

街の中を歩き交う人や秋の虹

食卓のひとりの広さ夜の秋

水音に心安らぐ秋の声
天竜区

横山 亜美

芍薬も君の姿に敵かなわない
天竜区

太田 光

風吹いて辺り染めゆく紅葉かな

奥深き郵便ポスト秋の声
南区

尾内 以太

紅葉散るいろいろ音が混じってる
磐田市

渥美結梨香

ペダル漕ぎとんぼと走る田圃道
中区

かりりん

太公望アユの友釣り竿の先
中区

伊藤志津子

ラッパ隊浜松祭り元気出せ
東区

川合 妙子

甘い香の私の好きな甘藷かな
天竜区

伊藤 日菜

遠雷や音の近づき雨の降る
中区

川上 とよ

三遠南信トンネル抜けて春を撮る
北区

伊藤 美代

雨うけて生気みなぎる四葩かな
浜北区

川島百合子

どこまでも青く澄んでる秋の空

東区

北島 はな

入梅の知らせを稲が待っている

中区

鈴木千恵子

走る子ら汗流してる運動会

中区

小池 久子

夏の空白球つかみ我が校歌

東区

高杉威一郎

梅雨空に嬉々と響くや子らの声

中区

佐藤 ケイ

仰向けの今際の蟬のアリ払う

中区

高鳥 謙三

紺碧の空のキャンパスあきあかね

南区

白井 忠宏

わらびもち売り来る声の懐かしき

中区

角替 かつ

銀杏散り黄金に染まる一本道

天竜区

鈴木 彩郁

切り干しの袋あければ香り立つ

中区

手塚 みよ

主なし酷暑に負けし手植えの花

中区

鈴木 京子

初暦今年も同じ貰ひ物

南区

利徳 春花

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

真澄空ちらりちらりと桜舞う

南区

永井 真澄

鮎釣や水澄み吾の心澄み

中区

宮本 恵司

初心者のギターぼろぼろ夏休

北区

西 周

冬近し池の水面に魚影なし

中区

山中 伸夫

ひらひらと落葉の踊る校庭で

天竜区

兵藤 葵

涼をとる色とりどりのかき氷

中区

山本 澤乃

名月の静かに宿る水面かな

中区

深谷とく子

草むらの楽士招いて月見かな

中区

和久田 俊文

枯れ蓮や引きあげられし捨て小舟

北区

牧 元久

秋晴は地球の丸さ写し出す

西区

松本 和樹

定型俳句選評

九鬼あきる

今年度の浜松市民文芸賞に、次の八人の方を推薦します。それぞれ一句について選評します。

・冷まじや顔面土器の発す声

松本 重延

「顔面土器」と対座した時、この土器の発する声を聞いたのである。加藤楸邨は言う。「全ての物の中にひそんでいる声は、こちらが聞きとめる心の耳を持ちさえすれば、必ず聞こえてくるはずだ。俳句はそういう声を聞き止めてゆく芸だ」と。

・鼓動聞く真赤なセーター着るたびに

澤木 幸子

なんと初々しい句だろう。「真赤なセーター着るたびに」作者の胸の鼓動は高鳴るのだ。何歳になつても、こう言う気持ちには持つていたいもの。柔軟な詩心が躍動している。

・体当たりして熊蟬の大あわて

藤田 節子

単純明快な文体で、ひたすら物の核心に迫る作風である。熊蟬そのものになり切ったからこそ俳諧味溢れる作品となつた。

・パリパリの皮に箸入れ秋刀魚食む

鈴木やよい

七輪で焼いた秋刀魚か。パリパリの焼き加減に仕上がつた。皮に箸を入れた音まで聞こえてくるようだ。生活感溢れる作品。

・どこからか秋の香水エアポート

佐久間優子

俳句の素材はどこにでもある。「秋の香水」と「エアポート」の取り合わせがとても新鮮。こんなお洒落な一句も楽しい。

・陣取のひとりに広き花筵

西尾 わさ

お花見のシーズンになると、どこでも陣取りはつきもの。余程早く来たのだろう。「ひとりに広き花筵」は言い得て妙。

・種袋静かに呼吸してをりぬ

中村 瑞枝

日野草城の「(もの)の種にぎればいのちひしめける」が浮かんできた。この種袋の種もこのように生きているのだ。

・マチス見し美術館より夏の蝶

大平 悦子

マチス展と「夏の蝶」との取り合わせが新鮮。感性の豊かさは生得的とも思える。この初初しい詩心を大切にして欲しい。

本年度も高校生十二名の参加は嬉しいかぎりであつた。全体としていろいろな傾向の作品に出会えたことに感謝しつつ、さらなるご精進を期待したい。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

きしむ街に星がつくる窓

南区

尾内 以太

あの街角にひそむ秋色の匂う風

東区

生田 基行

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

天竜区 伊藤 有美
 どこかで狐の嫁入りありそうな優しい陽に光
 る雨

振り向いて返事する誰もいない景色

濡れ落ちた柿の葉の縮む音さえも里山の秋

湖面に映る錦葉揺らしオシドリ織りなす横糸
 の波

東区 生田 基行
 手を添えたワイングラスに揺れる冬の月

誰もいない夜の公園秋の色踊る

暗い出口へいざなう風旅路も終われば

北区 伊藤 美代
 にごり湯に体をゆだね明日を知る

特大の冬瓜畑はたに堂々と横たう姿ねはん像

見えかくれ蓮の浮き葉に黒糸トンボ

浜北区 岩城 悦子
 桜貝渚に拾ふ君が声のする

分岐する川面に揺らゆは花筏

春風のいたずらだよね君の逝く

北区 凡道くにを
 誰が悪いでもない秋風の風鈴ふうりんの音ね

朽ちた墓標の上赤トンボ行ったり来たり

この若葉の風を一年分吸っておこう

窓から朝の光 スイッチオンだよ
北区 鈴木 章子

流れ星バスケットに集めてまた明日ね

枯葉舞ふ小人のロンド

川の流れゆったりと歩調合わせ昼下がり
中区 中谷 則子

青空に向かい一人吹くトランペット

吹き溜りの枯葉も踊り出す北風の魔法

雨の匂い階段くる気配してかしこ
南区 中津川 久子

昼の月にあずけとく青い嘘

ばらばら理性脱いでく午後のおひとりさま

爪の色すこし深くなり秋風のおんな
東区 宮本 卓郎

コーヒーにミルクあそびせて隣の会話

あしたはどっち お地藏さんの顔つるつる

公園のブランコが淋しがる夜
南区 村松ヒサ子

夕立にぬれて届く水色の封筒

雨止めば雨音も消え秋のいちにち

日本海沈む夕日に話す露天風呂
天竜区 リコリス

満開をまっつてコスモスに会いに行く

ビル街独り歩く頭上にぼんやり十六夜

中區 渡辺 憲三
ほほ笑みをあなたとコスモス畑が続く

雨の坂道ヒガンバナも濡れて立つ

渡り鳥も整列し深まりゆく秋

天竜区 岩本多津子
風はマフラー煽り冬へのプロローグ

句作に詰りマラーの調べに^{はま}まりゆく夜

中區 内山 文久
人影は孤児 バッサリと 伐られた大櫨

歩いている 萩に触れる 季節が落ちる

南区 大庭 拓郎
蓑虫のいたくひなびた蓑ひとつ枝

長々と夕陽を浴びて樹は自画像のよう

中區 小笠原靖子
柿の落葉に秋色結まって一枚のキャンバス

ぬる爛にして飲み方真似てみる亡夫の命日

南区 尾内 以太
風を夜色に染める雑踏

雨降る記憶の襞へ沈む鉄路

中區 嘉山 春夫
あれやこれやと只管^{しかんたぎ}打坐遠いサイレン聴く

ベランダの西と東ちぐはぐな打ち上げ火花

中区
街路樹の根元空蟬見つけ我身考え
畔柳 晴康

災害に負けず神を信じる祭り盛大

東区
亡夫の齢を越した息子の背に浮かぶ影
手塚 全代
秋日和の墓苑の陽射しに佇むひととき

西区
色香ほのかに老伎の艶な手さばき舞扇
鈴木あい子

中区
息子に継がせる事もなくこれからの暮らし
寺沢 純

老伎も一度帯をたしかめお座敷前

ミシンの音に昔を重ねて一人酔う

中区
揚羽蝶あげはちょう今朝も満足げだつたな昼餉にする
高鳥 謙三

南区
新米の香り広がるおにぎりほおぼる
中村 淳子

住吉バイパスを亡妻と歩いて同行三人どうきょうさんにん

赤い月松の向こうに隠れてる

浜北区
君となら死んでもいいよと桜舞うなか
竹内オリエ

東区
運動会の玉入れは青空に投げた
根本 文子

窓辺に展がる浜名湖に幸せ色の夢を置く

ピロードの様な手触りホトトギス

軒からの雨の雫に受難する椿の同じ一枚の葉は

浜北区

橋本まさや

薇げんまいの此の世に疑問を抱きつつ伸び来る

北区

原川 泰弘

検査表見直してまさかの病名

野良仕事もいつまで続けられるか雲よ

中区

藤本ち江子

地平線に夕日沈めて街の稲守に灯を点す

少し派手目な装ひで街に出たいな冬至の日

中区

山崎 譽代

黙って許すと決めた夜紫煙まっすぐ

想い出はいい事ばかりで通夜の席

メガネ越しに青い空

北区

伊藤 順子

現し世に適さぬ常識あれこれと

南区

太田 静子

こぼれ種で庭が華やぐ鶏頭や

中区

岡本 蓉子

新じゃがの湯気の向こうに友の顔

南区

加藤美恵子

デイサービスここ迄まできたか国際化

南区

白井 忠宏

三十年来の恋椿私を若くしてくれる

中区

杉浦 嬉子

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

抱き上げる手を伸ばす子にひつじ雲

中区

鈴木 和子

黒枠でくくられた 未来は 永遠の透明

中区

ヒメ巴勢里

百才は生きると云われ天高し

中区

竹田たみ子

枯れ蓮の口上それ以上枯れることなし

南区

水川 彰

木犀の香白き杖持つ方より始め聞く

中区

鴉多 健

諦らめていた 夫の歩行 夢ふたたび

中区

もとさんの姉

赤い月妖しく空に顕現す

中区

叡 征

年々に夕焼や雲の袖々しく

西区

浜名 湖人

若き母と子秋の陽惜しむすべり台

浜北区

浜 美乃里

自由律俳句選評

鶴田育久

予選句として十二句採りました。(○印二次予選句)

- 君となら死んでもいいよと桜舞うなか
- 長々と夕陽を浴びて樹は自画像のよう
- 流れ星バスケットに集めてまた明日ね
- あの街角にひそむ秋色の匂う風
- さしむ街に星がつくる窓

雨の坂道ヒガンバナも濡れて立つ

満開をまつてコスモスに会いに行く

- 吹き溜りの枯れ葉も踊り出す北風の魔法

枯れ葉の口上それ以上枯れることなし

コーヒーにミルクあそばせて隣の会話

夕立にぬれて届く水色の封筒

春風のいたずらだよね君の逝く

熟慮の結果、次の二句を市民文芸賞に推すことにしました。

さしむ街に星がつくる窓

あの街角にひそむ秋色の匂う風

さしむ街に星がつくる窓

星がつくる窓とは、ピルの窓に星が一杯映っているさまを詠んでいるのだと思いますが、星が窓をつくるという逆転の発想で、現代的なピル街の生態として捉えていて新鮮です。

あの街角にひそむ秋色の匂う風

場所を特定せず、あの街角という説明で、読者それぞれにそれぞれの街角を想い出させるのがミソです。秋風になろうとしている風が匂うとは、ひそむという言葉が示唆するあやうい関係かも知れません。そんな思わせぶりなところも面白い。

吹き溜りの枯れ葉も踊り出す北風の魔法

冬の風は魔法使いのようです。街をつむじ風で走ったり、吹き溜りの枯れ葉を集めて人形劇のように愉しく踊らせたり、冬の街角の風物詩です。

長々と夕陽を浴びて樹は自画像のよう

夕陽を浴びて屹立している冬木に、侘びしい自分の自画像を重ねているのです。それは長々と云う形容が、自分史の紆余曲折の長い道程であったことを物語っています。

流れ星バスケットに集めてまた明日ね

一日遊んで帰るバスケットにたっぷり流れ星を入れて又明日ねと囁く。星を集めてとはオーバーな表現ですが、それほど愉しかったということでしょう。

君となら死んでもいいよと桜舞うなか

一緒に死んでもいいとは、心中立ててというような哀しいものではなく、死ぬ時も今のように仕合わせに手をつないでという明るい所作で、満開の桜。羨ましいかぎりです。

枯れ蓮の口上それ以上枯れることなし

歌舞伎役者のように見得を切る枯れ蓮の、切ない意地です。

満開をまつてコスモスに会いに行く

まつてを待つてにした方が気持ち伝わりやすい。

川柳

〔市民文芸賞〕

裏切らぬ汗を味方にして生きる

北区

山口 英男

後悔の波打ち寄せる今日の鬱

東区

竹山 惠一郎

明日また笑顔でいたい菜を刻む

中区

宮崎 和子

笑わせて冷たい空気温める

西区

佐野 つとめ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

やりきれぬ世相の風が路地を抜け

中区

浅井 常義

帰宅してホッとしている旅靴

西区

竹平 和枝

今もなお心奮わす亡母の声

追いかける夢にピエロの応援歌

握り拳朝日に向かい突き上げる

軋む膝朝の散歩に油注す

中区

伊熊 靖子

数えましょ出来ぬことより出来ること

立ち話もうやめたらと刺すヤブ蚊

停電に洗濯板のリバイバル

石清水ごくり胃に落ち生き返る

爽やかな目覚めに今日のいい予感

注射針ぐつと堪える三歳児

苦も楽も家族で分けて子の育つ

子育ての一線を引く善と悪

北区

田中 恵子

ボランティア無口な頬に落ちる汗

完敗に笑顔孫との腕相撲

友達はみんな持つてる泣き落とし

体力に替わりたつぷりある時間

水平線何だ昨日のことなんか

軸足を我が家近くに置く老花

中区

鶴見芙佐子

十代の投稿記事に希望湧く

西区

恭子

幼馴染み遠州弁がすぐに出る

健康へ薄味愛を盛り付ける

母の味ゆつくり妻へ移動中

かあさんが笑っただけで力湧く

レシピ帳亡母の香りが染みている

急がずにゆるゆる降りる下り坂

東区

内山 敏子

浜北区

鈴木 覚

ライバルの誤解も解けて無二の友

エアコンが激務を果たし寿命尽き

世渡りのうまさを買われ裏帳簿

拉致家族涙も渴く半世紀

想い出をつなぎ合わせて夜が白む

野仏が事故の悲惨さ語り継ぐ

気まぐれな雨に予約が流される

友の訃に胸が突然塞がれる

虐待死昭和に生きる母嘆く

西区

竹川美智子

辛い過去くつきり写すレントゲン

熱に伏す枕辺に聞く遠花火

思ひ出の扉に閉ざす苦い恋

西区

竹平 安則

異常気象秋に桜の花咲かせ

万感の思いを胸に家畳む

老骨を試験の夢がまだ責める

増税へ国の勝手な無駄遣い

受け止めて治めた胸に残る悔い

東区

竹山恵一郎

予期しない結び目解け出る本音

温かさ伝わる譲られた座席

終章は流れに任す花筏

中区

寺田 文子

息止めて胸の底まで覗かれる

やんわりと言ったつもりの変化球

向こう岸介護保険で泳ぎます

踏まれても種を残した日照草

中区
少しでも老いを止めたいスクワット

宮崎 和子

北区
穏やかな心にさせるほめ言葉

山口 英男

カクテルの余韻楽しむ恋半ば

母おもい彫れば菩薩の貌になる

ちぎれ雲なんと自由な泳ぎ方

ゆずられた席ゆずり合う共白髪

うれしくてスキップしたい胸の内

ほろ苦い思い出たどる回顧録

東区

守屋 三千夫

西区

飯田 幸子

泣きさって心の中が透き通る

連れ添った夫婦の会話微調整

車椅子押され安堵の春の風

絡む糸ゆっくりほぐし温める

命乗せストレッチャーのきしむ音

想い出は仕舞い込むより咲かせたい

善と悪不意にぶつかる交差点

改憲の目論む先が見えている

北区

一

灯

モリカケはもう過去ですか総理さま

騙されてあげているのよ親だもの

凧よ飛べ子供の頃の夢のせて

中区

A

かき氷ほてった体ひと休み

祖母植えし柿が今年も実を結ぶ

朝の鬱緑の風が吹き飛ばす

東区

菊川 文江

和解しても何故か気になる言葉尻

引き際はこうであれよと散り椿

ふる里の民話に心洗われる

中区

小鳥 松太

小さな夢二人でスープ温める

凧の海誰にも愛を告げれない

すき間風趣味で繕う老夫婦

東区

佐次本 浜子

風静か波穏やかに喜寿迎う

日本晴れせつせと歩く医者嫌い

蟠り溶かす妙葉思い遣り

西区

鈴木 均

躰きの甘い言葉に尚未練

拘りの視点を变えて楽になる

夢ひとつ言葉の海に投げてみる

中区

高橋 紘一

頼られることが嬉しいお年頃

人間に戻る時間の一人旅

南区

牧田 龍司

自分史に書けぬ自分が居て師走

非常食試食で済ます有り難さ

目に見えぬ気遣い珈琲香味立ち

そよ風に誘われ登る夫婦坂

中区

高橋 博

みどり児の手にたつぷりと母の胸

中区

馬淵 征稍

杖二つ支え合つての八十路越え

愛の鞭痛さのこして師は鬼籍

風は吹く明日の風もきつと吹く

いらぬも本音はほしいイヤリング

手鏡に映る我が顔亡母に似る

南区

寺田喜代子

一本の線になるまで過去語る

中区

荒木いつか

読み聞かせ笑顔見たくて十年目
野良仕事自然相手と励む友

霜枯れて母の衰え偲び居り

前向きに生きて踏み出す今朝の靴

南区

伊藤 信吾

謙遜をした筈なのに領かれ

中区

嘉山 和美

寝たきりの母が手を取りありがとう

絹一反仕立てる母の裁ち鋏

夜の闇こころの闇を包み込む

中区

内山 文子

夢数多乗せて重たししゃぼん玉

東区

川口八重子

野面積み小石ひとつに歴史あり

ここだけの話と廻す回覧板

カモメらも己ひとりを持って余す

南区

大庭 拓郎

初恋を笑ひて語る爺ありき

浜北区

金子眞美子

厚着してクーラーで寝る熱帯夜

一年は長く短かき夫忍ぶ

いわし雲空一面に泳ぎゆく

中区

岡本 蓉子

先人の足跡偲ぶ八十の坂

東区

木村 民江

赤トンボ何処へ行くのか青い空

感性へ届かぬ夢を追いかける

本当は淋しがり屋のいじめっ子

西区

佐野つとめ

言い過ぎた悔いピーラーでスツと剥ぐ

南区

鈴木千代見

ストレスを一夜漬けて摘み食い

お気に入りのペンは私のパートナー

東区

佐野ふみ子

浜北区

竹内オリエ

生き方と死に方見せて母が逝く

重病のあとの元気な君の声

生ききった母の顔には笑み浮かび

幸せに馴れしこの身をつねる夜

中区

鈴木和子

中区

土屋香代子

幾たびの希望絶望拉致哀し

ざわめきの消えた高野をひとりじめ

拉致の皆帰り来たるを我も待つ

曼殊沙華愛でてなでゆく千の風

北区

鈴木勝則

南区

黒葛原千恵子

退院で知る健康のありがたさ

もう六十もう七十と年駆ける

暑い夏蚊も人間も動かない

忘れぬようメモした紙を置き忘れ

飲める酒まだまだ生きる証です

中区

手塚 美誉

ぶり返す暑さに昼は冷やし蕎麦

縁側に噂話の来て座る

南区

中津川 久子

姿見の中のワタシに覗かれる

秋雨に濡れた樹木の美しさ

中区

徳田 昭巳

辞書引いて漢字確かめ書く手紙

東区

根本 文子

秋燃ゆる旅路の宿で身も染る

二人分軽く食べてる腹八分

がむしゃらに突き進む日々懐かしむ

中区

徳田 美知子

負けん気が人の親切受け入れず

浜北区

浜 美乃里

骨密度歩け歩けと急ぎ立てる

有ったねえそうそう有った昭和には

言い訳をゆつくりカメに聞かせたい

浜北区

中田 尚

八十路過ぎ人間模様柔らかに

北区

藤生 君江

星空をゆつくり眺め静岡茶

歳重ね丸い心が趣味を生む

朝もやに浮び上った母子草 東区

堀内まさ江

無花果の熟れて食べごろ妻の口 西区

渥美 進

夕茜ゆつくり沈む地平線

旨すぎるポテチの罪を噛み砕く 中区

池田 稔

降って来た幸せだからお裾分け 中区

馬淵よし子

失敗を笑ってふやす免疫力 北区

伊藤 美代

腹の皮よじれ仲間と小半日

頑張った今の幸せ過去を消す 浜北区

猪原 利雄

出不精となり食欲も減退す 南区

水川 彰

火星よりウインク届く星月夜 浜北区

岩城 悦子

炬燵出す周囲に小物やたら増え

小カマキリじわじわ退る秋田犬 中区

内山 文久

受けて立つ覚悟はしてるスクワット 西区

山田とく子

針穴の的のはずれる寂しさよ 南区

太田 静子

逆境に耐えて今では語り草

立冬に何か告げたき蟬の啼く 天竜区

太田 初恵

いつ気付く先が見えない人の道 中区

小栗 秀治

愛犬に手綱引かれて早歩き 南区

カモメン

ミルクティ地球の色を忘れそう 南区

尾内 以太

旧友と逢える楽しみ祝寿会 中区

川上 とよ

わが妻のいびきが俺の子守歌 天竜区

恩田 章司

定年後虫は付かぬが黴は生え 中区

熊 鷹

病おし笑顔の一日母に感謝 ひとひ 天竜区

恩田 利子

スポンサーつかず計画空回り 中区

畔柳 晴康

言い訳が多くなりたり八十路かな 天竜区

恩田 恭子

余生のび杖から車椅子となり 中区

斉藤 三重子

卵焼き作ったつもりがいり卵 中区

加藤 貴代美

片思い十七文字に詰めてみる 西区

澤井 由紀子

どんな子も試験の時は張り詰める 北区

加藤 典男

飲み過ぎかひそひそ話大声に 南区

白井 忠宏

全集を死ぬ迄読める自信無く 中区

金取 ミチ子

パンの耳撒いて一茶の心内 中区

白柳 ますみ

巢立ちゆく子供の姿誇らしい

北区

鈴木 民江

水泳は吐けば自然に呼吸でき

中区

鴫多 健

墓参り念仏いつか演歌調

東区

鈴木ますゑ

麗筆が想像力を掻き立てる

中区

戸塚 忠道

哲学者の顔して猫のうんちどき

中区

鈴木由紀子

朝焼けや見事な赤だ曇染める

南区

永井 眞澄

不都合は雨風打たせ忘れたい

西区

高柳 龍夫

颱風で朽ち果てた花我に似て

中区

中村 歌子

避難所のテレビ相撲で力得る

中区

高山 功

信号機渡る速さを考える

中区

中村 禎次

ゴルフ場一転がりが勝負決め

中区

高山 紀恵

デイ通い米寿の皺に化粧して

中区

沼田 壽美

いびきより静かなほうが気がかりだ

中区

塚田 弘之

天道虫じぶんの殻からを割って飛ぶ

浜北区

橋本まさや

健康長寿亀の甲羅が重くなり

中区

寺田 久子

ちゃん付けの仲間が招く年の暮

西区

浜名 湖人

付度に翻弄されて部下動く
中区

平野 旭

千枚田畦を飾りぬ彼岸花
中区

米澤寿鶴子

人生のキャンバス描くボランティア
浜北区

馬塚 五朗

気のせいと無視する妻が気がかりだ
中区

和久田俊文

まだまだと気ばかりあせる老いの日々
東区

宮澤 秀子

このオレにがんばれヨとは失礼な
天竜区

宮澤 正人

蜘蛛が出て悲鳴あげたは若い頃
中区

山下あい子

沈んでる心を酒がなごませる
中区

山中 伸夫

穏かな日々を感謝し今日も暮れ
中区

横山タカ子

掴むより放す勇氣に身は軽く
南区

由倉 典之

川柳選評

今田久帆

今年は昨年より応募者数が一〇名減り、五二三句の中から、私の心を捉えた二五句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳の題材は日常生活のどこにも転がっています。ただ、どのような角度で、どのような切り口で見せるかにより、様々な発見があります。普段ながめている景色でも、カメラで捉えると新鮮な驚きに出会います。錦鯉でも上から見た時、横から見た時、正面から見た時、後から見た時、下から見た時で形は全く違います。ものまねでは、正面から捉えた口のまねをよくしています。どの角度で切り取って表現するかを考えながら、日常の何げないひとコマを切り取ってみましょう。

市民文芸賞予選句

やりきれぬ世相の風が路地を抜け
和解しても何故か気になる言葉尻
友の計に胸が突然塞がれる
泣ききって心の中が透き通る
熱に伏す枕辺に聞く遠花火
水平線何だ昨日のことなんか
苦も楽も家族で分けて子の育つ

かき氷ほてった体ひと休み

前向きに生きて踏み出す今朝の靴

拘りの視点を变えて楽になる

幼馴染み遠州弁がすぐに出る

数えましよう出来ぬことより出来ること

旨すぎるポテチの罪を噛み砕く

生ききった母の顔には笑み浮かび

言い過ぎた悔いピーラーでスツと剥ぐ

厚着してクーラーで寝る熱帯夜

夢数多乗せて重たししゃぼん玉

やんわりと言ったつもりの変化球

想い出をつなぎ合わせて夜が白む

日本晴れせつせと歩く医者嫌い

健康へ薄味愛を盛り付ける

市民文芸賞

◎裏切らぬ汗を味方にして生きる

自分が努力して流した汗は、それだけ自分の技術を向上させ、いざという時に、自分を救ってくれる。「裏切らぬ」と「味方」をうまく対比して、思いを強く打ち出している。

◎後悔の波打ち寄せる今日の鬱

過ぎてしまったことは、もう取り戻すことはできず、毎日のように悔んでいると、その後悔が積み重なり、やがては鬱となり、自分に重くのしかかってくる。「波」の比喩がいい。

◎明日また笑顔でいたい菜を刻む

健康はまず食から。健康でいて精神的にゆとりがあれば、自然と笑みがこぼれるようになる。

◎笑わせて冷たい空気温める

その場を冷たい空気が覆っている時、ちょっとした仕草や冗談などで、笑みがこぼれると、場が和み次第に打ち解けていく。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸 第65集』作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸 第65集」を編集・発行します。

浜松市

二 発 行

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

三 編 集

浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

四 応募資格

五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(二編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※ ワードプロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

六 選 者

選者の氏名は、二〇一九年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第65集」の作品募集要項に記載します。

二〇一九年九月一日(日)から十一月二十日(水)まで。(必着)

七 募集期間

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所創造都市・文化振興課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ **応募原稿の書き方については、別紙募集要項の「応募原稿の書き方」をご覧ください。**
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、82円切手を貼って**、作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品のジャンルの数に関係なく一通で結構です。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただきます。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
 - ⑩ 応募後の、原稿の修正はできません。
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で二〇二〇年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、二〇二〇年三月発行予定の第65集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、二〇二〇年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「浜松市民文芸第65集」を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発表 表

十 表彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中区早馬町二一ークリエート浜松内

☎〇五三一四五三一三九三三

「浜松市民文芸」第65 集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎を)

部 門	小説・児童文学・評論・随筆・詩・ 短歌・定型俳句《旧かな・新かな》・ 自由律俳句・川柳	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください	原稿枚数 (ページ数)	
	(部門に1箇所○をお付けください)		枚	
ふりがな				
氏名		年齢	歳	男・女
ふりがな		(2019年11月20日現在)		
発表名 ペンネーム		名称 所在地	(市外在住の方は必ず記入を) 勤務先または通学先	
住所			電話番号	
文芸館使用欄	受付月日	受付番号		

編集後記

ふるさとの池の匂いや蓮の花

嵐山光三郎

昨年の十一月、浜松文芸館では、開館三十周年記念として、作家の嵐山光三郎氏による記念講演会を催しました。嵐山氏は幼少期を浜松中野町で過ごされ、この浜松を故郷として、こよなく愛しておられる方です。講演会終了後、懐かしい浜松にまつわる話をする中で、一句、この句を色紙に書いてくださいました。清らかな蓮の花の咲く池から漂ってくるちよつと泥臭い匂いは、紛れもなくふるさと浜松の匂いなのです。その匂いと共に、懐かしい子供時代の様子や「じいちゃん」のことが思い出されるのでしょうか。

今年も、浜松市民文芸第六十四集が、多くの方々のご厚意に支えられ発刊の運びに至りましたことを、心からお礼申し上げます。

投稿作品総数二、五三八点、投稿者数延べ六一三人に上るこの文芸誌には、投稿者の皆様の熱い思いが込められていることは、言うまでもありません。自分の思いをどのように表現したら伝わるか、熟慮に熟慮を重ねて生み出された作品の数々は、必ずやこの市民文芸誌を手にとってページをめぐる皆様の心を動かすことと思います。一つつて作品を紹介して、そこには書き手と読み手の存在があり、書き手の書く力と読み手の読む力がびたりと合った時に、その作品は完成したと言えるのかもしれない。

今、実社会に生きる資質や能力が求められる現代社会において、文学を学んだり文芸に親しんだりする価値とは、どんなところにあるのか。脳科学者の中野信子氏は、「文学で健全な批判精神が培われる」、投資家の藤野英人氏は、「文学

学は稼ぐ力の源である」と書いていました。確固たる考えをもっているわけではありませんが、私は、皆様の作品を読ませていただき、文学や文芸の世界は、生きる真実と出会える場であり、そこには、人生がある。日常がある。そんな思いに駆られました。

これからも「浜松市民文芸」が、皆様の文芸発表の場として活用されるだけでなく、掲載された作品を市民の皆様が読むことにより、少しでも文学や文芸に親しみ楽しんでくれることを切に望みます。

最後に、改めて、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、御協力に厚く感謝申し上げます。

浜松文芸館 館長 下石精子

浜松市民文芸 第64集

平成三十一年三月十七日 発行

発行 浜松市
編集 (公財)浜松市文化振興財団

浜松文芸館

〒433-0109 九一六

浜松市中区早馬町二一

☎〇五三一四五三三九三三

印刷 杉森印刷株式会社

～アクトシティ浜松は2019年に開館25周年を迎えます～



ACT CITY CONCERT LINEUP

2019-2020

Premium Series

世界の一流アーティストが奏でる至高のコンサート・シリーズ

アクト・プレミアム・シリーズ 2019 ～世界の名演奏家たち～

アクトシティ浜松 中ホール 19:00(18:30開場)

vol.11 **ウラディーミル & ヴォフカ・アシュケナージ** [ピアノ・デュオ]

5.13(月)

世界最高峰の巨匠ピアニスト、ウラディーミル・アシュケナージと長男ヴォフカとの至高のピアノ・デュオ!

Program
シューベルト: 幻想曲へ短調 D.940
ブラームス: ワルツ集 Op.39
ラヴェル: ラ・ヴァルス
ラフマニノフ: 組曲 第1番「幻想的絵画」Op.5

©Susanne Holm

好評販売中!

全席指定 S¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 学生B¥3,000

vol.14 **シブリアン・カツアリス** [ピアノ]

12.9(月)

超絶技巧と色彩豊かな音楽性を併せ持つ世界的ピアニストのカツアリスが、2020年に生誕250周年を迎えるベートーヴェンをお祝いする珠玉のプログラム!

Program
ベートーヴェン: 7つのバガテル Op.33
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第17番 二短調 Op.31-2「テンペスト」
ベートーヴェン(リスト編曲): 交響曲 第7番 イ長調 Op.92より 第2楽章 ほか

全席指定 S¥6,000 A¥4,500 B¥3,000 学生B¥1,500
【一般発売】8.11(日) 【友の会発売】8.4(日)

vol.12 **ミハイル・プレトニョフ** [ピアノ]

6.24(月)

国際的な脚光を浴び、世界中の聴衆を魅了している現代最高のピアニスト!

Program
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 Op.110
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ 第32番 八短調 Op.111 ほか

©Rainer Maillard / DG

好評販売中!

全席指定 S¥9,000 A¥7,000 B¥5,000 学生B¥2,500

vol.15 **ネマニャ・ラドウロヴィチ** [ヴァイオリン] presents **ドゥーブル・サンス** [弦楽合奏+ピアノ]

2020 3.4(水)

“バガニーニの再来”とも称される熱き魂を奏でるヴァルトウオーゾ、ネマニャ・ラドウロヴィチ率いる変幻自在のパフォーマンス集団!

Program
リムスキー=ニコラエフ(セドラー編曲): 「シェヘラザード」Op.35 ほか

全席指定 S¥6,000 A¥4,500 B¥3,000 学生B¥1,500
【一般発売】11.10(日) 【友の会発売】11.3(日)

vol.13 **エマニュエル・パユ** [フルート] & **エリック・ル・サージュ** [ピアノ]

9.30(月)

ベルリン・フィルの首席を務めるフルート界のスーパースター、エマニュエル・パユと世界的室内楽の名手、エリック・ル・サージュによる豪華なデュオ・リサイタル!

Program
ベートーヴェン: セレナード 二長調 Op.41 ほか

©Denis Felix ©Jean-Baptiste Millot

全席指定 S¥6,500 A¥5,000 B¥3,500 学生B¥1,500
【一般発売】5.19(日) 【友の会発売】5.12(日)

特別協賛 / **オリックスグループ**

お問合せ先

公益財団法人浜松市文化振興財団

〒430-7790 浜松市中区板屋町111-1 アクトシティ浜松内
TEL: 053-451-1114 FAX: 053-451-1123
HP: <http://www.hcf.or.jp>